

学位請求論文

中国における留守児童共同体生態場構築の探求 —対話的問題提起学習を援用して—

2019 年 6 月

城西国際大学 人文科学研究科

比較文化専攻

周亜芸

目次

| | |
|---|----|
| 第1章 序論..... | 1 |
| 1.1 研究背景..... | 1 |
| 1.1.1 研究動機..... | 1 |
| 1.1.2 中国の留守児童を取り巻く社会的背景..... | 2 |
| 1.1.3 中国の留守児童研究の現状及び課題..... | 2 |
| 1.1.4 留守児童共同体生態場構築の追求 | 4 |
| 1.2 研究目的..... | 5 |
| 1.3 本論文の構成..... | 5 |
| 第2章 理論的枠組み..... | 8 |
| 2.1 言語生態学..... | 8 |
| 2.1.1 言語生態系・人間生態系・自然生態系のトータルエコロジー | 8 |
| 2.1.2 「外的言語生態場」と「内的言語生態場」の保全の必要性 | 9 |
| 2.1.3 「生態学的思考」から捉える中国の留守児童問題..... | 10 |
| 2.1.4 留守児童共同体生態場を目指す自他支援システム..... | 10 |
| 2.2 対話による学習 | 11 |
| 2.2.1 フレイレの問題提起型教育 | 11 |
| 2.2.2 対話的問題提起学習 | 13 |
| 第3章 先行研究..... | 15 |
| 3.1 中国の留守児童研究 | 15 |
| 3.1.1 中国の留守児童研究の概観 | 15 |
| 3.1.2 中国の元留守児童に関する先行研究..... | 17 |
| 3.1.3 中国の現留守児童に関する先行研究..... | 21 |
| 3.2 対話的問題提起学習に関する先行研究 | 24 |
| 3.3 本研究の位置付け | 28 |
| 第4章 研究方法と研究課題 | 29 |
| 4.1 研究方法と研究課題 | 29 |
| 4.2 調査フィールドの概要 | 30 |
| 4.3 調査協力者 | 31 |
| (1)筆者（周） | 31 |

| | |
|---|-----|
| (2) 元留守児童・現留守児童 | 31 |
| (3) 元留守児童・現留守児童の関係者 | 33 |
| 4.3 調査方法 | 34 |
| 4.4 データ収集 | 35 |
| (1) 対話的問題提起学習による対話データの収集 | 35 |
| (2) 半構造化インタビュー・データの収集 | 36 |
| (3) 文字化原則 | 37 |
| 4.5 分析方法 | 37 |
| 4.5.1 生態学的主客分析の基本的過程 | 37 |
| 4.5.2 生態学的主客構造に基づく分析 | 39 |
| 4.5.3 生態学的主体性とそれを成す契機 | 39 |
| 4.5.4 対話の分析に生態学的主客分析を用いることが目指す具体的な形 | 41 |
| 第5章 【研究1】分析結果と考察：元留守児童の生態学的意味の生成過程 | 43 |
| 5.1 静〈社会構造の捉え返しによる逆規定の実践へ〉 | 43 |
| 5.2 彩〈繋がり可視化による当事者性の獲得〉 | 68 |
| 5.3 健〈過去の留守児童経験の捉え返しによる未来像の獲得〉 | 91 |
| 5.4 本章のまとめと総合的考察 | 105 |
| 5.4.1 本章のまとめ | |
| 5.4.2 総合的考察 | |
| (1) 対話による生態学的意味の生成をもたらす実践 | 106 |
| (2) 人間生態系と自然生態系の統合による言語生態系の保全 | 106 |
| (3) 対峙性のある発言による対話の生態学的主体性の獲得 | 107 |
| (4) 自己と世界の相即的意味の把握による逆規定の形成 | 107 |
| (5) 外的言語生態場の保全による過去の留守児童経験の捉え返し | 108 |
| 第6章 【研究2】分析結果と考察：現留守児童の生態学的意味の生成過程 | 110 |
| 6.1 宏〈言葉の機能不全による想像力の縮退〉 | 110 |
| 6.2 武〈行きつ戻りつする生態学的意味の生成過程〉 | 125 |
| 6.3 玲〈対話参加者の働きかけによる「農業」への捉え直し〉 | 143 |
| 6.4 本章のまとめと総合的考察 | 160 |
| 6.4.1 本章のまとめ | |
| 6.4.2 総合的考察 | |

| | |
|--|-----|
| (1)生態学的意味生成における問題提起の重要性..... | 161 |
| (2)言語の機能不全による想像力の縮退..... | 162 |
| (3)対話参加者の働きかけによる生態学意味の生成..... | 162 |
| (4)人間生態系と自然生態系の乖離による言語生態系の不全..... | 163 |
| (5)農村社会環境の変動による三農に対する捉え方の変容..... | 163 |
| 第7章 結論..... | 165 |
| 7.1 周の生態学的意味の生成過程及び学び..... | 165 |
| 7.2 本研究のまとめと考察..... | 174 |
| 7.2.1 本研究のまとめ..... | 174 |
| 7.2.2 言語生態系・人間生態系・自然生態系の相互的交渉の観点による考察..... | 176 |
| (1)言語生態のあり方の良さは人間生態のあり方の良さ..... | 176 |
| (2)外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉による言語生態の保全..... | 177 |
| (3)生態学的思考による繋がり改善..... | 178 |
| 7.3 留守児童共同体生態場の構築を目指す自他支援システムへの示唆..... | 179 |
| (1)対話のテキスト..... | 180 |
| (2)対話の回数..... | 180 |
| (3)対話の参加者..... | 181 |
| ①元留守児童..... | 181 |
| ②現留守児童..... | 181 |
| 7.4 今後の課題..... | 182 |
| (1)留守児童を取り巻く関係者との対話の必要性..... | 182 |
| (2)元留守児童・現留守児童と継続的に対話を行う必要性..... | 182 |
| (3)非留守児童と元留守児童・現留守児童と対話する可能性..... | 183 |
| 参考文献..... | 184 |
| 付録1：周と調査協力者のライフストーリー・テキストの中国語原文と日本語訳文..... | 188 |
| 付録2：対話の中国語原文..... | 204 |
| 付録3：留守児童関係者（両親・監護者）への半構造化インタビュー質問項目.. | 238 |

図の一覧

| | | |
|-------|--------------------|----|
| 図 1 | 本研究の構成 | 10 |
| 図 2 | 生態学的主客分析の図 | 42 |
| 図 1-1 | 静と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 46 |
| 図 1-2 | 静と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 47 |
| 図 1-3 | 静と周の第 1 回の対話の全体図 | 48 |
| 図 2-1 | 静と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 49 |
| 図 2-2 | 静と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 52 |
| 図 2-3 | 静と周の第 2 回の対話の全体図 | 52 |
| 図 3-1 | 静と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 54 |
| 図 3-2 | 静と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 56 |
| 図 3-3 | 静と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 58 |
| 図 3-4 | 静と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 60 |
| 図 3-5 | 静と周の第 3 回の対話の全体図 | 61 |
| 図 4-1 | 静と周の第 4 回の対話の言語生態場 | 64 |
| 図 4-2 | 静の過去像・現在像・未来像 | 66 |
| 図 4-3 | 静と周の第 4 回の対話の全体図 | 66 |
| 図 1-1 | 彩と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 69 |
| 図 1-2 | 彩と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 70 |
| 図 1-3 | 彩と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 72 |
| 図 1-4 | 彩と周の第 1 回の対話の全体図 | 72 |
| 図 2-1 | 彩と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 74 |
| 図 2-2 | 彩と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 75 |
| 図 2-3 | 彩と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 76 |
| 図 2-4 | 彩と周の第 2 回の対話の全体図 | 77 |
| 図 3-1 | 彩と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 78 |
| 図 3-2 | 彩と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 80 |
| 図 3-3 | 彩と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 82 |
| 図 3-4 | 彩と周の第 3 回の対話の全体図 | 83 |
| 図 4-1 | 彩と周の第 4 回の対話の言語生態場 | 85 |
| 図 4-2 | 彩と周の第 4 回の対話の言語生態場 | 87 |
| 図 4-3 | 彩と周の第 4 回の対話の全体図 | 88 |
| 図 1-1 | 健と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 92 |

| | | |
|-------|--------------------|-----|
| 図 1-2 | 健と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 93 |
| 図 1-3 | 健と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 94 |
| 図 1-4 | 健と周の第 1 回の対話の全体図 | 95 |
| 図 2-1 | 健と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 97 |
| 図 2-2 | 健と周の第 2 回の対話の全体図 | 98 |
| 図 3-1 | 健と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 100 |
| 図 3-2 | 健と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 101 |
| 図 3-3 | 健と周の第 3 回の対話の全体図 | 101 |
| 図 1-1 | 宏と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 109 |
| 図 1-2 | 宏と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 110 |
| 図 1-3 | 宏と周の第 1 回の対話の全体図 | 111 |
| 図 2-1 | 宏と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 112 |
| 図 2-2 | 宏と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 114 |
| 図 2-3 | 宏と周の第 2 回の対話の全体図 | 114 |
| 図 3-1 | 宏と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 116 |
| 図 3-2 | 宏と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 117 |
| 図 3-3 | 宏と周の第 3 回の対話の全体図 | 118 |
| 図 4-1 | 宏と周の第 4 回の対話の言語生態場 | 120 |
| 図 4-2 | 宏と周の第 4 回の対話の言語生態場 | 121 |
| 図 4-3 | 宏と周の第 4 回の対話の全体図 | 121 |
| 図 1-1 | 武と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 124 |
| 図 1-2 | 武と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 125 |
| 図 1-3 | 武と周の第 1 回の対話の全体図 | 126 |
| 図 2-1 | 武と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 128 |
| 図 2-2 | 武と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 129 |
| 図 2-3 | 武と周の第 2 回の対話の全体図 | 130 |
| 図 3-1 | 武と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 132 |
| 図 3-2 | 武と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 134 |
| 図 3-3 | 武と周の第 3 回の対話の全体図 | 134 |
| 図 4-1 | 武と周の第 4 回の対話の言語生態場 | 136 |
| 図 4-2 | 武と周の第 4 回の対話の言語生態場 | 138 |
| 図 4-3 | 武と周の第 4 回の対話の全体図 | 138 |
| 図 1-1 | 玲と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 141 |
| 図 1-2 | 玲と周の第 1 回の対話の言語生態場 | 143 |
| 図 1-3 | 玲と周の第 1 回の対話の全体図 | 143 |

| | | |
|-------|--------------------|-----|
| 図 2-1 | 玲と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 144 |
| 図 2-2 | 玲と周の第 2 回の対話の言語生態場 | 146 |
| 図 2-3 | 玲と周の第 2 回の対話の全体図 | 146 |
| 図 3-1 | 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 148 |
| 図 3-2 | 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 150 |
| 図 3-3 | 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 151 |
| 図 3-4 | 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 153 |
| 図 3-5 | 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場 | 155 |
| 図 3-6 | 玲と周の第 3 回の対話の全体図 | 156 |
| 図 3 | 周の生態学的意味の生成過程の図 | 168 |

表の一覧

| | | |
|-----|--------------------|----|
| 表 1 | 筆者（周）のプロフィール | 31 |
| 表 2 | 調査協力者のプロフィール | 31 |
| 表 3 | 調査協力者の関係者（出稼ぎ親）の一覧 | 34 |
| 表 4 | 調査協力者の関係者（監護者）の一覧 | 34 |
| 表 5 | 文字化に用いた符号の一覧 | 37 |

第1章 序論

1.1 研究背景

1.1.1 研究動機

「中国の留守児童問題は大変だね。どうしてずっと解決できないだろう？」と数年前に日本人の教師に聞かれたことがあった。筆者はその当時、留守児童問題のあること自体を知らず、「なぜ？」という問いには全く答えることができなかった。そのことがきっかけになって、「留守児童」¹について調べてみたところ、まず、自分自身が留守児童の一人であったことが分かり、大きな衝撃を受けた。それまで自分が留守児童であるという自覚は全くなかったのである。つまり、留守児童問題に自分が直接関わっているとは思ってもよらないことであつた。

「二元戸籍制度」²の下、自由な移動が制限されている中国では、子どもを農村に残して単身出稼ぎに出る親が多く、その結果大量の「留守児童」が生み出されてきた（陳 2011）。2000 年以降、改革開放を背景とする出稼ぎ労働者の増加により、留守児童も急増し、その数は 6102 万人にも上る（全国婦聯 2013）。こうした社会的大変動の過程で生み出された大量の留守児童について、多くの調査・研究がなされ、彼らが直面する問題点が明らかにされてきた（呉 2004、秦他 2009、陳 2014、徐他 2017）。並行して、留守児童支援のための様々な国家的施策や、民間レベルでの社会的支援も展開されてきた（姚 2013、夏 2015、袁他 2017）。しかしながら、このような官民挙げての活発な取り組みにも拘わらず、留守児童問題は依然として解決されることなく存在し続け、近年では、むしろ深刻化してきているように思われる。

なぜ留守児童問題は解決されることなく問題であり続けているのだろうか。また、留守児童問題の根本的な解決方法とは何だろうか。過去において留守児童の一人であった者として、筆者自身、留守児童問題の解決に向けてどんなことができるのか、自分自身に問いかけてきた。これが本研究の問いであり出発点である。

¹ 留守児童は現在まだ統一された基準がないが、本研究では 2010 年の中国全国婦聯の計算基準に基づいて、父母両方もしくは片方が 6 ヶ月以上都市部に出稼ぎに行き、農村部に残された 18 歳未満の子どもを指すことにする（全国婦聯 2013）。

² 1958 年の中国の戸籍登記条例により、「農村戸籍」と「非農村戸籍（都市戸籍）」は厳格に区別され、農村住民と都市住民がまったく異なる社会を構成し、異なる社会的待遇を受けるという「二重社会構造」が定着した（鎌田 2010）。

1.1.2 中国の留守児童を取り巻く社会的背景

中国は1978年に始まった改革開放政策により、沿岸部をはじめとする都市が急速な経済発展を遂げた。その一方で、内陸部の農村地域では、生産請負制³の導入及び人民公社⁴の解体によって、農民の生産性が大幅に上昇したが、同時に、従来は人民公社内に潜在化していた農業余剰労働力が表面化し仕事のないものが大量に生み出された。沿岸部の都市における急速な経済発展による労働力不足の中で、「民工潮」と呼ばれる大勢の農民が都市に移動する事態が発生した。また、2000年以降中国がWTOに加入して以来、市場経済がさらに拡大し、グローバル化が一気に進んだ。農村における出稼ぎ農民の増加と都市化の動きが加速する中で、中国の農村地域は急激な変貌を遂げた。農村に戸籍がある出稼ぎ労働者の子どもは原則として都市で教育を受けられない。そこで、子どもを農村に残したまま、親が単身都市に出稼ぎに出た結果「留守児童」が大量に生み出されることになった。

以上のような社会的変動により、中国は工業化が進み、本来農業を中心とした社会が崩壊しつつある。特に、留守児童が存在する農村社会では、出稼ぎ農民と農村の都市化が進むことによって、農村から青壮年層の姿が消え、老人と子どもばかりになった。さらに、農村では農業生産から非農業生産への転換が進められ、第一次産業従事者数は1990年の38,914万人が、2017年には20,944万人まで激減した（国家統計局 HP⁵）。一方、地元企業の土地開発と農村地域の都市化により、農村と都市の差が縮小し、農村地域は生産構造、生産経営方式、収入水準と構造、生活様式、思想観念など多方面において、都市部に接近し同一化していつている（田村・夏 2011）。

1.1.3 中国の留守児童研究の現状及び課題

2000年以降、中国の留守児童の人数が徐々に増えていく中で、留守児童に対する注目も社会的に広がり、留守児童の問題に関する研究も急増した。先行研究では、留守児童経験は、将来に否定的な影響を与えるものとされ、留守児童は、「不安定な情緒」「低い学習意欲」「乏しい規範意識」などとして否定的に特徴づけられ、「問題児集団」と名指しされることも少なくない（秦他 2009、陳 2014、徐他 2017）。

一方、中国の留守児童研究では、現時点の留守児童（以下、「現留守児童」⁶とする）を対象とするものがほとんどであり、彼らが直面している問題や生活現状を指摘するものが多い。しかし、看過できないことは、そのような支配的言説を無意識のうちに受け入れ、自ら

³ 農家が政府と請負契約を結び、収穫の余剰分を自由に売却できる制度。中国で人民公社による集団所有体制に代わって、1970年代頃から導入された（デジタル大辞泉 閲覧日 2019年3月16日）

⁴ 中華人民共和国で、1958年以来、農業生産合作社と地方行政機関を一体化して結成され、地方組織の基礎単位。農業の集団化を中心に、政治・経済・文化・軍事などのすべてを包括する機能をもった。1982年の憲法改正による政社分離の原則に従って解体された（デジタル大辞泉 閲覧日 2019年3月16日）

⁵ 2017年第一産業就業人員 <http://data.stats.gov.cn/easyquery.htm?cn=C01&zb=A0402&sj=2017>（国家統計局）

⁶ 本研究では、2000年以前に生まれ（18歳以上）留守児童経験を持つものを「元留守児童」と呼び、2001年以降に生まれ（17歳以下）現在留守児童であるものを「現留守児童」と呼ぶことにする。

を「ダメな人間」として捉え、生きる意味を見失ってしまう元留守児童の存在である（周 2018）。2018 年まで、2000 年以前に生まれた留守児童は全部成人し、その多くが出稼ぎ親のあとを継いで親と同じように出稼ぎに出ており、「第二代農民工」と呼ばれる。2017 年までに、1980 年以降に生まれた「第二代農民工」の若年農民工は 1 億 4469 万人に達し、現在の農民工総数の 50.5%をも占めている（国家統計局 HP⁷）。若年農民工には、「第一代農民工」の親の子どもとして生まれ、子どものころは農村で生活していた経験を持つ「元留守児童」も少なくない。このような元留守児童である若年出稼ぎ者は、親の世代と違って、きつい肉体労働に耐えられず、ネット賭博にのめりこみ、仕事への情熱を持たない者として特徴づけられ、近年中国の社会問題になっている（益満 2018）。留守児童経験を持つ元留守児童の第二代農民工は、留守児童経験を持たない第二代農民工に比べ、転職率が高いという報告がある（汪他 2014、謝 2016、紀 2016）。さらに、かつての留守児童経験は、農民工になったものだけではなく、大学生になったものにも心理健康、人間関係、価値観及び人格形成、生活技能、生活満足度など多方面で否定的な影響を与えていることも指摘されている（王 2010、劉他 2014、楊他 2015）。

このように、元留守児童は大人になっても過去の留守児童経験を引きずり、そして、それが現在の生活やキャリアにも悪影響を及ぼしていることが分かる。しかし、すでに大人になった元留守児童に対する社会的な取り組みや支援は行われていない。大量の元留守児童は中国社会の構成員であり貴重な担い手である。彼らの生き方や行動基準は社会全体に多大な影響を与える。自分の過去の経験をどう意味づけるかによって、人が選ぶ行動は変わり、そして行動が変わることによって将来、つまりその人の人生が変わるということを筆者は重視したいと考える。換言すれば、元留守児童が過去の自身の留守児童経験を捉え直し、新たな意味づけをすることで、今生きているこの社会を構成する主体として自身を位置づけ、社会に正面から向き合うことが可能となる。従って、過去の留守児童経験の捉え返しは元留守児童がこの社会で主体的に生きていくために極めて重要な課題であると言える。

一方、このような農村の激変はそこで生まれた現留守児童にも影響を及ぼしている。現留守児童は幼少期から長期間にわたって親と離れて生活をしていることから、親に対して不信感を持ちやすく、親子の間にディスコミュニケーションが生じていると指摘されている（陳 2014）。また、1 年を通じて都市に出稼ぎに出ている親は、そばにいて子どもの面倒を見てやれない負い目から、子どもに十分過ぎるほどの金銭を与えることが多く、そのことが結果的に子どもの物質的欲望を肥大化させてしまうことに繋がっている。現在の農村では都市同様インターネット環境や現代的機器が普及しており、現留守児童もそれらに簡単にアクセスすることができるため、インターネットゲームに夢中になったり、ネットショッピングを繰り返したりしている（周 2018）。現留守児童は、親の出稼ぎと農村の都市化により、

⁷ 2017 年農民工監測調查報告 http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/201804/t20180427_1596389.html（国家統計局）

経済的にも物質的には豊かになったが、農業の衰退により農村コミュニティが崩壊し人間関係は都市と同様に希薄化した中で孤独な生活を余儀なくされている。現留守児童の問題は元留守児童と比べても多様化し深刻化してきていることが推察される。

しかしながら、現留守児童の生活の場である農村の急激な変化が現留守児童に及ぼす影響は殆ど明らかにされておらず、現留守児童が抱えている問題に対する研究者の理解は元留守児童のそれとあまり変わっていない。さらに、現留守児童に対して教育的介入を行う実践研究においても、彼らを支援を受ける「被支援者」として位置づけることから、現留守児童自身が感じている問題との間に存在するギャップを埋めることができず、現留守児童問題の根本的な解決に繋がらないことが指摘されている（譚 2018）。以上を踏まえると、現留守児童の問題を根本的に解決するためには、現留守児童と彼らを取り巻く生活環境を考慮する必要があることが分かる。同時に、現留守児童が、自分たちが置かれている現状をよく理解して捉え直し、能動的にその現状を打破し変えていく主体として自己を形成していくことが問題の根本的な解決につながると考えられる。

以上の中国の留守児童研究から、これまでは中国の元留守児童と現留守児童それぞれが抱えている問題を分けて捉えてきたことが分かる。しかし、元留守児童と現留守児童が抱えている問題は一見違うように見えても、実は、グローバル化という共通の社会的な文脈の下で生じた問題である。また、元留守児童と現留守児童は共通する留守児童経験を持っているため、彼らが互いに自らの留守児童経験を辿ることを媒介にして、自分たちが置かれている現状を捉え返し、その現状を変えていく主体として自己を形成していくとともに、留守児童共同体を構築することが可能であると考えられる。

1.1.4 留守児童共同体生態場構築の追求

以上の議論から、中国の元留守児童・現留守児童問題の根本的な解決には、彼らが問題解決の主体として関わっていくことが不可欠であることが分かる。このことを、生態学的に考えてみよう。自己という主体は世界という客体との関係性の中に生きており、自分が生きる意味も、如何に生きるか・現状を如何に変えるかという意志も、自分と世界との関係性に基づいている（岡崎 2009b）。そして、その関係性は、自分が世界（とその下にある自己）に働きかけることによって変えることが可能である。つまり、自己と自己を取り巻く環境（世界）との繋がりを認識し、そこに不全がある場合には、その繋がり方を変えることで、自分の生きる場を構築し、それによって生きることを持続可能としていくあり方である（岡崎 2014）。このような関係性の中にいる主体は生態学的主体である。そして、このような人の認識や意志や実践の形成過程を媒介する言語の生態を問う学は、言語生態学である。生態学的主体性の形成過程で生態学的自己と生態学的世界という相即的な主客関係を言語主体が把握するたびに、生態的意味が新たに生成されていく（岡崎 2013）。また、他の人間との間で言語を媒介にして、相互作用をしながら生態学的意味が生成されていく過程で、共同体

生態場が構築される（岡崎 2015）。このような共同体生態場の構築を可能にする学習方法として、「対話的問題提起学習」がある。対話的問題提起学習は、対話を重ねることを通じて、対話をする双方が共感的態度でそれぞれの持つ問題をともに考えること、対話をいくつも積み重ねていく中で、互いにかねがえのない人間的な繋がりを作っていくことを目的とする（岡崎 2009a）。

では、この対話的問題提起学習を援用し、対話を重ねることで、中国の元留守児童・現留守児童は、生態学的主体性を獲得し、留守児童共同体生態場の構築が達成できるだろうか。元留守児童・現留守児童は、対話的問題提起学習に基づく対話を通じて、自己を起点にして自己と自己を取り巻く生活世界との繋がりを理解し、捉え返すことで、生態学的主体性を獲得し、能動的に自分の置かれた現状を変えていこうとする意志を形成する道を開いていけるだろうか。また、生態学的主体性を獲得する過程で、留守児童共同体生態場が構築され、中国の留守児童問題の根本的な解決につながる展望が切り開いていけるだろうか。本研究は、これらの問いに対する答えを追求する。つまり、本研究では、対話的問題提起学習を援用し、対話を通じて、中国の元留守児童・現留守児童が生態学的主体性を獲得し、さらに、その過程において留守児童共同体生態場を構築するという課題がどのように達成できるかを探る。

1.2 研究目的

本研究の目的は、対話的問題提起学習による対話を通じて、中国の元留守児童・現留守児童が生態学的主体性を獲得すると同時に、その過程で留守児童共同体生態場の構築が進むことを実証的に示すことで、留守児童問題の解決方法の一つを提案することである。

本研究では、留守児童が外から特定の支援を受けることによって、その支援が奏功して一人ひとり留守児童問題から脱出するというのではない方法を追求する。具体的には、支援の受け手ではなく、自分自身が問題解決の当事者となることを目指す。まず、自分がどのようにして留守児童となっているのか、つまり、どのように留守児童が社会的に作り出されているのか、留守児童同士による対話を通じて、その構造を知り、次に、その構造を打破していく主体として、能動的に社会に働きかけることによって、留守児童問題を脱構築する。つまり、2段階で留守児童問題の根本的解決の展望を切り開くのである。また、留守児童同士が対話を繰り返す中で、互いにかねがえのない仲間として人間的紐帯を育むことにより、留守児童共同体生態場の構築が期待される。

1.3 本論文の構成

本論文は7つの章から構成される。

まず第1章序論として、ここまで、本研究の研究動機と研究背景を述べ、それを踏まえて研究目的について述べた。

続く第2章では、まず、本研究の理論的枠組みとして言語生態学理論を提示し、留守児童問題と関連付けながら言語生態学について述べる。続いて、本研究が援用した対話的問題提起学習について説明する。

第3章では、中国で行われてきた留守児童研究の概観を踏まえて、元留守児童と現留守児童に関する先行研究を分けて述べる。続いて、対話的問題提起学習に関する先行研究を紹介する。最後に、本研究の位置付けを明らかにする。

第4章の研究手法と研究課題では、まず、本研究はすべて質的研究方法を使う理由を述べ、そして本研究の研究課題を提示する。それから、本研究の調査フィールド、調査協力者を紹介する。そして、対話的問題提起学習による対話データの収集方法と半構造化インタビューのデータの収集方法について説明する。さらに、分析方法では質的研究と生態学的主客構造に基づく分析について述べる。

第5章（【研究1】）では、対話的問題提起学習を援用した筆者（周）との対話を通じて、元留守児童3人が三者三様に辿った生態学的意味の生成過程を詳細に分析・考察する。その後、3人の分析結果をまとめ、総合的に考察を行う。

第6章（【研究2】）では、同様に、対話的問題提起学習を援用した筆者（周）との対話を通じて、現留守児童3人が三者三様に辿った生態学的意味の生成過程を詳細に分析・考察する。その後、3人の分析結果をまとめ、総合的考察を行う。

最後に第7章では、まず、筆者（周）の生態学的意味の生成過程を分析し、本研究を通じて得られた周の学びを述べる。続いて、本研究の【研究1】、【研究2】と周の分析結果をまとめ、それらを踏まえて考察を行う。そして、対話的問題提起学習による留守児童共同体生態場の構築を目指す自他支援システムへの示唆を提起する。最後に、今後の課題を述べる。

以上をまとめると、本研究の構成は次のとおりである。（図1）

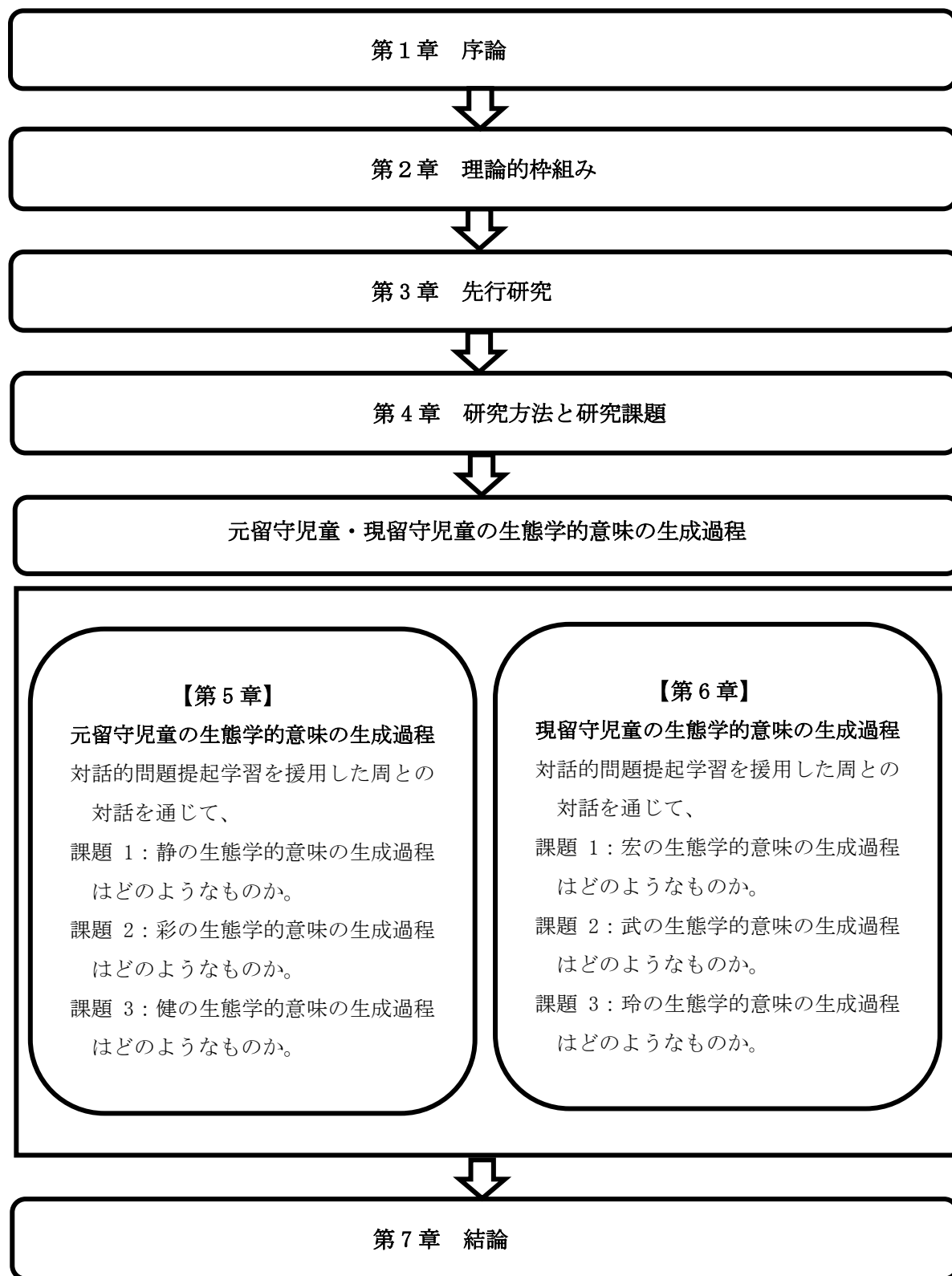


図1 本研究の構成

第2章 理論的枠組み

本研究では、対話的問題提起学習による対話を通じて、元留守儿童・現留守儿童が生態学的主体性を獲得し、留守儿童共同体生態場を構築することこそが、留守儿童問題の根本的解決につながることの提示を目指す。本章では、この主張の理論的枠組みである言語生態学について、留守儿童問題と関連付けながら述べることにする。その後、対話的問題提起学習という学習方法を紹介する。

2.1 言語生態学

言語生態学は Haugen(1972)が確立した学である。Haugen では以下のように定義されている。

「ある所与の言語とそれを取り巻く環境との間の相互交渉的関係の学である。」
(岡崎敏雄訳 2009a:03)

以下では、言語生態学の基本的な概念について、留守儿童問題と関連付けながら述べることにする。

2.1.1 言語生態系・人間生態系・自然生態系のトータルエコロジー

人間は1万年前に狩猟から農耕を仲立ちとする食物連鎖に連なる新たな形に移行する過程で、自然生態系と人間生態系との相互交渉的構造に変化が現れた。農耕という食糧生産活動を円滑、効果的に進めるために、人間は言語を使って協働することを始めた。つまり自然生態系と人間生態系に加えて新たに言語生態系が作られたと言える。こうして、言語生態系・人間生態系・自然生態系が相互交渉的に形作られ、このような成系構造は「鼎型(三者)構造」と呼ばれる(岡崎 2009a)。言い換えれば、自然との相互作用の場で、言語を仲立ちとして人間間の社会的相互作用が展開されるようになったのである。人間は自然との相互作用及び人間間の社会的相互作用を通じて行う食糧生産活動を通じて、生存を維持し、次世代を育てる。この意味で、言語は人間の生存を支える命綱として捉えられるであろう。

一方、グローバル化・都市化が進む現代社会では、本来主な生活基盤として存在していた「農業」が次第に縮小し人間の生活から離れてきた。工業化社会の下では、人間生態系と自然生態系の繋がりが希薄化し、人間生態系と自然生態系を仲立ちとしていた言語生態系も不全な状態になっている。そして、人間の生存を支える言語生態に不全がある場合、人間生態系にも影響を与え、不全になる。

近年、中国は農村の都市化と出稼ぎに行く農民の急増により、農業中心から非農業中心の農村に変わり、従来強固であった農村コミュニティが崩壊しつつある。つまり、非農業中心の社会では人間生態系と自然生態系の繋がりが切り離され、それによって両者を仲立ちと

する言語生態系にも不全をきたしやすくなる。具体的には、親の出稼ぎにより、留守児童は言語生態が不全になっている農村に残され、そのことは彼らの人間生態に悪影響を与えることになる。中国で留守児童問題が表面化して以来、彼らの厳しい人間生態が注目されるようになった。留守児童の人間生態の不全の改善には、まず彼らの言語生態の保全が必要である。言語・人間・自然の間の繋がりが十分機能している状態、つまり、言語・人間・自然のあり方が良好な状態としての「言語・人間・自然生態系のトータルエコロジー」が目指されなければならない。それでは、言語生態の保全とはどうすることか。

2.1.2 「外的言語生態場」と「内的言語生態場」の保全の必要性

人間と環境の相互作用を仲立ちする言語が生息する場を言語生態学では、言語生態場と呼ぶ。そして、この言語生態場には、「現実生態場」と「意識生態場」という二つの生態場がある（岡崎 2009b）。現実生態場は、自己もその一部を成し、その上で自己が直面している社会及び自然の形作る現実世界の現相である。現実生態場において、個々の人間が諸活動を円滑、かつ効率的に進めるために用いられる言語活動によって形作られるのが言語生態場である。一方、意識生態場とは、現実世界を構成する人間の意識内に形作られるものである。また、意識生態場の中に、「現実世界がどうなっているか」の問いをきっかけとして形作られていく「現実世界の能動的認識」の過程が認識生態場として形作られる。まとめると、現実生態場には言語生態場、意識生態場には認識生態場が形成される。これを前提にして、言語生態場には、現実生態場の中に形作られる外的言語生態場と、意識生態場に作られる内的言語生態場がある（岡崎 2009b:6）。

外的言語生態場は、現実生態場の下にある人と人との間の外的やりとり、即ち社会的相互作用をなすやりとりが生み出す生態場である。内的言語生態場は、意識生態場の中で、典型的には自問自答のような自己内対話の形で、人が頭の中で行うやりとりが生み出す生態場である。これらの外的言語生態場と内的言語生態場における言語使用は相互交渉的である。

例えば、中国の留守児童の場合、彼らは、自己を取り巻く世界について「なぜそうなのか」という問いを発するだろうか。多くの留守児童はこの問いを発することをしない。親が出稼ぎに出ること、その結果自分が留守児童になることを、ごく普通のことと受け止めているのである。「なぜなのか」の問いが発せられないのは、世界観、それを形作る認識、概念などの「言語の内的生態環境」と呼ばれるものに不全があるのかもしれない。「なぜなのか」の問いを発するのには、「世界はこのようにできている」という世界観、つまり世界を形作る認識、その一つ一つをなす概念が必要だからである。または、そうした問いを問いかける相手がいないのだろうか。つまり「言語の外的生態環境」と呼ばれるものに不全があるのかもしれない。

岡崎（2009a）は、「言語のあり方の良さは人の生き方のあり方の良さ」と述べている。言い換えれば、中国の留守児童の人間生態がよくない状態にあるのは、言語生態が不全である

ためと捉えられる。従って、留守児童の人間生態を良い状態にするには、まず彼らの言語生態の保全が必要である。つまり、留守児童が自分を取り巻く世界に対して「なぜなのか」を発せられるような世界観を形作る認識、概念をなす「内的言語生態場」と、そのような問いを問いかける相手の存在を保証する「外的言語生態場」の保全が必要である。

2.1.3 「生態学的思考」から捉える中国の留守児童問題

言語生態学では、言葉に関わる繋がりのある方を捉えるにあたって基礎とする生態学的思考を重視する。生態学的思考とは、一つの出来事やある現象が起きたとき、それは、多くの事柄の繋がりできていると捉える思考である（岡崎 2009a）。従って、問題の解決には一つの原因があるのではなく、繋がりの方を形作っていると考えられる。言い換えれば、対象を含めた世界の「コト・モノ・人の繋がり方」を変え、新たな繋がり方を形作ることが解決につながるという捉え方である。

この生態学的思考で、中国の留守児童問題を捉えるとすれば、留守児童問題の解決には、「留守児童」という現象を形作っているコト・モノ・人の繋がりを変え、その繋がり方を変える必要がある。つまり、この「コト・モノ・人」の繋がりとは、留守児童を取り巻くあらゆる人間や環境との関係のあり方を指す。そして、そのような「コト・モノ・人」の繋がりを変えて、新たな繋がり方を形作る自己が形作られ、留守児童問題の解決に繋がっていくと考えられる。

中国の留守児童問題研究には、留守児童が抱えている問題及びきびしい生活の現状自体に注目するものが多い。また、政府機関や様々な社会組織も、留守児童自体に焦点を当てて支援活動や取り組みを行うのが一般的である。彼らを取り巻く世界のコト・モノ・人に注目することは少ない。例えば、留守児童を取り巻く農村という社会環境、学校などの社会制度、あるいは関係者（両親、監護者など）は留守児童問題とどのように繋がっているのか、その繋がりには不全はないのか。もし不全があった場合、その繋がりを変えれば留守児童問題の解決につながるのか。留守児童問題の根本的な解決を目指すには、留守児童自体だけでなく、留守児童を取り巻く「コト・モノ・人」の繋がりの方を捉え直す必要がある。

2.1.4 留守児童共同体生態場を目指す自他支援システム

前述したように、言語生態学を基礎とする生態学的思考に立った場合、答え・解決策はある何か一つではなく、繋がりの方を形作っている。そのため、留守児童問題の解決も、「留守児童」だけを取り出して解決を図ろうとするのではなく、留守児童を取り巻く「コト・モノ・人」の新たな繋がり方の構築を視野に入れて考えることが必要となる。そして、繋がりが変わること、その新たな繋がりをも自分も形作ること、事態の改善のための自己、及び他人のための、自他支援システムが形作られていく。この意味で、繋がりが変わることによって形作られ

る自他支援システムは生態学的な性格を持っている。

中国の留守児童問題を捉える場合、留守児童及び留守児童を取り巻く世界（「コト・モノ・人」）を把握することが留守児童問題の解決に向けての第一歩だと考えられる。そのため、留守児童の世界を理解するために、留守児童及び彼らを取り巻く関係者の声を取り上げることが必要である。言語生態学では、「事態の本当の姿は自分の生き方とつながるとき見え始める」という捉え方からすると、留守児童が自分の生活世界を捉えることで、留守児童問題の所在及びその繋がりを明らかにすることができ、留守児童問題の解決に図ることも考えられる。つまり、留守児童当事者が自己及び自己を取り巻く世界をつなげて留守児童問題を捉えることが求められる。また、自分が見えている世界が実は「コトの真相」の半分しか見ていない結果であることも起こる可能性があるため、他の人の視点を取り入れることで、自分が気づきにくい残りの半分も見えてくることもある（岡崎 2009a）。このように考えると、一人の留守児童ではなく、複数の共通の経験を持つ留守児童同士の視点を取り入れることが重要である。留守児童当事者同士で互いが見えている世界を捉え直すことで、自己及び自己を取り巻く世界との繋がりを辿っていき、そしてその繋がりに不全がある場合、自分たちで新たな繋がりを形作ることができる。このように、留守児童当事者が留守児童問題の改善のための自己、及び他の人のための、いわゆる留守児童当事者同士による自他支援システムによって留守児童共同体生態場の構築が期待できる。

2.2 対話による学習

上記で述べた自他支援システムを可能にする学習方法として「対話的問題提起学習」が挙げられる。本節では、まず「対話的問題提起学習」の起源とされるフレイレの「問題提起型教育」を紹介しながら、中国の留守児童問題と関連づけて論じる。その後、本研究で援用する対話的問題提起学習を述べる。

2.2.1 フレイレの問題提起型教育

パウロ・フレイレはブラジルの教育者であり識字教育の実践家でもある。フレイレが「文化サークル (culture circles)」運動と呼ばれる方法で、成人の識字教育に携わり、顕著な成果によって世界中の注目を集めた。以下は、フレイレの識字教育実践を紹介した Shor (1987) を引用した西尾 (2010) を参考しながら、フレイレの「文化サークル」の方法とプロセスを見ていく。

フレイレの文化サークルの方法とプロセスは、(1)まず、教師ではないコーディネーターが住民との日常会話のやり取りから生活と労働の状況を表す言葉を集める。(2)その中から音節が豊かで、日常経験から切り離せない、議論を引き起こすような言葉を「生成語」として抽出し、易しい音節から難しい音節に並べる。(3)「生成語」が表している具体的な状況、例えば人が働いている日常生活場面を描いた写真や絵（寸劇も可能）を表示し、これを「コー

ド化 (codification)」と呼ぶ。(4)参加者はコード表示を見ながら対話と議論を行う。例えば、「この絵の中には何が見えるか」とコーディネーターから議論を始め、「誰が井戸を作ったか」「なぜ、彼はそれをしたか」など、次第に参加者に質問しながら対話を行う。(5)そして最初の生成語を導入する。例えば、「レンガ」という言葉の場合、1枚目としてレンガの建築の場面だけが描かれた絵が準備される。2枚目としてはその言葉が建築の場面に書かれた絵を提示される。3枚目には、「レンガ」という言葉だけが表示される。次に、「レンガ」の発音練習をし、音節の構造を認識していくのである。

このように住民から与えられるテーマを彼らに講義するのではなく、問題として再提出することはコーディネーターの役割で、このような再提出したテーマをフレイレは「生成テーマ (generative theme)」と呼んでいる。「文化サークル」に参加する調整者（コーディネーター）は、質問することによって刺激し、生成語に関する議論を深めるように努め、全員が議論に参加することを促す媒介者である。では、「生成語」が議論の中でどのように扱われるか、以下では里見・野元 (1993:49-51) を引用しながら、具体例を一つ挙げて説明する。

例：「生成語」→「賃金」

(1)討論の手がかり：

- ・労働を評価する。もらっているのはいくらか。
- ・賃金の目的—労働者と家族の扶養。
- ・労働時間、法ではどうなっているか。
- ・最低賃金と公正な賃金。
- ・週休、休日、1ヶ月有給休暇。

(2)対話の目的

- ・農民の賃金の状態について議論をするように導く。
- ・なぜそうした状況にあるのかを議論する。
- ・自分自身の場合に引きつけて、労働の時間と報酬について議論する。
- ・公正な賃金を要求する義務が一人ひとりにあると気づくようにグループを導く。

(3)会話の誘導

- ・この絵を見て何に気づくか。
- ・農民の賃金の状態はどうか。なぜそうなのか。
- ・賃金とは一体何か。
- ・賃金はどうあるべきか。それはなぜか。
- ・私たちは賃金に関する法律について何を知っているか。
- ・公正な賃金を得るためにわれわれは何ができるか。

以上のようなコード解読の作業を通じて文字を獲得するとともに、被抑圧者の非識字者が主体として世界と向かうようになり、自らの置かれた状況が自然で、変えられない前提ではなく、社会的・歴史的に作られているものであることを認識する。そして、このように被抑圧者であるブラジルの非識字農民は、自分の生活の中の問題を、対話を通じて、その現実を捉え直し、読み書き能力を獲得することを通じて、自分たちのような非識字農民を多く生み出す社会の変革に向けた実践を起こすことに成功した。フレイレ（1979）は、教師と学習者が対等な「対話」を通じて、自分が抱えている問題を主体的に捉えていく「問題提起型教育」こそが、真の教育であると提起した。

2.2.2 対話的問題提起学習

岡崎・西川（1993）は、フレイレ（1979）によって提案された「問題提起型教育」に対話性をより加えて、「対話的問題提起学習」と新たに名づけ、日本語教育分野に取り入れた。対話的問題提起学習は、対話を通じて双方が共感的態度でそれぞれの持つ問題をともに考えることと、対話をいくつも積み重ねていく中で、互いにかげがえのないこの人との人間的な繋がりを作っていくことを目的としている。対話的問題提起学習という手法における対話のステップは以下の通りである（岡崎 2009a : 106）。

- (1)ここではいったいどんなことが起こっていると思いますか。
- (2)私はここでいったい何を感じていると思いますか。また、どういう問題（社会的・文化的・個人的背景に何かある）として捉えていると思いますか。
- (3)あなたは、(2)に見られる私（または文章の作者）の感じ方、問題の設定の仕方について、どう思いますか。
- (4)もし、この話が自分のことだったら、あなたはどう感じ、どう行動しますか。
- (5)まずあなたの(3)、(4)での話を聞かせてください。そのあと、私の考えも聞いてください。

日本語教育分野で行われた対話的問題提起学習の実践は、学習者をただ単に「正しい日本語」を学ぶ側として日本語母語話者への同化を目指す日本語教育から、日本語母語話者と外国人学習者が共に学び合うという共生を促す日本語教育へと転換させた。具体的には、日本語母語話者と外国人学習者が同じ地域住民として、互いの違いを理解しながら共に暮らす上で生じる生活上の諸問題に対話で共有し、問題の解決に向けて主体的に関わっていく位置付けという視点である（半原 2008）。つまり、フレイレの識字教育を援用して「日本語を学ぶこと」と「人間らしく生きること」を結びつけて捉え、学習者と教師が水平関係に立ち、ともに学び合うことの必要性を主張する（野元 1995）。

以上、フレイレ（1979）は、被抑圧者の農民が対話を通じて被抑圧の原因を批判的に認識することで、主体的に非識字者を不断に生み出す社会の変革に向けた実践へと発展したことが示された。また、日本語教育分野でも、対話的問題提起学習で対話を通じて、学習者をただ既定の学習内容を学ぶという教授される客体から、主体的に学習に参加することができることが分かった。一方、従来中国の留守児童に対する支援のあり方を述べると、留守児童を、ただ支援を受ける存在として位置づけ、政府や社会からの経済的や教育的な支援を受ける一方で、「支援者」と「被支援者」という非対等的な関係が維持されることが多い。それによって、留守児童は自分が置かれている現状と世界との関わりを認識できず、その現状を批判的に捉えることができないため、自分の留守児童経験を否定的に捉える傾向になる。言い換えれば、留守児童は社会から与えられたラベルで自己を捉え、そういう自己から抜けられず、社会変革の主体になることも考えにくい。しかし、「問題提起型教育」と「対話的問題提起学習」の観点から捉えると、留守児童がそういう自己から解放され、社会変革の主体になるためには、支援者も留守児童と対等な立場になることが前提である。即ち、対等な立場になってはじめて、対話を通じて、批判的に自分たちが置かれている現状を捉えることが可能であるという考え方である。留守児童が、批判的に自分たちが置かれている現状を捉えることによって、留守児童が生み出される社会的構造を理解し、留守児童問題は自分たちの原因ではないことを知り、留守児童が自己から解放できると考えられる。また、留守児童が対話を通じて、自己と世界との繋がりを認識することにより、その繋がりの不全を変えていく主体になることも可能である。つまり、政府や社会から先進国が貧困国に食料を供給するかのように単に金銭や教育を「施す」というものではなく、留守児童が対話を通じて自ら留守児童を生み出している根本的な社会構造を認識し、主体的にその社会構造を変えていくことこそ根本的な問題解決につながる。

第3章 先行研究

本章では、まず中国の留守児童研究を概観し、そして中国の元留守児童・現留守児童に関する先行研究を述べる。そして、対話的問題提起学習に関する先行研究を紹介する。最後に、本研究の位置付けを明らかにする。

3.1 中国の留守児童研究

「留守児童」という言葉は、一張(1994)が『瞭望』の中で初めて使い、両親が仕事や留学のため海外へ行き、故郷に残されて、祖父母に預けられた子どもを指す言葉であった。現在の「留守児童」の定義は90年代後期に形成され、本研究では2010年の中国全国婦聯の計算基準に基づいて、父母両方もしくは片方が6ヶ月以上都市部に出稼ぎに行き、農村部に残された18歳未満の子どもを指すことにする(全国婦聯2013)。留守児童は主に中国の中西部など経済発展の遅れている地域に集中し、その数が2000年には2443万人、2005年には5861万人、2010年になると6102万人、このように増加の一途をたどっている(全国婦聯2013)。

3.1.1 中国の留守児童研究の概観

2000年以降、中国の留守児童の人数が徐々に増えていく中で、留守児童に対する注目も社会的に広がり、留守児童の問題に関する研究も急増した。中国最大の論文検索サイトである「中国知網」において主題「留守児童」で検索した結果、20,973件(2019年3月13日)あった。中国国内の留守児童に関する研究を、趙(2009)を踏まえて整理すると、次のような五つの段階に分けられる。

第一段階(1994～2000年)：この7年間は留守児童研究の萌芽期である。留守児童の心理上、学習上、行為上の問題が表面的に扱われるだけで、専門的な研究や実証的な調査はなかった(孫1995、張1998、曹1998)。

第二段階(2001年～2003年)：留守児童問題を専門的に取り上げる研究がなされるようになり、メディアも留守児童問題に関心を寄せるようになった。李(2002)は、留守児童の監護パターンを(1)隔代監護(祖父母が留守児童の面倒を見る)、(2)上代監護(子どもの親と同世代の人が留守児童の面倒を見る)、(3)自己監護(留守児童自身で自分の面倒を見る)という三つに分類し、この三つのパターンのいずれも子どもには不利な影響を及ぼすことを指摘した。朱他(2002)は留守児童の学習状況について調査し、親の出稼ぎは留守児童の学習動機、学習過程及び学習環境に一定程度の影響を及ぼすが、成績には特に悪影響を及ぼさないことを明らかにした。

第三段階(2004年～2005年)：政府も留守児童問題に介入し、マスメディアも留守児童に注目するようになり、留守児童問題研究の転換期であると言える。呉(2004)は、中国の三省五県(江蘇省沐陽県、宿豫県、甘肅省秦安県、榆中県、河北省豊寧県)の小学校と中学校

をサンプルとして一つずつ抽出し、対象校の児童・生徒に質問紙調査を行い、留守児童の出稼ぎの親の状況、出稼ぎ地域、出稼ぎ親の帰郷頻度、留守児童の監護者、留守児童の生活や学習上の悩みの相談相手、及び留守児童の親の出稼ぎに対する態度を詳細に調べた。調査の結果、留守児童は全体の 47.7%を占めており、そのうち片親監護（片親が子どもの面倒を見る）の留守児童は 56.4%で、隔代監護（祖父母が子どもの面倒を見る）の留守児童は 32.2%で、親戚や友人と暮らす留守児童は 5%であることが分かった。それから、監護者は高齢者で農作業や家事で忙しいため、留守児童は生活や学習上の悩みがあるとき、相談相手として教師（67%）がもっとも多く、その次は仲間（24.1%）であり、監護者との交流は少ないことが分かった。さらに、親との交流の欠如が原因で留守児童の性格及び心理などにマイナスの影響を与えていることも指摘された。また、范（2005）は湖南省、湖北省、河南省及び安徽省の個別地域と深セン市の二つの区で実地調査を行い、政府の政策不備が留守児童問題形成の原因だと指摘した。呂（2005）は 150 の訪問インタビュー例を分析し、留守児童の大量出現の原因は体制の問題で、都市での高額な借読費⁸で留守児童の入学を阻止したと指摘した。また、留守児童問題の中には、「逆監護」という概念も現れ、つまり留守児童が祖父母の面倒を見るという現象である。葉他（2005）は国内で初めての留守児童に関する著作である。この本は従来の留守児童研究を整理し、関連概念も全て定義した。葉他（2005）は、質問用紙調査、家庭訪問、個案分析、グループインタビューなど多様な調査方法を用いて留守児童の実際の生活を示した。

第四段階（2006 年～2010 年）：中国国内各地のメディア及び新聞、ラジオ、テレビ、インターネットなどの媒体で留守児童問題を報道しはじめた。学校、全国婦聯、共青团、専門協会など社会各層が留守児童に関心を寄せた。中国の知網データベースで「留守児童問題」の主題を検索すると、全国各期刊誌で発表されたことが分かる。研究内容は、留守児童の定義、留守児童の出現背景、留守児童の規模、留守児童問題などがある。留守児童問題の出現原因としては、児童自身の年齢、親の認識不足、代理監護者のモニタリングの不足、経済的な原因、学校の認識不足と資源の制限、社会環境の変化の影響、政策と体制原因などが挙げられる。留守児童問題の解決策としては、戸籍制度の改革、都市と農村の格差の消去、政府の支援、留守児童の心理教育の拡大、社会ボランティア活動、農村で留守児童青少年教育と監護体系の成立、児童権利の保護法制度の整備などが提言された。また、長期間にわたって留守児童の生活現状に注目したフィールド調査研究には、阮（2008）がある。阮（2008）は、中国の出稼ぎ労働者が最も多い 5 つの省である湖南省、湖北省、河南省、安徽省、四川省を訪問し、約 3 年間にわたって大量な調査を行い、留守児童の具体的な事例、留守児童との対話、留守児童の手紙などを取り上げながら農村留守児童の生活現状を示した。

第五段階（2011 年～2018 年）：この 7 年間は留守児童問題研究が飛躍的に発展し、大きな

⁸ ここでの「借」は場所を借りこと、「読」は就学することである。「借読費」は、場所を借りて、就学する際に、特別入学費とも言うべき学費（越境入学費）を支払うことを意味する（黄 2008）。

成果を遂げた。この時期の研究は従来の留守児童問題研究に比べ、視野が広く、切り口も多様であることが特徴である。また、長期間にわたって留守児童の生活現状および抱えている問題を記録したものがある。譚（2012）は、実際の農村留守児童のストーリーを取り上げ、農村留守児童の生存状況を全面的に記録したものである。また、趙（2012）は、5年間をかけて農村留守児童に対して継続的に観察し、農村留守児童が直面している一連の問題を明らかにしたものである。さらに、劉他（2013）は、農村留守児童の生活を実際に考察し、留守児童が直面している問題を指摘したものである。呉他（2015）は、江西省、福建省、四川省、安徽省、江蘇省、貴州省などの農村留守児童が直面している教育問題を実地調査を通じて、農村留守児童の学校管理、心理健康、コミュニケーション能力などの面における問題を提起し、関連する解決方法を提示した。南方周末（2016）は、中国各地の留守児童の生活実態及び問題を留守児童自身の日記や手紙で示された。また、留守児童問題が生み出される中国の経済発展という社会背景を考察し、国の政策の角度から解決方法を示した。陳・詹（2017）は、アンケート調査と実地訪問を通じて、中国の西部地域の留守児童の生活現状及び社会サポート需要の内容を把握した。それを踏まえて、既存の政府の政策および社会支援の角度から中国の西部地域の留守児童社会サポートシステムを提言したものである。

3.1.2 中国の元留守児童に関する先行研究

近年中国の元留守児童を取り上げる先行研究の中には、留守児童経験を持つ第二代農民工と大学生を取り上げるものが多い。留守児童経験を持つ元留守児童の第二代農民工は、留守児童経験を持たない第二代農民工に比べ、転職率が高いという報告がある（汪他 2014、謝 2016、紀 2016）。また、かつての留守児童経験は大学生にも心理健康、人間関係、価値観及び人格形成、生活技能、生活満足度など多方面で否定的な影響を与えていることも指摘されている（王 2010、劉他 2014、楊他 2015、張他 2018）。以下では、これらの先行研究を詳細に紹介する。

汪他（2014）は、過去の留守児童経験は第二代農民工のキャリアに影響を与えているかどうかを調べるために、以下の3つの仮説を設定した。(1)留守児童経験を持つ第二代農民工と同世代の第二代農民工に比べて、転職率が高くなる。(2a)留守児童経験を持つ第二代農民工が同世代の第二代農民工に比べて、非体力の職種より体力の職種の方が転職率が高い。(2b)留守児童経験を持つ第二代農民工が同世代の第二代農民工に比べて、熟練または半熟練の職種より熟練度が低い職種の方が転職率が高い。これらの仮説を検証するために、汪他（2014）は、2005年に中国の19つの都市の出稼ぎ農民工に対するアンケート調査から1%（3536人）のサンプル調査データを抽出して、それを調査対象とした。そして、「毎年の平均職数」と「初職の平均持続期間」を転職率の二つの指標とした。さらに、初職の職種の性質（体力と非体力、非熟練と熟練／半熟練）に分けて、回帰分析で分析した。分析の結果、留守児童経験を持つ第二代農民工は同世代の第二代農民工に比べて、毎年の平均職数は

0.162 倍高く、初職の離職率は 1.315 倍高いと分かった。つまり、留守児童経験を持つ第二代農民工は同世代の第二代農民工より転職率と初職の離職率が高いため、仮説 1 は証明された。それから、体力の職種と非熟練の職種の離職率においては、留守児童経験を持つ第二代農民工は同世代の農民工に比べて 1.297 倍と 1.402 倍高いと分かった。また、非体力の職種と熟練／半熟練の職種の離職率においては、留守児童経験を持つ第二代農民工と同世代の農民工の差は顕著的ではないことが分かった。このように、仮説 2a と仮説 2b の仮説も検証された。

謝 (2016) も、留守児童経験が第二代農民工の転職率に与える影響を調べた。汪他 (2014) と違って、謝 (2016) は「完全留守」と「非完全留守」、「長期留守」と「短期留守」という二つ指標を用いて仮説を立てた。仮説 1 は、同世代の第二代農民工に比べて、留守児童経験を持つ第二代農民工の転職率が高くなる。仮説 2a は同世代の第二代農民工に比べて、非完全留守者より完全留守者の第二代農民工の方が転職率が高い。仮説 2b は、同世代の第二代農民工に比べて、短期留守者より長期留守者の第二代農民工の方が転職率が高い。謝は、2015 年 7 月から 8 月にかけて北京の出稼ぎ農民工に対する調査データを基に分析した。調査内容は、出稼ぎ農民工の個人と家族の情報、留守児童経験か流動児童経験の有無、職業の性質、都市への適応及び認知などについて調べられた。調査対象は、16 歳から 35 歳までの第二代農民工を絞って、そのうちの 1034 人（男性 567 人、女性 467 人）のデータを抽出した。全てのデータの中には、留守児童経験を持つ第二代農民工は 276 人で、全体の 26.69% を占めた。そのうち、完全留守と長期留守はそれぞれ 12.28% と 16.83% だった。回帰分析で分析した結果、(1)留守児童経験を持つ第二代農民工の転職率は同世代の農民工より 1.56 倍高いことが分かった。また、(2)非完全留守より完全留守の第二代農民工の方が転職率が高いことも明らかになった。さらに、(3)短期留守者より長期留守者の方が転職率が高いことも報告された。つまり、仮説 1、仮説 2a と仮説 2b が全部検証された。そのほかに、同じ留守経験を持つ第二代農民工でも性別による影響があり、女性より男性農民工の方が転職率が高いことが分かった。

紀 (2016) も過去の留守児童経験が第二代農民工のキャリアに与える影響を調べた。2015 年 8 月から 11 月にかけて北京の 6 つの地域で農民工の職業安定性、職業レベル、キャリア発展及び起業状況などについてアンケート調査を行った。そして、調査対象は、2005 年時点で留守児童か流動児童であった第二代農民工の 1352 人にした。調査の結果、留守児童経験を持つ第二代農民工は流動児童経験を持つ第二代農民工に比べて、職業のレベルが低く、雇用環境も悪く、職業の安定性も弱く、都市への適応感も低いと報告された。

王 (2010) は、留守児童経験は大学生の親密関係の質、社会支持及び主観幸福感に与える影響を調べるため、湖北省の 7 つの大学の学生を対象にアンケート調査を行った。そのうち、留守児童経験を持つ大学生は 319 人（男性 217 人、女性 102 人）、留守児童経験を持たない大学生 400 人（男性 213 人、女性 187 人）を対象とした。調査方法は、家庭基本情報ア

ンケート、主観幸福感アンケート、親密関係体験度量表、社会支持アンケートを全部合わせて配布し、集団方式で調査を行われた。そして、SPSS で留守儿童経験を持つ大学生と留守儿童経験を持たない大学生の親密関係の質の違いを調べた。また、社会支持は親密関係の質と主観幸福感を仲介するという役割を調べるために、この三つの変量を回析分析で分析した。分析の結果、(1)留守儿童経験を持つ大学生は留守儿童経験を持たない大学生に比べて、親密関係の質が低いことが分かった。親密関係に対して留守儿童経験を持つ大学生は不安型の割合が最も高く、回避型も留守儿童経験を持たない大学生より高いことが分かった。(2)留守儿童経験を持つ大学生は留守儿童経験を持たない大学に比べ、主観幸福感全体が低いことが分かった。そのうち、留守儿童経験を持つ大学生は生活満足度が最も低く、消極感情が留守儿童経験を持たない大学生より多いことが分かった。(3)社会支持は、親密関係と主観幸福感の間に仲介する役割を果たし、つまり親密関係は社会支持の多角度から個人の主観幸福感に影響を与えていることが分かった。

劉他 (2014) は、小学校段階の留守儿童経験と中学校段階の留守儿童経験が大学生の心理健康に与える影響を調べるため、以下の 3 つの仮説を設定した。(1)小学校段階と中学校段階の流動児童経験か留守儿童経験を持つ大学生は、心理健康レベルには差がある。(2)留守儿童経験は大学生の心理健康にマイナスな影響を与える。(3)流動児童経験と留守儿童経験は大学生の親子関係と家族帰属感にも影響を及ぼし、そして両者は共に仲介変量として成人以降の心理健康にも影響を与える。調査対象は、11 つの大学の学生 906 人 (男性 541 人、女性 365 人) とした。かつては流動児童、両親ともに出稼ぎに行った留守儿童、片親出稼ぎの留守儿童と両親ともに出稼ぎに行っていない農村児童が含まれていた。調査方法は、「大学生心理健康度量表」「親子関係量表」「家庭幸福感」などの項目で作成された度量表で調べられ、そして因子分析で調査データを分析した。分析の結果、学齢前段階、小学校段階あるいは中学校段階のどの段階においても、両親ともに出稼ぎに行った留守儿童経験を持つ大学生は、親子関係と家族帰属感が他のタイプの大学生に比べて明らかに低く、心理問題は明らかに高いことが分かった。また、流動児童経験を持つ大学生の親子関係と家族帰属感とは他のタイプの大学生に比べて一番高く、心理問題が一番低いことが分かった。さらに、片親出稼ぎの留守儿童経験を持つ大学生と両親が出稼ぎに行ったことがない大学生も、流動児童経験を持つ大学生に比べて、親子関係と家族帰属感が低く、心理問題が高いことが分かった。従って、仮説 1 が検証された。また、留守儿童経験は大学生の心理健康に大きな影響を与えることが分かった。特に、両親ともに出稼ぎに行くことは、留守儿童を早く社会化させるマイナスな経験であり、このような経験は親子関係と家族帰属感に直接な影響を与えると指摘された。一方、流動児童経験は大学生の心理健康にプラスな影響を与えることが分かった。また、中学校段階の留守儿童経験に比べ、小学校段階の留守儿童経験の方が影響が大きいと分かった。従って、仮説 2 と仮説 3 も検証された。

楊他 (2015) は、留守儿童経験を持つ大学生の生活技能現状及びその要因を分析し、科学

的な関与措置を探ることを目的とした。調査対象は、2013 年に河北工程大学の新入生 500 人のアンケート調査のデータから抽出した。そのうち、有効データは 464 人分あり、留守児童経験を持つ大学生は 212 人いた。調査内容は、(1)5 年～10 年以上両親と同居していない留守児童経験を持つ大学生の人数、(2)生活技能に関するアンケート調査、(3)留守児童経験を持つ大学生の生活技能に影響する要因（例えば、年齢、性別、出身地、留守期間、入学前後の生活スタイル、両親との交流状況、両親の職業、家庭の経済状況、個人の性格など）。分析方法はまず SPSS でデータを χ^2 検定で行った後、回帰分析でその要因を分析した。分析の結果、農村戸籍で留守児童経験を持つ大学生の生活技能は、都市戸籍の留守児童経験を持つ大学生より低いことが分かった。また、留守期間が長ければ長いほど、生活技能の水平値が低いことが分かった。さらに、生活技能が低いと、個人の創造力も下がり、自信がなくてコミュニケーション能力も欠けるため、事件処理能力とストレス解消能力も低くなり、心身の病を生じることにつながると指摘された。

張他 (2018) は、留守児童の心理問題を予防するための理論的な指導ができることを目的とし、留守児童経験が大学生の人格と鬱の程度に与える影響を調べた。調査対象は、安徽省、江西省、四川省、福建省にある 6 つの市⁹から 227 人のアンケート調査からデータを抽出した。また、そのうちの 128 人を選んで、インタビュー調査を行なった。インタビュー内容は、生活及び心理の現状、留守児童経験に対する主観的評価、留守児童期間で起きた自分の人生にとって最も影響の大きい事件、今後自分の子どもの教育に対する考えなどであった。調査対象は、1980 年から 1990 年の間に生まれた留守児童経験を持つ学生、農民工、農民及びビジネスマンであった。分析方法は、量的分析と質的分析を統合して行われた。量的分析は、アンケート調査のデータを比較分析と相関分析をした。質的分析は、インタビュー法、記述研究法、文献研究法で分析した。さらに、SPSS で鬱の程度の量表と人格量表を分析した。分析の結果、まずインタビューでは、(1)生活現状に対する態度において、困惑、生きる方向を失って、現在だけを考えると答えた頻度が最も高かった。また、学歴が低く、農民としては将来性がなく、安定した収入と生活がないという評価もあった。身体健康の面においては、心理良好状態は 103 人で、亜健康状態は 25 人、健康的ではない人は 14 人いた。(2)78 名は過去の留守児童経験に対して理解できる態度を示した。そのほかの 50 人は、留守児童経験は自分にマイナスな影響を与えられたため、過去の経験に対して抵抗感を感じる。そして、過去の留守児童経験に対する不満の要素の中に、「しつけが欠ける」「監護者が指導も安心感も与えてくれない」「仲間の関係が疎い」と「教師が自分のことを重視してくれない」など頻度が高かった。人格分析では、留守児童の心理にとって最も影響を及ぼす要素として、仲間関係、教師と学生の関係、母親の付き添い、マイナスな経験などがあることが分かった。そのうち、マイナスな経験が留守児童の心理健康に最も大きな影響を与える要素であることが分かった。

⁹ 阜陽市、滁州市、南陽市、上饒市、自貢市と長樂市

以上の先行研究から、留守児童経験は第二代農民工のキャリアだけではなく、大学生となった元留守児童の人生、人格、心身など多方面にわたって悪影響を与えることが分かった。つまり、留守児童経験は留守児童である時期に影響を与えるだけでなく、彼らが大人になってもその経験に引きずられて深刻な影響を与えていることが読み取れる。また、留守児童経験を持つ第二代農民工や大学生が、過去の留守児童経験に対して否定的に捉えているため、その経験を引きずられて今後の人生やキャリアに悪影響を与えると捉えることができる。従って、第二代農民工や大学生にとって、過去の留守児童経験を新たに意味付けることによって、自らを過去の留守児童経験から解放し、社会の主体として能動的に社会に働きかける主体へと自己変革していくことをどのように達成していけるかが重要な課題であると考えられる。

3.1.3 中国の現留守児童に関する先行研究

近年中国の現留守児童を取り上げる先行研究の中には、現留守児童が抱えている問題と厳しい生活現状を指摘するものが多い（呉 2004、秦他 2009、陳 2014）。また、そのような生活に対して現留守児童が不満を感じていることも多く指摘されている（池他 2008、范他 2010、匡他 2016）。一方、現留守児童に対するフィールド調査研究は、阮（2008）、趙（2012）、譚（2012）など限られている。以下では、これらのフィールド調査研究を詳細に紹介する。

阮（2008）は、中国の出稼ぎ労働者が最も多い5つの省である湖南省、湖北省、河南省、安徽省、四川省を訪問し、約3年間にわたって農村留守児童の生活現状、教育問題、留守児童と関連する農民の老後社会保障問題、農村公衆文化問題、農村の未成年の成長環境問題などの社会問題について大量な調査を行い、事例、対話、手紙などで本書に提示した。本書は「欠席編」「悲情編」「償還編」の3つの部分によって構成されている。「欠席編」は、家庭・学校と社会の欠席問題を指摘し、農村留守児童の厳しい生存現状を明らかにし、留守児童問題の多発と関係があることを論じた。「悲情編」は、農村留守児童の心理健康、事故傷害、未成年犯罪などの諸問題を実際の事例を通じて示し、留守児童の生存環境問題の解決は緊急であることを示すことで社会に警鐘を鳴らした。「償還編」は、留守児童問題に対する中国政府及び社会からの取り組みと対策を多方面から提示し、政治、経済、文化などの諸方面から問題が生まれる原因及び解決方法について分析し示唆を与えた。阮は、自費で留守児童がいる学校の先生たちと座談会を開いたり、留守児童に対して質問紙調査を行ったりした。また、留守児童と手紙で交流したり、留守児童の少年犯罪者と会話したりして、合わせて約1600名の教師と1900名の留守児童とやりとりをして、大量なデータを収集した。調査によると、留守児童は農村の学齢期児童の47.7%を占められ、その半数以上の留守児童は親の不在により他人から差別され、孤独感や悲観的な感情を持っているとされる。また、少年犯罪者の80%以上は留守児童か親が離婚した子どもである。中国がWTO及びグローバル化競争に加入してから「三農問題」が顕著に現れ、農業人口が都市へ移動し、出稼ぎ農民が増加

し、留守児童の数も上がる一方である。そこで、阮は、このような留守児童問題は近年中国の経済発展がもたらした結果であり、この社会に生きているすべての人々が留守児童問題の解決方法に取り組むべきだと指摘した。一方、阮は、上記述べられたような留守児童問題の具体的な実践活動や解決方法については論じていない。また、留守児童問題が改善できるような社会環境づくりのための具体的な対策は何かも論じていない。

趙（2012）は、広西省都安県を中心に、現地の留守児童問題を全面的に調査し、五年間にわたって留守児童の成長を記録したものである。調査時（2007年）都安県の人口は全部63万人であるが、年間出稼ぎ労働者は15万人であり、中国の重点貧困扶助地域であり、留守児童の割合が約80%で、留守児童問題が顕著に現れている地域である。趙は、約10回以上現地を訪問し、小学生105例、家庭訪問18軒、3つの小学校において、校長5人、教師若干、村の委員会及び教育部門の関係者若干に対してサンプリング調査をしてインタビューを行った。この調査によると、親の出稼ぎにより、留守児童は生活だけではなく、心理的な問題も抱え、特に留守女児の危険性が高いことを多くの事例を通じて示された。この105人の小学生において片親が出稼ぎに行く人は全体の35%、両親とも出稼ぎに行く人は全体の35.9%を占め、両親とも家にいる人は全体の29.1%を占めている。つまり、これらの小学生において大半は留守児童で、約全体の70%以上を占めているとされた。その理由としては、出稼ぎ親の収入では子どもを都市へ連れて行って生活することが難しいとされるため、都市の親と離れて農村で暮らせざるを得ないとされる。これらの留守児童は、50.7%は片親が監護して、41.1%は隔代監護（祖父母）、8.2%はそのほかの監護である。留守児童は出稼ぎ親の帰郷回数は毎年平均回数は2.51回で、半数以上は年に1回しか帰らないという。また、105人の子どもの中では、片親及び孤児の割合が12.4%も占められる。労働者の社会保障の不整備のため、出稼ぎに行く労働者が作業中での事故や給与の不安定により、出稼ぎ農民の事故による死傷と離婚が多いとされる。また、趙は、留守児童の生活観察から留守児童が成長して親について都市へ出稼ぎに行き、留守児童の親になるまでという成長過程を記録し、縦断的に留守児童の成長を観察する中で、留守児童問題は次世代に繰り返されていることを述べた。趙は、留守児童問題は都市化の進化の産物であり、留守児童問題の解決方法としては、(1)都市の教育資源を拡大し、留守児童が出稼ぎ親と共に都市で生活できるような環境を作ること(2)留守児童問題の解決の一時的な手段として、農村の寄宿制学校の建設を充実させ、留守児童に良い教育環境を整えること(3)留守児童以外の特殊集団、例えば孤児、片親家庭子女、一人暮らし女児などに対して保護とともに救済をして、彼らが健全に育つことを保証することを提案した。また、出稼ぎ労働者に対する都市の開放は、留守児童問題の根本的な解決につながるだけでなく、持続可能な経済発展の必然な選択であると強調した。しかし、都市を出稼ぎ労働者に開放しても、収入が少ない出稼ぎ労働者では子どもを出稼ぎ先へ連れて行って生活することは難しい。また、たとえ出稼ぎ労働者が子どもと都市で生活できても、都市戸籍を持つ人と同じような公衆サービスと社会保障を受けられない

ため、出稼ぎ労働者および子どもの生活が不安定で、農民工問題および流動児童問題が浮上する可能性があるため、留守児童問題の根本的な解決にはならない。

以上の阮（2008）、趙（2012）は長期間にわたって留守児童の生活現状を記録し、留守児童の厳しい生活現状と教育環境を指摘した。しかし、阮（2008）、趙（2012）も留守児童が直面している問題および厳しい生活現状を記録したものの、そのような問題を解決するための具体的な実践や対策については言及していない。一方、譚（2012）は、留守児童に対して教育的介入を行い、その効果を検証した実践研究である。以下に譚の研究を概観する。

譚は、2009年に重慶市の留守児童が集中している二つの学校で質問紙調査と健康診断を実施し、留守児童には身体健康、心理感情、行為習慣、思想政治及び生活安全において問題があるという結果を得た。この結果を踏まえて、重慶市の政府機関、大学及び企業と提携して、2010年3月から主に重慶市の寄宿制学校の留守児童に対して、思想政治、人格品質、心理感情、行為規範、栄養健康と安全（「4+1」教育モデルと呼ばれる）に焦点化した教育的介入を実施した。思想政治教育は、中国共産党を賛美する歌、人物やストーリーを取り上げ、中国共産党をテーマとする様々な活動を通じて、留守児童に無意識のうちに愛党愛国愛民の種を蒔き、将来に対して大きな夢を持たせることを目指す。人格品質教育は、週に一回テーマ別の課外活動を行い、その活動の中で、意志力を鍛え、高度な責任感とチーム精神を育成することを目指す。心理感情教育は、学校に電話やメールボックスを設置して、出稼ぎ中の親との連絡を促したり、教師が積極的に悩み相談に関わったりすることで、周囲からの愛を実感させることを目指す。規範教育は、留守児童の日常生活に対して軍隊のような管理を行うことで、彼らに礼儀正しく行動する習慣を身につけさせることを目指す。栄養健康と安全教育は、留守児童に対して健康診断を行い、身体状況の問題がある場合には、食事を管理し、同時に体質訓練と安全教育の強化を目指す。このような教育的介入を3か月間実施した後に質問紙調査と健康診断を行った。その結果、(1)貧血罹患率が22ポイント下がり、留守児童の体質は向上した。(2)留守児童の両親、集団、故郷と国家に対する帰属感が高まった。(3)留守児童の心理問題が35%減少し、心理感情、行動習慣が改善された。(4)留守児童の人格の質が向上し、95%の子どもが自分から他人を助けるようになった。つまり、この教育的介入は留守児童問題の解決に一定の効果が認められたと報告している。

一方、譚（2018）は、教育介入の焦点として取り上げた「身体健康、心理感情、行為習慣、思想政治及び生活安全」という問題と留守児童自身が感じている問題との間にはギャップがあり、留守児童の根本的な問題を解決することは難しいと指摘した。また、譚（2012）の実践では、留守児童は、一方的に支援を受ける「被支援者」として位置づけられており、児童たちも、受身的にこの教育支援に参加していることが窺われる。

以上、中国の留守児童研究を概観して分かるように、従来の先行研究は元留守児童と現留守児童を分けて、異なるグループとして取り上げて研究してきたと言える。しかし、元留守児童も現留守児童も共に留守児童経験を持っており、しかも、彼らはグローバル化という同

じ社会的な文脈の下で生み出された集団である。また、以上の先行研究からも分かるように、元留守児童は成人しても過去の留守児童経験に引きずられて、彼らの現在の人生及びキャリアに大きな負の影響を被っていることが分かる。一方、現留守児童も外部から与えられた言説や社会的支援により、自分の主体性を発揮できず、受動的な存在となっていることも読み取れる。従って、元留守児童と現留守児童が社会の主体として能動的に社会に働きかけることができるように、自分たちの留守児童経験を捉え直し、留守児童経験を新たに意味付けることが重要であると考ええる。

3.2 対話的問題提起学習に関する先行研究

対話的問題提起学習を援用した先行研究には、半原(2008)、野々口(2016)、野々口他(2018)などがある。以下では、野々口(2016)、野々口他(2018)について詳細に紹介する。

野々口(2016)は、都内のある地域の日本語教室で実施された日本人と外国人の対話的問題提起学習活動で、外国人が提起した問題に対する参加者の認識の変容及び意味の生成過程を明らかにした。この対話実践は、全23回のコースの中盤の3回で行われ、野々口は第1回の対話活動を分析した。対話活動に参加したのは、中国語母語話者である教師(T)と、中国語母語話者(周、鄭)、日本語母語話者(中村、吉田)の計5名であった。周と鄭はともにプログラマーで、来日後は日本人の上司や同僚とともに仕事をする中で日本語を使用し、今回分析する対話の時点での2人の在日期間は約7ヶ月であった。中村は福祉関係の職員、吉田は公務員である。

まず、対話的問題提起学習が始まる前に、参加者が自分の困っていることをタスクシートに記入し、その中から解決したいものを一つ選んで、全員で話し合う活動を実施した。対話の開始時点では、プログラマーである周の「上司からの言葉が分かるが、自分の気持ちを伝えたい時は言葉がわからない」という問題を取り上げたが、周一人では自分の問題を十分に説明できず、対話の参加者は周の問題を外国人プログラマーのコミュニケーション問題として理解していた。そのあと、かつてプログラマーだった吉田が周の問題に反応し、エンジニアリングの話は図を書いてシステマティックに説明すればわかるはずだと発言をした。しかし、教師と中村は吉田の主張が「わからない」と言って不同意を表明し、〈非プログラマー〉として向かい合う立場を取っていた。これを受けて周がさらに自分の問題を説明すると、鄭が周の問題は「僕の困っていること」でもあると言い、同じ問題を抱えていることを明示的に表明した。周と同じ問題があると言う鄭は特にいい解決策はないと言い、絵で説明しても解決できないと述べた。鄭の発言を受けて、教師はさらに具体的な状況の説明を求めると、鄭は二つのプログラムを作って上司に尋ねるという方法を取っていることが分かった。つまり、本来3時間で済むところを6時間かけて二つのプログラムを作り、「どっちがいいですか」と上司に尋ね、上司が「ああ、こっちがいいね」と答え、上司の意図に合わなかったもう一つのプログラムは無駄になる。これを聞いた吉田の、〈プログラマーにコミュ

ニケーション上の問題は起こらない」という認識が変わっていった。そして、鄭は自分の問題を、上司に言葉で確認できないことから発生する「効率」の問題として捉え直した。これに周が「そうそうそう」と同意を示した。周が鄭の問題に自分の問題を重ね合わせていることが分かった。周が上司の意図を誤解した時は「やり直す」となり、「残業しなければならぬ」と述べた。ここで、〈非プログラマー〉の教師と中村は、周の問題は、残業という文脈においてプログラマーに限定されない働くもの一般的な問題であると捉えるようになった。

対話の開始時点において、周は「自分の気持ちを伝える言葉が分からない」という問題だと認識していた。しかし、教師や他者との対話を通じて、この「残業」の意味は、鄭と周の体験談や、同じプログラマーである吉田によるその代弁、それらに対する中村や教師からの共感といった多声な声の積み重ねによって、生み出されたものであると考えられる。そして、野々口は以上の事例を周の生態学的意味の生成プロセスとしてまとめた。周は、まず自分の問題を「上司からの言葉はわかるが、自分の問題を日本語で説明するのが難しい」と認識し、〈上司とのコミュニケーション、自分の問題、日本語、説明する、難しい〉といった諸概念のネットワークが形成され、プログラマーとしての実践や生きることと結び付けられた意味を生成した。これが生態学的意味の生成の第一段階と捉えられる。その後、教師や他者と対話を重ねて他者の声を介することで、自分が「上司に日本語で説明するのが難しい」と認識した現実から、「効率が良くやれない」「ただで残業」「生産性が下がった」「業務改善をするべき」「上司は外国人に重要なファンクションを任せられない」という新たな認識を得て、そこから〈非効率、生産性の低下、残業、働く人の負担、不当な評価、個人ではなく会社全体での解決〉といった諸概念のネットワークが形成され、自分の生活と結びつけた新たな意味を生成した。これが生態学的意味の生成の第二段階と捉えられる。

野々口（2016）の事例から、対話における言語の媒介によって自分や他者が新たな認識を得ることで、他者の声を介して自分の生き方と結びついた新たな意味を言語として獲得していくことが分かった。言い換えれば、言葉の意味はあらかじめ決められたものではなく、対話を通じて、自分の生活とつなげてはじめて意味として作り上げられていくものであると捉えられる。そして、問題の共有は互いの認識の変容によって可能となり、認識の変容は対話によってもたらされることが分かり、相互学習としての対話的問題提起学習の意義が検証された。

野々口他（2018）は、学習者と教師が外的言語生態場で言語を交わすことを通じて、それぞれの内的言語生態場で自己とグローバル化社会との繋がりをどのように見出し、捉え返していくのかを、テキストの意味分析に基づいて記述した。分析対象は、第6回の授業「グローバル化社会を生きる私たち：雇用から食糧へ」を受けた学習者の振り返りと、それに前後する教師（トンプソン、鈴木、房）との発言及びコメントといった、学習者と教師のテキストである。特に、学習者春野（仮名）と教師たちとのやりとりに注目して、彼らの間で、

主体の生存の危機が「間接的な消費」や「比較優位」という語を通じて言語化されている部分を中心に分析した。

春野は最終課題「今までの自分の振り返りとコメント、事前課題を読み返してください。そしてこのクラスで何を考え、何を学んだか、レポートにまとめてください」というレポートで、自分と世界との繋がり方に関する認識を深めていき、グローバル化社会の現状を変えていこうとする主体性形成の契機を獲得していたことが窺われ、特に、労働者、消費者、生産者としての明確な行動基準を表明していた。野々口他は、春野が「「生きる」ということの根本的な部分を考えるようになった」そのきっかけ及び過程の一部を第 6 回の教室談話を取り上げて分析した。学習者春野が振り返りを書く前に、先行する第 6 回の授業で事前課題を前提に、教師トンプソンが自給率、肉食文化など食糧について考えるヒントを示した上で、食をめぐるグローバル化社会を「間接的な消費」と「比較優位」という切り口から見た場合、どのようなことが、「私たち」がどのように繋がっていて、「私たち」がどのように考えているかを述べた。まず、場面 1 では、トンプソンが比較優位という言葉の意味を、車と農産物の輸出入を例に挙げながら説明した。そして、比較優位の概念を通じて得た、自己の生存を支える食糧に関する認識とその理由―「車と食べ物を一緒にできない、食べ物は私たちの命に関わるが車はそうではない」と自分の生存の危機を認識した。そして、車と食べ物を同じ物として交換した場合、農業が衰退化し、荒れた土地の回復には時間がかかり、農業からは副産物も得られないという負の連鎖についての思考も得られた。ここでは、トンプソンが比較優位という用語について、自己の生存及び他者そして自然と結びつけて概念のネットワーク（生態学的意味）を得たと捉えられる。

次に、場面 1 に続くミニレクチャーで、トンプソンが「肉食」に対して、「私たちが肉を食べることによって、またその小麦などの、主食を消費していることになるわけですね。」というトンプソン自身の理解を述べた発話を受けて、同じく第 6 回の授業担当教師である鈴木が「間接的な消費」を発言した場面が取り上げられている。鈴木が発話には、食をめぐるグローバル化としての「私たち」の肉食に対して、「間接的な消費」が多くなるという認識を鈴木が得ていることが表れている。鈴木が「間接的な消費」という発言に続き、トンプソンは「私たち」の肉食が「誰かの食べ物を取っている」可能性があるという自分の認識を述べた。つまり、食糧をめぐる「比較優位」「間接的な消費」といった概念のネットワーク（生態学的意味）が第 6 回授業前に行われた教師ミーティングで教師たちが獲得したものであった。

第 6 回の授業を受けた春野は振り返りで「間接的な消費ということをあまり考えたことがなかったので衝撃的でした。」と書き、以降「間接的な消費」を通じて春野がグローバル化社会を捉え返していった。春野は、授業において「間接的な消費」（鈴木）という認識や、「誰かの食べるものを取っている」（トンプソン）という認識を得て、自分を他者の食べ物を奪う存在として位置付け、飢餓に苦しむ人々と自分との繋がりを見出し始めた。そして、

「自分はどうすればいいのか」という問いは、春野が自分と「家畜のえさの原料を主食とする人々」との繋がり方を変えるための探索に入ったことを示している。このような自発する問いを通じて、春野は生態学的主体としての自己と、それとの関係で世界を生態学的客体として捉えようとしていた。次に、春野は第6回の授業で触れた「比較優位」という概念を取り上げて、なぜ「比較優位説を食べ物と車の間に用いてはだめ」なのかについて考えた。そして、「日本は一体どうやって生きていけばいいのだろう」との自発する問いに続き、春野は日常的に使っている大学生協の食べ物を調査した。調査した結果、食べ物の多くが輸入物で、肉だけではなく穀物であるジャガイモがイスラエルから来ているということに驚いていた。「グローバルゼーションが進んでなかったら今の生協の食堂もなかったのです。」という振り返りを結び、自分の生存を支える食が世界との繋がりの下にあるという発見を実感として述べていた。

春野の第6回授業の振り返りに対してコメントを書いた房も、春野の「衝撃的」という言葉に共感し、その感覚に基づきながら、トウモロコシによるバイオ燃料や水道水からのホルムアルデヒド検出といったニュースを持ち出して、自己と他者・外の世界との繋がりを見出すことの重要性や自己の生存の脆弱性を改めて認識した。そして、春野がトンプソンの言葉を理解し、自分との関連性をたどる思考を通じて使用した言葉が、房の思考を通じて増殖され、コメントというフィードバックによって強化されていることが分かった。このように、教師も学習者も、他者の言葉を媒介にして、自分がこれまでの生活で得た知識や経験を呼び起こし、自分との関連性をたどりながら思考していることが示された。

以上をまとめると、野々口（2016）は、自分の考えを相手に伝えることができないという単に言語の問題ではなく、相手と自分が抑圧―被抑圧の関係になっていたことが分かる。そして、対話による参加者の認識の変容及び生態学的意味の生成は、参加者を取り巻く世界に対する新たな理解を得ると同時に、世界に対して能動的に働きかけていく実践につながると捉えられる。また、野々口他（2018）は、学習者と教師が教室という外的言語生態場世界で言語を交わしながら、それぞれにグローバル化社会と自己がどのような繋がり方をしているかを把握できたことが分かる。春野は生態学的主体性を成す契機の獲得は、トンプソン、鈴木、房がそれぞれに、自己の生存の危機と他者の飢餓を関連づけて把握し、そして自己はどうすべきかを考えるという教師の同行者性の中で実現しているとされた。さらに、このような実践を通じて、学習者・教師・グローバル化社会という三者の主客共同体と学習共同体が形成されたことも推察された。しかしながら、研究者を対話参加者とする研究はそもそも少なく、さらに、その場合であっても、対話参加者として研究者自身を分析する研究は管見の限りない。対話的問題提起学習は、対話を通じて対話参加者の双方が水平的関係に立ち、ともに学び合うことを重視する学習法である。従って、対話的問題提起学習を援用した対話を分析するとしたら、対話参加者の一方だけでなく、対話参加者双方の学びを見ることが重要な課題であると考えられる。

3.3 本研究の位置付け

中国の留守児童研究によって、留守児童が直面している問題及び厳しい生活現状が浮き彫りにされた。また、元留守児童に関する先行研究によって、留守児童経験が第二代農民工のキャリアだけではなく、大学生となった元留守児童にも人生、人格、心身など多方面にわたって悪影響を与えることが分かった。また、現留守児童を対象とした研究では、留守児童を、支援が必要な被支援者として位置づけ、支援のための教育的介入が実施されている。しかし、現留守児童はこのような支援に受ける時、自分の主体性を発揮できず、受動的な存在となっていることが読み取れる。また、現留守児童自身が感じている問題と教育介入で取り上げられている問題の間にはギャップがあり、現留守児童問題の根本的な解決が難しいという指摘もあった。さらに、研究者が留守児童に教育的介入を支援するものとして位置付けると、支援者の研究者が被支援者の留守児童に一方的に教え込む行為になり、支援者は被支援者からは何も学べないという前提になる。つまり、研究者と留守児童は「支援者-被支援者」という垂直的な関係であり、被支援者の留守児童は永遠にその権力関係から脱せず、社会の主体として能動的に社会に働きかける主体へと自己変革していくことが不可能であると考えられる。

一方、対話的問題提起学習の先行研究から、対等な関係を重視する対話を通じた参加者の認識の変容及び生態学的意味の生成においては、参加者は自身を取り巻く世界に対する新たな理解を得るだけでなく、同時に世界に対して能動的に働きかけていく実践を生み出すことが分かった。しかし、これらの先行研究では、対話を通じて対話参加者（日本語学習者、学生）の生態学的意味の生成及び生態学的主体性の獲得については分析されているが、研究者が対話の参加者の場合の対話参加者(=研究者)の学びは取り上げられていない。

そこで、本研究では、この対話的問題提起学習を援用し、筆者（周）と対話を通じて、中国の元留守児童・現留守児童が、自らの留守児童経験を新たに意味づけ、自己を起点にして自己と自己を取り巻く世界との繋がりを捉え返すことで、能動的に社会変革に向けて働きかける主体となることを実証的に示すことで、留守児童問題の解決に向けた一石を投じることを目指す。

第4章 研究方法と研究課題

4.1 研究方法と研究課題

本研究では、全て質的な研究方法を使ってデータを分析する。質的研究は、研究対象の一つ一つを事例として重視し、事例をその存在するコンテキストから切り離さない研究方法であるとされている（岡村 2004）。本研究で取り上げる調査協力者である元留守児童・現留守児童も一人ひとりの事例を取り上げてそれぞれの生活世界を重視して分析することが重要であると考ええる。

言語学者の Pike (1967) は、文化現象としての人間の社会的行為全般の記述や説明に対して、「エティック」と「エミック」という二つの基本的な研究立場を提唱し、そのうちとりわけ「エミック」な研究側面の重要性を論じている。Pike によれば、「エティック」な視点とは、あるシステムの外部から行動を研究することであり、「エミック」な視点とは、そのシステムの内部から行動を研究することである。質的研究は「エミックな視点」である。すなわち研究者はその環境の中で生きている内部者の視点をもち、研究中的場と文化に十分に馴染み、関わりを持つことである。本研究では、筆者は研究者でありながら、元留守児童当事者でもあるため、調査協力者と共通の生活経験と文化背景を持ち、彼らの内面に入り込んで解釈し、理解することができると考えられる。また、調査地は筆者の出身地であるため、現地の言葉と文化をよく知っており、馴染みのある調査環境であり、調査協力者の多くは筆者とすでに信頼関係が築かれている。よって、本研究は「エミック」な視点で、質的に分析する条件が備わっている。

次に、本研究の理論的枠組みである言語生態学、および調査方法である対話的問題提起学習の目的と特徴を取り上げながら質的研究方法を用いる妥当性を述べる。まず、言語生態学の基本的な考えでは、言語はアプリアリに意味を持たないことである（岡崎 2009b）。つまり、意味は一定の契機に応じて生成されるものという考え方である。この点においては、仮説検証を目的としない、現象に内在・潜在する意味を見出して理論化する質的研究も共通の性質を持つ（大谷 2017）。また、言語生態学に基づく生態学的分析は、生物・人間の生存の諸相、その基盤を支える構造、過程を明らかにする学であることを基本とする（岡崎 2010）。つまり、現象の質的理解（数量で表現できないような）や説明、あるいは解釈をし、プロセスを重視することを目的とする質的研究と一致している。

また、本研究の調査方法である対話的問題提起学習は、対話を通じて双方が共感的態度で互いの問題を考え、互いに相手の物の見方、感じ方や文化の内在的視点を形成していくことが目的とされる（岡崎 2009a）。内在的視点とは、聞き手は話し手の取り上げた事柄をできるだけ自分の問題として耳を傾けていくことである。つまり研究者は研究対象の文化に自分から積極的に関心を持ち、関わりを持つことである。この点は、研究者と研究対象が密接な関係を持つことを前提とする質的研究と共通している。以上のような理由で、本研究は全

てにわたって質的研究方法を用いてデータを分析することが適切だと考える。

本研究では、対話的問題提起学習を援用した筆者（周）との対話を通じて、中国の元留守儿童・現留守儿童の生態学的主体性の獲得を促すと同時に、留守儿童共同体生態場の構築を目指す。その際、元留守儿童と現留守儿童はどちらも親が出稼ぎのため都市に出ることによって親から離れて村に残されるという留守儿童経験を持つとはいえ、それぞれが留守儿童として成長した農村の社会的環境は大きく異なっている。また、元留守儿童が過去の留守儿童経験を語ることと、現留守儿童が現在経験していることを語ることに異なりがあると考えられる。そのため、以下では元留守儿童と現留守儿童を二つの研究に分けて、それぞれ3つの課題を設定した。

【研究1】元留守儿童の生態学的意味の生成過程

対話的問題提起学習を援用した周との対話を通じて、

課題1：静の生態学的意味の生成過程はどのようなものか。

課題2：彩の生態学的意味の生成過程はどのようなものか。

課題3：健の生態学的意味の生成過程はどのようなものか。

【研究2】現留守儿童の生態学的意味の生成過程

対話的問題提起学習を援用した周との対話を通じて、

課題1：宏の生態学的意味の生成過程はどのようなものか。

課題2：武の生態学的意味の生成過程はどのようなものか。

課題3：玲の生態学的意味の生成過程はどのようなものか。

4.2 調査フィールドの概要

本研究の調査フィールドは、中国の湖南省の岳陽市と邵陽市という二カ所である。湖南省には811,684人の農村留守儿童がいる（中国社会組織2017¹⁰）。湖南省14の市州のうち、邵陽市は135,970人で最も多く、湖南省の農村留守儿童人数全体の約17%を占めている。そのうち、監護者がいない、あるいは監護能力を持たない農村留守儿童の人数は中国全国のトップ3に入っている。

本研究でこの二カ所を調査フィールドにしたのは、以下の理由がある。

- ① 湖南省岳陽市は、洞庭湖の南の農漁業の盛んな地域である。総面積1,535 km²、総人口（2003年）69万人。ここは筆者の出身地であり、現地の言葉と文化も馴染みがあり、調査協力者とすでに信頼関係が築かれている。

¹⁰ 中国社会組織公衆服務平台、「湖南省慈善总会募集 508.8 万将建 30 个“留守儿童之家”」
<http://www.chinanpo.gov.cn/6020/102746/index.html>、2017年4月13日（閲覧日2018年11月22日）

- ② 湖南省邵陽市は、総面積 2,184 km²、総人口(2003 年)78 万人。湖南省では 8 番目に広い県である。ここは湖南省で留守児童の人数が最も多く地域であり、留守児童問題が深刻で顕在的に見られると考える。

4.3 調査協力者

(1)筆者（周）

本研究の筆者も調査協力者と共通の経験を持つ元留守児童である。筆者（周）のプロフィールについては以下の表 1 で示される。

表 1 筆者（周）のプロフィール

| |
|--|
| (0 歳) 中国湖南省の農村地域 (X 鎮) に生まれた。 |
| (0 歳～15 歳) 父親は出稼ぎに行き、母親、姉と自分と弟の 4 人は農村で暮らした。 |
| (15 歳～19 歳) 周は中学校を卒業してすぐ深セン市（広東省）へ出稼ぎに行った。 |
| (19 歳～21 歳) 仕事をしながら、日本語を勉強した。 |
| (21 歳～23 歳) 大学で日本語を主専攻として勉強した。 |
| (23 歳～30 歳現在) 交換留学で日本の大学に留学し、現在は大学院に在籍している。 |

(2)元留守児童・現留守児童

周の知人の中から個人的伝手を頼って留守児童を募集した結果、周と同じ出身地の留守児童 6 名（元留守児童 3 名・現留守児童 3 名）の協力を得ることができた。留守児童当事者の他に、彼らの生活世界をもっと理解するために、元留守児童・現留守児童の関係者にも半構造化インタビューを行なった。調査協力者の元留守児童・現留守児童のプロフィールは以下の表 2 のとおりである。名前は全部仮名である。元留守児童・現留守児童の異なる生活環境をより把握できるように、表 2 の後にはそれぞれの詳細な情報をつけた。

表 2 調査協力者のプロフィール

| 名前・留守児童分類 | 性別 | 年齢 | 婚姻状態 | 留守児童時期 | 留守児童期間同居家族 |
|-----------|----|-----|------|-----------------|------------|
| 静（元） | 女 | 24歳 | 未婚 | 2006年～2010年 | 祖母 |
| 彩（元） | 女 | 21歳 | 未婚 | 2002年～2010年 | 母親、姉、弟、 |
| 健（元） | 男 | 27歳 | 未婚 | 1991年～2006年 | 母親 |
| 宏（現） | 男 | 17歳 | 未婚 | 2001年～2019年（現在） | 祖父母 |
| 武（現） | 男 | 15歳 | 未婚 | 2003年～2019年（現在） | 母親、二人の姉 |
| 玲（現） | 女 | 13歳 | 未婚 | 2011年～2019年（現在） | 祖父母 |

① 元留守児童

元留守児童である静は、1994 年に長女として生まれ、7 つ下の弟がいる。静の両親は元々

地元で農業をやりながら竹の子の加工工場を経営していたが、父親の怪我とあいまって工場での思いがけない事故により莫大な資金を失ってしまい、安定していた生活が一気に困窮した。そして、静が小学校6年生の時に、両親は幼い弟を連れて北京へ出稼ぎに行き、静は祖母に預けられることになった。静は祖母と農村でほぼ4年間留守児童として暮らし、たくさんの農作業経験をした。その後、農村を離れて都市の高校と大学に通い、大学を卒業してから現在に至るまで都市にある喫茶店で働いている。静と周の弟は友人であるため、周は弟を介して静と知り合った。静は初めて周と会った時から調査に協力的で、対話に開放的な姿勢を示した。また、静は周と同じ出身地の現留守児童である宏と玲を紹介し、そして周が静の出身地の村を訪れた時にはずっと周の通訳として同行していた。

元留守児童である彩は、1998年に次女として生まれた。7つ上の姉と5つ下の弟がいる。80年代から90年代にかけて中国は「一人っ子政策」の規制が厳しかったため、彩の弟が生まれたときに政府に家を壊されただけではなく、莫大な罰金も払わされた。一家の生活を支えるために、彩の父親は都市の建設現場で農民工として働いた。彩の母親は農村に残って農業をやりながら、子ども3人の面倒を見た。彩は中学校卒業までずっと地元の農村で生活をし、その後は都市の高校と大学に通い、現在は大学二年生である。彩と周は同じ村の出身であり、彩の姉と周が親友であるため、彩が幼い頃は姉と周の3人でよく遊んでいた。周は今回の調査のため久しぶりに彩の家を訪れたが、彩は快く調査を引き受け、対話にも開放的な姿勢を示した。

元留守児童である健は、1991年に生まれ、2歳上の姉がいる。健の父親は大工職人で、1980年代から広東省へ出稼ぎに出ていた。健は農村で母親と姉の三人で暮らし、家の唯一の男手として労働力として大量の農作業をやっていた。中学校を卒業した後、父親と広東へ出稼ぎに行き、大工の仕事経験を重ねた。現在は広西省にいる姉と共同で大工関係のビジネスをしている。周と健は同じ農村地域の出身であり、子どもの頃はよく遊んでいた。その後二人ともそれぞれ出稼ぎに村を出て行ってから連絡が少なくなり、今回の調査のために二人が会ったのは14年ぶりだった。健は子どもの頃はおしゃべりが好きであったが、出稼ぎに出からは会話できる相手が少なくなり、無口になったと言う。そして、今回健は、周との出会いを懐かしく思い、快く調査を引き受けてくれた。

② 現留守児童

現留守児童である宏は、2001年に長男として生まれ、9つ下の弟がいる。元留守児童の静とは同じ農村地域の出身である。宏の両親は中学校を卒業してすぐ都市へ出稼ぎに行き、出稼ぎ先の工場を知り合って結婚し、そしてまもなく宏が生まれた。宏が生まれてまもなく両親がまた都市へ出稼ぎに出かけ、宏を農村にいる祖父母に預けた。現在宏は都市の専門学校に通っており、両親は今でも都市で出稼ぎに出ている。宏の両親は毎年旧正月の休み期間だけ農村に帰り、およそ二週間宏と過ごす。宏は、幼稚園の頃に「標準語の発音が悪い」と

他の同級生に笑われた経験があって、それ以来自分の標準語に自信を失い、他人と話すことに対して消極的である。そして、学校以外の時間はほとんど一人で家の二階の部屋で、携帯でゲームをやったり、小説を読んだりしている。周が訪れた時は、宏は最初ずっと黙っていたが、周と約1週間知り合ってからやっと調査に協力することを引き受けてくれた。

現留守児童である武は、2003年に末っ子として生まれ、元留守児童彩とは兄弟である。農村では男尊女卑の観念を強く持っている人が多く、男の子で末っ子の武は、生まれたときから家族や周りの人に可愛がられている。現在二人の姉は結婚と進学で家を出ており、武は都市の専門学校に通っている。武の母親は地元で小さな八百屋さんを営み、その収入を生活費に充てている。父親は今でも都市へ出稼ぎに行っており、年に一回か二回家に帰ってくる。武は8歳から11歳までは両親の出稼ぎ都市で滞在した経験があり、その時から成功したIT技術者や起業家に憧れるようになった。そして、中学校から自分で携帯のソフトウェアを開発して、インターネットで販売することもあった。普段両親と交流することがほとんどなく、いつも二階の部屋で携帯やパソコンを遊んでいる。武が子どもの頃に周と面識があるが、ほとんど会話をしたことがない。しかし、今回周が訪れた時は、武はとても喜んで調査を引き受け、毎回たくさん話してくれた。武の親も「普段は私たちと全然話さないのに、なぜあなたといっぱい話せるのか」と不思議に思っていた。

現留守児童である玲は、2005年に次女として生まれた。10歳上の姉と5歳下の弟がいる。玲の両親は1990年代半ばから農村を離れて広西省へ出稼ぎに行き、玲は両親の出稼ぎ先で生まれ、5歳まではそこで育てられた。その後学校に通うため、6歳から農村へ帰って祖父母と三人で暮らす。現在玲は中学校二年生であり、夏休みは親の出稼ぎ先に行き、冬休みは両親が農村に帰ってくる。祖父母はずっと農業をやっているが、玲は農作業経験が全くない。玲は学校以外の時間は携帯で友達とチャットしたり、ビデオを見たりすることが多い。周が初めて訪れた時、玲はずっと携帯でビデオを見ていて、対話をする意欲がなかった。その後、二人が毎回対話の時間を交渉してから対話を進めた。

(3) 元留守児童・現留守児童の関係者

本研究では留守児童（元留守児童3名・現留守児童3名）に対話的問題提起学習を援用して対話を行なったほか、彼らの出稼ぎ親と監護者¹¹（15名）に対しても半構造化インタビュー調査を実施し、そのインタビュー・データを補足データとして使用した。留守児童問題は留守児童本人だけではなく、彼らを取り巻く関係者も影響を及ぼしていると考えからである。そして、元留守児童・現留守児童の関係者として両親と監護者を選んだのは、彼らの日常生活で最もコミュニケーションの多い関係者であり、一番直接に留守児童の生活に影響を与える人物であると考えられるからである。出稼ぎ親と監護者の具体的な情報は以下の表3・表4のとおりである。（※は元留守児童の出稼ぎ親の当時の情報である。彩と武は

¹¹ 未成年者の保護者を指すことが多いが、本研究では留守児童の面倒を見る人を指す。

兄弟であり、同じ両親である。)

表3 調査協力者の関係者（出稼ぎ親）の一覧

| 留守児童 | 出稼ぎ親 (年齢) | 出稼ぎ先都 市 | 出稼ぎ親の 職場・職業 | 給料 (月給) | 学歴 |
|------|------------------|----------------|--------------------------------|-----------------------|----------------------|
| 静(元) | 父(48歳) 母(46歳) | ※北京市 | ※印刷工場・非正 規社員 | ※500-1000元 (一人あたり) | 小学校卒(父親) 中学校卒(母親) |
| 彩(元) | 父(54歳) | ※広州市 (広東省) | ※建設現場・建築 労働者(日雇い) | ※800-1000元 | 小学校卒 |
| 健(元) | 父(55歳) | ※深セン市 (広東省) | ※建設現場・大工 (日雇い) | ※800-1000元 | 小学校卒 |
| 宏(現) | 父(40歳) 母(38歳) | 東莞市 (広東省) | 帽子製造工場・非 正規社員 | 3000-4000元 (一人あたり) | 中学校卒(両親) |
| 武(現) | 父(54歳) | 広州市 (広東省) | 建設現場・建築労 働者(日雇い) | 3000-4000元 | 小学校卒 |
| 玲(現) | 父(50歳) 母(44歳) | 玉林市 (広西省) | 自営業・広場でカ バン販売(父)、 髪回収(母) | 2000-3000元 (一人あたり) | 小学校卒(両親) |

表4 調査協力者の関係者（監護者）の一覧

| 留守児童 | 監護者(年齢) | 職業 | 学歴 |
|------|--------------------|-------------------|-----------------------|
| 健(元) | 母親(53歳) | 農業 | 中学校卒 |
| 静(元) | 祖母(82歳) | 農業 | 教育歴なし |
| 彩(元) | 母親(53歳) | 農業 | 中学校卒 |
| 宏(現) | 祖父(88歳) 祖母(78歳) | 元小学校教師(祖 父)、農業 | 祖父(高校卒) 祖母(小学校卒) |
| 武(現) | 母親(53歳) | 農業・小売業 | 中学校卒 |
| 玲(現) | 祖父(80歳) 祖母(76歳) | 農業・小売業 | 小学校卒(祖父) 教育歴なし(祖母) |

4.3 調査方法

本研究は対話的問題提起学習を用いて周が元留守児童・現留守児童と対話を行い、その対

話の内容をデータとして収集する。次に本研究が対話的問題提起学習を使う理由を説明する。

第2章の理論的枠組みで述べたように、対話的問題提起学習は、ブラジルの教育者であり識字教育の実践家でもあるパウロ・フレイレによって提案された問題提起型学習に起源を持つ。フレイレ（1979）は、被抑圧者の農民が対話を通じて抑圧の原因を批判的に認識することで、主体的に社会変革に向ける実践へ発展したことが示された。また、日本語教育分野でも、対話的問題提起学習で対話を通じて、学習者が、既存の学習内容を受身的に学ぶという教授の客体から、能動的に学習に参加する学習の主体へと転換することが示された。

以上を踏まえて、本研究では、中国の元留守児童・現留守児童が、対話的問題提起学習による対話を通じて、自分の置かれている現状を捉え直すことで、留守児童問題の本質を理解しながら、主体的に問題の解決に向けて働きかけることができると考えた。また、自分たちが共通して持っている留守児童経験について話し合うことから、対話参加者一人ひとりの主体性と能動性が引き出されやすいことが推察される。また、対話的問題提起学習の一環として、留守児童は、自分の留守児童経験を言語化し、問題提起用のテキストを作成する。このテキスト作成は調査の素材になるだけでなく、元留守児童・現留守児童が自分の経験や考えを言語化にすることで書く力をはじめとする多様な学習能力も副次的に身につくことが考えられる。さらに、いくつもの対話を積み重ねることで、留守児童当事者同士の人間的な繋がりも構築されることが期待され、留守児童共同体生態場の構築も可能であると考えられる。以上の理由で、本研究は対話的問題提起学習を用いて対話を行なうこととし、その対話をデータとして収集する。

4.4 データ収集

(1)対話的問題提起学習による対話データの収集

本研究は、岡崎（2009a）の対話的問題提起学習における対話ステップを踏まえて対話を行なったが、データ収集方法として実施したため、適宜改変を加えている。具体的な手順は以下の通りである。（問題提起用のテキストは付録1・2を参照）

- ① 周が過去の留守児童経験や生活を短い文章にまとめて、問題提起用の「テキスト」とした。読む側は、テキストの登場人物が置かれている状況をできるだけ具体的細部まで思い浮かべることから始める。
- ② その後、対話の参加者は、このテキストに基づいて、追体験しながら対話を行なう。そして対話は、基本的には岡崎（2009a）の「対話のステップ」に沿って進める。
- ③ 対話中はメモを取ったり、キーワードを書いたりするようにする。また対話に先立って、各自、テキストを読んで話したいと思うことを、あらかじめメモしておくことにする。「作者に聞いてみたいこと」、「なぜこのように考えたのか」、「～しようとは思わなかったのか」、「自分だったらこうする」など。

④ 対話の後、「対話後の考察」をする。

以上のステップを踏まえて 2017 年 8 月から 2018 年 8 月にかけて、筆者（周）は元留守児童（静・彩）と現留守児童（宏・武）との間で対話的問題提起学習による対話を 4 回行なった。周は調査協力者が留守児童として生活している場所（元留守児童はかつて生活していた場所）を訪ねて、彼らの実際の生活環境を観察しながら対話を行なった。本研究では対話的問題提起学習による対話を 4 回行うことにし、その位置付けは以下の通りである。

- ① 第 1 回の対話は、調査協力者に対して、同じ留守児童当事者として共感してもらうために、まず周が自身の過去の留守児童経験をまとめた「テキスト」を読んでもらい、その後、そのテキストの内容に基づいて調査協力者との間で留守児童経験を振り返りながら対話を行なう。対話が終わった後に、調査協力者にも周と同じように自分の留守児童経験を次回の対話用の「テキスト」として作成してもらう。
- ② 第 2 回の対話は、調査協力者が作成した「テキスト」に基づいて、第 1 回の対話と同じ流れで周との間で対話を行なう。
- ③ 第 3 回の対話は、周と調査協力者が過去行った 2 回の対話を振り返り、互いが気になることや気づいたことについて出し合い、さらに対話を進めていく。
- ④ 第 4 回の対話は 1 年後に実施し、過去 3 回の対話を振り返り、調査協力者の考えにどのような変化があったかをめぐって話し合う。

元留守児童の静（女性）と彩（女性）、現留守児童の宏（男性）と武（男性）の 4 人に対しては、上記のとおり、4 回の対話を行なった。ただし、協力者とした元留守児童が二人とも女性であるのに対して、現留守児童が二人とも男性であることから、男女差を考慮に入れ、2018 年 8 月に、協力者を増やした。即ち、元留守児童に男性協力者健を加え、現留守児童に女性協力者玲を新たな調査協力者として加え、それぞれ 3 回ずつ対話的問題提起学習で対話を行なった。健と玲に対しては、1 年後の対話を行わず、3 回の対話で終わった。毎回の対話は 60 分から 90 分間であった。周と同じ出身地である留守児童（健・彩・武）とは地元の方言で、他の 3 人（静・宏・玲）とは中国語（普通話）で対話を行なった。対話の内容は調査協力者の同意を得た上で全て録音した。

(2)半構造化インタビュー・データの収集

2018 年 8 月に元留守児童・現留守児童協力者の関係者（出稼ぎ親・監護者）の 17 名に半構造化インタビューを実施した。場所は関係者の意見を聞いた上で、彼らに馴染みのある環境で行われた。元留守児童・現留守児童の出稼ぎ親には、周が彼らの出稼ぎ先（元留守児童 3 人の出稼ぎ親は現在の出稼ぎ先）を訪ね、彼らの職場環境を把握した上で、出稼ぎ先の状況や自分の子どもについての考えなどについて質問した。元留守児童・現留守児童の監護者

には、当該留守児童が実際に生活している場所（元留守児童はかつて留守児童として生活した場所）を訪ねて、彼らの生活環境を把握した上で、留守児童のことや監護者の生活について質問した。インタビュー調査の質問項目は周があらかじめ作成したものである（付録3）。インタビューは一人につき、60分から90分かけて行われた。周と同じ出身地である関係者（健・彩・武の関係者）とは地元の方言で、他の関係者（静・宏・玲の出稼ぎ親）とは中国語（普通話）で、（静・宏・玲の監護者）とは彼らの地元の方言でやりとりをした。周が当該方言が分からない場合には、元留守児童である静に通訳してもらいながらインタビューを行なった。すべてのインタビュー内容は、調査協力者の同意を得た上で録音した。

(3)文字化原則

対話的問題提起学習で周と元留守児童・現留守児童が行った対話の内容、および半構造化インタビューで関係者に対して行われたやりとりの内容は全て文字化した。文字化に際し、周と同じ出身地である元留守児童・現留守児童および関係者とは方言で対話を行なったため、まず中国語（普通話）に直してから日本語に訳した。その際、方言の特殊な言い方の部分は筆者が解釈し、分かりやすく言い換えたが、基本的は録音資料で聞こえたままを書き起こした。文字化に使用した記号の凡例は表5の通りである。

表5 文字化に用いた符号の一覧

| 符号 | 表す意味 |
|-----|---------------|
| 。 | 文末を表す |
| 、 | 区切りを表す |
| …… | 一秒以内の短い沈黙を表す |
| ？ | 疑問の音調を表す |
| （ ） | 発話者の表情や気持ちを表す |
| 〔 〕 | 割り込みあるいは同時発話 |
| 【 】 | 筆者が付け加えた説明 |

4.5 分析方法

本研究は【研究1】元留守児童の生態学的意味の生成過程、と【研究2】現留守児童の生態学的意味の生成過程はどのようなものか、という二つの研究は生態学的主客構造に基づく生態場分析を基軸的枠組みとする言語生態学的分析で行うことにする。

4.5.1 生態学的主客分析の基本的過程

本研究は、中国の元留守児童・現留守児童が対話的問題提起学習を援用して行った対話を、

生態学的主客分析を用いて分析する。岡崎（2014）を参考にして、以下のように行う。

1. 生態学的主客分析は、認識・実践・意志の形成のツールである。それは留守児童が対話的問題提起学習を援用して行った対話の分析で、分析対象となる事象の示す認識・実践・意志・自覚の形成分析にも適用される。留守児童が対話的問題提起学習で行った対話の分析は、そこに形成されるこれらのそれぞれの学びに関わる生態学的関係の諸相を捉えることを基軸とする。
2. 留守児童が対話的問題提起学習で行った対話をそれぞれの文章・文に即して行う逐文分析を実践していく過程で、テキストと対話の内容のうち、上記の学びを形作る（分析者が捉える）対象事象に焦点を当てて、その生態学的主客関係のなす構造と過程を分析する。
3. その場合、逐文分析する対象となる対話の内容のすべての部分についてこの分析を行うのではなく、分析する側が上記のような焦点を当てる部分について行う。
4. この分析を通じて、人が学ぶこと・それに基づいて人が生きること・人間活動を形作る生態学的関係の諸相を、論理的・視覚的両者の上で明示的に把握して記述する。これによって、誰が、誰に対して（いかなる人との/いかなるやりとりを通じて）、何をいかなるコト・モノ・人について/いかなる繋がりを見出し、いかなるものとして捉え、変えようとしたか、さらにそれらを踏まえ、自らの形成する留守児童を取り巻く世界およびそこに形成される自らの実践・認識・意志がいかなるものであり、それらを構成する自己とはいかなる存在であるかを明らかにする。さらに、それらが生態学的主客の形作るどんな関係の場で行われつつあるか、また行われたかを明らかにする。本質的には、誰が、誰に、何を、何のために、どのように、どんな関係の下にどんな場で行なったかを明示的に捉える。
5. この分析の基軸を成すのは、上記の繋がりに関わる学びのそれぞれおよびその前提の過程・構造並びにその推移の流れを形作る諸相の分析である。その上で、流れを基軸として形成される関連事象の多様・多次元の展開相がいかなるものであるかを捉える各局面で適用される。
6. このような分析を基に、例えば次の諸点に注目する。この結果は、留守児童問題のどこをどう改善するかに関わる知見を得るものであり（留守児童に対する支援への示唆の獲得）、及びそれに関わる自己とは何かの自覚などに寄与するものである。
 - ①対象事象を形成する上記関係諸相・展開相諸相について示される生態学的主体上の特性、パターンは何か。
 - ②対象事象はどのような生態場、それらの相互作用による影響を受けた帰結なのか。また、それらに逆に影響を与えるものは何か。即ち生態場上の生態場間の繋がりの上での特性、パターンは何か。
 - ③対象事象に関わる認識諸相はどんな生態場上の次元、構造のものか。

7. 以上に基づき、元留守児童・現留守児童が対話的問題提起学習で行われた対話の示す固有の構造・過程の分析をも踏まえつつ、留守児童個々がその都度形成した意味を明らかにし、元留守児童・現留守児童の対話を対象とした意味分析をも行う。

4.5.2 生態学的主客構造に基づく分析

言語生態学は、言語はアプリアリには意味を持たないという基本的捉え方をもとにする（岡崎 2009b）。言語は人の生き方、即ち人間生態系と結びつけてその意味が成立する、という生態学における言語の意味に関する捉え方である。基本的には、言語主体において、第一段階として現実世界の能動的認識の過程が形成される。第二段階として、能動的認識に踏まえて実践が形作られ、認識内容を実現する現実相が獲得される。さらに、第三段階として、第一、第二段階の循環的蓄積を辿る中で、その個人が直面して生きている「今、この現実生態場」を超えて次の「今、ここ」即ち「未来の生態場」を、どのようにして形作るかの具体像が形成される段階に至るとき、その個人にとってその現実生態場は、以前の現実生態場とは異なる性格を持つ生態場、実践生態場として存在し始める（岡崎 2013）。このような能動的認識—実践—意志の三段階をたどる過程は、生態学的主客構造を形作る生態学的客体との間で生態学的主体が形成する関係のあり方の変容の過程である。このように、生態学的主体が、生態学的客体との間の繋がり方を見出し、捉え直し、実際に変えること、そしてそれらを踏まえて、かかる関係を形成してその下で能動的認識—実践—意志を形成する自己とはいかなる存在であるかに関する自覚の形成を通じて、生態学的主体と生態学客体の生み出す対象事象を形成する言語の意味、すなわち生態学的意味が生成される（岡崎 2014）。同時に、能動的認識—実践—意志・自覚の生成過程は、生態学的主体性を成す契機の生成の過程が形成される過程でもある。従って、トータルに捉え返すと、言語生態学の基本的捉え方のもとでは、意味を捉えようとする対象事象が言語の主体の生きることと結び付けられることによって、言語主体の能動的認識—実践—意志・自覚の生成の各段階をたどる中で、生態学的意味の生成がなされること、生態学的主体性を成す契機の生成の過程が形成されることを通じて、生態学的主客の構造およびそれを構成する生態学的主客の諸関係が変革される過程が重層的に形作られる中で、言語の意味が生成される（岡崎 2014）。

4.5.3 生態学的主体性とそれを成す契機

生態学的主体性とは、人間生態系である現実世界（現実生態場）を構成する人間主体が、その生態学的主体にとって生態学的客体を成す人間生態系すなわち現実世界によって影響を受けるいわゆる「規定」に対して、直面する現実を認識の端緒とする（岡崎 2014）。自分を起点としてレバンス（繋がり）をたどることを通じて、被与として与えられる現実世界を能動的に認識し、その認識を踏まえて実践を試行する中で、世界が何であり、世界のコト・モノ・人につながる自己が何であるかを自覚すること、またそのように規定されている

世界および自己を、さらにはその両者の関係をどのように変えようとするか、言い換えれば被与として実現されている世界およびその下にある自己さらにはその両者の関係の形で「世界および自己の規定」をどのように新たなものとして規定し直すか。その上で、目の前の現実に向かって投げ返そうとする意志を形成すること、およびそれらを行うもとにある自己をいかなる存在として捉えるかの自覚を形成する。自己を起点とする認識—実践—意志・自覚の形成の各過程の契機として、自己という生態学的主体の側から世界およびその下にある自己を逆に規定し返すことによって逆規定を生成していくことを通じて形成、確立されていくものとして定義される。

具体的には、生態学的主体性は、生態学的主体が以下に示す生態学的主体性を成す契機を形成し、獲得することを媒介として形成される（岡崎 2014:13-14）。

1. 生態学的主体性を成す契機 その1：自己を起点としてレラバンスを辿り、自己・世界の相即的意味を把握する
 - (1)自己を起点とする
 - A:生態学的主体にとっての「今、ここ」を起点とする
 - B:自己の直面する現実の問題を認識の端緒とする
 - (2)自己を起点としてレラバンスを辿る
 - A:自己の起点と自分の生き方への問いを媒介にレラバンスを辿る
 - B:自己の起点を世界はどうなっているかの問いを媒介に世界/現実生態場の把握を通じて自己と世界のレラバンスを辿る
 - C:自己を起点と、自分にとって身近な群像＝人間生態系の身近な成員群から少しずつ広がる人間の広がり、その生き方の有り方とのレラバンスを辿ることを媒介に、世界の把握を進める
 - (3)自己の生き方に関わる問いとの関連に基づく世界の把握
 - A:自己と世界はどう繋がっているか
 - B:繋がっている世界の中で自己はどう生きればよいか
 - C:自己と世界とどういう繋がりを作って生きていけばよいか/自己と（世界を含む）人とどういう繋がりを作っていけばよいか
 - (4)(1)(2)(3)を通じて生態学的主体・生態学的主体との関係で捉えた世界の両者の相即的把握による両者の意味の生成
 - A:自己とは何かを（(1)(2)(3)を媒介として）把握する
 - B:世界の状況を把握する
 - C:A、Bを通じた自己と世界の相即的意味の把握を通じて両者の意味が生成される
2. 生態学的主体性を成す契機 その2：自己の生の底流を成す生存の危機を起点としてレラバンスを辿る

- (1)自己の生存への漠然とした不安を起点とする
 - (2)自己の生存への漠然とした不安を媒介として、他者・外の世界の生存の不安性・危機性とのレラバンスを辿る
 - (3)主体の生存の危機と他者・外の世界の生存の危機の相即的把握
3. 生態学的主体性を成す契機 その3：逆規定性の胚胎・逆規定としての形成
- (1)上記1および2を踏まえ、雇用・食糧・社会保障の構造的危機とその集約としての構造的飢餓を自己の生き方との関連で捉えることで生成する自己・世界の相即的意味
 - (2)(1)を自己の生存との関連で捉えることで生成する自己・世界の相即的意味
 - (3)(1)～(3)で捉えられる自己・世界の現在の像と、それとの関連で捉え返される過去の像、これから「どう生きればいいのか」の問いに駆動される胚胎してくる未来の像〈逆規定の胚胎〉・その明確化による〈逆規定としての形成〉

4.5.4 対話の分析に生態学的主客分析を用いることが目指す具体的な形

生態学的主客分析を用いて、対話などの社会的実践を通じて獲得される学び（即ち繋がりを見出す・捉え返す・変えようとする・自覚する）のそれぞれに関わる関係およびその前提の過程と構造並びにその推移の流れを論理上・視覚上明示的に把握し、明示的に記述することを通じてそれらそれぞれに伴い生成される生態学的意味を図2のような形で明らかにするものである（岡崎 2014:15）。

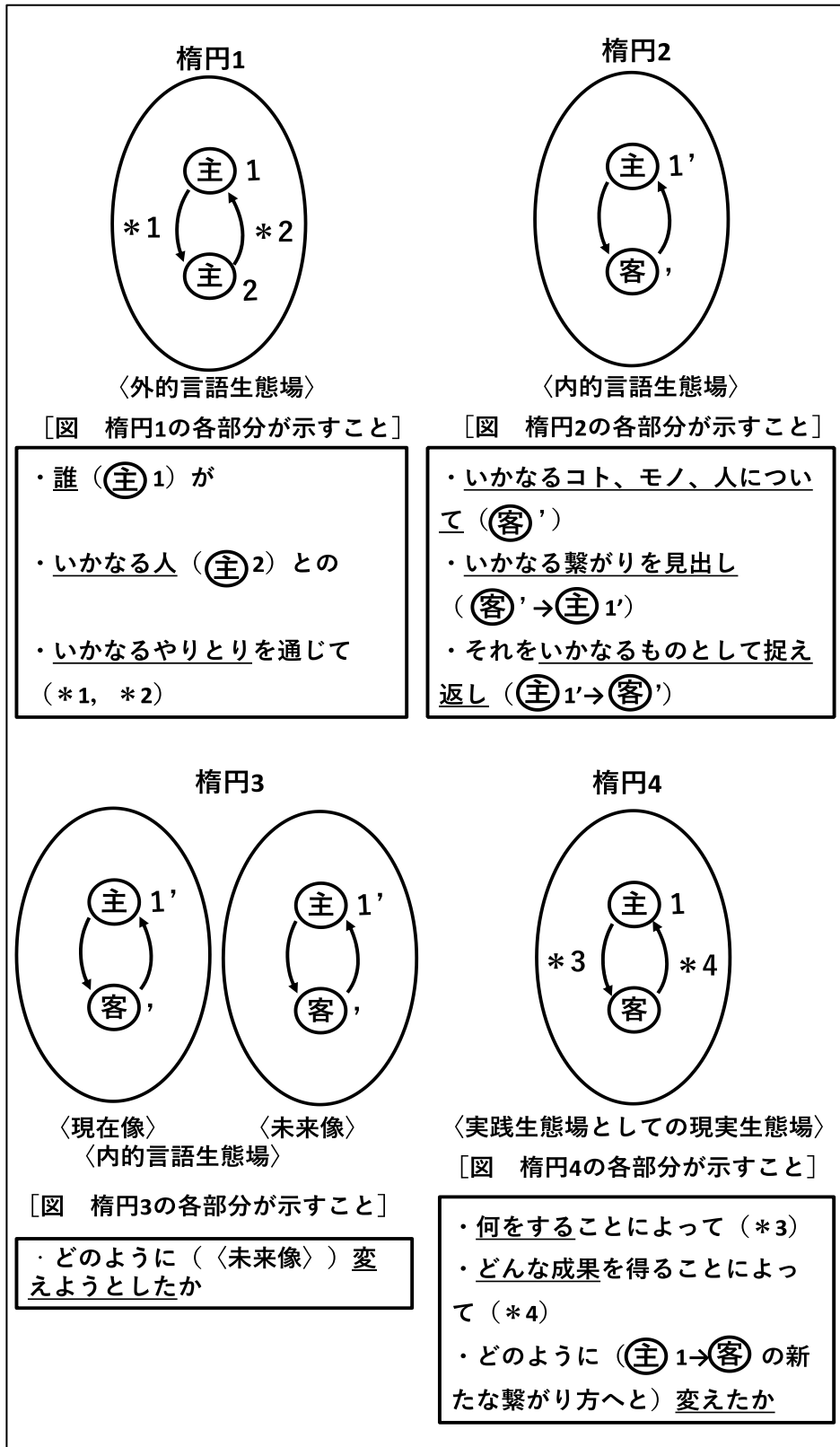


図 2 生態学的主客分析の図

第5章 【研究1】分析結果と考察：元留守児童の生態学的意味の生成過程

本章では、元留守児童3人（静・彩・健）が周と対話的問題提起学習による対話を繰り返すことで、それぞれにおいて、生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界の繋がりを辿る社会的実践とはどのようなものかについて、元留守児童3人と周との間で開かれた内外の言語生態場に着目して分析していく。人と人との間の外的やりとり、すなわち社会的相互作用を成すやりとりが生み出す生態場である外的言語生態場と、自問自答のような自己内対話の形で、人が認識内で行うやりとりが生み出す内的言語生態場という二つの概念を用いて、生態学的主客分析を援用して分析する。言語生態学においては、言語はアプリオリに意味を持たない（岡崎 2013）。意味を捉えようとする主体（言語主体）がその対象である客体と主体自身の生きることを関連付けることによって、生態学的な意味が生成される（岡崎 2013：8-9）。生態学的主体が生態学的客体との間に形成する関係のあり方を変えれば、新たな繋がり方とともに新たな意味が生成される。元留守児童3人（静・彩・健）が周と外的言語生態場で言語を交わすことを通じて、各自の内的言語生態場において、自己を取り巻く生活世界との繋がりをどのように見出し、そして捉え直していくのか、対話の意味分析に基づいて一人ずつ記述・分析する。

以下では、元留守児童3人（静・彩・健）が、周との対話を通して、生態学的意味の生成という課題に取り組んでいったか、その過程を探った研究1を報告する。

5.1 静〈社会構造の捉え返しによる逆規定の実践へ〉

静は、2017年8月3日から2018年8月28日にかけて、周との間で対話を4回行った。静は今回の対話実践の最初の対話相手であり、周にとっても対話的問題提起学習による対話は初めての経験であった。つまり、対話的問題提起学習が何かについては知識をもっているだけで、自身で実践したことはなかったのである。

第1回の対話のために、周は自分の過去の留守児童経験から問題提起用に4つのテキスト（付録1）を作成した。第1回の対話は、そのテキストを静に示して読んでもらうことから始めた。

静は周のテキストを読み終わると、まず、周の里子に出されそうになった経験を取り上げ、共感の意を表明した。そして、静自身はそのような経験はなかったが、彼女の出身地の村には周と共通の経験を持つ女の子がたくさんいると言った。そこで、周は当時の状況（里子に出されそうになった経験）について詳しい説明を始めた。以下に示す。

第1回の対話【2017年8月3日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

発話番号

発話内容

01 周：（前略）私も子どもの頃はよく近所に笑われていた。「あなたはもう少し

で親に里子に出されるところだったよ。ただ誰も引き取らなかつただけ」って。里子に出されそうになったそのとき、私は、ずっと父を見て微笑んでいたことを覚えている。

02 静：まだ覚えているの？

03 周：覚えている。

04 静：その時は何歳だった？

05 周：多分2、3歳かな。弟が生まれたばかりの時。そのことが今でもはっきり覚えていて、ずっと印象に残っている。その時は一生懸命に微笑んでいた。その後出されなかったけど、私もずっと微笑んでいた。なぜかという、またいつか出されるじゃないかと心配していた（笑）。

06 静：微笑んでいれば、（父があなたを可哀そうに思って）里子に出すのをやめ
ると思った？

07 周：うんうん。その後父は私のことをとても可愛がってくれた。姉と弟は父のことを怖がっていて、あまり話さないし笑わなかった。私は一生懸命父親の機嫌を取っていた。（中略）そうだ、私が6、7歳の時、弟が3、4歳の時かな、家が火事になって、全焼してしまった。その時母は家にいたけど、父は出稼ぎに出ていた。そのことはライフストーリー・テキストには書かなかった。当時母が引火する用の稲の草を〔束ねて〕、そうそう、束ねて、〔干して〕うん、母はそれを干してから束ねていた。庭にはあっちこっち草だらけで、弟と私がそばで遊んでいた。その後、二人が遊んでいるときに、庭の稲草になぜか火がついてしまって、そして家が全焼してしまった。当時弟と私はとても怖くて、「私じゃない、あなただよ」と泣きながら互いを指して言っていた。母もびっくりして、火を止めようとしてもできなくて、そして家が大きい炎に包まれて燃えていたのをただ見ていた。

08 静：その時期はきっと家族は苦労していたでしょう？

09 周：うん、子ども3人も生まれたから、罰金を何回も払わされ、さらに私の
不始末から家も全焼してしまった。両親が結婚した時に祖父母【父方】からは何ももらえなかったから（笑）、何でも自分たちで作った。最初の家は土で作られたから、屋根には穴だらけで、家の中にあっちこっちバケツと盆を置いてあって、外は雨や雪が降ると家の中は小雨と小雪が降ってしまう。

10 静：「家の中に盆だらけという光景を見たことがある？」とよく彼【週の弟】に聞かれる（笑）。雨が屋根からポタポタと落ちてくる。

11 周：うん、雨の音が本当に音楽のようで、屋根には穴だらけだったから。その後、親は屋根をよく修理したり直したりしていたけど、その家が結局焼かれてしまった。

- 12 静：あの時家族全員はどこに泊まっていた？
- 13 周：その日の夜は祖父【母方】の家に泊まっていた。弟と私が怖くてその晩はずっと言葉も出なかったことが覚えている。その後はマッチを見たら恐怖感が湧いてきて、マッチを使うのがずっと怖がっていた。当時はマッチを遊んでいて火事になっちゃったから。祖父の家でしばらく泊めてもらったが、その後親戚にお金を借りて一時的に小さな部屋を二つ建てた。その家はとても小さかったけど、姉と私が出稼ぎに行くまで家族5人がずっとそこに住んでいて、結構長く住んでいた。当時の学費も高かったし、子ども3人も通学していて、父の給料は高くなかったし、農業税も払わなければならなかったもので、家の負担が結構重かった。特に学費が高くて、一人一学期約600元もするし、兄弟3人もいるから。当時父の給料は一日20-30元だったから、とても大変だった。だから学校に行くことはとても苦しかった。子どもの頃は表には楽しそうにしていたけど、心の中はとても辛かった。学費のこと、2番目だから（親から）あまり注目されないこと、家が燃えてしまったことは私にも原因があるし、また私が生まれたことで罰金も払わされたから、いろいろなことでストレスが溜まっていた。そこで、中学校を終えて早く出稼ぎに行つて、お金を稼いで親の負担を軽減したいと子どもの頃からずっと考えていた。

周が生まれた時は、「一人っ子政策」¹²が最も厳しかった時期で、次女である周と末っ子の弟が生まれた時に多額の罰金を払わされ、家も当時の政府の関係者に壊された。さらに、生活が困窮した周の親は、農村地域では「男尊女卑」という風潮が強かったこともあり、女子である周を里子に出そうとした。周はその顛末の説明から対話を始めた（01周）。この周の「親に微笑む」という行為に着目して、静は、里子に出されないために意図的に父親に笑いかけたのかと確認した（06静）。それを受けて、長女の姉と末っ子の弟とは異なる存在だと感じていた周にとって、「一生懸命に微笑む」「父親の機嫌をとる」ことが、里子に出されず家に留まるための唯一の手段だったとして、幼いころの周の無自覚の行動を二人で意味づけをしていることが分かる（07周）。

ところが、周は、その語りの中で、突然幼少期に起きた「火事」事件を持ち出し、比較的長い話をした（07周）。それに対し、静は、「その時期はきっと家族は苦労していたでしょう？」と言って、周個人というよりは、周の家族が家族として直面した数々の災難に対する同情を示した（08静）。その同情に対して、周は、「うん、子ども3人も生まれたから、罰金を何回も払わされ、さらに私の不始末から家も全焼してしまった」と振り返った（09周）。周が生まれてから、周の一家は、「一人っ子政策」による罰金、家の取り壊し、

¹² 1979年から2015年まで導入された厳格な人口削減策（計画生育政策）を指す。

高い学費・農業税、火事、借金と次々と災難に見舞われた。13 周から、周が、これらの「災難」の原因を全部自分にあると思い込み、その「責任」を取るために、中学校を卒業した後すぐ出稼ぎに出たとして中学卒業で出稼ぎに出た決断を意味づけている。つまり、〈家の災難→私が原因〉という認識の下に、責任をとって出稼ぎに出るという行動指針をとったという意味付けがなされている。

このように、周は過去の留守児童経験（家の災難）を自分だけに原因があると捉え、自己と現実世界との繋がりは見えていないことが分かる。つまり、周は、過去の留守児童経験は現実世界（客体）からの影響を受けていたことであるにもかかわらず、現実世界を自己との繋がりの下で認識していないため、生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 2）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体 2）から現実世界（客体）への繋がりや関連などは認識していないので、自己の認識像と現実世界の認識像をつなぐ矢印は図示されない。この時点における静と周の外的言語生態場及び周の内的言語生態場を図 1-1 として示す。特に周（主 2）の内的言語生態場に注目したい。

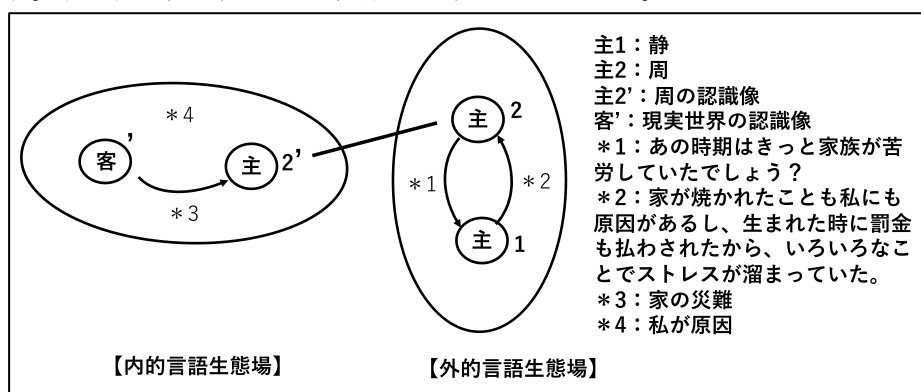


図 1-1 静と周の第 1 回の対話の言語生態場

13 周を受けて、静は、「そうね」とまず共感を示した上で、「ご両親にも（他人には）言えない苦しみがあったでしょう」と、周の語りに対して、再度家族の立場から見ることを働きかけている（14 静）。

- 14 静：そうね。ご両親にも、（他の人には）言えない苦しみがあったでしょう。
- 15 周：うん、親にも（他人に）言えない苦しみがあったと思う。昔の農民は重い農業税も払わなければいけないから、1 年に何百元¹³も払っていた。
- 16 静：そう、私の実家もそう。
- 17 周：払っていた？
- 18 静：同じだ。

¹³ 90 年代の農民の年間純収入は 300～900 元である（中国国家统计局）。1 元は約 15.92 円に換算できる（2019 年 1 月 9 日）。

- 19 周：今は逆に農民がお金をもらえるでしょう。昔は農業税も学費も払っていた。
- 20 静：うん、今はその気持ちを理解できると思う（後略）。

周は静の提案に耳を傾け、自分の両親をはじめとする当時の農民の生活に目を向け始めた。つまり、自分と客体（現実世界）との繋がりを見出し始めたと言える。周は農民に課せられていた農業税についてその額まで覚えていた（15 周）。そして、続けて農業税を払わなくて済むだけでなく、逆に農民に報奨金まで出ている現在の農民と対比しながら、過酷な過去の農民の生活の実態を語った（19 周）。静は、「私の実家もそう」（16 静）と言って、互いの家族が当時同様の大変な経験をしていたことを共有した。

周は静との対話を通じて、自己を起点にして辿った繋がりから、自分にとって身近な群像（当時全ての農民）へその繋がりが拡がり、過去の留守児童経験を捉え直した。そこで、周は最初持っていた〈家の災難→私が原因〉という狭い意味を捉え直し、〈家の災難→当時の国の政策・社会制度と関係がある〉として、何故当時の農民は大変だったかという問いを立て答えを求めたという点で広い意味が生成されたと言える。ここで注目したいのは、静の問いとそれに対する周の応答の結果として周における過去の留守児童経験の捉え返しが可能になったことである。

このように、外的言語生態場における静との対話に促され、周の内的言語生態場では、〈家の災難→私が原因〉という狭い直線的意味から、〈家の災難→当時の政策・社会制度と関係がある〉という広い新たな意味が生成された。つまり、静との対話により、周は、自己を起点にして過去の留守児童経験を辿り、自己（主体 2）と客体（現実世界）との間の見えなかった繋がりを認識し可視化した。従って、周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 2）へつなぐ矢印が図示されるだけでなく、自己（主体 2）から現実世界（客体）への捉え返しも認識したため、自己の認識像と現実世界の認識像をつなぐ矢印が図示される。この時点における静と周の外的言語生態場及び周の内的言語生態場を図 1-2 として示す。特に周（主 2）の内的言語生態場における変化に注目したい。

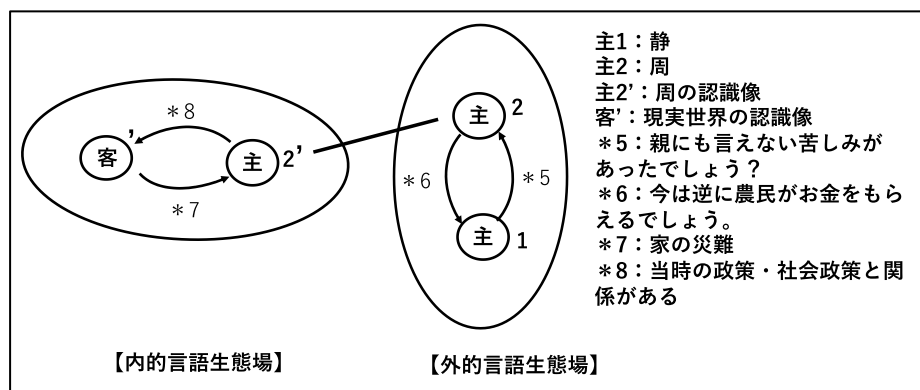


図 1-2 静と周の第 1 回の対話の言語生態場

以上をまとめると、周は、最初、〈家の災難→私が原因〉という意味を生成していた。しかし、静との対話を進めることによって、周は、「自分」から「家族」に視点を広げ、〈家の災難→当時の政策・社会制度と関係がある〉として新たな意味を生成した。周において生態学的意味が生成されたと言える。第1回の対話の全体図を以下の図1-3で示される。

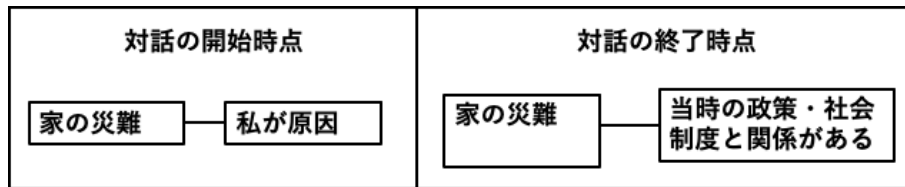


図1-3 静と周の第1回の対話の全体図

第1回の対話が終わった後、周は静に対して周と同じように過去の留守児童経験を第2回の対話の「テキスト」として作成することを依頼し、静は快く承諾し、テキストを作成した（付録1）。第2回の対話を行う前に、周は静と一緒に彼女がかつて留守児童として生活していた村を訪ねた。その時、その村ではほとんどの家が出稼ぎに行っていることに気づいた。それについて、周は静のテキストの内容を踏まえて問題提起をした。以下は静が留守児童時期の出稼ぎ状況及び自分の留守児童生活について周と対話をした場面である。

第2回の対話【2017年8月18日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：その当時は、村から都市へ出稼ぎに行く人はまだ少なかったでしょう？ |
| 02 | 静：今ほど多くない。でも、隣に住んでいる子どもの両親は、私がまだ小さかった頃に出稼ぎに行った。多分昔も多かったけど、私がよくみていなかったかもしれない。 |
| 03 | 周：向かい側も、隣もそうだったのね。 |
| 04 | 静：そう、私がとても幼かった頃からその子の親は出稼ぎに行っていた。 |
| 05 | 周：じゃ親の世代から出稼ぎに行っていて、子どもは農村に残されてお年寄りに預けられていたのね。 |
| 06 | 静：うん、お年寄りには行っていない。私の親の世代から出稼ぎに行き始めた。 |
| 07 | 周： <u>だから親が家にいなくても普通だと思っていたのかな。周りの家が皆そうだったから。</u> |
| 08 | 静： <u>うん、皆出稼ぎに行っていた。</u> でも子どもにはやはり影響があると思うよ。子どもが言わないだけ。 |
| 09 | 周：静が子どもだった時に、親がそばになくてどんな影響があった？ |

- 10 静：子どものころは深く考えなくて、辛くても我慢するしかなかった。
- 11 周：例えば、親がそばにいてくれればよかったと思う時があった？
- 12 静：親が家を出たばかりの時は思ったことがある。本当は親には家に残って欲しいと思っていたけど、言えなかった。（後略）

前述したように、周は、静と一緒に彼女がかつて留守儿童として生活していた村を訪ねた時、その村ではほとんどの家が出稼ぎに行っていることに気づいた（03 周）。親が出稼ぎに行くと、子どもを祖父母などに預けるのが一般的である。「皆出稼ぎに行っていた。」

（08 静）から分かるように、静は、現金収入を得るために都市に出る自分の親をはじめとする Y 鎮の農民の出稼ぎは〈自然な現象〉として捉えていた（08 静）。このような捉え方は、静だけでなく、彼女の両親と祖母も共通の認識¹⁴として持っていた。しかも、出身地の村の人々は出稼ぎに行くことを良いこととして評価しており、静もそうした周囲の人々の考え方の影響を受けていると考えられる。つまり、自分の両親を含め出身地の出稼ぎ農民の増加現象、及び自分を含めて多くの留守儿童が農村に残されることを、〈自然な現象〉として認識していた。静の内的言語生態場では、〈親の出稼ぎ&留守儿童問題→自然な現象〉という意味が生成されていたと考えられる。

このように、静は親の出稼ぎ及びそれに起因する留守儿童問題を所与の事実として捉え、自己と現実世界との繋がりは見えていないことが分かる。つまり、静は、過去の留守儿童経験は現実世界（客体）からの影響を受けていたことであるにもかかわらず、現実世界を自己との繋がりの中で認識していないため、生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）への繋がりや関連などは認識していないため、自己の認識像と現実世界の認識像をつなぐ矢印は図示されない。この時点における静と周の外的言語生態場及び静の内的言語生態場を図 2-1 として示す。特に静の内的言語生態場において、主から客への矢印がないことに注目したい。

¹⁴ 静の祖母：（訳）出稼ぎはいいことだ。広東へ出稼ぎに行かなければ、お金も稼げないから、今のようないい食べ物や着るものもない。昔の農村はいくら農業をやっても食べ物も着るものも満足できなかったから。

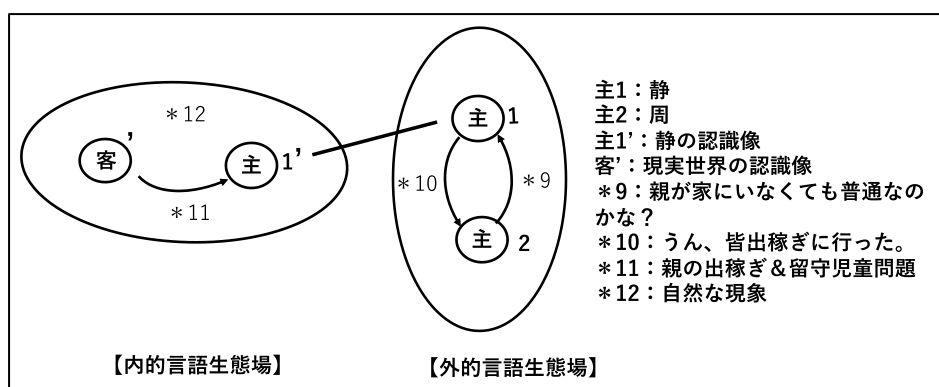


図 2-1 静と周の第 2 回の対話の言語生態場

現在、静は既に成人しているが、静の父親は今でも出稼ぎに行っている。それに対して、疑問を感じた周が「なぜまだ外で出稼ぎに出ているの？実家に戻るのかは考えていないの？」と問題提起した(15 周)。

- 13 周：今でもお父さんがそこ【北京】ではなく、他のところへ出稼ぎに出ているね。
- 14 静：うん。
- 15 周：なぜまだ出稼ぎに出ているの？実家に戻るのかは考えていないの？
- 16 静：弟がまだ学校に通っているから。帰ってきても仕事がなく収入がな
いし、農村では現金収入が得られないから。

(中略)

- 47 周：当時祖母との暮らしはどうだった？お年寄りとの暮らしはどう？
- 48 静：祖母？祖母と暮らしていたときはよく出かけて農業のお手伝いをした。年寄りは勉強に対してはあまり厳しく言わないから自由に遊べた。でも祖母と住んでいたときは、遊ぶ時間ももっと少なかった。毎日放課後、祖母が私を連れて畑に行って農作業を手伝わされた。お手伝いが終わって家に帰ると、いつも晩御飯を 2、3 茶碗も食べられる（笑）。「まだ体が成長しているから、男の子より食べられるね。」とよく祖母が笑いながら言っていた。
- 49 周：静はその後都市に来て一人暮らしを始めたよね。昔祖母から教わったことは今の生活に役に立っている？
- 50 静：いや、全然役に立っていない。だって、一人暮らしは野菜なんか全然作
らないから。

(中略)

- 58 周：昔祖母と農村で過ごした日々は思い出になるね。農村に帰ることを考

えたりしていないよね。

59 静：うん、考えていない。

60 周：農村の実家で農業をやるとか。

61 静：実家に帰ることは考えたことがない。

62 周：帰りたくないというのは、どこか満足していない？

63 静：収入が低く、農作業も大変だから。私もできないし、私の両親でもできない農作業がたくさんあるから。（後略）

静は、9歳下の弟がまだ高校に通っているため、その学費を稼ぐために出稼ぎに行かなければならないと答えた（16 静）。つまり、ここでは、静は先の〈親の出稼ぎ→自然な現象〉という意味を捉え直し、父親の出稼ぎに行く理由を、〈親の出稼ぎ→弟の学費を稼ぐ〉として新たな意味づけをしている。このように、15 周の問題提起によって、静は親の出稼ぎの理由の認識が〈自然な現象〉・所与の事実から、〈弟の学費を稼ぐ〉という具体的な要因の捉え返しへ変化したことが分かる。また、静の父親本人へのインタビュー¹⁵でも静が述べた理由を確認できた。このように、静は親の出稼ぎを所与の事実から、「弟の学費を稼ぐ」という具体的な要因があって生じていることと捉え直した。

続いて、静は、両親が出稼ぎに行くもう一つの理由として「帰ってきてても仕事がなく収入がないし、農村では現金収入が得られないから」と意味付けている（16 静）。静は留守児童時代に農村で祖母と暮らし、たくさんの農作業経験をしたことを振り返った（48 静）。しかし、農村を離れて現在都市で働いている静は農業の実用性を実感できなく、将来農業をやる可能性を否定し、「実家に帰ることは考えたことがない」と答えた（50 静、61 静）。その理由は、農業は「役に立たない」、「収入が低い」、「大変だ」と挙げられた（50 静、63 静）。つまり、静の認識の中には、〈農業＝実用性がない、収入が低い、大変だ〉という概念のネットワークが形成された。そして、静は、〈将来の生活≠農業をやる〉という意志も表明し、将来は Y 鎮の出稼ぎ農民及び自分の両親のようにずっと都市に出て、農業ではなく現金収入を得る仕事をするという自己の未来像を描いていた。そこで、〈農業＝実用性がない、収入が低い、大変だ〉という認識を持っている静は、16 静の発言をしたと捉えられる。つまり、上記の〈親の出稼ぎ→弟の学費を稼ぐ〉という意味の他に、〈親の出稼ぎ→農業による現金収入の低下〉という新たな意味が生成された。

このように、静は「弟の学費を稼ぐ」という単一の要因から、〈農業＝実用性がない、収入が低い、大変だ〉という認識を踏まえて、親の出稼ぎを「農業による現金収入の低下」として捉え直したことが分かる。一方、義務教育段階の弟の学費はなぜ高いのか、農村で主な

¹⁵ 静の父親：（訳）：静は今毎月の給料が少なく自分の生活だけで精一杯だし、彼女の弟はまだ学校に通っているから、毎年少なくとも一、二万元はかかる、多い場合はもっとかかる。でも、私は外で出稼ぎに行っても給料は高くないし、毎月はそんなにもらえない。

生活基盤としていた農業ではなぜ農民の生存を維持できないのか、というような問いはまだできていないことが窺われる。つまり、自己及び家族の生き方に関する問いが立てられていないため、自己及び家族につながる世界に対する把握には至っておらず、自己と現実世界との繋がりや関係は認識されていないことが分かる。従って、静の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）への繋がりや関係などは認識していないため、自己の認識像と現実世界の認識像をつなぐ矢印は図示されない。静の内的言語生態場においては、依然として、主から客への矢印がないことに注目したい。この時点における静と周の外的言語生態場及び静の内的言語生態場を図2-2として示す。

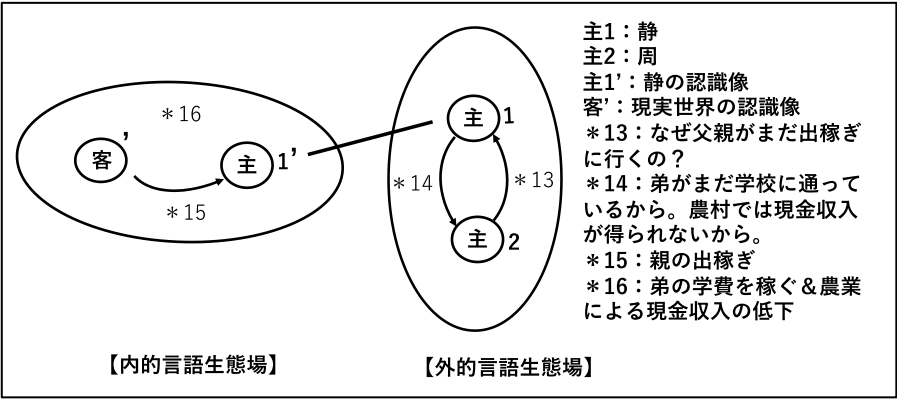


図2-2 静と周の第2回の対話の言語生態場

以上の第2回の対話をまとめると、対話の開始時点では、静は両親の出稼ぎを〈自然な現象〉として捉えていた。つまり、これは人間の力では変えられないことで、天から与えられた所与の事実であると認識していた。一方、周の問題提起によって、静は両親の出稼ぎについて、〈弟の学費を稼ぐ〉と〈農業による現金収入の低下〉という具体的な原因を挙げて、所与の事実ではないことであると捉え直した。第2回の対話の全体図を図2-3として示す。



図2-3 静と周の第2回の対話の全体図

以上第2回の対話が終わった後、静と周は過去2回の対話を踏まえて第3回の対話を行った。第3回の対話では、主に互いの気づきや疑問を出し合い、それについてさらに話し合った。以下はその対話の一部である。

第3回の対話【2017年8月24日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|------|--|
| 01 | 周：ここはどこへ行ってもお年寄りと子どもばかりだね。 |
| 02 | 静： <u>どこにもいる、ははは</u> 。この間バスに乗った時もお年寄りと子どもだけでしたでしょう。中年の人がとても少なく、若者はなおさらだ。 |
| 03 | 周：農村にいてもやることがないから？ |
| 04 | 静： <u>うん、農業をやっても収入がないから</u> 。実は私の実家の消費レベルは大都市よりも高い。 <u>野菜は少し安いけど、そのほかのものは全部C市よりも高い</u> 。この間C市である洋服を気に入って、でも200元もするから高いと思って買わなかった。その後実家に帰った時に、全く同じ洋服を見かけて、でも600元もして、しかも何の割引もなかった。 |
| （中略） | |
| 13 | 静：祖母は一人暮らしをしていますが、たくさんのとうもろこし、落花生と野菜を作っていて、普通の人はそんなに作っていない。 |
| 14 | 周：じゃ祖母はどうやって暮らしているの？ それで祖母一人で生きていけるの？ |
| 15 | 静：祖母は普段娘や息子からもらっている。たまに私たちもあげる。 |
| 16 | 周：ほう、畑だけに頼れないのね。 |
| 17 | 静：そう。それだけでは難しいから、作ったとうもろこしも売っている。 |
| 18 | 周：ほう。お年寄りは娘、息子や親戚に助けてもらうのね。ただ農業だけでは生きていく人がとても少ないよね？ |
| 19 | 静：ただ農業だけやって、出稼ぎに行かないと、自分を養うのも大変だよ。食べ物は困らないけど、洋服や他のものは購入できない。しかも、彼らはインターネットショッピングも分からないから、実際の店に行って買い物するととても高いから。 |
| 20 | 周： <u>そうになると、大人が出稼ぎに行くことを促して、お年寄りと子どもだけを農村に残してしまう</u> 。 |

周が静の出身地を訪れて、お年寄りと子どもが多くいることに疑問を感じ、それを対話の開始時点で問題提起した（01 周）。01 周の問題意識に静は共感を表し、「どこにもいる、ははは」から分かるように、静は出身地の農村で生きている一人ひとりの農民に目を向けている（02 静）。そして、自分の出身地には年寄りと子どもしかいなくて、大人が全部出稼ぎに行った理由として、第2回の対話に述べた「農業による現金収入の低下」の他に、「農村の物価が高い」という新たな意味を生成した（04 静）。同じ商品でも農村と都市ではモノの値

段が全然違い、農村の収入に相応しない高価格になっているという現象について静の経験したことを語った（04 静）。また、農村部は都市部に比べて、モノが限られているため、現金がより重要である。このように、農村では現金収入が得られない農民は、日常生活用品を購入するために、都市に出稼ぎに行って現金を稼がなければならないと意味付けている（19 静）。つまり、自分の親及び村の農民の出稼ぎについて、静は〈出稼ぎ農民の増加→弟の学費を稼ぐ〉、〈出稼ぎ農民の増加→農業による現金収入の低下〉という意味から、〈出稼ぎ農民の増加→農村の物価の上昇〉という新たな意味が生成された。一方、周は、都市に出稼ぎに行く農民の増加によって、農村に残された年寄りと留守児童が顕在化し、留守児童問題の深刻化につながると周が捉えていることを指摘した（20 周）。つまり、出稼ぎ農民の増加現象が留守児童問題を深刻化させているということに周が気づき、〈出稼ぎ農民の増加→留守児童問題の深刻化〉という新たな意味が生成された。

このように、周と静は、静の出身地の村を訪れ、老人と子どもだけが取り残されたような農村の実態を目にして、言い換えれば、自分の直面した現実の問題を認識の端緒として、客体（現実世界）の捉え返しのプロセスを少しずつ進めていったことが窺われる。01 周の問題提起によって、静は自分及び家族を起点とした繋がりから、自分を取り巻く世界（出身地の村）に生きている全ての農民へ拡がり、現実世界の把握を進めていることが窺われる。つまり、静は、自己（主体 1）と現実世界（客体）の繋がりを認識したため、自己の認識像と現実世界の認識像をつなぐ矢印が図示される。また、静の応答を受けて、出稼ぎ農民の増加による影響として、周も出稼ぎ農民と留守児童問題との関係を認識し、自分の問いを媒介に現実世界に対する把握を能動的に進めることが可能となり、自己の認識像と現実の認識像をつなぐことができた。従って、静と周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1、主体 2）へつなぐ矢印と、自己（主体 1、主体 2）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における静と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-1 として示す。周と静の内的言語生態場の変化に注目したい。

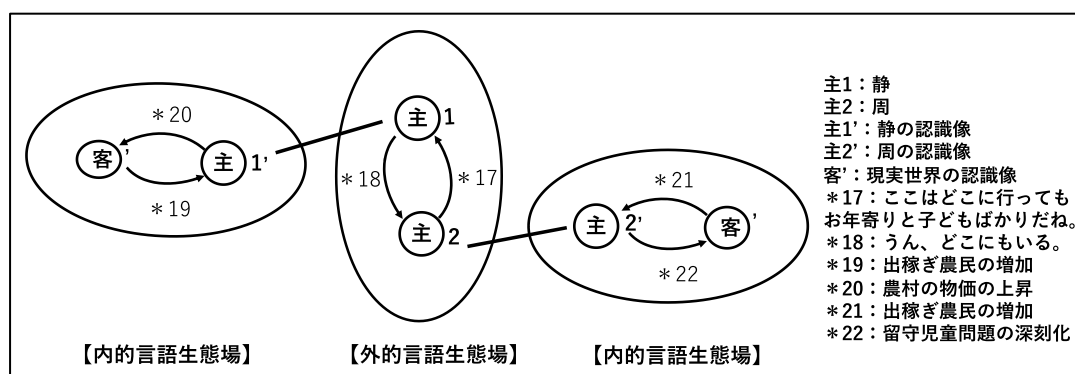


図 3-1 静と周の第 3 回の対話の言語生態場

一方、親の出稼ぎにより農村に残された留守児童にとっては、親に代わって自分の面倒を

見てくれる祖父母との間には大きいジェネレーション・ギャップがあることが想定される。この点に着目して、周は、家庭教育が機能しないという問題を、実例を上げて意見を述べた(22 周)。

- 21 静：活動範囲が狭いし、物価も高いから。
- 22 周：それも仕方ないけど、問題は解決できない。でもお年寄りと子どもが一緒に生活するとジェネレーションギャップがある。この間宏【静と同じ村にいる現留守児童】から聞いた話だけど、親がそばにいないと誰も教育してくれないから、すぐ悪い習慣を身につけてしまうとっていた。
- 23 静：そう、お正月の時だけ何日間か帰ってきててもあまり役に立たないし。
- 24 周：何日間だけでは関係が薄くて効果がないから。
- 25 静：でもそばにおいてもダメ。例えばうちの弟。元々親の出稼ぎ先でずっと学校に通おうとしたけど、現地の中学校まで上がっても、その後大学入試は受けられない。
- 26 周：現地の規則で大学は受けられないの？ 外の地域から来た子どもたちは全部？
- 27 静：そう。中学校も入れなかった。その時は5つの証明書が必要で、そのうちの一つは不動産所有証だった。だから、多くの親がそこでトイレくらいの家を買って。

(中略)

- 31 周：それでも何十万元はかかるでしょう？
- 32 静：北京の物価はそうでもないけど、不動産はものすごく高い。
- 33 周：じゃ大人たちが向こうへ行っても、子どもは結局帰ってくるね。
- 34 静：だから、家を買えない出稼ぎの親は子どもを現地の学校に入れられなくて、仕方なく離れ離れで生活している。多くの現地学校は中学校までは入れるが、高校は入れない。

静は周の発話を受けて、留守児童の家庭教育の難しさに共感を表す一方、子どもを親の出稼ぎ先の都市の学校に入れることも簡単なことではないことを、自分の弟の話を共有しながら、流動児童¹⁶の入学難問題として問題提起をした(25 静)。静の弟は小学校までは親の出稼ぎ先の学校に通っていたが、中学校からは以下に述べるような制度上の理由で通学できなくなったため、仕方なく農村に送り返された。静の両親の出稼ぎ先の北京では、流動児童の入学条件のうちの一つは「北京の不動産所有証明書」を持つことである(27 静)。しか

¹⁶ 出稼ぎに出た親に伴われて半年以上戸籍登録地を離れて居住する児童(0～17歳)であると定義する(全国婦聯2013)。

し、中国で不動産価格が最も高い都市の一つである北京で、出稼ぎ農民が家を買うことは困難である。このようなハードルの高い入学条件では、長年都市で働いている出稼ぎ労働者であってもトイレの大きさをくらの極端に小さい家しか持てない。そこで、多くの出稼ぎ労働者は、その入学条件を満たすことができないため、子どもを農村に送り返してしまうことになるのだと、周は静の説明を聞きながら自らの認識を整理した（33 周）。つまり、周は、この静の語りを聞くまでは出稼ぎ農民の増加は留守児童だけに影響を与えるとして狭い意味で捉えていた。しかし、静の応答及び説明によって、出稼ぎ農民の増加は留守児童だけではなく、流動児童にも影響を与えるという広い意味が生成された。このように、農民が出稼ぎに行くことによって、子どもたちは留守児童となるか、流動児童となるかという究極の選択を迫られる現実と直面せざるを得ない状況になる。そして、二人はこのように対話している中で、周と静の内的言語生態場では、〈出稼ぎ農民の増加→留守児童の家庭教育の機能不全〉、〈出稼ぎ農民の増加→流動児童の学業継続困難〉という新たな意味が生成され、農民の出稼ぎの影響をより複眼的に捉え直していることが窺われる。

以上のように、まず周は出稼ぎ農民の増加による留守児童問題を提起した。一方、静は周の考えを認めた上で、出稼ぎ農民の増加による流動児童の学業継続困難問題も持ち出した。静の応答を受けて、出稼ぎ農民の増加による影響として、周も出稼ぎ農民と留守児童問題との関係を認識し、自分の問いを媒介に現実世界に対する把握を能動的に進めていることが窺われる。つまり、静と周は、出稼ぎ農民の増加という現実を認識の端緒として、自分たちを取り巻く現実世界の把握（留守児童問題&流動児童問題）を進めていることが窺われる。そして、その認識を踏まえて、自己（主体 1、主体 2）が、現実世界（客体）との間の繋がり方を見出し、さらに捉え直していることも分かる。従って、静も周も、生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1、主体 2）へつなぐ矢印と、自己（主体 1、主体 2）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における静と周の外的言語生態場及び静の内的言語生態場を図 3-2 として示す。二人の内的言語生態場において、客を捉え返している点では図 3-1 と同じであるが、客の捉え返しの対象が留守児童だけでなく流動児童も含むものとして拡張していることが特徴である。

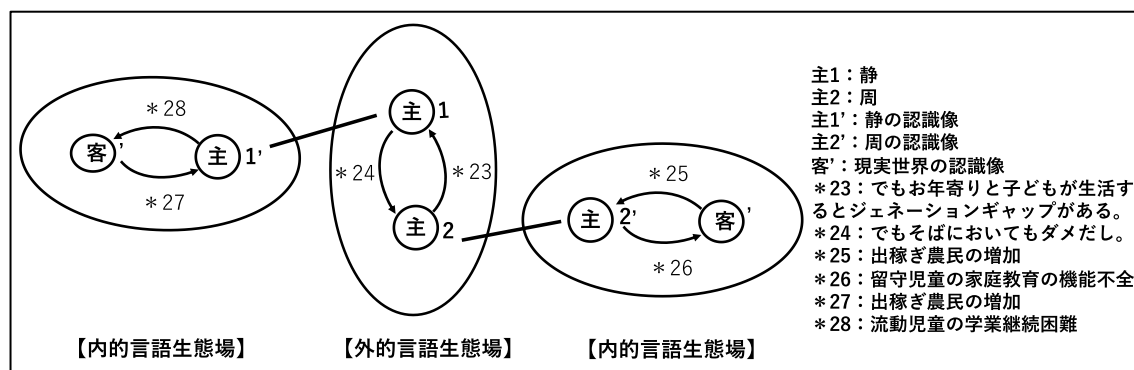


図 3-2 静と周の第 3 回の対話の言語生態場

子どもが親の庇護の下に成長することは子どもに与えられた人権であるにもかかわらず、農民の出稼ぎによってそれが保障されない現実を問題として周は提起した(35 周)。

35 周：このように考えると、家族も実家にいて、子どもも実家で勉強できることが最も理想的だけど、農村では収入がないし、色々な状況で許されないね（後略）。

36 静：全てが循環になっている気がする。多分町の範囲が狭いし、皆が外へ出稼ぎに行ってからお金を持っているはずだと思われていて、そして物価も上がってきた。物価が上がってくると、また皆が出稼ぎに行かなければならなくて、このようにある種の循環になっちゃった。

37 周：本当だね。お金がないから出稼ぎに行ったけど、実家に戻るとまたお金持ちだと思われて、仕方なくまた出稼ぎに行かなければならなくなった。

（中略）

44 周：大人が出稼ぎに行くことは子どもだけに影響を及ぼすのではなく、出稼ぎ先でもたくさんの問題にぶつかるし、また農村地域も寂しくなって、これらのことが全て影響を受けてしまう。全部繋がっている気がする。

また、近年静の出身地には出稼ぎに行ってお金を稼いで帰ってくる人もおり、農村では〈出稼ぎ＝お金持ち〉という考え方が広まっている。静の祖母もそのような考え方を持つ一人である¹⁷。静は、このような考え方が流布することで農村の物価上昇が起きたと解釈し、この二つは循環関係にあることとして捉え直した（36 静）。つまり、静は上（図 3-1）で述べていた〈出稼ぎ農民の増加→農村の物価上昇〉という一方向的な意味づけから、〈出稼ぎ農民の増加⇔農村の物価上昇〉という双方向の相互に循環するとして新たな意味づけを得て、二つのことが循環していることを新た認識した。一方、周は、静のこの発話を受けて、農民工の父親及び自分の出身地の村のことを思い出した。農民の出稼ぎによって、子どもは留守児童か流動児童になるという課題に直面するだけではなく、出稼ぎ先でも差別や不公平な待遇を受けるといった都市における農民工問題及びその農村における過疎化の問題にもつながることを新たに認識し、出稼ぎ農民の増加による影響をさらに広く捉え直した（44 周）。つまり、二人は外的言語生態場で対話を進めることで、静の内的言語生態場は〈出稼ぎ農民の増加⇔農村の物価上昇〉という新たな意味が生成され、一方、周の内的言語生態場では〈出稼ぎ農民の増加→農民工問題&農村地域の過疎化〉という意味が新たに生成された。このように、〈出稼ぎ農民の増加〉という概念は、〈農村の物価の上昇、留守児童の家庭

¹⁷ 静の祖母：（訳）今の農村と昔の農村は違う。今の農民は皆広東に出稼ぎに行き、その稼いで、大きな家を建て直すことができ、食べ物も着るものもよくなり、お金も持っている。昔の農民は一日三食も困っていて全然お金がなかったけど、今の農民は皆余分なお金を持っている。

教育の機能不全、流動児童の学業継続困難、農民工問題、農村地域の過疎化」という一連の意味が自己を起点にして繋がり の形をもって形成され、概念のネットワークが広がった。

このように、静と周は互いの発言に触発されつつ、農民の出稼ぎの増加による影響の繋がりについて思考を続けた。静と周は自己を起点にしてその繋がりを辿ることを通じて、現実世界（出稼ぎ農民の増加、留守児童の家庭教育の機能不全、流動児童の学業継続困難、農村の物価上昇、農民工問題、農村地域の過疎化）を能動的に認識していることが窺われる。そして、自己及び身近な群像の生き方に関わる問いを立てることにより、静も周も、自己（主体1、主体2）と現実世界（客体）の繋がりを捉え返していると言える。従って、図3-3が示すように、図3-2と同じように、周も静も自己の認識像と現実世界の認識像をつなぐ矢印が図示されている。この時点における静と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図3-3として示す。

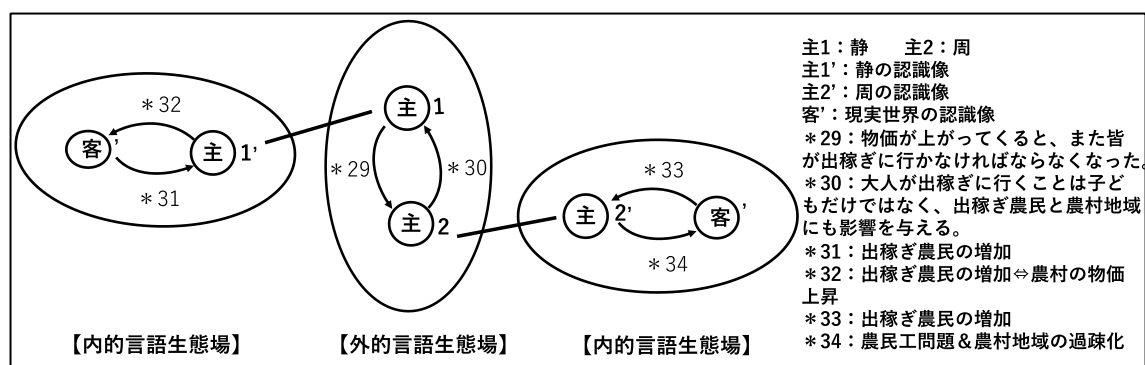


図3-3 静と周の第3回の対話の言語生態場

周が静の出身地を実際に訪ねて、この対話をするまでは、静は自己との間に上記で述べた一連の繋がりがあ ることを全然意識していなかった。しかし、これまでの対話を通じて、周も静も、自分たちもその繋がりの中の一人であることを捉え返すに至った（49 静）。

- 45 静：多分私はずっとここにいたからあまり気がつかなかったけど、初めてここに
来た人の目から見るともっとはっきり見えて、深刻に見えるかもしれない。
- 46 周：昔はこのようなことを考えていなかった？
- 47 静：昔中学校や高校の時は考えたこともなかった。
- 48 周：これらのことは静と関係があると思う？
- 49 静：関係ある。私もその中の一人だから。子どもはやっぱり親には家に残って欲
しい。
- 50 周：実は農村の親は出稼ぎに行つて、出稼ぎ先でもたくさんの問題に直面する。
例えば、大都市に言葉や習慣の違いで馴染めなくて、人間関係もうまく行かなく
て、たとえ既有能力があつても発揮できないから、きっと生活が大変だ。

- 51 静：だからまた悪循環になってしまった。最初彼らは出稼ぎに行きたくなかったけど、長い時間出たら今度は農村に戻りたくなくなって、たとえ戻ってきても農業のやり方も分からなくなっているし、それでまた都市に行かなければならない。そこで、都市の不動産の値段がまた高くなる。何故なら出稼ぎでも【子どもの入学のため】そこで家を買う人がいるから。実は全て繋がっている。どれも関係がある。それからお金持ちはまた質の高い生活を追求するために田舎に来て、お金があるから、都市にいらなくてもいいと思っているから。本当におかしいね。

(中略)

- 87 静：私の出身地の子どもたち、つまりお姉さん【周】が調査しようとしている留守児童が多すぎることに気づいた。留守児童がどこにもいるから、本当にこれは嚴重な問題だ、今までは誰も意識しなかった。
- 88 周：そうですね。留守児童の問題だけでなく、出稼ぎ親の問題も、農村地域の発展の問題も繋がっていると思う。もし外へ出稼ぎに行く人が増えると、外部の人が実家に行って開発や土地をレンタルすると、また実家に住んでいる人々の衣食住にも影響を与える。だから問題を解決するなら、全ての要因を考えないといけないね。そうしないと完全に解決できない。
- 89 静：やっぱり教育が大事だと思う。人間は生まれてから最初の十何年間も学校にいるから、この期間にちゃんと教育しなければ、その後は実行しにくい。
- 90 周：それから、大人が出稼ぎに行かなくても生きていける農村環境も大事だね。これは多分国の政策と関係がある。

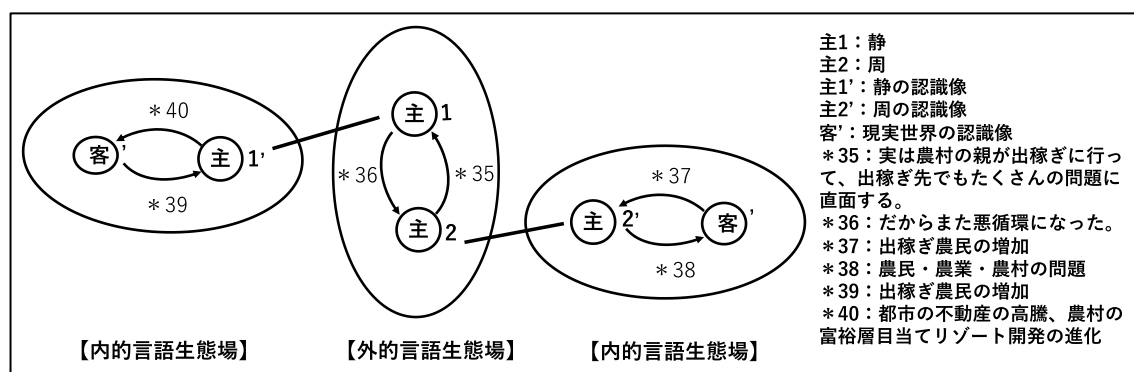
出稼ぎ農民が増加することによって、農業が衰退し、農業を主とする生活基盤が壊された。また、農村地域では〈出稼ぎ＝お金持ち〉という考えが広がり、農村の物価上昇にもつながった。そこで、物価の上昇によって農民はまた出稼ぎに行かなければならなくなるが、出稼ぎ先で差別や不平等な扱いをされる農民工の問題にぶつかって大変な思いをせざるを得ないと周が認識した(50 周)。このように、農民が出稼ぎに行くことで、農業が衰退し、農村地域も過疎化するとともに、農民自身も出稼ぎ先で辛い思いをするということになる。言い換えれば、出稼ぎ農民の増加による、農民・農村・農業という「三農問題」の相互の関連性について周が捉えていた。

50 週の発話を受けて、静は新たな気づきを得た。つまり、出身地の農民は最初生活を維持するために仕方なく都市へ出稼ぎに行ったが、長期間都市に出稼ぎに出ると、農業のやり方も分からなくなり、その後農村に戻っても生活スキルを持たないため、また都市へ出稼ぎに行くしかない。そして、都市にいる出稼ぎ農民が増えるとともに、親に伴われる流動児童の入学条件として都市の不動産所有書が要求されるため、都市の不動産価格が上昇することにつながる。また、出稼ぎ農民が増加することで、農村地域が過疎化し、農民は耕作放棄

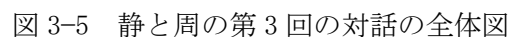
し、外部者による開発が進むことになった。周も静の出身地を訪れた時、富裕層によって建てられた別荘をたくさん見かけた。都市に比べ空気も水もきれいな農村に質の高い生活を求めて来る富裕層が増加し、このような都市の富裕層目当ての観光リゾートの開発も近年静の出身地で進められている。そこで、農村にいる富裕層の増加現象を、静は先に述べた諸問題との関連性に気付いた(51 静)。このように、静は以上の問題を全部つなげて捉え直し、そして全てが悪循環になっていると新たに認識し、農民の出稼ぎによる影響をさらに広く捉え直した(51 静)。

以上をまとめると、静と周は外的言語生態場対話を通じて、周の内的言語生態場では、〈出稼ぎ農民の増加→農民・農業・農村の問題〉という意味が生成された。静の内的言語生態場では、〈出稼ぎ農民の増加→不動産価格の高騰、富裕層目当てのリゾート開発の進化〉という新たな意味が生成された。このように、〈出稼ぎ農民の増加〉という概念について、〈農村の物価の上昇、留守儿童の家庭教育の機能不全、流動児童の学業継続困難、農民工問題、農村地域の過疎化、農民・農業・農村の問題、不動産価格の高騰、富裕層目当てのリゾート開発の進化〉という一連の意味が生成され、概念のネットワークがさらに広がったことが窺われる。また、静と周はこのような繋がりを一つ一つ辿っていく中で、自己と現実世界との間の繋がりに関する認識が深くなり、そして元留守儿童当事者として主体的に留守儿童問題の解決方法を考え始めた(静 89、周 90)。

このように、静と周は対話を通じて、〈出稼ぎ農民の増加〉をめぐる一連の繋がりを認識することにより、自分たちもその繋がりの中の一人であることを捉え返した。その認識を踏まえて、二人は主体的に留守儿童問題を考え、静は「やっぱり教育が大事だと思う」、周は「大人が出稼ぎに行かなくても生きていける農村環境も大事だね。これは多分国の政策と関係がある」という具体的な解決方法を出した。すなわち、静と周はこのような自問自答を通じて、留守儿童問題を構造的に作られた社会問題として認識するようになり、そして留守儿童当事者として主体的に留守儿童問題の解決に向けて考え始めたと言える。従って、静と周の生態学的主客構造は現実世界(客体)から自己(主体1、主体2)へつなぐ矢印と、自己(主体1、主体2)から現実世界(客体)へつなぐ矢印が図示される。この時点における静と周の外的言語生態場及び静の内的言語生態場を図3-4として示す。



第3回の対話をまとめると、静は周と対話を繰り返すことで、〈出稼ぎ農民の増加〉は留守児童問題だけではなく、農村の物価の上昇、留守児童の家庭教育の機能不全、流動児童の学業継続困難、農民工問題、農村地域の過疎化、農民・農業・農村の問題、不動産価格の高騰、富裕層目当てのリゾート開発の進化など、多様な繋がりを見出し、さらに自分もその繋がりの中の一人であることを認識した。二人は〈出稼ぎ農民の増加〉という概念を捉え続け、対話の終了時点（点線部分）では対話の開始時点（実線部分）に比べ、概念のネットワークが広がった。第3回の対話の全体図を図3-5として示す。



近年、中国でも日本でも農業が衰退することによって、国内の食糧自給率が急速に下がり、海外からの輸入食糧は増える一方である。今中国と日本では、果物や野菜だけではなく、

く、牛肉や鶏肉なども海外から大量に輸入するようになった。そこで、牛や鶏を大量に出荷する多国籍企業は、牛や鶏の餌としてトウモロコシを大量に仕入れる必要があるため、トウモロコシを主食とする中南米諸国のような途上国の人々の食糧の不足に繋がり、世界の飢餓人口の増加に拍車をかけている。また、大規模化を基礎とする多国籍企業による農業経営は、大量の水を使用することで、資源エネルギーの消費が加速し、自然環境に対する負荷が大きくなっている。周は、このような認識を踏まえ、さらに自分もこのグローバル世界の下で生きている一人であることを自覚し、自己を起点にして、「世界は10億の人が生存危機（飢餓人口）にある」を不可避とする繋がり of の不全を変えようとする試みとして、わずかでも自身が食糧生産に携わること、即ちベランダでの野菜栽培を始めた。

過去3回の対話が終わった後も、周と静は、互いに連絡を取り合っており、互いの近況を共有してきた。そして、周は自身が始めたベランダでの野菜栽培の写真もSNSでアップした。静はそれを見て、自身の過去の留守児童として祖母の指導の下に従事した農作業経験から得た既有知識を呼び起こして、周に多くの野菜栽培の助言をした。そして、静も遂にベランダで野菜を作り始めた。静は以前の対話で、農業はするつもりのないことを宣言していたのである。

周がこの第4回の対話のために1年後に静のアパートを訪れた時は、静のベランダ野菜の規模は最初より何倍も拡大していたことに気づいた。第4回の対話では、周はその野菜を見ながら、二人の野菜栽培経験を共有した。

第4回の対話【2018年8月28日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：その後どうして野菜を作り始めた？ |
| 02 | 静：お姉さん【周】がアップした野菜の写真を見たためもある。野菜は蔓なら張りやすいし、夏の時は日の光を遮ることもできる。これらの野菜は伸びるのがとても早い。この間広州に行った何日間の間にすごく伸びた。行く前に野菜の蔓を一本ずつ綺麗にそろえたのに、広州から帰ってきたら全部ぐちゃぐちゃになっていた。私は定期的にこれらの野菜を手入れして、綺麗に並べてあげる。 |
| 03 | 周：そうね。野菜の伸びは早いね。 |
| 04 | 静：本当に早い。ちょっとした間にこんなに伸びたよ。 |
| 05 | 周：これらの野菜は、食べるために作った？ |
| 06 | 静：見るためでもある。 |
| 07 | 周：食べるためだけではないね。 |
| 08 | 静：食べるよ。もう何回も食べた。 <u>今外で売っている野菜は全部農薬が使われている。ほら、この間ベランダで作った白菜は、毎日虫を取っている。虫がいっぱいいいるから。でも外で売っている野菜はあんなに綺麗にできているから、きっと</u> |

農薬などいっぱい使われているに違いない。

09 周：そうね。外で売っている野菜はとてもきれいだね。

(中略)

29 静：ただこれらの土を運んでくるのが大変だった。約一ヶ月間もかかった。

30 周：これらの土は全部静一人で6階まで運んできたの？背負おってきた？

31 静：ほとんど私が運んできた。とても重かった。友達もちょっと手伝ってくれた。

32 周：どこから運んできた？

33 静：最初は他の人の畑に行って土を掘っていたけど、何回も掘ったら大きな穴ができちゃった。(笑) いつも夜に行っていたけど、穴ができたからやめた。その後はアパートの花壇から少しずつ掘ってきた。ちょうど私の職場にはコーヒー滓がいっぱいあるから、それを全部ためて土の肥料として使った。最初は土をどうやって肥やすか一生懸命に考えた。

34 周：このような知識は誰かに教えてもらったの？それとも元々知っていた？

35 静：コーヒー滓の効果は昔から知っている。それを使ってお花を植えたりしていたから。肥料としての機能の他に、コーヒー滓を使ってコップなどの水垢を落とすこともできるよ。少し使うだけで、とても綺麗に洗える。

36 周：そっか。私が日本で作っているベランダ野菜は、土も肥料も全部買ったものだ。

37 静：でもコーヒー滓も虫がつきやすいデメリットがある。だからカビが生えるまで置いといて、その後土に入れるといい。それから、一回の量はあまり多くない方がいい。コーヒー滓で作られた肥料はとても肥えるから、たくさん入れたら植物の根も焼かれてしまう。これからミミズを土の中に入れようかと思っている。

38 周：え！（驚き）

39 静：土を柔らかくしてくれるから。

40 周：そう？

41 静：うん。ミミズを入れると土がやわらかくなり、良い質の土ができるから。

42 周：どこでそれを見たの？

43 静：これは全部子どもの頃に大人から聞いた話だよ。もし土の中にミミズがいれば、だいたいその土の質がいいと言われていた。

静は、自身の野菜栽培を通じて、それまで食べていた野菜の栽培法に不信感を抱き始めた（08 静）。また、過去の留守児童時代に祖母と共にした農作業経験を思い出しながら野菜を育てていた（43 静）。周と静は、過去3回の対話を通じて留守児童問題は構造的に作られた問題であるという繋がりの中に問題を位置づけるという認識を踏まえて、自己を取

り巻く世界（出稼ぎ農民の増加による農業の衰退、10 億人の飢餓人口）という現実をつなげて捉え、そして自己を起点にしてその現実を変えようとして、ベランダでの野菜栽培という新たな実践を始めたことが分かる。即ち、この実践は自己を起点として様々なことをつないではじめて可能となった行動であり、自分と世界との繋がりに問題があるという認識にこそ、自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎していることが分かる。このように、静と周は、対話による【社会的相互作用】というやりとりだけでなく、野菜栽培を通じて自己と【自然との相互作用】というやりとりも実現している。このことから、以下の図 4-1 のように、言語生態系・人間生態系・自然生態系という 3 極構造が実現されたと言える。

下の図 4-1 では 3 つの楕円が組み合わさって示された。そして、実践生態場では、静（主体 1）と現実世界である客体との間の往復の過程を示す左上から右下にかけて描かれた楕円の主 1 から客体に向けた矢印のもとにある*41 野菜栽培という生産である。これに対して、現実世界である客体から主体 1 に向けた矢印のもとにある*42 野菜の生育と収穫という成果である。また、周（主体 2）と現実世界である客体との間の往復の過程を示す左下から右上にかけて描かれた楕円の主 2 から客体に向けた矢印のもとにある*41 野菜栽培という生産である。これに対して、現実世界である客体から主体 2 に向けた矢印のもとにある*42 野菜の生育と収穫という成果である。縦長の楕円の中では、*43 は静（主体 1）と周（主体 2）との間での野菜栽培経験を外的言語生態場で共有していることが示された。このように、主体と現実世界である自然との間の過程が【自然との相互作用】であるのに対して、主体 1 と主体 2 との間の過程を【社会的相互作用】を示すものである。こうして、図 4-1 は、主 1—客 1 間・主 2—客 1 間の【自然との相互作用】が、主 1—主 2 間の【社会的相互作用】を仲立ちとしてなされている。

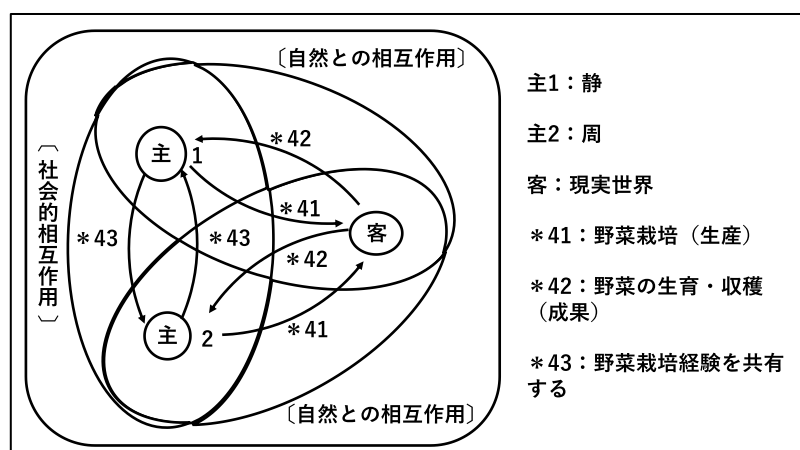


図 4-1 静と周の第 4 回の対話の言語生態場

また、1 年後の第 4 回の対話では、静は、当初、自然な現象で所与のものであり、人間の

力による解決は不可能だと捉えていた留守児童問題を、自分の力で問題解決につながるという捉え直しをした（353 静）。

310 周：他の感想は？自分の出身地とか、周りの留守児童とか。他の調査協力者に比べると、静はこれまでずっと調査に協力して付き合ってくれたので、おそらく一番印象深いと思う。

311 静：留守児童問題は当たり前のことだと思っていたから、今まで深く考えていなかった。

312 周：自分が気づけなかった、それとも気づいても特に問題だと思っていた？

313 静：これは仕方がないことで、変えられないことだと昔は思っていた。親は、仕方がないから出稼ぎに行ったと実はずっと思っていた。

（中略）

352 周：最後に聞きたいけど、去年の8月から今年の8月までこの1年間ずっと私の調査に協力してくれたよね。通訳してくれたり、出身地へ案内してくれたり、他の留守児童を紹介してくれたり色々やってくれた。なぜそこまで協力してくれて、色々話してくれるのかを知りたい。他の留守児童はどっちかという抵抗を感じているようで、私から機嫌をとってやらないと話してくれない。でも静はとても喜んで私の調査に協力してくれたように感じる。それはなぜかを知りたい。

353 静：友達のお姉さん【周】だし、私の出身地にはちょうど留守児童がいるから、最初はただお姉さんの役に立てれば役に立ちたいと思っていた。しかし、その後お姉さんと色々話してみたら、留守児童問題は確かに大きな課題だと認識できて、留守児童の将来にも大きな影響を与えると思うようになった。今はこの留守児童に注目して問題を改善しようと思っている人【周】が私のそばにいるから、私も自分ができることで役に立ちたいと考えている。

つまり、1年前の第2回の対話にあった〈出稼ぎ農民の増加・留守児童問題→自然現象〉という意味を捉え直し、〈留守児童問題→自分の力で解決できる〉という新たな意味が生成された。さらに、周と対話を繰り返す中で、留守児童問題の深刻さを理解するようになり、自分も周と共に留守児童問題の解決に役に立ちたいという意志・決意を表明した（353 静）。

下の図4-2は静の〈過去像〉〈現在像〉〈未来像〉であり、3つの楕円を並べて示した。一番左の楕円は第2回の対話で静（主体1）と現実世界（客体）との間の往復の過程を示すものあり、「*11:留守児童問題」を「*12:自然な現象」だと捉えていた。その時点の静は、自己（主体1）と現実世界（客体）の間との繋がりを認識しておらず、生態学的主客構造は

自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。これは静（主体1）の1年前の認識像であり、〈過去像〉である。そして、真ん中の楕円は1年後の第4回の対話の時点のものである。静（主体1）と客体（現実世界）との間の往復の過程を示すものであり、「*44:留守児童問題」という現実（客体）に対して、「*45:自然で解決不可能な問題ではない」と捉え直した。これは静（主体1）の現在の認識像であり、〈現在像〉として捉えられる。さらに、一番右の楕円は、第4回の対話の最後に静（主体1）と現実世界（客体）との間の往復の過程を示すものあり、「*46:留守児童問題」という現実に対して、「*47:自分の力で問題解決に役に立ちたい」という問題解決に向けて主体的に働きかけようとする強い意志が窺えた。これは静（主体1）の将来の認識像であり、〈未来像〉として捉えられる。〈現在像〉と〈未来像〉における静は、自己（主体1）と現実世界（客体）の間との繋がりを認識しているため、生態学的主客構造は自己の認識像と現実世界の認識像の間の矢印は図示される。

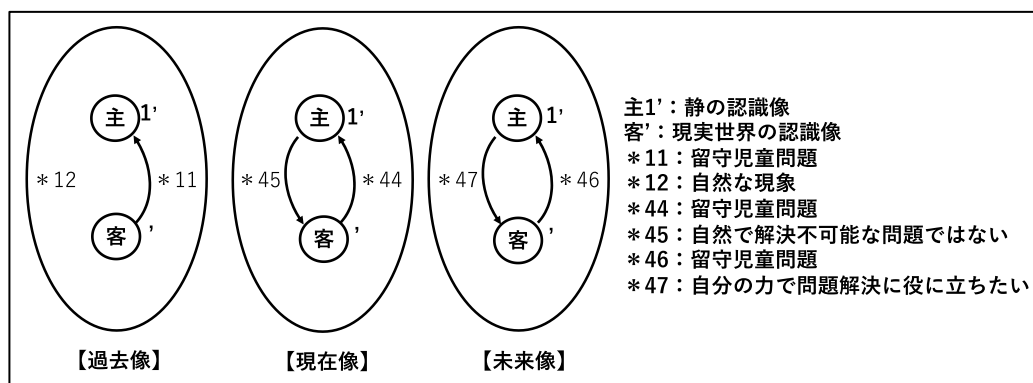


図 4-2 静の過去像・現在像・未来像

1年前の第3回の対話では、静と周は出稼ぎ農民の増加による影響及び留守児童が生み出される社会構造（実線部分）を把握した。それを踏まえて、1年後の第4回の対話では、静と周は自己とグローバル世界との繋がり（点線部分）を見出し、自分たちもその世界に規定された一人であると捉え返し、自己を起点にしてその繋がりを変えようとする実践（野菜栽培）を始めた。1年後の第4回の対話の全体図を図 4-3 として示す。

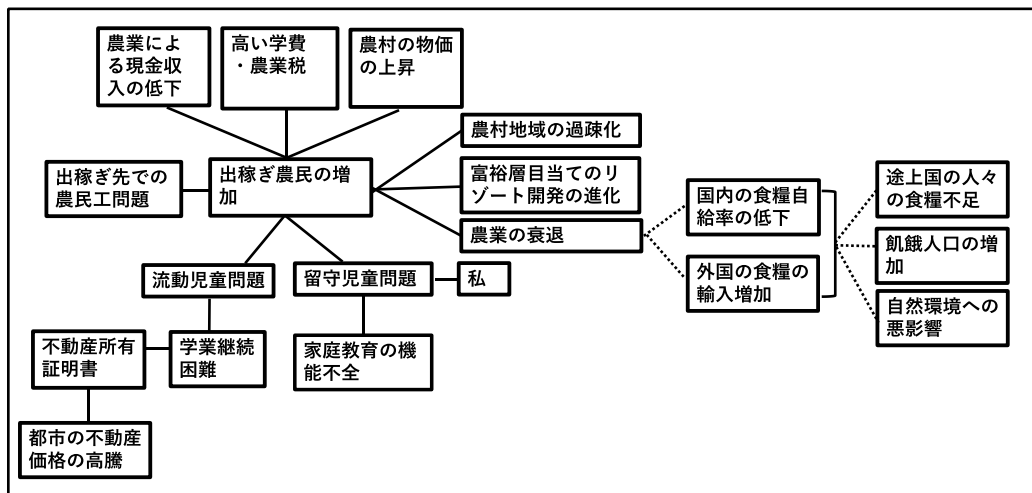


図 4-3 静と周の第 4 回の対話の全体図

以上、対話的問題提起学習の事例から、周との対話を通じて、静が過去の留守児童経験を捉え返し、生態学的意味を生成する過程を見た。第 1 回の対話では、周は過去の留守児童経験を捉え返すことにより、〈家の災難〉は自分だけの原因ではないことを知り、当時の政策・社会制度と関係があることに気づき、過去の経験を捉え直した。第 2 回の対話では、静は過去の留守児童経験を捉え返すことにより、親の出稼ぎを所与の事実ではなく、具体的な事情があって親が出稼ぎに行ったというように捉え直した。第 3 回の対話では、静は自分を取り巻く世界の現実の詳細を具体的に辿ることにより、出稼ぎ農民の増加は留守児童の問題だけではなく、農村の物価上昇、農業の衰退、農村の過疎化、流動児童の学業継続困難、出稼ぎ先での農民工問題、都市の不動産価格の高騰、農村に住む富裕層目当てのリゾート開発の進化など、多様な繋がりを見出した。さらに、静はこれら全ての問題が繋がっていることに気づき、自分もその繋がりの中の一人であることを認識した。その認識を踏まえて、第 4 回の対話では、静と周は現実世界の生存危機（飢餓人口）を自分が直面している現実（出稼ぎ農民の増加による農業に衰退）とつなげて捉え、そしてその現実を変えようとして、飢餓を生み出す現実の不全を保全するための具体的な実践（ベランダでの野菜栽培）を始めた。

以上を、生態学的主体性を成す契機の生成の過程を形成する三段階を辿って、静の生態学的主体性を成す契機をまとめる。

まず、生態学的主体性を成す契機の生成のその 1 は、「自己を起点としてレバンスをたどり、自己・世界の相即的意味を把握する」である。第 2 回の対話では、静は自己を起点にして過去の留守児童経験を捉え返すことで、親の出稼ぎを所与の事実ではなく、具体的な事情があって親が出稼ぎに行ったというように捉え直した。即ち、静は自己起点にして自分及び身近な群像の生き方のあり方との繋がりを辿ることを媒介にして、自己と現実世界の相即的意味を把握した。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその 1 と考える。

次に、生態学的主体性を成す契機の生成のその2は、「自己の生の底流を成す生存の危機を起点としてレバンスをたどる」である。第3回の対話では、静は周と対話を積み重ねることで、〈出稼ぎ農民の増加〉をめぐる一連の意味が生成され、そしてその繋がりを辿ることによって自分もその繋がりの中の一人であることを捉え返した。そして、静は元留守儿童当事者として留守儿童問題の解決に向けて主体的に考え始めた。即ち、静は周と対話を通じて、自己及び身近な群像の生き方を起点として、自己（主体1）と現実世界（客体）との繋がり方を把握でき、その繋がり方に不全のあることを認識し、その不全に対して主体的に働きかけようとする意志が形成されたと言える。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその2と考える。

さらに、生態学的主体性を成す契機の生成のその3は、「逆規定性の胚胎・逆規定としての形成」である。1年後の第4回の対話では、静と周は過去3回の対話を踏まえて、自分が直面している現実（出稼ぎ農民の増加による農業の衰退、10億の飢餓人口）をつなげて捉え、そして自己を起点にしてその繋がりを変えようとする試みとして、ベランダで野菜栽培を始めた。即ち、静は自己の生存を支える食糧の確保（ベランダでの野菜栽培）を他者の生存と関連づけて把握することによって、自己と他者の複数の主体（同じ世界に生きている人々）は同じ「食糧に関する生存の危機」を認識し、そしてその認識を踏まえて自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎し、具体的な実践（野菜栽培）が行われたと言える。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその3と考える。

以上の静におけるこのような生態学的意味の生成過程は周との対話によって達成されたものであり、ここに留守儿童共同体生態場の構築の萌芽が認められる点に注目したい。

5.2 彩〈繋がり可視化による当事者性の獲得〉

本実践は2017年8月4日から2018年8月22日にかけて、彩は周と対話的問題提起学習を援用して、対話を4回行った。第1回の対話を行う前に、彩に周のライフストーリー・テキスト（付録1）を読んでもらった。彩はそれを読み終わった後、文章の中に書いてある周の経験に共感を表した。彩は周と同じく3人兄弟であるため、周の「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊しと共通の経験を持っていた。彩は弟が生まれた時ときの記憶が鮮明であると言い、以下は当時の状況について彩が説明した場面である。

第1回の対話【2017年8月4日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

番号

発話内容

- 01 彩：たぶんお姉さん【周】の経験と比べたら、私の経験はそんなにたくさんの考えを要するほどのものではない。ただ弟が生まれたばかりのときに、政府の人【現地の「一人っ子政策」の担当者】が来て、家の一部を取り壊されてしまったということだけは覚えている。

- 02 周：本当？
- 03 彩：うん。
- 04 周：弟が生まれた時？
- 05 彩：うん。弟が生まれたことも「一人っ子政策」に違反したから、政府の人が来て部屋を取り壊した。だから、昔の家には穴があいているでしょう。
- 06 周：うん。
- 07 彩：うん。それは弟が生まれた時に取り壊されたよ。
- 08 周：その時、彩が見てたの？
- 09 彩：彼らを取り壊すのを見ていたし、彼らが来るのも見た。
- 10 周：その時どう思った？
- 11 彩：その時はまだ幼くて、とても単純だった。
- 12 周：あの時は何歳だった？
- 13 彩：まだ5歳になっていなくて、4歳だった。当時は弟が生まれたばかりで、母の体はまだ回復していなくて、家で休んでいた。
- 14 周：お父さんは？ その時はどこへ行っていた？
- 15 彩：父は、知らない。父がその時どこへ行っていたのか知らない。でも私は、その時ちょうど外で遊んでいて、そしてたくさんの人【「一人っ子政策」の担当者】が来た。その前も何回か来たことがある。そして、「家の外にはたくさんの人が来ているよ」と、近所の子どもが母に伝えた。「声を出さないで、私が家にいないと伝えて」と母に言われた。その後、その人たちは豚小屋と台所を取り壊した。
- 16 周：うん、その後は？ 彼らが家を取り壊した後は帰ったの？
- 17 彩：取り壊した後に罰金も払われたかな。その後は私も良く覚えていない。
- 18 周：彩が生まれた時は大丈夫だった？
- 19 彩：私が生まれた時は大丈夫だったみたい。私も覚えていない。

彩には弟（現留守児童の武）一人いるが、彩の弟が生まれた時にも周と同じ経験（政府の人に罰金・家の取り壊し）をされた（01 彩）。政府の人に罰金・家の取り壊しをされたのは、弟が誕生することで「一人っ子政策」に違反したと彩が意味付けている（05 彩）。

「一人っ子政策」の計画出産条例¹⁸によると、農村部住民は「第1子目が女儿の場合、出産間隔を4から5年間あけるとともに、母親が28歳以上の場合に第2子を許可する」と一部の地域で定められている。彩の上には二人の姉がいたが、二番目のお姉さんは生まれた間も無く里子に出されたため、公には知らされていなかった。彩はその後生まれて、一番上のお姉さんと5つ以上も離れているため、罰金・家の取り壊しをされずに済んだ（19

¹⁸ <https://ja.wikipedia.org/wiki/一人っ子政策>（閲覧日 2019年3月6日）

彩)。しかし、彩の弟の場合は、上に姉が2人いるため、3人目の出産は禁止されていた。当時の状況について、彩の母親もインタビュー¹⁹で答えた。一方、2016年から中国は高齢化と少子化を懸念し、30年以上も実施されてきた「一人っ子政策」が緩和され、二人目を産んでもいいというように政策が改正された。

このように、彩は周と外的言語生態場で過去の経験を捉え返すことにより、内的言語生態場では、〈弟の誕生による罰金・家の取り壊し→「一人っ子政策」の違反〉という意味を生成した。しかし、罰金・家の取り壊しは当時の「一人っ子政策」と関係があり、今の政策では起きないことであることが分かる。つまり、彩はその経験を当時の社会背景とつなげて考えておらず、弟の誕生という狭い、直線的な意味として捉えていることが分かる。従って、彩の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印が図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示されない。この時点における彩と周の外的言語生態場及び彩の内的言語生態場を図1-1として示す。

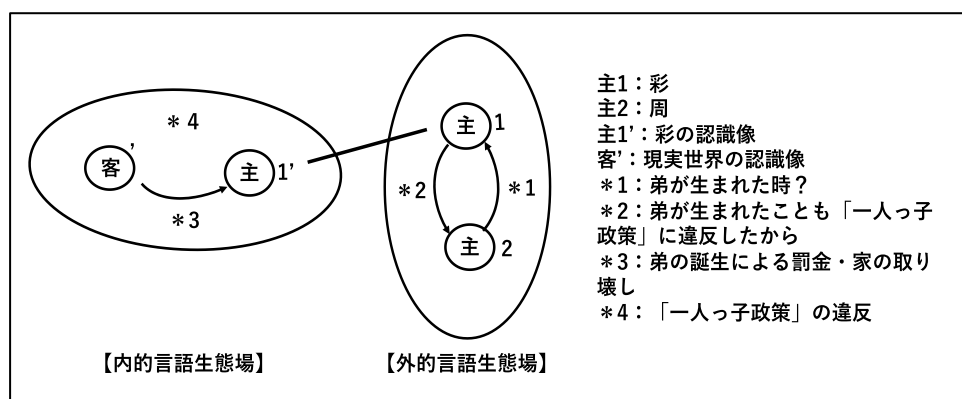


図 1-1 彩と周の第1回の対話の言語生態場

周は上で彩が述べた弟の誕生時の状況をもっと把握しようとして、彩の父親の行方を尋ねた（20周）。

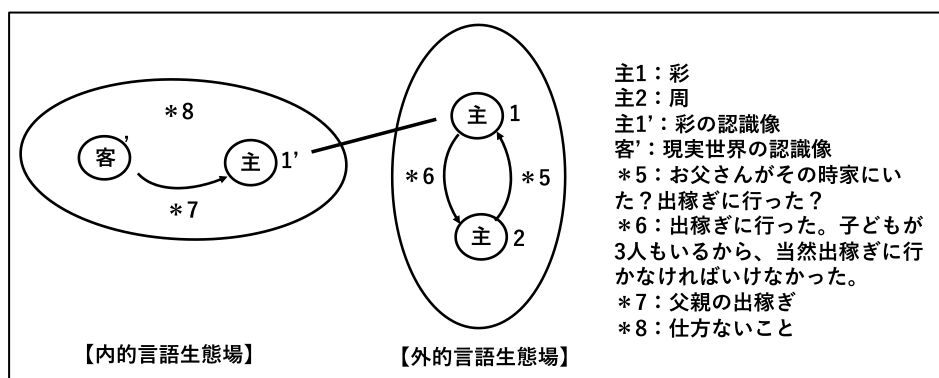
20 周：そうね。その時はまだ小さかったからね。お父さんはその時は家にいた？それとも出稼ぎに行った？

21 彩：出稼ぎに行った。子どもが3人もいるから、当然出稼ぎに行かなきゃいけなかった。たとえ姉と私だけでも、家の生活もあまりよくなかったから。

周の質問を受けて、「子どもが三人もいるから、当然出稼ぎに行かなければならなかった」

¹⁹ 彩の母親：（訳）あの時は二番目の子を産むことが許してくれなかったから、一人産んだ後、次の子（彩の姉）を里子に送り出した。そのあとはずっと産んでいない。結構何年間も経ってから産む許可が出されて、そして彩を産んだ。武はその後隠れて産んだのだ。

というように、5人家族を養うのに、彩は、農村を離れて都市へ出稼ぎに行く父親の行動基準を仕方ないこととして位置付けていた(21 彩)。特に子どもが3人もいるため、高い教育費を払うためには、現金収入が得られる仕事が必要であり、つまり都市に出稼ぎに行くという手段しかなかったと、彩が父親の出稼ぎを捉え直した。彩の父親本人もインタビュー²⁰で自分の出稼ぎ理由を説明し、彩の考えと一致していた。



その後、彩が過去の留守児童経験を振り返りながら、小・中学校の学校撤廃・合併を言及した（23 彩）。

20 彩の父親：(訳) 私は今でも出稼ぎに行っているけど、これも仕方ないことだ。うちの子ども三人は間隔が開いているからかもしれないが、私も大したお金を稼いでいないから。でも全然お金を稼げていないと言うと、私は毎日働いているから、誰も信じないだろう。ただ家の出費が大きすぎるから。

- 27 彩：うん。三年生の時に A 小学校²¹がなくなったから、B 小学校へ行った。五年生まで通ったが、この学校も廃校になってしまった。六年生から中学校までは全部 C 中学校に統合された。六年生の時は、上学期はまだ C 中学校に通っていたが、下学期から母も出稼ぎに行ったから、私は親戚の家に預けられて、そっちの学校に移った。中学校 1 年生まで A 親戚に 1 年間、B 親戚にも 1 年間、そしてまた両親の出稼ぎ先で 1 年間、その後戻ってきた。戻ってきた後 1 年間留年した。
- 28 周：親戚の家に預けられていた時の生活はどうだった？ すぐ慣れた？
- 29 彩：慣れるとか慣れないとかという問題じゃなくて、私は自分の親のそば以外は、どこにも行きたくなかった。

中国は、長年にわたって「一人っ子政策」の規制により少子化が進み、農村の小・中学校の学生の人数が下がる一方である。特に 2001 年以降、中国の子どもの出生率が下がるとともに、農村部は出稼ぎ農民が急増することにより、出稼ぎ親に伴われて都市の学校で通学する子どもが増えた。農村の小・中学校の学生が減少することで、農村の小・中学校の撤廃・合併現象が大規模に現れた。2000 年から 2010 年までの間、中国の農村部では平均毎日 63 の小学校、30 の教学所（小規模な学校）、3 つの中学校が消えていた²²。周と彩の出身地の農村も近年小・中学校の撤廃・合併現象があった（27 彩）。小・中学校の撤廃・合併の原因について、彩は「学生が少なくて学校が運営できない」と説明した。一方、学生がなぜ少ないのか、その現状と当時の社会背景との繋がりについて、彩はまだ把握していなかったことが窺われる（25 彩）。

このように、彩は周との応答を通じて、自分が経験した農村の小・中学校の撤廃・合併現象を捉え返し、内的言語生態場では〈小・中学校の撤廃・合併→学生が少ない〉という意味が生成された。一方、彩は小・中学校の撤廃・合併現象を個人だけの経験として捉え、その現象の普遍性、それからその現象を生み出す社会背景（「一人っ子政策」、農民の出稼ぎ、流動児童の増加など）については認識していなかったことが分かる。従って、彩の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印が図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示されない。この時点における彩と周の外的言語生態場及び彩の内的言語生態場を図 1-3 として示す。

²¹ A 小学校から家まで約 2 キロ、B 小学校は家まで約 3 キロであり、C 小学校から家まで約 2.5 キロである。

²² 21 世紀教育高峰论坛：我国每小时消失 4 所农村学校
<http://www.21cedu.org/?nson/id/214/m/524.html>（閲覧日 2019 年 3 月 24）

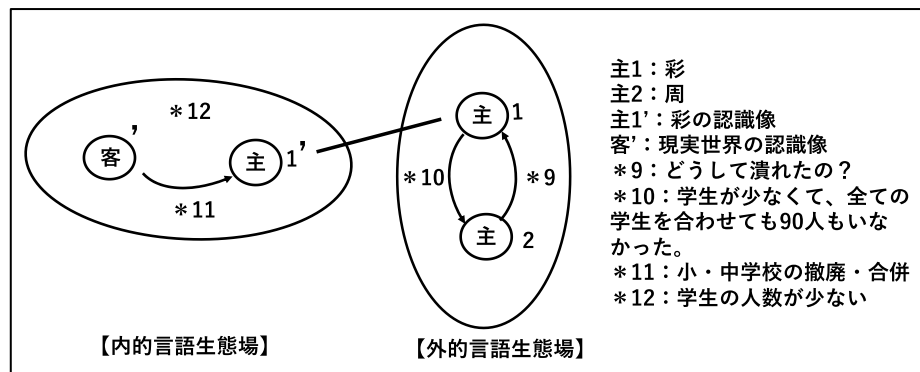


図 1-3 彩と周の第 1 回の対話の言語生態場

以上をまとめると、第 1 回の対話の開始時点では、彩は自分の留守児童経験について、「たくさんの考えを要するほどのものではない」と述べ、周の一方的な質問によって会話が進んでいたことが分かる。そして、周の質問および応答によって、彩は「弟の誕生による罰金・家の取り壊し、父親の出稼ぎ、小・中学校の撤廃・合併」という具体的な経験を呼び起こして捉え返した。第 1 回の対話の全体図を図 1-4 として示す。

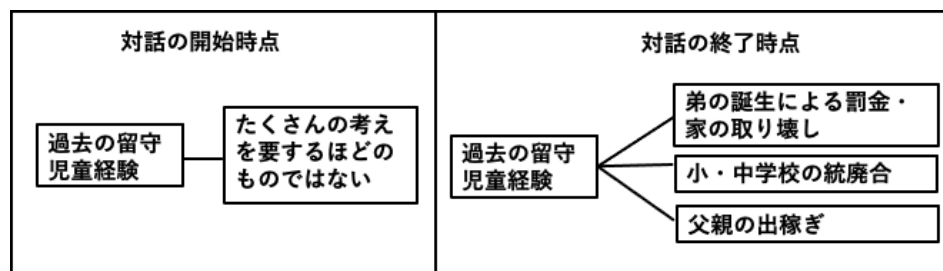


図 1-4 彩と周の第 1 回の対話の全体図

第 1 回の対話が終わった後、周は彩に過去の留守児童経験を第 2 回の対話の「テキスト」として作成してもらうように依頼したが、彩は「特に書く内容がない」、「アルバイトで忙しい」などという理由で断ってきた。そのため、第 2 回の対話も周が書いたテキストを用いて行われた。彩は周と同じ村の出身であるが、周及び周の姉が村を離れて出稼ぎに行った時は、彩はまだ幼かった。周の姉が 13 歳で出稼ぎに行ったことを聞いて、彩は驚いて、具体的な説明を求めようとして以下の対話が行われた。

第 2 回の対話【2017 年 8 月 7 日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|------------------------------|
| 01 | 彩：〇〇姉さん【周の姉】は 13 歳で出稼ぎに行ったの？ |
| 02 | 周：うん、まだ中学校 1 年生のときだったかな。 |
| 03 | 彩：お姉さんたちの経験はとても豊富だね。 |

04 周：何が豊富？

05 彩：経験。私はこれまでずっと学校にいるから。

(中略)

13 周：もし彩が 13 歳の私の姉のように中学校 1 年生で学校を辞めて出稼ぎに行く状況におかれたら、どうする？

14 彩：13 歳で何ができるか自分も分からない。まだ中学校 1 年生だから、何も分からないと思う。

15 周：私の姉は、最初の仕事はベビーシッターだったんだ。でも、13 歳で仕事の経験もないから、すぐ辞めてしまった。母親は次の仕事を探すが、またそれも長続きしない。

16 彩：ははは。なんというかな、私が育った時の生活は〇〇姉さんの当時の生活に比べると少し良くなったと思う。もし〇〇姉さんの状況を想像して、と言われてもいろいろな面で想像できない。

彩は周の姉が 13 歳で出稼ぎに行った話に驚き、周に確認していた (01 彩)。彩は現在中国のある私立大学の 2 年生で、これまでずっと学校で勉強しているため、周及び周の姉のような社会経験は持っていない。そして、周は「もし彩が 13 歳の私の姉のように中学校 1 年生で学校を辞めて出稼ぎに行く状況におかれたら、どうする？」というように、彩にも姉の立場に立って追体験してもらうように尋ねた (13 周)。一方、周の質問に対して、彩は自分の成長環境と周の姉とは違うため、周の姉の当時の心境を想像できないと答えた (14 彩)。そして、彩の内的言語生態場では〈他人の追体験→できない〉という意味が生成された。

つまり、彩は自己と他者・世界との繋がりを認識していないため、自己の生存と他者 (周の姉) の生存を関連づけて捉えることも難しいことが窺われる。即ち、言い換えれば、自己を現実世界の中の一人であることを認識せず、自己 (主体 1) と現実世界 (客体) とのつながりが見えていない。そのため、彩の生態学的主客構造は現実世界 (客体) から自己 (主体 1) へつなぐ矢印は図示されるが、自己 (主体 1) から現実世界 (客体) へつなぐ矢印は図示されない。この時点における彩と周の外的言語生態場及び彩の内的言語生態場を図 2-1 として示す。

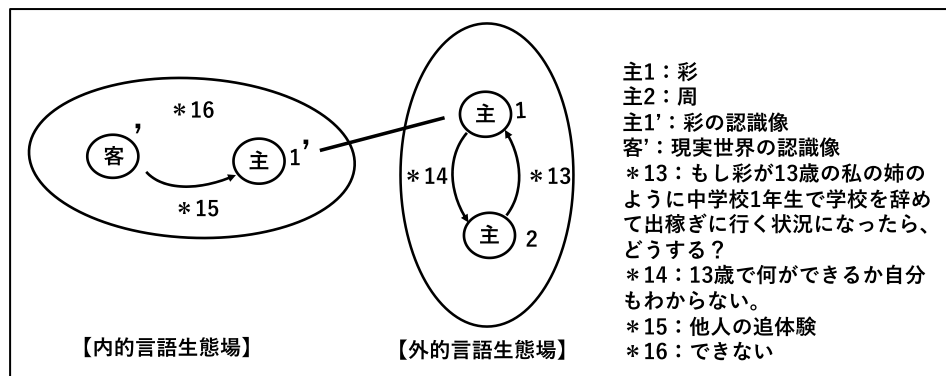


図 2-1 彩と周の第 2 回の対話の言語生態場

続いて、自分は世界の中の一人であり、自己と他者・世界はつながっていることを彩に実感してもらうために、周は彩にも身近だと思われる現在の中国社会のニュースを話題として取り上げた(134 周)。

- 134 周：普段はニュースとか見る？ 社会の出来事とかには関心を持っている？
135 彩：いや、あまり見ない。関心はあるけど、見てもよく分からない。
136 周：自分との関連性が感じられない？
137 彩：うん。ニュースでは、例えば今日どこそで地震が起きたと報道されても、私が住んでいるところはまだ大丈夫だから、全然焦る気持ちになれない。
138 周：もしかして明日ここで起きるかもしれないと思って、事前に対策を考えたり準備したりはしないの？
139 彩：しない。

一方、彩は、ニュースや社会の出来事には関心を持つが、自分と関連づけることが難しいと述べた (135 彩)。その理由としては、自分の目の前に起きていないことは実感できないし、関連付けにくいからだと言う (137 彩)。この彩の発話から、彩は自分を取り巻く世界を狭く捉えているため、実際に存在している広い世界とその世界に生きている人々と自己の繋がりが実感できず、その世界の人々及び出来事と自分とは無関係であると認識していることが窺われる。彩はニュースの出来事と自分は無関係であると捉え返した。そして、彩の内的言語生態場では、〈ニュースや社会の出来事→自分と関係がない〉という意味が生成された。彩の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における彩と周の外的言語生態場及び彩の内的言語生態場を図 2-2 として示す。

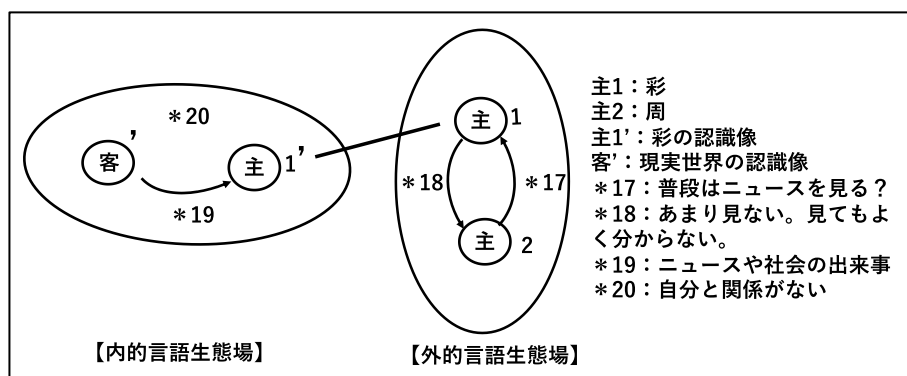


図 2-2 彩と周の第 2 回の対話の言語生態場

その後、周は、現在大学生である彩にとって関わりを捉えやすいと想像し、近年中国で注目されている「キャンパスローン」事件を取り上げ、問題提起をした（166 周）。「キャンパスローン」とは、在籍中の大学生がローンを組み、現金を借りる行為を指す。近年中国では大学生の利用者が急増し、利用者の中には高い利息を支払えず、自殺に追い込まれた大学生も少なくない²³。

- 166 周：（前略）そう言えば、彩の大学にはキャンパスローンがある？
- 167 彩：あるよ。何というかな、つまり利息が超高いローンだね。去年同じ大学の学生もそのキャンパスローンを利用して、その後飛び降りして自殺してしまった。
- 168 周：どうして？
- 169 彩：何というか、キャンパスローンは利子がどんどん上がるから、返せないローンだよ。彼女は最初 1000～2000 元だけを借りたそうだが、その後利子が毎日上がっていくから、最後は何十万元になっちゃって、彼女はとっても返せなかった。現在中国の大学にはキャンパスローンで自殺した人が毎年いるし、しかも人数は少なくない。キャンパスローンを借りたら、大体二つのパターンに分かれる。一つは借りて高い利子がついても、経済的な余裕を持つ家庭であれば、家族がお金を出してくれて返せば解決できる。もし家の状況が悪くて、自分も返せない場合は、本人もキャンパスローンの関係者になって他の学生を騙して、そこから得た利益を自分が借りたローンへ返すことが多い。このように、最初は一人、その後は二人、三人になって、だんだん利用する人が増えていく。
- 170 周：結構深刻な問題だね。

²³ [https://wapbaike.baidu.com/item/校园贷/19461739?fromtitle=校园贷款](https://wapbaike.baidu.com/item/校园贷/19461739?fromtitle=校园贷款&fromid=22895742&fr=aladdin&ms=1&rid=5586591632699239277&rt-err=900&rt-msg=unkown)
&fromid=22895742&fr=aladdin&ms=1&rid=5586591632699239277&rt-err=900&rt-msg=unkown（百度百科
閲覧日 2019 年 2 月 27 日）

171 彩：だから、私の大学では現在キャンパスローンは禁止されて、キャンパスの中では「キャンパスローンを拒絶する」というように忠告の看板が設置された。また大学から学生にキャンパスローンのことを説明して、学生に理解してもらい、キャンパスローンを使用しないように呼びかけている。

(中略)

178 周：クラスメートの間ではこの事件について話したりする？

179 彩：うん。今、大学はこの事件をととても重視している。自分の大学の事件で、すぐ目の前に起きた事件だから、実感しやすい。もし自分の身の回りに起きなかったら想像もつかない。今の大学は複雑化されてきて、単純ではない。

180 周：だから学生も常に冷静な考えを持って、社会のことに関心を持つことが大事だね。いつか自分の身の回りで起きてしまうかもしれないから。普段から同級生たちと議論したりしていると、いざとなるときは焦らないで対応できる。

181 彩：うん。

166 周の問題提起を受けて、彩は、去年（2016 年）自分と同じ大学の女子学生がキャンパスローンを利用して自殺した顛末を説明した（167 彩）。この事件は身近に起きた事件だったため、彩を含めて同じ大学の教師や他の大学生もニュースで取り上げられていた「キャンパスローン」と自分との関連性を実感できた（179 彩）。つまり、彩は、「キャンパスローン事件」はただのニュースや他人事ではなく、自分と関係があることとして位置付けている。このように、彩は上記 2-2 の〈ニュースや社会の出来事→自分と関係がない〉という認識から、〈ニュースや社会の出来事→自分と関係がある〉というように捉え直した。

このように、外的言語生態場で周の問題提起によって、彩は初めて自己と世界との繋がりを認識し、そして自分が世界の中の一人であることを捉え返した。そのため、彩の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印と、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における彩と周の外的言語生態場及び彩の内的言語生態場を図 2-3 として示す。

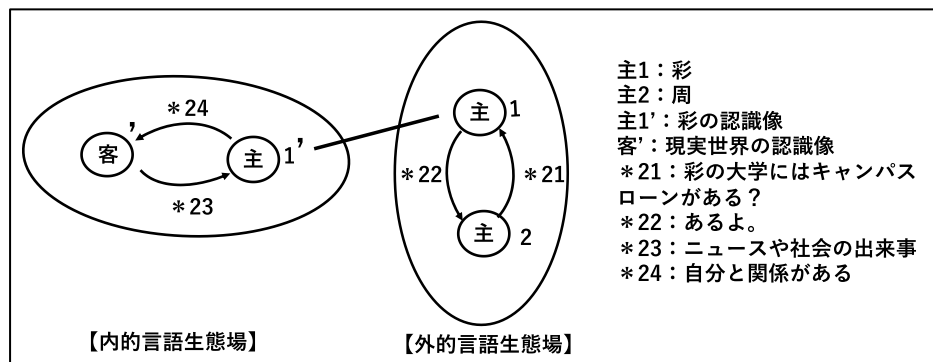


図 2-3 彩と周の第 2 回の対話の言語生態場

以上をまとめると、第2回の対話の開始時点では、彩は周及び周の姉の経験、そしてニュースや社会の出来事について、自分との関連性を認識しなかった。しかし、その後周の問題提起（「キャンパスローン」事件）によって、彩は自己と社会との関連性を実感し、初めて自分と他者・世界との繋がりを認識できた。第2回の対話の全体図を図2-4として示す。

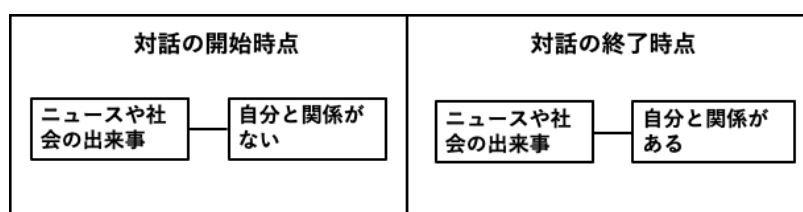


図 2-4 彩と周の第2回の対話の全体図

第2回の対話が終わった後、過去2回の対話を踏まえて第3回の対話を行なった。第3回の対話は彩と周が気づいた点をお互いに出し合い、それについてさらに対話をした。以下はその対話の一部である。

第3回の対話【2017年8月20日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|---|
| 01 | 彩： <u>親の出稼ぎは子どもだけではなく、大人にも影響すると思う。</u> |
| 02 | 周： <u>そうね。最近中国の離婚率は本当に高いね。特に若者の離婚率がますます高くなってきた。</u> 農村の人は都市へ出稼ぎに行くと離婚しやすくなった。 |
| 03 | 彩： <u>今は本当に愛し合って結婚する人がとても少ない。多くの女の方は相手の家の経済状況を見て決める。もし経済状況が良かったらすぐ結婚する。そして結婚した後、もしトラブルがあっても相談をしないから、すぐ離婚してしまう。最近</u> は知り合って2、3ヶ月も経たないですぐ結婚する若者が多いでしょう。もし二人とも貧しい農村家庭の出身の場合、二人とも出稼ぎに行くことになるから、女の方が離婚する可能性がもっと高くなり、そしてそういう場合は子どもが重荷になっちゃう。（中略） |
| 04 | 周： <u>家庭内のトラブルは二人でちゃんと話し合えば解決できると思うけど、今の</u> 人たちは皆対面の交流が苦手なようだ。特に、現在は通信手段も多様化してきて、ほとんど携帯とパソコンで交流しているから、対面の交流がどんどん減ってきた。 |
| 05 | 彩： <u>「離婚」という言葉は、昔はとても遠く感じて、自分の生活の中にあまり出なかった。離婚のケースがあっても、それは単に個別な例でしかなかった。でも、今はその言葉がすっかり自分の生活の中に浸透してしまった。</u> |

- 06 周：なぜそうなのと思う？
- 07 彩：お金だろう。特に出稼ぎに出た後はいろんな考えが出てくるから。
- 08 周：昔の農村女性は家にしかいなかったが、今は全部出稼ぎに行けるから、
外の世界を見たらきっと誘惑されやすいだろう。

親が出稼ぎに行くと子どもに悪影響を与え、「留守児童問題」が生じるという議論がよく聞かれる。一方、彩は、大人が出稼ぎに行くことは、残された子どもだけでなく、出稼ぎに出る大人自身にも影響を及ぼすとして独自の見解を表明した (01 彩)。この彩の話題提起に周は啓発され、近年中国の若者の高い離婚率に言及した (02 周)。彩が子どもだった時、農村では「離婚」は馴染みのない言葉であったが、近年農民の出稼ぎが増えることにより、農村でも若者の離婚を頻繁に聞くようになり、「離婚」という言葉は身近な存在になったと振り返った (彩 05)。離婚の理由として、彩は、大人は都市へ出稼ぎに行って現金収入を得るようになると、様々な考えが出てきて離婚につながると捉えた (07 彩)。つまり、彩は、農民の出稼ぎと離婚率の上昇の二つのことを関連づけて捉えている。彩の発話を受けて、周も賛同した。そして、近年若い女性の出稼ぎによる価値観の変化と離婚率の上昇の二つのことを関連づけて捉えた (08 周)。このように、二人が対話を通じて「農民の出稼ぎ」という概念を捉え返し、彩の内的言語生態場では〈農民の出稼ぎ→離婚率の上昇〉、周の内的言語生態場では〈農民の出稼ぎ→女性の価値観の変化〉という意味が生成された。

外的言語生態場で彩の話題提起(農民の出稼ぎ)により、彩と周は自己及び家族の個人的な経験から、自己を取り巻く世界の人々(出稼ぎ農民)の生き方へと認識の範囲が広がった。言い換えれば、彩は過去2回の対話を踏まえることで、自己と世界の繋がりを認識でき、能動的に自己を取り巻く世界に対する認識を進めていると言える。従って、彩と周の生態学的主客構造は現実世界(客体)から自己(主体1、主体2)へつなぐ矢印と、自己(主体1、主体2)から現実世界(客体)へつなぐ矢印が図示される。この時点における彩と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図3-1として示す。

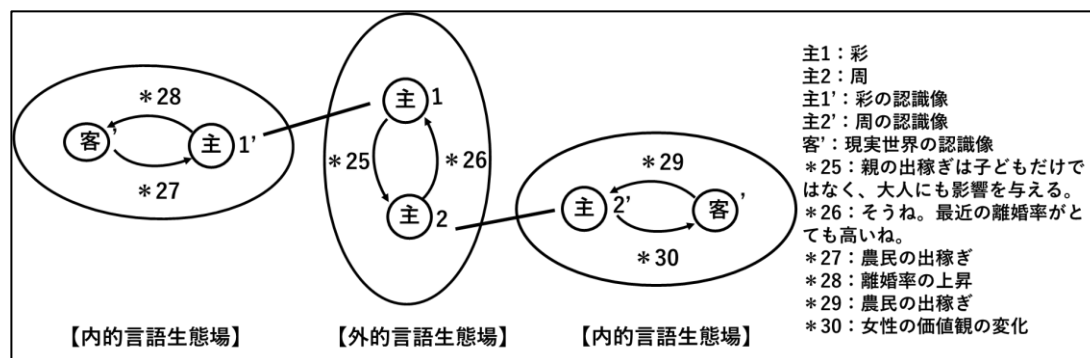


図 3-1 彩と周の第3回の対話の言語生態場

一方、周は長年日本に留学しているため、出身地の村に帰ることは少ない。そこで、彩は近年の村の変化について周と共有しようとして新たな話題を切り出した（35 彩）。

- 35 彩：これから私たちの村は「鎮」になるよ。□□鎮、大きい町は××鎮と呼ばれるでしょう。それから、今後ここは鉄道も通るよ。この間、鉄道の線路を測る人も来た。ここはもうすぐ政府に買収されるという噂が流れたら、村の人たちは次々と家を建て始めて、少しでも多くの買収費用をもらおうと考えている。皆がわざわざ新しい家まで建てているのを見ると、一体どのくらいお金が欲しいのか、私には彼らの強欲な考えは本当に理解できない。
- 36 周：私は政府がなぜ農村を全部都市化しようとするのかがよく理解できない。
- 37 彩：それは分かるよ。中国は、2020 年までには全面的な小康社会を、そして 2050 年までには共産主義社会を実現することを目指している。つまり、最も高いレベルの社会を目指すという国の政策があるから。「小康社会」というのは分かる？
- 38 周：よく分からない。
- 39 彩：つまりどの家も質の高い生活を送ることができる社会のことだ。例えば、どの家もちゃんとした仕事があって、そして自分の家や車も所有して、生活レベルが非常に高い社会のことだ。
- 40 周：でも中国にはこんなに多くの人がいるから、全面的に小康社会にするのは難しいんじゃない？
- 41 彩：そうかもしれないけど、今もう既に実施されているよ。今は農村でも全部ハイテク化になってきて、農民は誰でもなれるわけではなく、知識を持っている人しかなれない。
- 42 周：でもハイテク化は必ずしもいいとは限らない。例えば昔、推奨されてきた「遺伝子組換え」は、体に良くないことが最近分かったでしょう。
- 43 彩：そうね。確かに、山奥で小康社会を実施するのは難しいと思う。彼らの生活スタイルを全部変えるのも無理がある。
- 44 周：生活スタイルを一気に変えるのは難しいと思う。特に少数民族の場合はこれまで何百年も伝統的なスタイルで生活してきたから、無理やりに小康社会の生活をさせられると、かえって生活の質が下がってしまうと思う。

近年、農村の都市化が進む中で、周と彩の村及び他の二つの村も今後合併してより大きい単位の「鎮」²⁴になり、そして都市間の主要鉄道もここに敷設されることになった。村に鉄道が通ることは、路線範囲内にある家を全部撤収することを意味し、そして撤収される家の

²⁴ 鎮：鎮の設置は県政府の所在地か、または人口が 2 万人以上でそのうち非農業人口が 10%以上、もしくは人口は 2 万人以下だが非農業人口が 2,000 人以上である（李 2005）。

持ち主に対しては鉄道関係部門から補助金が与えられることになる。その補助金（買収費用）で農民たちは他のところで家を建て直すか都市で家を買うかということになる。その補助金の金額をめぐる噂が村の中で流れており、その補助金をもらうために村の人だけではなく、外部から来た富裕層も土地を買って村で新しい家を建てていることを彩は指摘した（35 彩）。彩の発話を受けて、周は、村の人々のそうした行動より、農村を全面的に都市化しようとする政府の政策が理解できなかった（36 周）。周の疑問に対して、彩は学校で学んだ知識を呼び起こし、近年中国政府が掲げている目標を取り上げて説明した（37 彩）。

一方、農村を全面的に都市化するためには、農業及び農民のあり方も変える必要があると彩が述べた（41 彩）。つまり、今の農業のやり方は非効率的であるため、農作業を全部機械化し、そしてその機械を操ることができる専門人材しか農業に従事できないようにするという。彩の説明を聞いて、周は近年話題になっている「遺伝子組換え」のケースを取り上げて農業のハイテク化の危険性に言及した（42 周）。周の反論を受けて、彩もこれまで知識として学んだその政策の本質を捉えるようになり、全国範囲で「小康社会」を実施するのには限界があると捉え直した（43 彩）。つまり、周の反論（40 周、42 周）によって、彩は初めて「小康社会」の中身を考えるようになり、この政策の限界を認識できたと言えよう。農村を都市化する目的は人々の生活の質を高めることである。一方、伝統的な文化や習慣を持っている少数民族にとって都市化は彼らの生活や文化を全部壊してしまうことになり、生活の質が逆に下がることにつながると、周が彩の意見に賛同した（44 周）。

このように、彩が自分の村の都市化を話題として提起し、周と農村の都市化による影響を話し合った。そして、二人は互いの発話に啓発され、内的言語生態場では〈農村の都市化→農業のハイテク化による食の安全問題〉、〈農村の都市化→伝統文化の破壊〉という意味が生成された。即ち、彩は、自己と世界との繋がり認識をきっかけにして、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人（農村の都市化による農民・農村・農業への影響）に対する認識をさらに能動的に拡張していることが窺われる。従って、彩と周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1、主体 2）へつなぐ矢印と、自己（主体 1、主体 2）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における彩と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-2 として示す。

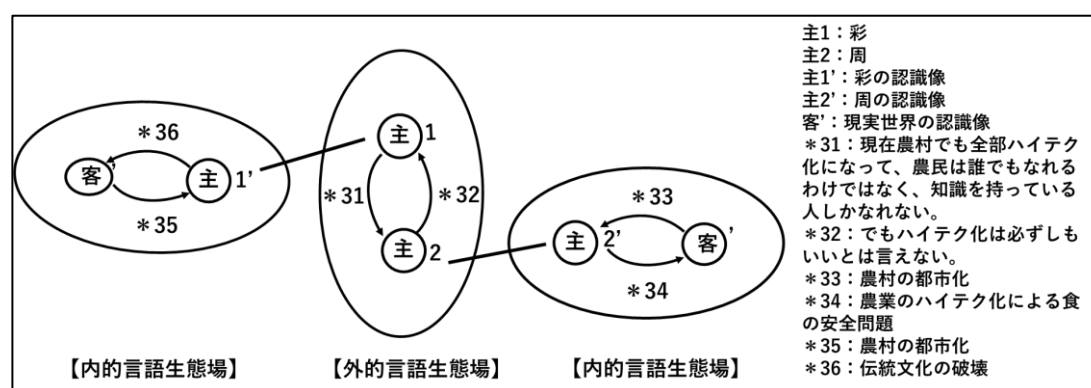


図 3-2 彩と周の第 3 回の対話の言語生態場

一方、彩と周の村でも近年都市化が進み、多くの外部（元々地元の農民ではない人）の富裕層や企業が来て、土地を買って大きな家を建てたり、工場を作ったりしている。このような部外者が増加することにより、村全体が昔に比べて騒々しくなり、環境汚染もひどくなったと彩が指摘した(45 彩)。

45 彩：うん。農村は空気がいいから、現在都市の人も農村に押し寄せてきて、家を建てたりしている。そして、農村に家が増えて、空気も悪くなってしまった。私たちの村は昔に比べると空気が悪くなったでしょう。水も空気も綺麗な場所はもうどこにもなくなった。ほら、私の家の周りの土地も全部都市の富裕層に売られてしまったでしょう。このように、お金がない人は一生懸命に農村から都市へ出ようとしているのに対して、お金がある人は逆に一生懸命になって都市から農村に押し寄せてくる。

46 周：逆トレンドになったのね（後略）。

（中略）

66 周：前回の対話では、お金持ちはどんどん豊かになって、貧乏人はますます貧しくなると言っていたよね。

67 彩：そう。お金持ちはお金を持っているから、もっと裕福になれる資本を持っている。

68 周：このような現象は現在の社会とどんな関係があると思う？

69 彩：政府が政策をよく実施していないからだと思う。現在は貧困を助ける政策を行なっているけど、肝心なところに行き届いていないと思う。今中国は全体の発展がますます良くなってきて、生活の質も高くなったが、逆に貧困格差がもっと大きくなっちゃった。

70 周：当時の改革開放政策は一部の沿岸部だけを先に豊かにさせたから、内陸部のほうはまだ遅れている。

71 彩：うん。だから今農民の多くは都市へ出稼ぎに行っているけど、出稼ぎ先では自分を見失いやすい。自分が努力しないと他人にやられると思うから、皆は一生懸命に上に上ろうとする。でも、一体いつになったら上に上がれるか分からない。

彩は、都市の富裕層が農村に次々と押し寄せて来る一方で、農民は農業をやめて都市へ出稼ぎに行く人が年々増えている現象を関連づけて捉えた（45 彩）。そこで、周は、彩が過去の対話で述べた貧困格差の拡大というキーワードを思い出し、今の話題と関連づけて新た

に問題提起した（66 周）。中国は、1978 年に始まった改革開放政策により、当時最初に発展した沿岸部の都市は飛躍的に発展した一方で、内陸部の地方の発展は未だに実現されずに発展から取り残されている。周は、貧困格差の拡大は改革開放政策と関連していると意味付けた（70 周）。周の問題提起を受けて、彩は再び出稼ぎ農民に目を向けた。出稼ぎ農民は都市に行くと、他人にいじめられないように努力して一生懸命に働く。しかし、いくら頑張ってもお金も地位も手に入れない自分と、あまり努力しなくても富や権力を手に入られる大金持ちと権力者との間のギャップは大きくなるばかりで、その結果、出稼ぎ先で自信を失い、自己を見失いやすくなるという問題を提起した（71 彩）。さらに、彩の「一体いつになったら上に上がれるか分からない」という言葉に注目すると、彩は出稼ぎの農民の立場に立って、彼らのみじめな思いや置かれた状況を想像しながら彼ら心境を語っていることが窺われる。第 2 回の対話では彩は〈他人の追体験→できない〉と捉えていたが、今の彩の発話を見ると、その転換は大きく、出稼ぎ農民という他者の経験を見事に追体験しており、意味を捉え直したことが分かる。

このように、彩と周は出身地の村の都市化を起点にして、その影響についてより広く捉えるようになり、自己が直面している現実の問題を認識の端緒として、自己を取り巻く世界の把握をさらに進めていることが窺われる。二人は外的言語生態場での問題提起と応答により、彩と周の内的言語生態場では〈農村の都市化→外部者の増加による環境汚染〉〈農民の出稼ぎ→生きる意味の喪失〉〈改革開放政策→貧困格差の拡大〉という一連の意味が生成された。従って、彩と周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1、主体 2）へつなぐ矢印も、自己（主体 1、主体 2）から現実世界（客体）へつなぐ矢印も図示される。この時点における彩と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-3 として示す。

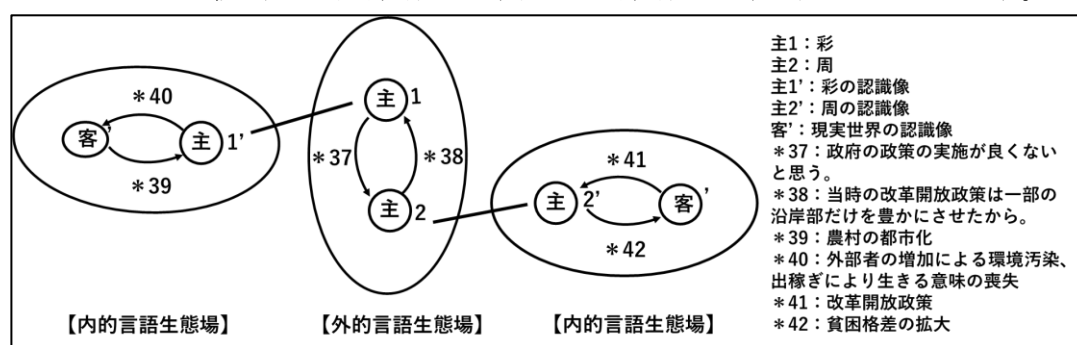


図 3-3 彩と周の第 3 回の対話の言語生態場

以上第 3 回の対話をまとめると、彩は初回の対話時とは打って変わって自ら次々と問題提起を行い、周との対話を自ら牽引していくことで、〈農民の出稼ぎ→留守児童問題〉という意味から一連の意味を見出し、それらの繋がりを辿ることで認識を進めていた。第 3 回の対話からは、彩が自己を取り巻く世界の現実を能動的に捉え返し、主体的に対話に参加している様子が窺え、過去 2 回の対話とは対照的になっていることが分かる。第 3 回の対話の

全体図を以下の図 3-4 として示す。

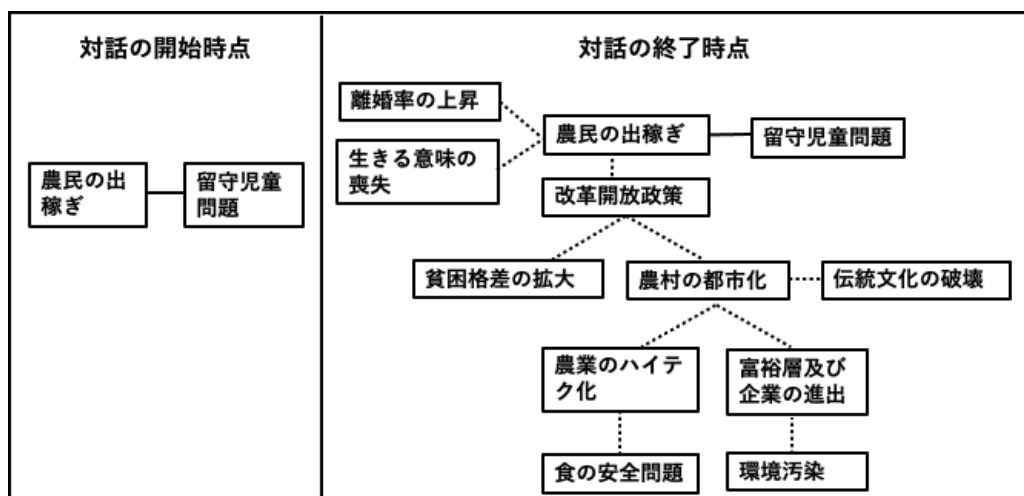


図 3-4 第 3 回の対話の全体図

過去 3 回の対話が終わった後も、周と彩は互いに連絡を取り合ってきた。1 年前、第 1 回の対話の後、第 2 回の対話に向けて、周は彩に対して自分の留守児童経験を書くことを依頼したが、断わられた。ところが、1 年後に周が再度依頼したところ、彩は快く引き受け、過去の留守児童経験を文字化してテキストを作成し、周と共有した（付録 1）。周は彩のこのテキストを読んで、両親の出稼ぎが彩に大きな衝撃を与えたことを知り、最初彩が自らの留守児童経験を書くことを拒否したことも理解できるようになった。以下の第 4 回の対話は、周が、彩が書いたテキストに基づいて、彩の過去の留守児童経験をもっと詳しく知りたいと思って質問を投げかける場面である。

第 4 回の対話【2018 年 8 月 22 日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

番号

発話内容

- 01 周：昔の先生たちはとても優しくしてくれたと、ここに書いているね。
- 02 彩：うん。私はとてもラッキーな人だったと思う。なぜかという、同級生も先生も、全部いい人ばかりで、とても優しくしてくれた。どこへ行っても、先生たちはずっと私のことを見てくれた。
- （中略）
- 18 彩：私の先生は、成績だけで学生を判断しないで、人柄でその人を判断する。たとえ勉強が得意じゃなくても、先生は他の良いところを見つけてくれる。犯罪や学校のルールを破らなければ、先生はいい学生だとしてみてくれる。
- 19 周：どのようにしていい学生かを判断するのか。どの学生も成績がいいとは限らないから、一人の人間として持つべき品格を持っていれば十分だと思う。教師の

仕事は良い学生を育てるより、良い人間を育てることがもっと大事だと思う。だって、学校を離れて社会に出たら、もう誰もそのようなことを教えてくれないから。特に、留守児童のような場合は、家庭教育がもう機能していないから、学校教育の役割がもっと重要になった。

20 彩：現在多くの親は子どもの教育を全部学校に任せているけど、学校はまた親に対して責任を追及している。両者ともその責任を擦り付け合っているけど、一体誰の責任なのか。実は誰か一人の責任だとも言いにくい。

21 周：そうね。これは単に学校あるいは親の責任だと言うことはできない。これらは全て繋がっているから。例えば、彩のお父さんは子どもたちの学費を稼ぐために出稼ぎに行った。だって、農村にいと現金収入が得られる仕事がないから、都市へ出稼ぎに行かなければならなかった。でも、お父さんは出稼ぎに行くと、彩の家庭教育が機能しなくなった。最初お母さんが家にいた頃はまだ良かったが、その後お母さんも出稼ぎに行ったから、家庭教育が全く機能しなくなった。そこで、彩の心理にもマイナスの影響を与えて、その影響がまた勉強にも支障をきたしてしまう。幸いあの時、彩のことを支えてくれた先生がいて、本当に良かった。もしその時先生も相手にしてくれなかったら、どうなったか。だから、親が出稼ぎに行くことによって他のことにもマイナスの影響を与えてしまう。

22 彩：全部繋がっている。これもあれもチェーンのように繋がっている。

彩は、留守児童でいる間、周りの教師と同級生に支えてもらうことで、両親のいない苦しみ乗り越えられたと説明した（02 彩）。親が出稼ぎに行くと、子どもの教育を学校の教師の役割として捉える親が多い。一方、学校の教師は、子どもの教育の第一責任は親にあると捉えている。そこで、子どもの教育をめぐる親と教師が互いに責任を擦り付け合うということが中国ではよく議論されるが、誰か一人の責任ではないと彩が指摘した（20 彩）。周も彩の意見に賛同し、親が出稼ぎに行くこと、それによって家庭教育が機能しないこと、またそのような子どもを扱う教師の役割の拡大にもつながることを、彩を例として取り上げながら語った（21 周）。周の発話に触発され、彩は、これらの問題（農民の出稼ぎ、留守児童の家庭教育の機能不全、学校教育の役割の拡大）は全部つながっていることに気づき、留守児童問題を繋がりの中にある問題として捉え返したことが窺われる（22 彩）。このように、彩と周は互いの応答によって、農民の出稼ぎという概念についてさらに広く捉えるようになり、二人の内的言語生態場では〈農民の出稼ぎ→留守児童の家庭教育の機能不全〉、〈農民の出稼ぎ→学校教育の役割の拡大〉という新たな意味が生成された。

このように、過去3回の対話を踏まえて、彩と周は〈農民の出稼ぎ〉という概念をさらに捉え直し、〈農民の出稼ぎ→留守児童の家庭教育の機能不全&学校教育の役割の拡大〉という新たな意味が生成された。また、彩は自分の留守児童経験を文字化し、それに基づいて周

- が起きやすい。
- 25 周：そうね。特に留守児童の場合は、両親がそばにいないから、問題やストレスが溜まりやすい。彩が書いたように、留守児童は自分の親がなぜ出稼ぎに行くのかを理解できないから、親に対しても不信な気持ちを持つ。それから、もし周りの先生も彼らに対して〈冷たく扱うと……〉
- 26 彩：〈正しい方向に向いていけばいいけど、もしそうじゃないと……〉
- 27 周：〈極端な道へ行きやすい〉。だから、このようなことは誰か一人のせいにすることはできなくて、社会全体に責任があると思う。農村では義務教育も学費を払わなければならないから、子どもを学校に行かせるためには親は出稼ぎに行かなければならない。だから、出稼ぎに行く親のせいにはできない。また、出稼ぎに行かないと、一家を養うこともできないから。そこで、国の政策と関わってきて、国が農村の教育にもう少し資金を出せばいいけどね。
- 28 彩：今農村でも義務教育は全部無料だと言われている。しかし、学費は免除されたけど、雑費はかえってもっと高くなった。昔学費を払っていた時期、雑費はせいぜい何十元だった。
- 29 周：うん、何十元だったね。
- 30 彩：今学費は免除されても、雑費は一学期に千元くらいはかかる。弟が今中学校に通っているけど、給食代の何百円を払うのは仕方ないが、その他にも何百円を払った。それから最近の雑費はますます高くなった。
- 31 周：そうね。雑費はどうしてあんなに高いだろう。
- 32 彩：うん、ただノートとペーンだけなのに。学費は国が払ってくれるから。
- 33 周：だから、政策を実施する初心はいいけど、一旦実施されると全て変わってしまった。
- 34 彩：うん。
- 35 周：管理にも問題もある。
- 36 彩：うん、よく実施されていない。こんなにたくさんの人がいるから、その中にはいつも一人か二人か……。
- 37 周：汚職、賄賂。
- 38 彩：うん。
- 39 周：彼らは上から下へ抑え、そして一番下の人は最もかわいそうだ。例えば農民。彼らより下にはいないから、自分に頼るしかなくて、生きていくために出稼ぎに行かなければならなかった。そう言えば、なぜ雑費がこんなに高いのか？ どうして払わなければならないのか？ 農民たちは自分の権利をあまり認識していないね。
- 40 彩：彼らは何も聞かないで、ただ一生懸命にお金を稼ぐことだけを知っている。

- 41 周：うん。自分の権利をあまり認識しないし、何かを訴える人もとても少ない。
- 42 彩：農村では何が起こっても、農民たちは訴えることはないだろう。裁判に行くことなんて、ほとんどない。
- 43 周：死んだら死んだって、車にひかれたらひかれたって、何があってもその現実をすぐ受け入れられるようだ。
- 44 彩：ほら、この間の江歌事件、彼女のお母さんは日本の裁判所へ行って犯人を控訴したでしょう。もし私たちの村であのような事件が起きたら、おそらく誰一人も行かないだろう。だから、ここを出てもっと外の世界を見ないとね。やはり現実を一つずつ変えていかないといけない。一気に全てを変えることができないから。

24 彩の発話を踏まえて、周は留守児童問題（心理上の問題）の直接的な原因である農民の出稼ぎという現象を取り上げ、その現象を生み出す世界のコト・モノ・人の繋がりを辿り始めた（27 周）。農村では高い教育費と農業による現金収入の低下により、一家の生活を維持するために農民は出稼ぎに行かなければならないと、周は農民の出稼ぎ理由を分析し、さらに国の政策も関係していると述べた（27 周）。27 周の発話に触発され、彩は農村の義務教育の非実質化を問題提起した（28 彩）。2006 年から中国では小学校から中学校までの義務教育段階の学費が全部免除となったが、農村地域では学費免除の代わりに他の雑費が年々上がっていることを彩が指摘した（30 彩）。

このように、彩と周は互いの発話に触発され、「農民の出稼ぎ」という概念をさらに拡張し、二人の内的言語生態場では〈農民の出稼ぎ→留守児童の心理上の問題の発生〉〈農村の義務教育の非実質化→農民の出稼ぎ〉という新たな意味が生成された。また、対話の終了時点では、彩は自分が直面している現実を被与のものではなく、人間の力で変えられるものとして捉え返し、社会変革に向けて主体的に変えていこうとする意志が窺われた（42 彩）。一方、第 1 回の対話では彩は父親の出稼ぎを所与の現実として捉えていたが、そうした認識を捉え直し転換したことに注目したい。従って、彩と周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1、主体 2）へつなぐ矢印と、自己（主体 1、主体 2）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における彩と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 4-2 として示す。

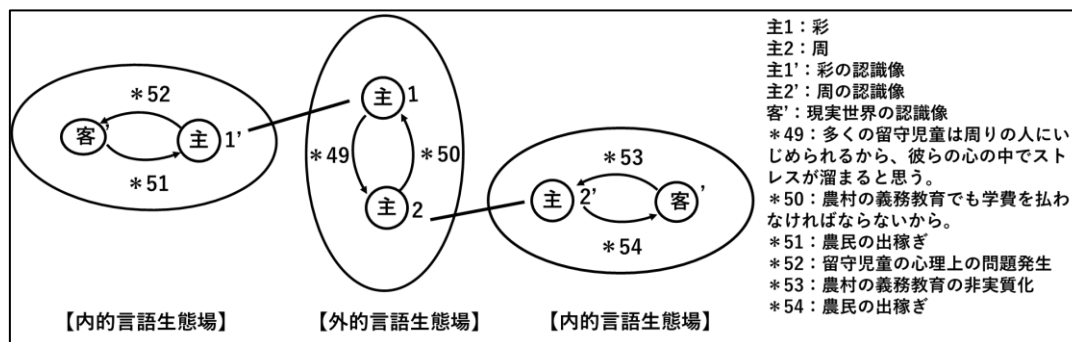


図 4-2 彩と周の第 4 回の対話の言語生態場

1 年後の第 4 回の対話では、彩は自分の過去の留守児童経験を文字化し、それに基づいて自己を取り巻く世界の現実（学校教育の役割の拡大、留守児童の家庭教育の機能不全、義務教育の非実質化）を捉え返した。彩は過去 3 回の対話で自己と現実世界との繋がりを認識した上で自己を取り巻く世界を捉え返すことで、自分も留守児童当事者だったことを認識し、主体的に現実世界に向けて働きかけようとする意志が窺われた。1 年前の第 3 回の対話（実線部分）に比べ、1 年後の第 4 回の対話では多くの意味が生成され、「農民の出稼ぎ」という概念のネットワークが広がった（点線部分）。第 4 回の対話の全体図を図 4-3 として示す。

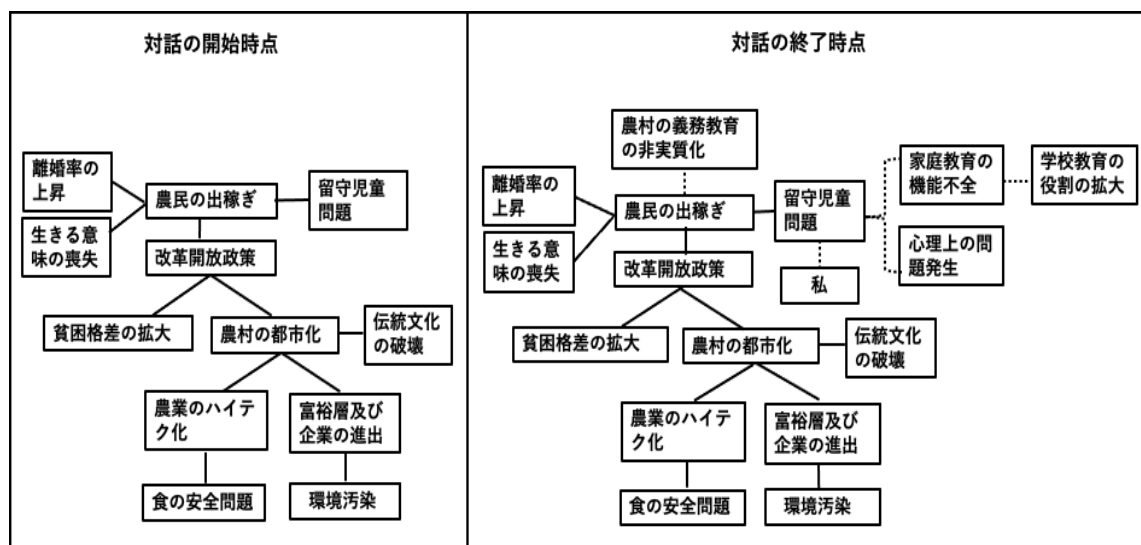


図 4-3 彩と周の第 4 回の対話の全体図

以上、彩との対話的問題提起学習の事例から、周との対話を通じて、彩は自分の留守児童経験を捉え返すという、生態学的意味の生成過程を見た。まず、第 1 回の対話では、彩は周の過去の留守児童経験を踏まえて自分の留守児童経験を捉え返した。対話の開始時点では、彩は自分の留守児童経験を「たくさんの考えを要するほどのものではない」として捉え、周

が一方的に質問を繰り返す形で対話が進んだ。その後、外的言語生態場で周の質問および彩の応答によって、彩は〈弟の誕生による罰金・家の取り壊し、父親の出稼ぎ、小・中学校の撤廃・合併〉という具体的な経験と呼び起こし、それらを捉え返した。第2回の対話でも周の留守児童経験に基づいて対話をした。対話の開始時点では、彩は自己と他者・世界（他人の追体験、ニュースと社会の出来事）との繋がりを認識していなかった。しかし、その後周が彩にとって身近な話題である「キャンパスローン」を問題提起することをきっかけにして、彩は社会のニュースと自己との関連性を実感し始め、初めて自己と他者・世界との繋がりを認識した。第3回の対話では、その認識を踏まえて彩は「出稼ぎ農民の増加」という現実を起点にして、自己及び身近な群像の生存の危機（離婚率の上昇、生きる意味の喪失など）を辿り、主体的に自己と世界の繋がりの認識を進めた。第4回の対話では、彩は、自分の留守児童経験を言語化したテキストに基づいて、周と農民の出稼ぎによる留守児童問題について議論し、留守児童当事者として自分を取り巻く世界の現実に向けて主体的に働きかけようとする意志が形成されたことが窺われた。このように、外的言語生態場で周の問題提起（「キャンパスローン」事件）を承けて、彩は自己と他者・世界との繋がりを認識し始め、その認識を踏まえて留守児童当事者として主体的に社会に働きかけようとする意志が形成されたと言える。

以上を、生態学的主体性を成す契機の生成の過程を形成する三段階を辿って、彩の生態学的主体性を成す契機をまとめる。

まず、生態学的主体性を成す契機の生成のその1は、「自己を起点としてレバンスをたどり、自己・世界の相即的意味を把握する」である。第2回の対話で、周が「キャンパスローン」という問題提起をすることによって、彩は初めて自己と社会の関連性を実感し、自己と他者・世界との相即的關係を把握することができた。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその1と考える。

次に、生態学的主体性を成す契機の生成のその2は、「自己の生の底流を成す生存の危機を起点としてレバンスをたどる」である。第3回の対話では、彩は自分を取り巻く世界の現実「出稼ぎ農民の増加」を起点にして、自己及び自己にとって身近な群像の生存の危機（離婚率の上昇、出稼ぎ農民における生きる意味の喪失など）を辿った。つまり、彩は自己が直面している現実の問題を認識の端緒として、能動的に自己と自己を取り巻く世界の繋がりを辿っていた。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその2と考える。

さらに、生態学的主体性を成す契機の生成のその3は、「逆規定性の胚胎・逆規定としての形成」である。1年後の第4回の対話では、彩は過去3回の対話で得られた認識を踏まえて、自分の留守児童経験を文字化してテキストを作成し、そのテキストに基づいて周と対話をすることによって、自分が留守児童当事者であることを捉え返し、さらに留守児童当事者として現実世界に向けて主体的に働きかけようとする意志が窺われた。このように、外的言語生態場で周の問題提起により、彩は自己と客体（現実世界）との繋がりを見

出し、留守児童当事者として主体的に現実世界に向けて働きかけようとする意志が形成されたと言える。このような認識を明確にした上で、彩が今後その現実を変えていく主体として実践を行うこと、つまり〈逆規定の胚胎〉として期待することができる。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその3と考える。

5.3 健〈過去の留守児童経験の捉え返しによる未来像の獲得〉

2018年8月14日から2018年8月16日にかけて、健と周は対話的問題提起学習を援用して、対話を3回行った。第1回の対話を行う前に、健に周のライフストーリー・テキスト（付録1）を読んでもらった。健が周のテキストを読み終わった後、文章の中の周の経験について、どう思ったか、感想を求める周の発話で対話が始まった。以下の対話は周の留守児童経験について語っている場面である。

第1回の対話【2018年8月14日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：これは私の留守児童経験である。これを読んで、どう思った？ |
| 02 | 健：なんというか、私はこの上に書いてあるような経験【「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し、里子に出される】はなかったと思う。 <u>ただし、3つ目の文章の内容は私の経験とほとんど同じで、その頃の子どもは皆経験したと思う。</u> |
| 03 | 周：どこ？ |
| 04 | 健：「通学路には林と畑がたくさんあって、毎日同じ村の子どもたちと遊びながら学校に通っていた」、ここはとても似ている。90%以上同じだ。 |
| 05 | 周：そうね。あの頃は家からお小遣いがもらえなかったから、全部自分でおやつを探していた。 |
| 06 | 健：あの頃はお小遣いがとても少なかった。父が帰ってくるときだけ何元かくれるけど、普段は全然お金がなくてお金の使い方もよく分からないから、もらったらずぐ使ってしまった。 <u>あの頃はやっぱり通学路が一番楽しかった。中学校は4時半に学校が終わるけど、同級生たちと山道を遠まわりして遊びながら帰るから、いつも6時頃に家に着く。そして、母親がいつも家で待っていた。あの頃は山や野原のどこに木の実など食べられる物があるか知ったら、どんなに遠くても取りに行った。例えば、スモモとか。食べ物があって、楽しければいいと思っていた。</u> |
| 07 | 周：あの頃は、家にはあまりおやつがなかったね。 |
| 08 | 健：おやつが全然なかった。昔の子どもたちは皆お小遣いがなかった。おやつは、スモモ、もも、みかん、栗のようなものばかりで、もし自分の家になかったら、他のところへ取りに行く。 |

- 09 周：うん。この部分は私たちの経験は共通しているね。
- 10 健：うん。よく似ている。家から学校まで 30 分もかかるから、朝は歩いて行って、昼はまた歩いて家に戻って昼ごはんを食べていた。学校にも食堂があったけど、誰も食堂で食べなかった。
- 11 周：食堂で食べるとお金がかかるからね。
- 12 健：お金がかかる。あの頃、同じ村の子どもは皆家に帰って昼ごはんを食べていた。昼休みは 1 時間だけで、往復だけで時間がギリギリになってしまうのが普通だった。自転車もなかったから、歩くしかない。また、学校に行く道は泥道で凸凹、大きな穴がたくさんあった。
- 13 周：うん、確かにそうだった。その他の内容は？例えば家事の手伝いとかはした？
- 14 健：家事はもちろんやった。それから、落花生やトウモロコシの種まきと収穫、田植えと稲の収穫も全部手伝った。大人は別に期待していなかったけど、だいたい 5、6 年生の時から大人と一緒に農作業に出かけていた。
- 15 周：子どもたちはだいたい大人について行ったね。
- 16 健：あの頃は家にいてもつまらなかったから、大人が田んぼや畑に行く時は子どももだいたいついて行った。
- 17 周：稲の収穫のためには道具がたくさん必要だったから、当時はその道具を担ぐために多くの人が行っていたね。
- 18 健：うん。中学校に上がると、稲の収穫とかは自分たちでできるようになった。このような経験はあるでしょう？
- 19 周：うん、私も昔よく近所の家に手伝いに行った。
- 20 健：今日は私の家に手伝いに来てもらい、明日はその家に手伝いに行く、昔の村の人々は皆このような感じだった。
- (中略)
- 68 周：昔の生活や経験に対して、健はとても満足しているような感じがした。
- 69 健：あの頃は、僕の家はとても貧しかったとは言えないけど、家の状況はそんなに良くもなかった。でも趣味とか遊びとかはとても楽しかった。まあ、少年時代は誰もが完璧ではないでしょう。
- 70 周：どこが完璧じゃない？
- 71 健：全ての人の少年時代は完璧じゃないと思う。でも、あの頃仲間との遊びはとても楽しかった。
- 72 周：どこが良くなかった？
- 73 健：とても貧しかった。かわいそうじゃないけど、私たちの生活状況は確かに良くなかった。

- 74 周：あの頃はみんなそうだったね。
 75 健：うん。みんなは自給自足していた。

健は周のライフストーリー・テキストを読んで、自分の少年時代を思い出し、それについて捉え返した（06 健、08 健、10 健、12 健）。周と健は同じ村の出身で、年齢も近いと、共通する経験が多かった。周と健の少年時代（1990 年代）に存在していた農村では、ほとんどの農民が農業を中心に生活を営み、農業による共同作業が多く、地域のコミュニティも強固であった。都市に出稼ぎに行く農民も少なく、農民たちは互いに助け合いながら自給自足していた（20 健）。当時の農村のイメージを健の母親のインタビューでも確認した²⁵。そのような環境で育てられた健は、よく母親と一緒に畑に行って農作業の手伝いをしていた。これについて、健の父親もインタビューで語った²⁶。少年時代の農村生活は経済的には厳しかったが、健にとってはとても懐かしい経験であり、農村に対しても肯定的に捉えていることが分かる（69 健）。

このように、外的言語生態場で周と過去の留守児童経験を捉え返すことで、健の内的言語生態場では〈農村→楽しい少年時代&自給自足〉という意味が生成された。つまり、周の過去の留守児童経験に触発され、健は自己を起点にして、自分を取り巻く世界のコト・モノ・人（農村、留守児童生活、農民）を能動的に把握しようとし、自己（主体）と現実世界（客体）との繋がりを認識した。そのため、健の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつながる矢印も、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつながる矢印も図示される。この時点における健と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 1-1 として示す。

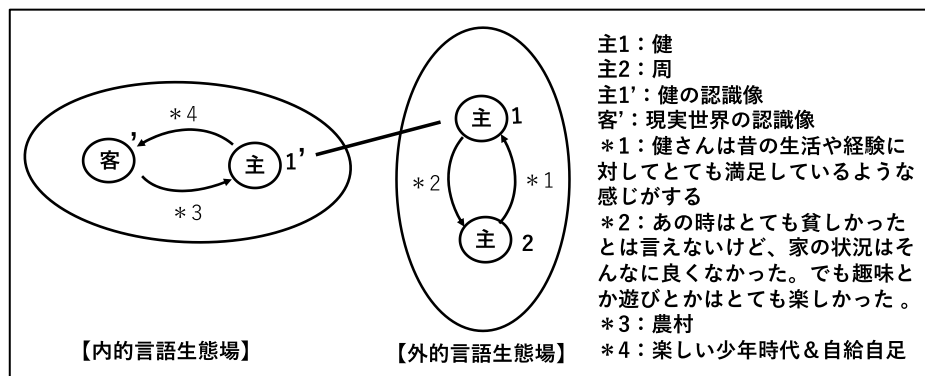


図 1-1 健と周の第 1 回の対話の言語生態場

一方、中国は 2008 年の北京オリンピック開催をはじめ、海外からの企業が押し寄せて進出し、中国が「世界の工場」と呼ばれるようになり、国全体の経済力も上がった。中国の経

²⁵ 健の母親：（訳）あの時は互いに助け合って農作業をやっていた。そうしないと、一人で稲の収穫も運搬も大変だから。

²⁶ 健の父親：（訳）あの時は、稲の収穫もトウモロコシの収穫も皆でやっていた。健のお母さんはトウモロコシを摘んで、そして健はそれを担いで帰るといったのが普通だった。

済力が強まるとともに、国内全体の生活レベルも向上し、国民の消費欲を刺激するように短期的な商品が次々と生産され、全てのサービスや物が商品化されるようになった。健が少年時代に生活していた農村社会は経済的に乏しかったが、農民たちは自給自足していたため、食糧も自然資源も無駄遣いをせずに大事に使われていた。一方、現在出稼ぎ農民が増えるとともに、農村の都市化も進むことで、農村は昔に比べて経済的に豊かになり、消費は美德という観念は農村社会でも隅々まで浸透するようになってきた。

- 76 周：じゃ今野菜を買って食べることと、昔自分で作って食べることと何が違う？
 77 健：なんというか、今は生活レベルが全体的に上がったから、何でも買わなければならなくなった。実はそんなに贅沢しなくてもいいのに。
 78 周：贅沢すると浪費しちゃうね。
 79 健：そう、贅沢は浪費だ。

周は過去の自給自足の農村社会と現在の消費主義の農村社会との違いについて、健の意見を尋ねた（76 周）。周の問いかけに対して、このような消費主義社会では、人々の消費行動で資源の浪費と無駄遣いにつながるとして、健は否定的に捉えていることが分かる（77 健、79 健）。つまり、健の内的言語生態場では、〈消費主義社会→資源の浪費と無駄遣い〉という意味が生成された。

このように、周の問題提起によって、健は自己及び自己を取り巻く世界（農村の都市化、農民の出稼ぎ、消費主義）のあり方を問題の端緒として、自己（主体）と現実世界（客体）との繋がりを把握し、さらに〈消費主義社会による資源の浪費と無駄遣い〉という繋がりの不全を認識した。言い換えれば、健は、自分が直面している問題を被与の現実として捉えるのではなく、その問題を生み出す世界のコト・モノ・人の繋がりを辿っていることが窺われる。従って、健の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印と、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における健と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 1-2 として示す。

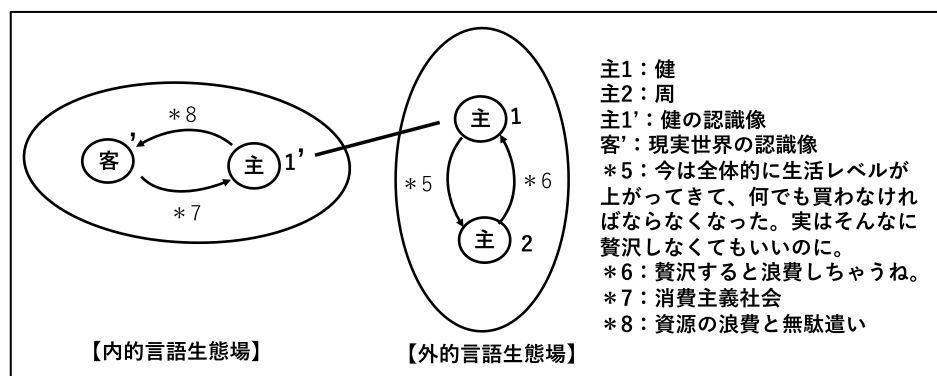


図 1-2 健と周の第 1 回の対話の言語生態場

続いて、周は過去の農民に課せられていた農業税について言及し、その額まで覚えていた（139 周）。健は周の発話に触発され、当時の農民の生活に目を向け始めたが、周のように具体的な額は知らなかった（140 健）。

- 137 周：昔の農民は負担が重かったね。
138 健：本当に重かった。
139 周：農業税がとても重くて、年間一人あたり 100～200 元も納めていたと母から聞いた。あの時は家族の人数分で農業税を納めていた。
140 健：うん。これらは全部払わなければならなかった。でもそのような具体的なこと【金額】は、私は知らなかった。
141 周：でも今は農民が逆に政府からお金をもらえるでしょう。
142 健：もう 21 世紀になったから、もちろんもらえる。今政府は農民たちに農業をやることを奨励している。そうしないとご飯も食べられなくなるから。
143 周：それについてどう思う？
144 健：もし全ての農民が農業をやめて出稼ぎに行ったら、皆が餓死してしまうと思う。
145 周：そうね。
146 健：もし皆が農業をやめて土地を放棄したら、中国の経済も悪くなる。

一方、周は、農業税を払わなくて済むだけでなく、逆に農民に報奨金まで出ている現在の農民の生活を語り、過去の農民の過酷な生活と比較していた（141 周）。141 周の疑問に対して、健は、現行中国政府の政策（農業を奨励する）を持ち出し、そして、「もし全ての農民が農業をやめて出稼ぎに行ったら、皆が餓死してしまうと思う」と「もし皆が農業をやめて土地を放棄したら、中国の経済も悪くなる。」というように、農業の重要性を述べた（144 健、146 健）。その後健の説明によれば、中国は昔から農業大国で国民の大半は農民であったが、かつて中国経済が今ほど良くなかった時期でも農民たちはほとんど自給自足で生活ができた。しかし、近年農村の都市化及び出稼ぎ農民の増加により、農業が衰退してきて、農民の生活基盤も脆弱化してきた。そこで、健は、農業は農民にとっては生存を維持するために必要不可欠なものであると意味付けている（144 健）。もし中国全ての農民が農業を放棄すると、農民自身の生存を支える食糧も保証できなくなるだけでなく、中国の国民全体の生存危機にも関わるため、中国の経済にも悪影響を与えると認識した（146 健）。即ち、外的言語生態場で周の話題提起により、健の内的言語生態場では、〈農民の出稼ぎ→国民の生活基盤の揺れ&中国経済への悪影響〉という意味が生成された。

このように、周の話題提起（農民の農業税）によって、健は自己を起点にして自分を取り

巻く世界の現実（出稼ぎ農民、農業の衰退、飢餓リスク、中国経済への悪影響）を捉え返し、その繋がりを辿っていた。言い換えれば、健は、周の問題提起により、自己及び身近な群像（農民、出稼ぎ農民工、中国人）の生き方に目を向けるようになり、自己（主体）と他者・現実世界（客体）との繋がりの把握を能動的に進めていたことが窺われる。従って、健の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印も、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印も図示される。この時点における健と周の外的言語生態場及び健の内的言語生態場を図1-3として示す。

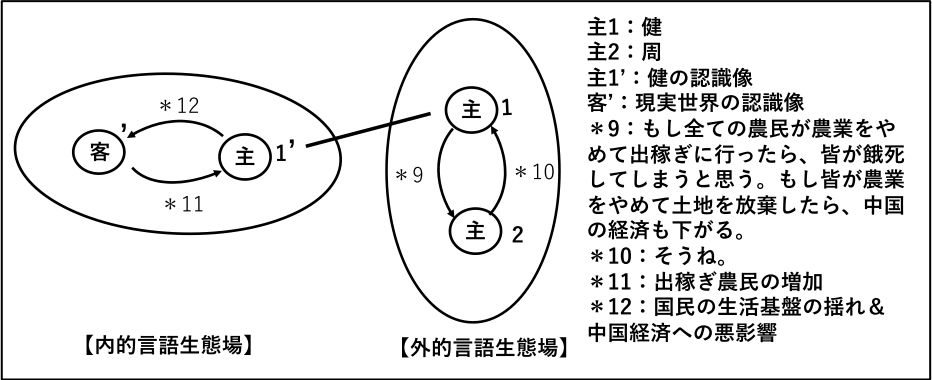


図1-3 健と周の第1回の対話の言語生態場

第1回の対話をまとめると、対話の開始時点では、健は、周の留守児童経験に基づいて自分の留守児童経験を捉え返した。その後、周の話題提起によって、健は過去の農民の生活に目を向けるようになり、自分を取り巻く世界の現実（出稼ぎ農民、農業の衰退、飢餓リスク、中国経済への悪影響）を捉え返し、自己（主体）と他者・現実世界（客体）との繋がりの把握を能動的に進めていたことが窺われる。第1回の対話の全体図を図1-4として示す。

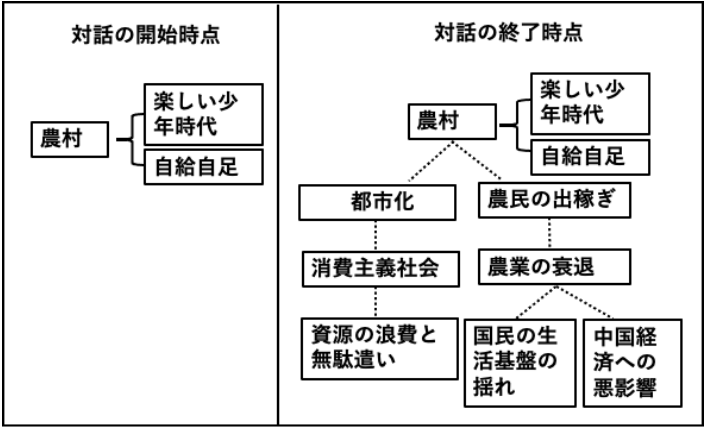


図1-4 健と周の第1回の対話の全体図

第1回の対話が終わった後、健にも周と同じように自分の留守児童経験を第2回の対話の「テキスト」として作成してもらった。周は健が書いたテキスト（付録1）を読んでから

対話を行なった。

第2回の対話【2018年8月15日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|---|
| 01 | 周：健は学生時代、将来どんな仕事をしたいと考えていた？ |
| 02 | 健：その時は職業については全然考えていなかった。ただ収入が良くて、大変じゃない仕事がいいと思っていた。でも世の中はそんなに甘くない。 |
| 03 | 周：社会に出た後は？ |
| 04 | 健：社会に出たら、それがただの妄想だと分かった。出稼ぎに出た最初の何年間かは全然技術を持っていなかったから、まず技能を学ぼうと思った。一つの技能を身につければ、その後は何かができると考えていた。今は着実に一生を過ごしたいと考えている。もし本当に籤に当たったら当たったで、当たらなくてもいい、全然期待していないから。 |
| | (中略) |
| 21 | 周：今の仕事は大変？ |
| 22 | 健：大変じゃないけど、楽でもない。 |
| 23 | 周：今後もずっとこの仕事を続けるつもり？ |
| 24 | 健：分からない。 <u>実はレストランを開きたいという考えがある。</u> |
| 25 | 周：自分でレストランを開く？ |
| 26 | 健：そう。 <u>あるレストランのチェーン店を実家で開きたい。</u> |
| 27 | 周：どういう店？ |
| 28 | 健：この近くにある麺屋。魚介スープの麺。今度行ってみるといい。 |
| 29 | 周：明日行ってみよう。まだ食べたことがない。 |
| 30 | 健：その麺がとても美味しいし、実家にはまだそのような店はないから。 <u>特に中年層や高齢者は辛いものを食べられないから、このようなマイルドな味の麺はぴったりだと思う。だから、実家でそのような店を持ちたいと考えている。</u> |
| | (中略) |
| 56 | 周：そうね。都市に住むと二つの問題がある。一つは人間関係、もう一つは消費だ。何でも買わなければならないから。 |
| 57 | 健：そうだね。 <u>今実家の裏庭では野菜を作っているから、自分が作った野菜は当然買った野菜よりはいいでしょう。</u> |
| 58 | 周：もっと安全だし。 |
| 59 | 健：安心で安全だと思う。農薬とかは使われていないから。都市の野菜は、小農ならまだいいが、トラックで運ばれてきた野菜はどこからきた |

ものかを知らないから、農薬とか使われているかもしれない。

60 周：自分で作れば、自分が好きな野菜を作れるね。

61 健：そう。大根、ピーマン、茄子、苦瓜などを少しずつ作る。畑を持っていれば自分の食べ物は全部保証できる。

62 周：じゃ実家に帰ったら畑もやる？

63 健：まだ分からない。

64 周：野菜の作り方は分かるの？

65 健：分かるかな。でも野菜作りはとても簡単だ。穴を掘って、種も蒔いて、肥料をやればいいから。畑を持てれば餓死しなくて済むから。近所の人と交換したりできるし、たくさん作ったら家に置くと腐るから、そんなにたくさん作らなくてもいい。それから、農村では近所付き合いがとても緊密だし、親戚よりも親しいから。私の母が今一人で家にいるけど、毎晩近所の人が家に来ておしゃべりしたりする。母は一人で家にいるのが少し怖いようだから。

66 周：そうね。都市にいとずっと一人で、寂しいね。

67 健：都市は外に出ると人がたくさんいるけど、家にいるときはいつも一人だ。誰かとおしゃべりしようと思っても、なかなか相手が見つからない。農村は誰とでもおしゃべりができるし、何時間話しても大丈夫だ。

第2回の対話では、まず、学生時代に健の職業についての考えを周が問題提起した。健はかつて楽で高い給料がもらえる職業を期待していたが、実際に出稼ぎに出て社会人になってはじめて、その考え方が現実的ではないことに気づいた(02 健)。健は中学校を卒業してすぐ出稼ぎに行ったが、最初の何年間は大工職人の父親について技能を学んでいた。そのあと、その技能を生かして仕事をしてきた。健は自分の出稼ぎ経験を通じて、楽な職業は元々存在しないし、一生懸命に働かないと良い収入は得られないと自分の意見を述べた(14 健)。

一方、健は出稼ぎに出てからもう10年間以上も経ち、そして約2年前から広西省で大工関係の店を持つようになった。健の今後の予定について、周が尋ねた(23 周)。健は長年都市で働いても、都市でずっと住むことは考えておらず、いつかは実家の農村に帰って自分の店を持ちたいと述べ、自分の未来像を語った(24 健)。その理由の一つは、農村は農業で自給自足の生活ができるため、たとえ雇用されなくて現金収入がなくても、安全で十分な食糧は確保できるという点である(59 健)。もう一つは、農村は近所づきあいが緊密であり、協力しあって生活できるという点である(65 健)。一方、都市では雇用されないと生活も厳しくなり、また人間関係も希薄で自分の居場所が感じられにくいと、健が長年の都市生活を踏まえて感想を述べた(67 健)。

このように、周の問題提起によって、健は現在の都市生活と過去の農村生活を比較しながら

ら捉え返した。そして、健の内的言語生態場では、〈農村→安定した生活基盤&良い人間関係〉という意味が生成された。言い換えれば、健は、過去の留守児童経験を捉え返すことによって、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人（農業、農村、農民、都市、都市の人、仕事）のあり方及びリスクを認識し、その認識を踏まえて自分の未来像を見出したと言える。従って、健の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印と、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における健と周の外的言語生態場及び健の内的言語生態場を図 2-1 として示す。

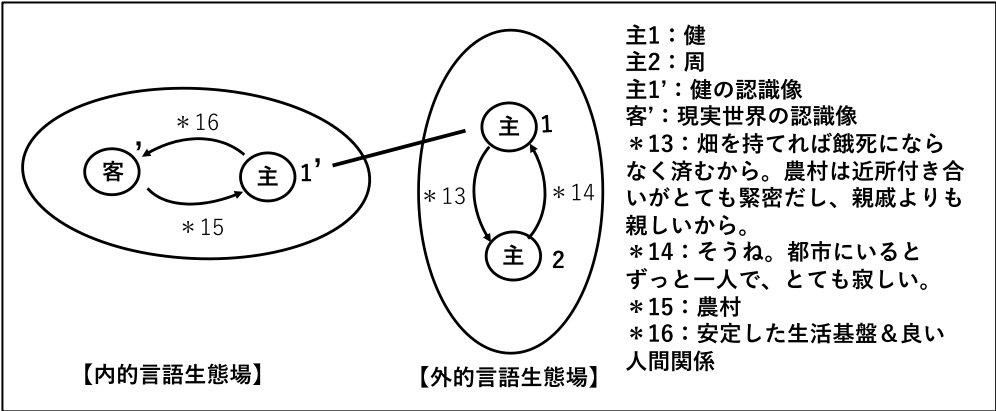


図 2-1 健と周の第 2 回の対話の言語生態場

以上をまとめると、第 2 回の対話では、外的言語生態場で周の問題提起により、健は自己を取り巻く世界（都市と農村）を捉え返し、その認識を踏まえて自分の未来像を見出した。そして、第 2 回の対話では「農村」という概念について、〈楽しい少年時代、自給自足、安定した生活基盤、良い人間関係〉という一連の意味が生成され、第 1 回の対話に比べ、その概念のネットワークが広がった。第 2 回の対話の全体図を図 2-2 として示す。

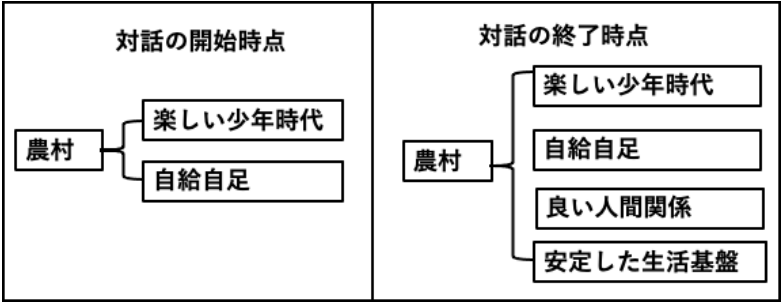


図 2-2 健と周の第 2 回の対話の全体図

第 2 回の対話が終わった後、健と周は過去 2 回の対話を踏まえて第 3 回の対話を行なった。第 3 回の対話は、健と周が気づいた点について出し合い、それについてさらに対話をした。以下はその対話の一部である。

第3回の対話【2018年8月16日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 対話内容 |
|----|---|
| 01 | 周：普段ニュースとかに関心がある？ |
| 02 | 健：普通のニュースじゃなくて、趣味ブログのニュース、つまりお笑いのニュースなら興味がある。 |
| 03 | 周：じゃ普通の社会のニュースとかは見ないの？ 関心がない？ |
| 04 | 健：関心がないのではなくて、関心を持っても私たちが決めるわけではないし、決める権利もない。例えば、私たちのようにあるニュースについておしゃべりすることはできるけど、影響は与えられない。 |
| 05 | 周：でも国全体も私たちのような普通の人によってできているから、一人ひとりの言動は社会全体にも影響を与えているよ。 |
| 06 | 健：それは考えすぎだ。 <u>今の社会では、自分がそうしても、他人もそうするわけではない。今の人たちは皆が利益至上主義だから、利益がないと絶対やらない。</u> |
| 07 | 周：でも普通の人たちの利益にも関わっているよ。例えばこの間話題になっていたワクチンや幼稚園の虐待事件もそうだけど、それを知っている？ |
| 08 | 健：知っている。 <u>幼稚園の先生が子どもをいじめたり、ベビーシッターが子どもをいじめたり、このような行為は絶対ダメだと思う。元々相手をケアする立場だから、相手をいじめるのは許せない。</u> もし自分の子どもを幼稚園に入れていて、そこで他人にいじめられたら、どう思うか。 |
| 09 | 周：だからこれは一人のことではなく、社会全体のことだと思う。 |
| 10 | 健：そうね。だから90%の人はこのようなニュースを見ると怒るけど、残りの10%の人は自分と関係ないと思っている。でも、私たちのような普通の人でも怒ってもどうにもならない。ネットで文句を言うだけで、誰も相手にしてくれない。 |
| 11 | 周：でもネットでも何も言わなかったら、政府もあの問題に対して重視しないだろう。 |
| 12 | 健：中国政府は今このような問題に対して政策を出しているから、しっかり対応してくれるだろう。 |
| 13 | 周：今インターネットが普及しているから、何があったらすぐアップできるね。 |
| 14 | 健：インターネットが発達すると、このような問題は何時間で知り渡されるから。 |
| 15 | 周：だから、このような問題は公開されないと、自分はなかなか気づかないだろう。 |

- 16 健：このようなことはだいたい当事者じゃなくて、それに関係ない人が見てそれをアップする。このようなことを見かけたらほとんどの人はアップするだろう。
- 17 周：個人の道德に関わる問題だね。
- 18 健：アップする人はただどこのどの幼稚園でこのようなことがあったと伝えて、相手の顔や名前を公開しないのが普通である。今の社会ではどんなことが起きておかしくないから、相手に復讐されることも心配するでしょう。

第3回の対話では、周は現在中国社会で話題になっているニュースや社会問題について取り上げられた。健はそれに関心を示しながらも、個人の力の限界を述べた(04 健)。一方、健の発話を聞いて、周は「でも国も普通の人によってできているから、私たち一人ひとりの言動は社会全体あるいはほかの人にも影響を与えているよ。」というように異議を唱えた(05 周)。周のこのような考えは過去1年間で大学院での勉強と留守児童研究の進みによって獲得し、つまり個人の言動は社会あるいは世界にも影響を与えることができると考えている。しかし、健は長年の都市生活を通じて、現代社会の人々(特に都市の人々)は利益至上主義で、全ての言動は自分の利益のために行われていると捉え返した(06 健)。つまり、健が過去2回の対話で述べた農村にあるような助け合いや良い人間関係が都市には存在しておらず、自分が見た都市と農村を対照していることも窺われる。

このように、外的言語生態場で周の話題提起(中国のニュース)によって、健はそれと関連づけて都市の人の性質を捉え、内的言語生態場では〈都市の人→利益至上主義〉という意味が生成された。つまり、自分が直面している社会ニュースを認識の端緒として、自分を取り巻く世界のコト・モノ・人(虐待事件、都市の人及び彼らの考え方、行動など)を能動的に認識し、その繋がりを把握しようとしていることが窺われる。また、健は、自分が直面している社会現象はただ孤立した問題ではなく、その現象を作られている社会構造に問題があると認識しているため、自己(主体)と現実世界(客体)の相即的關係を把握できていると言える。従って、健の生態学的主客構造は現実世界(客体)から自己(主体1)へつなぐ矢印も、自己(主体1)から現実世界(客体)へつなぐ矢印も図示される。この時点における健と周の外的言語生態場及び健の内的言語生態場を図3-1として示す。

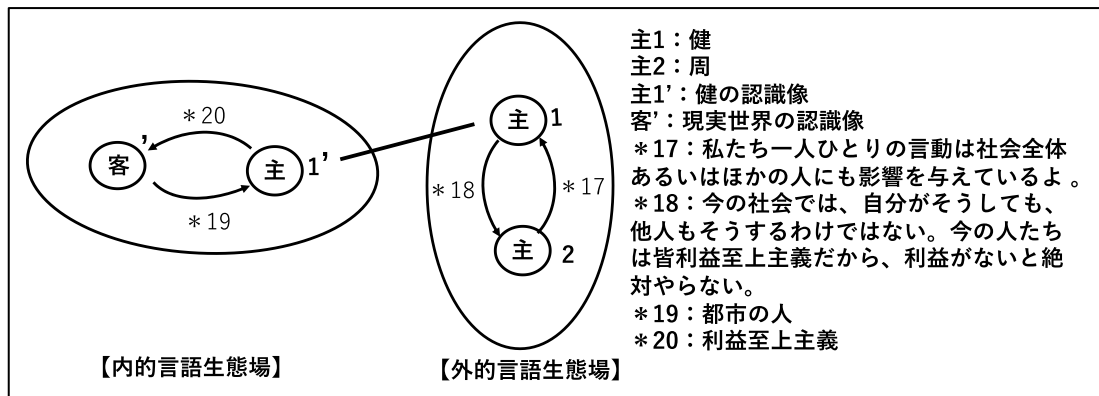


図 3-1 健と周の第 3 回の対話の言語生態場

上記の健の「都市の人は利益至上主義」という意見を聞いて、周は都市の人々の人間関係について提起した（19 周）。そこで、健は、都市の人々には信頼関係を築けるのが難しいと述べた（20 健）。

- 19 周：今の社会では人間同士の信頼関係を築くのがとても難しいね。
- 20 健：今は 100%の信頼はない。特に都市はそうだ。
- 21 周：どうしてだろう。
- 22 健：100%の信頼関係はありえない。私のようにビジネスをやっている場合は特にそうだね。
- 23 周：自分の利益を損なわれるかもしれないから？
- 24 健：それもある。ビジネスをやっていると、常連さんとの間には信頼関係はあるけど、100%の信頼は絶対にない。だって他の人に何万元の商品をあげたら、万が一相手に逃げられたらどうする。そうすると、何万元も損してしまうから、100%の信頼はやはりできない。
- 25 周：今は 100%信頼できる友達がいる？
- 26 健：もちろんいる。でもビジネス関係の友達じゃない。
- 27 周：やはり昔実家で知り合った友達？
- 28 健：そう、子どもの頃から一緒に遊んできた友達だ。今は広西省に来てビジネス関係の友達も多いけど、100%信頼できる友達は一人もいない。50%の信頼があれば結構良い方だ。やっぱりビジネスをやっている人は皆お互いに警戒心を持っているから。

一方、周は 20 健の発話に対して疑問を感じた（21 周）。そして、健は自己を起点にして、その理由を説明した（22 健）。つまり、都市の人々は雇用されてはじめて生存できるため、

皆は生きていくために一生懸命に自分の生活基盤（仕事）を守ろうとし、周りの人々と競争関係になりやすく、本当の信頼関係が築きにくいと健が分析した（24 健）。そのため、健は都市で長年いても信頼できる人がおらず、特にビジネス関係の場合は相手と常にライバル関係でいなければならないと語った（28 健）。また、都市では自然生態系と人間生態系が切り離れることにより人間同士による共同作業も少なくなり、それによって自然生態系と人間生態系を仲立ちする言語生態系にも不全が生じると言えるだろう。

このように、周の話題提起（都市の人間関係）によって、健はさらに「都市の人」という概念を捉え返し、内的言語生態場では〈都市の人→信頼関係構築の難しさ〉という新たな意味が生成された。つまり、健は、自分を取り巻く世界（都市）を客観的に捉え、その世界に生きている人々（都市の人々）の生存のあり方を把握し、そして彼らが抱えているリスク（不安定な生活基盤、希薄な人間関係）を認識した。従って、健の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印と、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における健と周の外的言語生態場及び健の内的言語生態場を図 3-2 として示す。

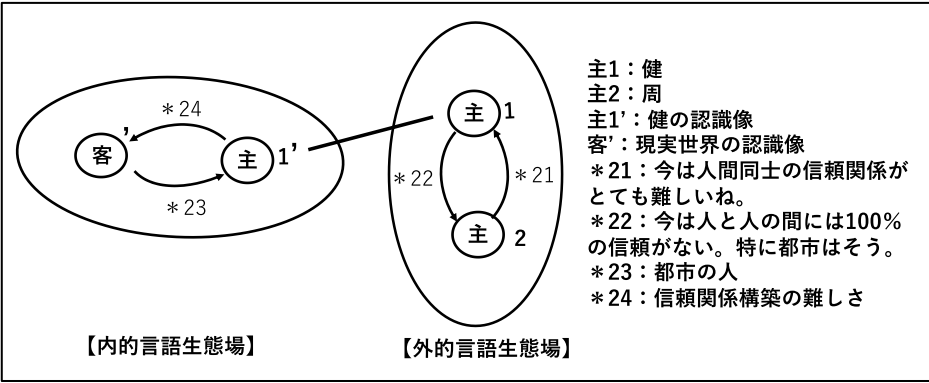


図 3-2 健と周の第 3 回の対話の言語生態場

第 3 回の対話をまとめると、周の話題提起（中国のニュース、都市の人間関係）によって、健は能動的に自分を取り巻く世界（都市）のコト・モノ・人のあり方及びリスクを把握し、「都市の人」という概念を捉え返した。過去 2 回の対話で捉え返した「農村」と対照になっていることが分かった。第 3 回の対話の全体図を図 3-3 として示す。

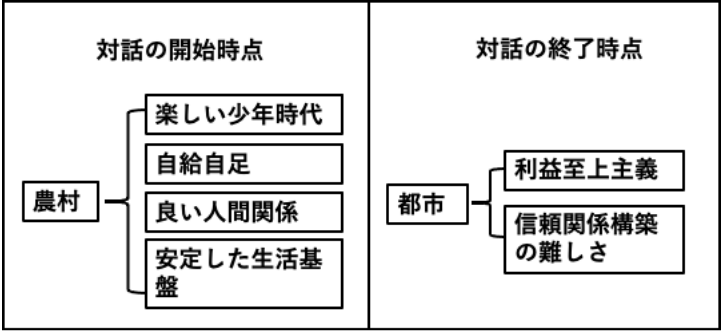


図 3-3 健と周の第 3 回の対話の全体図

以上、対話的問題提起学習の事例から、周と対話を通じて、健は自分の留守児童経験を捉え返し、生態学的意味の生成過程を見た。第 1 回の対話では、健は、周の留守児童経験を辿ることによって、自分の過去の留守児童経験を捉え返し、そして〈農村→楽しい少年時代&自給自足〉という意味が生成された。その後、周の話題提起によって、健は過去の農民の生活に目を向けるようになり、自分を取り巻く世界の現実（出稼ぎ農民、農業の衰退、飢餓リスク、中国経済への悪影響）を捉え返し、その繋がりを辿っていた。第 2 回の対話では、周の問題提起（職業についての考え）により、健は現在の都市生活と過去の農村生活を捉え返し、その認識を踏まえて自己の未来像（農村で自分の店を持つ）を見出した。第 3 回の対話では、周の話題提起（中国のニュース、都市の人間関係）によって、健は〈都市の人→利益至上主義&信頼関係構築の難しさ〉という意味を生成し、能動的に自分を取り巻く世界（都市）のコト・モノ・人のあり方及びリスクを認識し、過去 2 回の対話で捉え返した「農村」とは対照的であることが分かった。このように、外的言語生態場で周の問題提起や応答により、健は、長年封印していた留守児童経験を読み起こし、それを捉え返すことによって自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を把握でき、自己の未来像を見出したと言える。

以上を、生態学的主体性を成す契機の生成の過程を形成する三段階を辿って、健の生態学的主体性を成す契機をまとめる。

まず、生態学的主体性を成す契機の生成のその 1 は、「自己を起点としてレバンスをたどり、自己・世界の相即的意味を把握する」である。第 1 回の対話では、健は周の過去の留守児童経験に基づいて自分の留守児童経験を辿り、自分を取り巻く世界のコト・モノ・人（農村の都市化、留守児童生活、農民の出稼ぎ、農業の衰退）を能動的に捉え返し、自己（主体）と現実世界（客体）の繋がりの把握を進めた。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその 1 と考える。

次に、生態学的主体性を成す契機の生成のその 2 は、「自己の生の底流を成す生存の危機を起点としてレバンスをたどる」である。第 2 回の対話では、周の問題提起（職業についての考え、将来の予定）により、健は、自己を取り巻く世界（農村、都市）のあり方及びリスクを捉え返し、そしてその認識を踏まえて自分の未来像を見出した。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその 2 と考える。

さらに、生態学的主体性を成す契機の生成のその 3 は、「逆規定性の胚胎・逆規定としての形成」である。第 3 回の対話では、周の話題提起（社会のニュース）及び応答により、健は自分を取り巻く世界のコト・モノ・人（虐待事件、都市の人及び彼らの考え方、行動など）を能動的に捉え返し、能動的にその繋がりを辿っていたことが窺われた。このような認識を明確にした上で、健が今後その現実を変えていく主体として実践を行うこ

と、つまり〈逆規定の胚胎〉として期待することができる。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその3と考える。

5.4 本章のまとめと総合的考察

5.4.1 本章のまとめ

以上、本章では、元留守儿童3人（静・彩・健）は周と対話的問題提起学習を援用し、対話を通じて、それぞれの生態学的意味の生成過程を報告した。元留守儿童3人（静・彩・健）が周と対話的問題提起学習による対話を繰り返すことで、それぞれにおいて、生態学的主体性を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界の繋がりを辿る社会的実践とはどのようなものか、という課題に対する答えは本章のまとめとして以下に述べる。

静は、第3回の対話で周が静の出身地に老人と子どもだけが取り残されたような農村の実態を問題提起することによって、静は自分を取り巻く世界（出身地の村）に生きている全ての農民へ拡がり、そして自分を取り巻く現実が捉え返すことで、留守儿童問題は構造的に作られた社会問題であると認識し、自分もその繋がりの中の一人であることと捉え返した。その認識を踏まえて、静は留守儿童当事者として主体的に留守儿童問題の解決に向けて考え始めた。さらに、1年後に静は自己の生存を支える食糧の確保を他者の生存と関連づけて把握することによって、自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎し、具体的な実践（野菜栽培）が行われた。即ち、周の問題提起によって静は自分を取り巻く現実を捉え返すことができ、その繋がりを辿る中で自己と世界との繋がりを認識し、自分が留守儿童当事者であることに気づくことで生態学的主体性をうながし、その繋がりの不全を変える実践へつながったと言える。

彩は、第2回の対話で周が「キャンパスローン事件」を取り上げることによって初めて自分と世界との繋がりを認識できた。その認識を踏まえて、彩は「出稼ぎ農民の増加」という現実を起点にして、能動的に自己及び自己にとって身近な群像の生存の危機（離婚率の上昇、生きる意味の喪失など）を捉え返し、そしてすべてのことが繋がっていることを認識した。最後に、彩は自分の留守儿童経験を文字化して、さらに周と議論することにより、自分も留守儿童当事者であることを捉え返し、留守儿童当事者として主体的に現実世界に向けて働きかけようとする意志が形成されたことが窺われた。即ち、彩は周の問題提起（「キャンパスローン」事件）をきっかけにして、自己と他者・世界との繋がりを認識でき、その認識を踏まえて留守儿童当事者として生態学的主体性をうながし、主体的に社会に働きかけようとする意志が形成されたと言える。

健は、第1回の対話で周の話題提起によって、過去の農民の生活に目を向けるようになり、自分を取り巻く世界の現実（出稼ぎ農民、農業の衰退、飢餓リスク、中国経済への悪影響）を捉え返した。その認識を踏まえて、健は自分を取り巻く世界のコト・モノ・人（農村、都市、農村の人、都市の人、農業、仕事）を捉え返し、さらに自分の未来像を見

出した。即ち、外的言語生態場で周の話題提起や応答により、健は自分の留守児童経験を捉え返すことで自分を取り巻く世界のコト・モノ・人の繋がりを把握でき、その認識を踏まえて生態学的主体性をうながし、自己の未来像を見出したと言える。

5.4.2 総合的考察

(1)対話による生態学的意味の生成をもたらす実践

フレイレ (1979) は、被抑圧者の農民が、対話を通じて、自分たちの現状を批判的に認識することで、主体的に社会変革に向ける実践へ発展したことを第 2 章の理論的枠組みで述べた。本章の元留守児童静は、自分を取り巻く現実が捉え返すことで、留守児童問題は構造的に作られた社会問題であると認識し、自分もその繋がりの中の一人であることと捉え返した。その認識を踏まえて、静は留守児童当事者として主体的に留守児童問題の解決に向けて考え始めた。さらに、1 年後に静は自己の生存を支える食糧の確保を他者の生存と関連づけて把握することによって、自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎し、具体的な実践（野菜栽培）が行われた。従って、本対話例もフレイレが言ったように、静は周と対話を積み重ねることによって、自分たちが置かれている現状（留守児童を取り巻く世界）を捉え返すことにより、自己と現実世界の繋がりを認識でき、主体的にその繋がり不全を変えていく実践（ベランダでの野菜栽培）につながったと言えよう。即ち、過去 3 回の対話による静と周の認識の深化と生態学的意味の生成は、1 年後の二人の行動すなわち〈ベランダでの野菜栽培〉に影響を及ぼし、現実世界への能動的な働きかけとして、対話による生態学的意味の生成による生活の変化の事例であると捉えられる。

(2)人間生態系と自然生態系の統合による言語生態系の保全

本研究の理論的枠組みでは、言語生態系・人間生態系・自然生態系が相互交渉的に形作られ、自然生態系と人間生態系が統合された状態であれば、両者を仲立ちとする言語生態系も保全される状態になると述べた（岡崎 2009a）。本章の元留守児童静と健の対話事例から見ると、2 人が生活していた農村は、農業が主な生活基盤として存在し、盛んな農業活動により農村地域コミュニティのメンバー間の連携が強かったことが分かる。言い換えれば、人間生態系と自然生態系が統合され、そして両者を仲立ちする言語生態系も保全された状態になったことが窺われる。具体的に見ると、元留守児童静は、留守児童だった時期に祖母とたくさんの農作業を経験しているため、祖母や周りの大人と良い人間関係が築かれ、多くの農業知識も学べたことが分かる。また、周がベランダで野菜を栽培する際に、静は留守児童としていた時期に祖母や村の人々から教わった農業知識を生かしながら周に助言できた。元留守児童健は、留守児童だった時期に毎日母親や村の人々と積極的に農業活動に参加しているため、コミュニティが構築され、今でも村の人々と良い人間関係が保っていることが窺われる。また、健は、長年都市に出稼ぎに出ても、かつて農業活動の協働によって実現され

た自給自足の生活及び良い人間関係の農村社会に憧れ、それを自己の未来像として描いたことも窺われた。このように、人間生態系と自然生態系が統合された農村社会環境は、両者を仲立ちする言語生態系も保全されることになり、さらに、そこで育てられた元留守児童の人間生態にも良い影響を与えていることが分かる。

(3)対峙性のある発言による対話の生態学的主体性の獲得

野々口（2016）では、「対立を恐れず率直な発言をすることが、参加者に対峙性のある対話への参加を促す」と述べている。本章では、元留守児童の彩と周の対話例も「対立を恐れず率直な発言」を参照しながら、周の発言に注目して考察する。まず、第1回と第2回の対話では周が主に彩の留守児童経験に共感を示しながら、ずっと彼女の発言に同調していた。しかし、第3目の対話では周は彩の考えを尊重した上で、自分の考えを述べるようになった。例えば、彩は政府からの徴収費用をもらおうとする人が村で新しい家を建てていることを指摘し、彼らの気持ちをよく理解できないと述べた（35 彩）。それに対して、周は彩の発言を否定せずに、「私は政府がなぜ農村を全部都市化にするのがよく理解できない（36 周）」と、彼女と異なる視点から自分の疑問を述べた。彩は周の疑問に答え、そして「小康社会というのは分かる？（37 彩）」というように、周に質問した。周は「よくわからない（38 周）」と正直に彩に伝えながら、相手に対する理解を開放的な姿勢が窺えた。また、周がその後「小康社会」の概念が分かった後でも、「でも中国にはこんなに多くの人がいるから、全面的に小康社会にするのは難しいんじゃない？（40 周）」と「でもハイテク化は必ずしもいいとは限らない。例えば昔、推奨されてきた「遺伝子組換え」は、体に良くないことが最近分かったでしょう（42 周）」というように、自分の問題を提起し続けた。そこで、彩も周の一連の疑問に答えているうちに、「そうね。山奥で小康社会を実施するのも難しいと思う（43 彩）」、政府の政策をそのまま鵜呑みするのではなく、自分なりにその政策の本質に目を向けるようになり、最初に比べて彼女の認識もさらに深化したことが見られる。このように周が対話の協調や同調に反して、互いの枠組みを尊重し合った上で対立を恐れずに率直な発言をした行為により、二人が問題に対する認識を深化させ、生態学的主体性の獲得に大きな役割を果たしたと考えられる。

(4)自己と世界の相即的意味の把握による逆規定の形成

岡崎（2014）では、自分を起点としてレラバンス（繋がり）をたどることを通じて、被与として与えられる現実世界を能動的に認識し、その認識を踏まえて実践を試行する中で、世界が何であり、世界のコト・モノ・人につながる自己が何であるかを自覚すること、またそのように規定されている世界および自己を、さらにはその両者の関係を規定し直すことに繋がると捉えられている。本章の元留守児童静と彩の生態学的意味の生成過程を見ると、まず、静は、周と過去2回の対話を踏まえて、第3回の対話では自分を取り巻

く世界の現実の詳細を具体的に辿ることにより多様な繋がりを見出し、全ての問題が繋がっていることに気づき、自分もその繋がりの中の一人（留守児童当事者）であることを認識した。その認識を踏まえて、第4回目の対話では、静は留守児童当事者として主体的に留守児童問題の解決に向けて働きかける意志を表明したことが分かった。次に、彩は、第2回の対話で周が彩にとって身近な話題である「キャンパスローン」を問題提起することをきっかけにして、社会のニュースと自己との関連性を実感し始めた。その認識を踏まえて、第3回の対話では、彩は「出稼ぎ農民の増加」という現実を起点にして、能動的に自己及び身近な群像の生存の危機（離婚率の上昇、生きる意味の喪失など）を辿り、自己と世界の繋がりでの認識を進めた。さらに、過去3回の対話で得られた認識を踏まえて、第4回の対話では、彩は自分の留守児童経験を文字化してテキストを作成し、そのテキストに基づいて周と対話をすることによって、自分が留守児童当事者であることを認識し、さらに留守児童当事者として現実世界に向けて主体的に働きかけようとする意志が窺われた。このように、元留守児童静と彩は、自己を起点として自分の留守児童経験を辿ることにより、自己と世界の繋がりでの認識し、さらに自分が留守児童当事者であることと捉え返すことで、留守児童当事者として主体的に留守児童問題の解決に向けて働きかけようとする意志が形成されたことが窺われた。言い換えれば、静と彩は、対話的問題提起を援用した周との対話を通じて、自己を起点として自己と他者・世界との繋がりをつまみ返すことにより、留守児童を生み出す社会構造を能動的に認識し、その認識を踏まえて留守児童当事者として留守児童問題という現実に向かって主体的に働きかける意志が形成されたと言える。従って、自己を起点として繋がりをつまみ返すことが、被与として与えられた現実世界を認識でき、世界に規定された自己、及びその両者の関係を変えていく逆規定を生成していくことが期待できると考えられる。

(5)外的言語生態場の保全による過去の留守児童経験のつまみ返し

序論と先行研究では、留守児童が外部から与えられたマイナスな言説を受けて、自己の存在を否定的に捉え、成人しても過去の留守児童経験に引きずって自分の人生とキャリアに否定的な影響を与えていると論じるものが多い（王 2010、劉他 2014、楊他 2015）。一方、健と周の3回の対話から分かるように、健が一貫して過去の留守児童経験及び農村・農業・農民に対して肯定的に捉えていることが分かった。対話例から分かるように、健が生活していた農村は、農業が主な生活基盤として存在し、盛んな農業活動により農村地域コミュニティのメンバー間の連携が強かった。そのような農村環境で育てられた元留守児童の健は、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人（農村・農業・農民）に対しても肯定的に評価していることが分かる。しかし、健は、出稼ぎに出たから会話できる相手がいないため、自分の認識を外語的言語にすることができず、過去の留守児童経験をつまみ返すこともできなかった。従って、健は、本対話実践を通して周と対話を通じて、長年封印していた留守児童経験を読み起

こし、それを捉え返すことにより、現在直面している世界（都市）とその世界の下に生きている人々（都市の人々）の生存のあり方及び危機を把握することができた。さらに、その認識を踏まえて、健は、自己の未来像、つまり今後「どう生きればいいのか」という具体的な未来像も見出した。従って、元留守児童の健の事例から見ると、序論や先行研究で述べたように全ての元留守児童が過去の留守児童経験を否定的に捉えているとは言えないだろう。本章の元留守児童健のように、過去の留守児童経験を捉え返す外的言語生態場が保全されていない可能性があるため、元留守児童の外的言語生態場を保全することで過去の留守児童経験の捉え返しができると考えられる。

第6章 【研究2】分析結果と考察：現留守児童の生態学的意味の生成過程

本章では、現留守児童3人（宏・武・玲）が周と対話的問題提起学習で、対話を繰り返すことで、現留守児童が生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界の繋がりを辿る社会的実践とはどのようなものかについて、現留守児童の言語生態場に着目して分析していく。人と人との間の外的やりとり、すなわち社会的相互作用を成すやりとりが生み出す生態場である外的言語生態場と、自問自答のような自己内対話の形で、人が認識内で行うやりとりが生み出す内的言語生態場を用いて、生態学的主客分析で分析する。言語生態学においては、言語はアプリオリに意味を持たない（岡崎敏雄 2013）。意味を捉えようとする主体（言語主体）がその対象である客体と主体自身の生きることを関連付けることによって、生態学的な意味が生成される（岡崎敏雄 2013：8-9）。生態学的主体が生態学的客体との間に形成する関係のあり方を変えれば、新たな繋がり方とともに新たな生態学的意味が生成される。現留守児童3人（宏・武・玲）と周が外的言語生態場で言語を交わすことを通じて、それぞれの内的言語生態場と現留守児童を取り巻く生活世界との繋がり方をどのように見出し、捉え直していくのか、対話の意味分析に基づいて一人ずつ記述・分析する。

以下では、現留守児童3人（宏・武・玲）と周が対話的問題提起学習による対話を通じて、それぞれの生態学的意味の生成過程を詳細に報告する。その後、本章の分析結果を総合的に考察する。

6.1 宏〈言葉の機能不全による想像力の縮退〉

2017年8月14日から2018年8月28日の間に、宏は周と対話的問題提起学習を援用して、対話を4回行った。第1回の対話を行う前に、周は自分の過去の留守児童経験をまとめた資料（付録1）を宏に読んでもらった。宏は周のテキストを読み終わった後、周の留守児童経験と自分の留守児童経験の違いに気づき、以下の対話は、それについて述べている場面から始まった。

第1回の対話【2017年8月14日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

| 番号 | 発話内容 |
|----|------------------------------|
| 01 | 周：これを読んで、どう思った？ |
| 02 | 宏： <u>とても違う感じがした。</u> |
| 03 | 周：宏の両親は農民なの？ |
| 04 | 宏：分からない。親が子どもだった頃は農業をやったと思う。 |
| 05 | 周：ここは農村じゃないよね？ |
| 06 | 宏：農村だよ。 |
| 07 | 周：じゃ、どうして皆農業をやらないで出稼ぎに行ったの？ |

- 08 宏：農業をやっているよ。私の祖母は農業をやっている。
09 周：でも両親のような若者は全部農業をやめて出稼ぎに行ったよね。
10 宏：うん、父は16歳から出稼ぎに行っている。
(中略)
21 周：両親が出稼ぎに行った時に、宏は何歳だった？
22 宏：まだ1歳もなっていなかった。
23 周：なぜ両親はそんなに早く出稼ぎに行ったの？
24 宏：ここに書かれたように、当時はうちも家を建てていたから。
25 周：親は宏を出稼ぎ先へ連れて行くことを考えていなかった？
26 宏：うん、考えていなかった。

周の過去の留守児童経験を読んで、宏は自分が現在経験している生活とは大きく違うことに注目した(02 宏)。宏の反応に対して周も共感した。周が宏の出身地の村を訪ねたとき、3階建ての家がずらりと並び、商店も多く出ていることを見かけ、これまで持っている農村のイメージとは大きなギャップを感じられ、ここは本当の農村であるかどうかを宏に確かめた(05 周)。宏の出身地の村では、1980年代から若者や中年層が次々と都市に出稼ぎに出ていき、出稼ぎ農民の増加により農耕地はどんどん放棄され、現在は一部の年寄りしか農業をやっていないことを宏が共有した(08 宏)。宏の両親も結婚する前から都市に出稼ぎに行き、出稼ぎ先で知り合った後すぐ結婚した。その後、宏の両親は宏を産んで一時的に農村にいたが、その後また都市へ出稼ぎに行った(22 宏)。一方、1歳もならない子どもを農村に残して都市へ出稼ぎに行った宏の両親の行動に対して周が不思議に思った(23 周)。周の問題提起に対して、宏は「当時は家を建てていたから」と答え、祖父母から聞いた話をもとに両親の出稼ぎ理由を位置付けた(24 宏)。

このように、宏は、外的言語生態場で周の留守児童経験に基づいて自己の留守児童経験を捉え返し、そして内的言語生態場では〈両親の出稼ぎ→家を建てるため〉という意味を生成した。一方、宏は親の出稼ぎを「家を建てる」という単一の要因として位置付け、親の出稼ぎという現象を生み出される社会的な文脈(改革開放政策、農業による現金収入の低下、出稼ぎ農民の増加など)と繋げて捉えておらず、自己と世界との繋がりを認識していないことが窺われる。従って、宏の生態学的主客構造は、現実世界(客体)から自己(主体1)へつなぐ矢印は図示されるが、自己(主体1)から現実世界(客体)へつなぐ矢印は図示されない。この時点における宏と周の外的言語生態場及び宏の内的言語生態場を図1-1として示す。

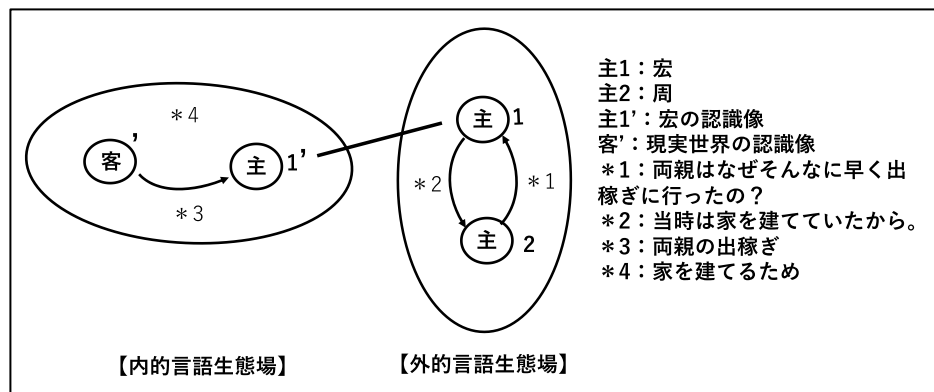


図 1-1 宏と周の第 1 回の対話の言語生態場

宏が生まれてすぐ両親が出稼ぎに行き、対話時点（16 歳）に至るまではずっと祖父母と暮らしている。宏の祖父母は宏と宏の弟以外、他にも 2 人の孫の面倒を見てきた。宏のような親の出稼ぎにより年寄りと暮らす子どもは、宏の村にはたくさんいると語った（28 宏）。

27 周：ここの人たちも皆そうだね。全部お年寄りが子どもの面倒を見ているね。

28 宏：うん。

29 周：少年時代はどうだった？

30 宏：結構よかった。子どもの頃はおもちゃがたくさんあったから、よく他の子どもと一緒に遊んでいた。

31 周：全部両親が買ってくれたの？

32 宏：うん。親戚も買ってくれたよ。

（中略）

71 周：宏が子どもの頃は両親の出稼ぎ先に行ったことがある？

72 宏：1 回だけ行った。

73 周：え、今まで 1 回しか行ったことないの？

74 宏：全部で 2 回行った。2 回とも夏休みだった。冬休みの時は両親が帰ってくるから。

75 周：子どもの頃は親に会うとどんな気持ちだった？

76 宏：親が帰ってくると新しいおもちゃが遊べる。毎回たくさんのおもちゃを買ってくれるから。

77 周：親といっぱい話す？

78 宏：いいえ。

79 周：やっぱり祖母と一番親しい？

80 宏：うん。

宏は、両親が出稼ぎにより長年一緒に生活できなかったが、両親の毎月の仕送りで物質的にも経済的にも困らなかったため、このような生活をととても満足していると振り返った（30 宏）。対話の始めに宏が周の留守児童経験を読んで、「とても違う感じがした」というように、宏の少年時代は周が書いた物質的にも経済的にも乏しかった少年時代とは対照的になっていることが明らかにされた。年中都市に出稼ぎに出ている両親は、普段宏の面倒を見ることができないため、できるだけ物質的に満足させることに務めていたことが分かる（32 宏）。周が宏の両親に対するインタビュー²⁷でもそれを確認できた。年に一回しか両親に会えない子どもは親のことをどう思っていたか、周が宏に問いかけた（75 周）。周の質問を受けて、宏は、普段両親とのコミュニケーションは少ないが、親の出稼ぎにより自分の生活が豊かになり、物質的にも経済的に満足させてくれる人として両親を位置付けた（76 宏）。

このように、外的言語生態場で周の質問や応答により、宏は両親の出稼ぎを捉え返し、内的言語生態場では〈両親の出稼ぎ→物質的・経済的に豊かになる〉という新たな意味が生成された。一方、宏は、両親の出稼ぎにより自分の生活が豊かになるという狭い意味で捉え、両親の出稼ぎによりどんな問題やリスクに直面するのか、それらの問題と自分とはどのように繋がっているのかはまだ把握していないことが窺われる。従って、宏の生態学的主客構造は、現実世界（客体）から自己（主体 1）へはつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における宏と周の外的言語生態場及び宏の内的言語生態場を図 1-2 として示す。

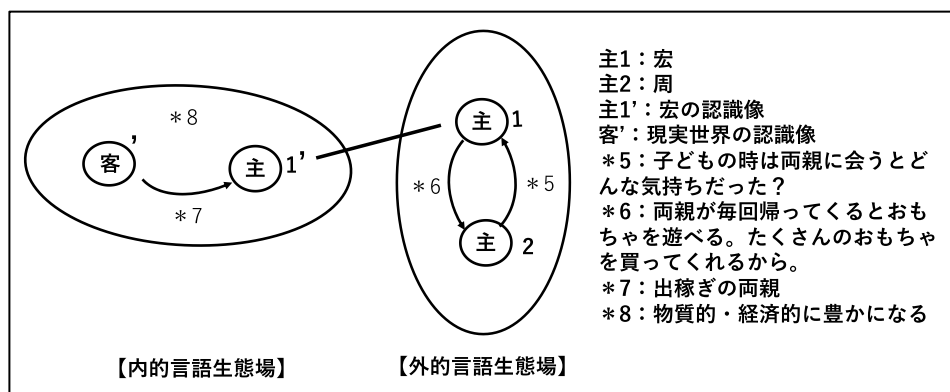


図 1-2 宏と周の第 1 回の対話の言語生態場

第 1 回の対話をまとめると、宏は、周の留守児童経験に基づいて自分の留守児童経験を辿り、そして両親の出稼ぎを捉え返した。一方、第 1 回の対話を見ると、周が一方的に問題提起をしながら対話を進めていることが窺われる。第 1 回の対話の全体図を以下の図 1-3 と

²⁷ 宏の父親：（訳）私たちはずっと彼に申し訳ないと思っていて、なるべく彼の要求を満足させた。だから、彼が何か欲しければ全部買ってあげた。

宏の母親：（訳）彼のことを言うと涙が出る。（泣く）なぜかと言うと、8ヶ月から彼の面倒を見ていないから。子どもの頃は今のように向内的じゃなくて、もっと活発な子だったが、なぜか今のようになっちゃって、私の心もちょっと痛い。だから、彼の要求がひどくなければ、できるだけ満足させる。

して示す。

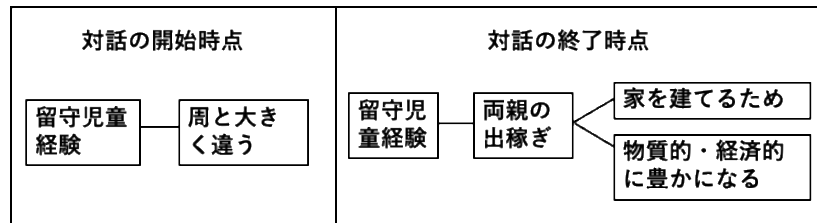


図 1-3 宏と周の第 1 回の対話の全体図

第 1 回の対話の後、宏にも周と同じように自分の留守児童経験を第 2 回の対話の「テキスト」として作成してもらった。そして、第 2 回の対話は宏が書いたテキスト（付録 1）を用いて対話を行なった。

第 2 回の対話【2017 年 8 月 15 日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：宏が生まれて 8 ヶ月の時に親がまた出稼ぎに行ったのね？ |
| 02 | 宏：うん。 |
| 03 | 周： <u>周りの同級生の親もそうだった？ 全部自分が幼い頃に親が出稼ぎに行っ</u> <u>た？</u> |
| 04 | 宏： <u>そうだよ。</u> |
| 05 | 周：子どもの頃は親に会いたかった？ |
| 06 | 宏：いや。 |
| 07 | 周：親の存在が感じられなかったの？ |
| 08 | 宏：うん。 |
| 09 | 周：じゃ、宏にとって親はどんな存在である？ |
| 10 | 宏：ただの親だ。 |
| 11 | 周：将来宏も大きくなって親になったら、自分の両親のようになりたい？ |
| 12 | 宏：今はまだ大人になっていないから、考えるのが早い。まだ 17、18 年先の話だ。 |
| 13 | 周：30 歳以降に子どもを持つと考えているの？ |
| 14 | 宏：うん。 |
| 15 | 周：宏の両親は 20 歳の時に宏を産んだよね。宏は早く結婚したくないの？ |
| 16 | 宏：いいえ、したくない。 |
| 17 | 周：どうして？ |
| 18 | 宏：お金がないから結婚しない。 |

周は宏が書いたテキストを読んで、宏が生まれて8ヶ月から両親と離れ離れになり、ずっと祖父母と生活していることを知った（01周）。同じ村にいる他の子どもも宏と同じ経験をしているかどうかを、周が宏に確認した（03周）。周の質問を受けて、宏は「そうだよ」と答え、自分の経験は特殊なことではないことを強調した（04宏）。一方、近年農民が農村を離れて都市に出稼ぎに行くことが現金収入を得る唯一な手段として、農村の人々はとても良いこととして推奨されている。また、宏が生まれた時（2001年）に中国はWTOに加入し、市場経済を進める中で出稼ぎ農民の増加に拍車をかけた。そして、出稼ぎに行った親の子どもたちの面倒を見る年寄りたちも仕方なくその責任を引き受けざるを得ないと、宏の祖母がインタビューで語った²⁸。このような社会的変動により大きく変わった農村で育てられた宏は、両親の出稼ぎを始めとする農民の出稼ぎを特別なことではなく、普遍的な現象だと捉え返した。

このように、外的言語生態場で周の問題提起によって、宏は自分の両親の出稼ぎから農民の出稼ぎへ目を向けるようになり、内的言語生態場では〈農民の出稼ぎ→普遍的な現象〉という意味を生成した。一方、農村で主な生活基盤としていた農業はなぜ自分の生存を維持できないのか、村の多くの農民が出稼ぎに行くことを促す社会的な変動とは何か、そして農民の出稼ぎは自分とどのようにつながっているのかなど、自己及び自己を取り巻く他者の生き方に関する問いができておらず、自分が直面している現象（農民の出稼ぎ）を所与の事実として認識していることが窺われる。従って、宏の生態学的主客構造は、現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における宏と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図2-1として示す。

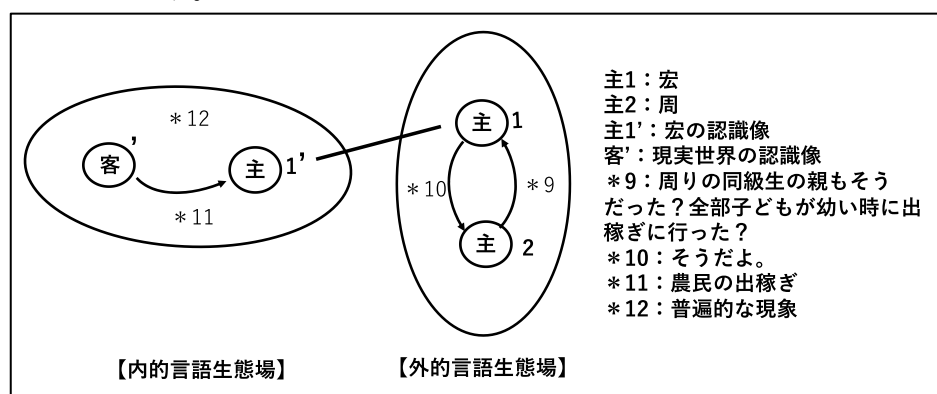


図2-1 宏と周の第2回の対話の言語生態場

宏の両親を含めて村の若者がほとんど広州や他の都市へ出稼ぎに行ったことを周が宏の出身地の村を訪ねて分かった。そして、宏も他の若者と同じように将来出稼ぎに行く予定が

²⁸ 祖母：（訳）私は自分の五人の子どもを育てて大きくなったらまた孫の面倒を見て、今までずっと子どもの面倒を見ている。彼らが全部出稼ぎに行ったから、仕方ない。

あるかどうかを、周が宏に尋ねた（161 周）。

- 161 周：ここは広州へ出稼ぎに行く人が多いね。宏も広州に行きたいと考えている？
- 162 宏：いや、私は家で農業をやる。農業をやればせめてご飯は食べられる。だってお父さんは一年中出稼ぎに行っても、時々給料をもらえないと書いたでしょう。家で農業をやればせめてご飯は食べられる。それに、最近プラスチック製のお米もあるらしい。
- 163 周：プラスチック製のお米？ 外で売っているお米？
- 164 宏：うん。だから自分で作ったほうがいい。
- 165 周：宏は作れるの？
- 166 宏：Baidu で検索したり、他のお年寄りに聞いたりできる。私は、将来お金を稼いだら実家に戻って農業をやるつもりだ。あんなに苦労したくない。また、今の農業は全部機械でやるから、昔に比べるとそんなに大変じゃない。
- 167 周：そうね。確かに宏が言うように、外で一生懸命に働いても、自分の食べ物の安全も保証できないね。
- 168 宏：うん。そして、彫刻と陶器を学びたい。
- 169 周：農村で？
- 170 宏：うん。畑は春と秋だけ忙しいから、夏と冬は他のスキルを学んで、自分も遊べるし。
- 171 周：野菜も作るの？
- 172 宏：作るよ。糞を肥料にしてね。ははは。
- 173 周：自然から得たものを食べて、そして排出したものを自然に戻してまた野菜の肥料になるね。その野菜が大きくなると、また私たちが食べる。このように自然と自分が繋がっていることを実感できる。
- 174 宏：そうね。

161 周の質問を受けて、宏は、今後自分が出稼ぎに行く可能性を否定した。それは、宏が第 1 回の対話で周のテキストを読んで、周の父親が出稼ぎに行っても給料不払い経験をされることがあることを思い出し、出稼ぎに行っても生活が保障されとは限らないと捉え返した（162 宏）。一方、農村にいと畑を持てれば餓死にならず済むし、食料の安全も保証できるため、宏は、将来一時的に出稼ぎに行つて十分なお金を貯めてから、農村に戻つて自給自足の生活をするとして自己の未来像を表明した（166 宏）。しかし、宏の「今の農業は全部機械でやるから、昔に比べるとそんなに大変じゃない。」という発言から、「自給自足」に対する理解が十分ではないことが窺われる。もし専門農家が使う農業機械（トラクタ、田

植え機、コンバイン、乾燥機、散粉機など、石油に依存するもの）を使うと、機械の稼働時間が短く、機械代の償却ができず赤字経営になる可能性が高い。また、石油や機械に依存した農業法は、農産物の味や安全度にも影響を与える。従って、宏が述べた専門機械を使って農業を行う農法は不安定であり、持続可能な生き方を支えることが不可能であると言える。

このように、外的言語生態場で周の問題提起（今後出稼ぎに行くかどうか）により、宏は過去の対話で得た認識（周の父親の給料不払い）を呼び起こし、自己を起点にして出稼ぎによる影響やリスクを捉え返した。そして、宏の内的言語生態場では〈出稼ぎ→不安定な生活基盤〉という意味が生成された。一方、「自給自足」に対する不十分な認識という宏の発話から見ると、「自給自足」という生き方は出稼ぎによる不安定な生活基盤から逃れる選択肢の一つとして捉えており、本気で「自給自足」の生き方を追求しようと考えていないことが窺われる。即ち、宏は、自己を起点にして自分を取り巻く世界の現実（農民の出稼ぎ、農業、自給自足）に対する認識ができていないと言える。従って、宏の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へのつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。そして、この時点における宏と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 2-2 として示す。

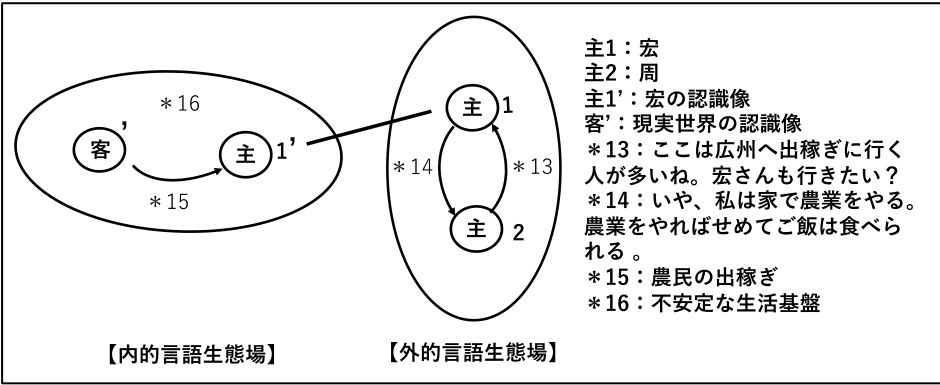


図 2-2 宏と周の第 2 回の対話の言語生態場

第 2 回の対話をまとめると、第 1 回の対話と同じく外的言語生態場で周の一方的な問題提起により、宏は「農民の出稼ぎ」という概念を捉え直した。第 2 回の対話の全体図を以下の図 2-3 として示す。

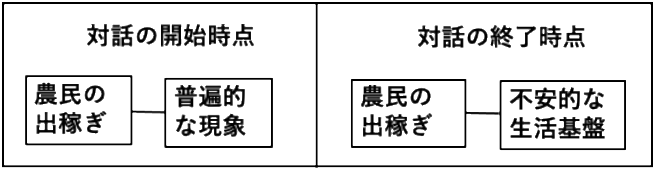


図 2-3 宏と周の第 2 回の対話の全体図

第 2 回の対話が終わった後、過去 2 回の対話を踏まえて宏と周は第 3 回の対話を行なっ

た。第3回の対話は宏と周が互いに気づいた点を出し合い、それについてさらに対話を進めた。以下はその対話の一部である。

第3回の対話【2017年8月16日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|---|
| 01 | 周：宏は普段何があった時に誰と話すの？ |
| 02 | 宏：誰とも話さない。 |
| 03 | 周：親と電話で話す？ |
| 04 | 宏：いや。親は怖い。 |
| 05 | 周：どうして？ |
| 06 | 宏：親だから、やはり怖い。そう思わない？ |
| 07 | 周：多分子どもの頃はそう思っていたかも。じゃ毎回親と電話する時は何を話すの？ |
| 08 | 宏：「ちゃんと勉強して、いい成績をとって、そして弟の面倒もよく見てね」と毎回電話で親に言われる。でも弟はとても腕白だから、私の話を全然聞いてくれない。 |
| | (中略) |
| 39 | 周：そういえば、ここは朝市で買い物できる以外、他に買い物ができるところがあるの？ |
| 40 | 宏：あるよ。でもここのスーパーは商品が少なく、日常用品しか売ってない。鶏とか、魚とかは買えない。 |
| 41 | 周：洋服はどこで買うの？ |
| 42 | 宏：私もよく知らないけど、多分この辺でも売っているだろう。私はいつも町に行って買いに行く。 |
| 43 | 周：わざわざバスに乗って町に行くの？ |
| 44 | 宏：うん。 <u>またはJDかTAOBAOで買う。農村でもネットショッピングができるから。</u> |
| 45 | 周：だから農村にいても特に不便を感じられないよね？ |
| 46 | 宏：うん。 |

周が宏の出身地の村を訪れたとき、地元の農民が週に1回広場に集まって、自分たちが作った野菜や手作りの品物を売っていたのを見かけた。そのような広場の他に、スーパーや小売店もいくつかあるが、都市にある大きなスーパーと違って、品物の種類がとても少ないと宏が説明した(40 宏)。宏の発話を受けて、村の人々の日常生活について周がさらに宏に質問した(41 周)。宏の村から大きなショッピングセンターがある町へ行くのにバスで片道でも

40 分間かかる距離があるが、宏はいつも週末にバスを利用して町へ出ていると答えた（42 宏）。また、近年農村は都市化が進むことによりインターネット環境も普及されたため、ネットショッピングも農村地域で利用できるようになった。宏は、いつもネットショッピングを利用して学習用品や生活用品を購入していると語った（44 宏）。従来の農村は交通の不便や物質不足というイメージが強かったが、現在の農村は都市化が進むことにより何でも簡単に手に入れられるようになったため、農村にいても不便を感じられないと宏が捉え返した（46 宏）。

このように、周の問題提起（村の人々の買い物）により、宏は自分を取り巻く農村の変化（農村の都市化）を捉え返し、内的言語生態場では〈農村の都市化→便利な生活〉という意味が生成された。一方、近年農村は都市化が進むとともにネットショッピングも普及されるようになったため、従来地元にあった小規模な実体店舗が減りつつあり、そこで働いていた人々の生存も危機に直面している現状である。宏は、農村の都市化を生活の便利さと繋げて捉え返したが、農村の都市化によるリスクはまだ把握していないことが窺われる。従って、宏の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における宏と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-1 として示す。

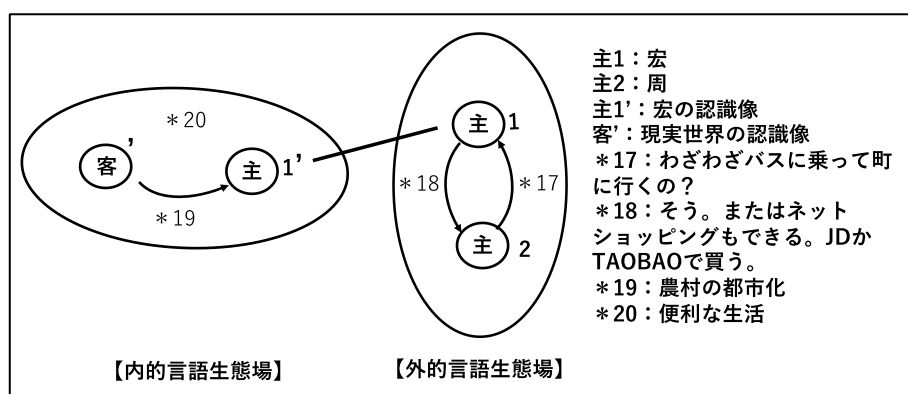


図 3-1 宏と周の第 3 回の対話の言語生態場

一方、出稼ぎ農民が増加とともに、農村の都市化が進む中、従来農業を中心とした時期の共同作業もなくなること、それまで存在していたコミュニティも崩れて、農民同士の付き合いが少なくなった。

- 91 周：周りの近所との関係はどう？
- 92 宏：まあまあ、一軒だけいく。でも、今その家の人も都市の学校に行
ったから、行かなくなった。
- 93 周：じゃ普段はずっと家にいる？

- 94 宏：うん、いつも携帯で小説を読んだり、漫画を読んだりしている。
- 95 周：学校から家に帰ってくる頻度はどのくらい？
- 96 宏：2週間に1回。
- 97 周：じゃ弟は2週間に1回しかお兄さんに会えないね。
- 98 宏：うん。
- 99 周：今年のお正月も親が帰ってくるの？
- 100 宏：知らない。
- 101 周：お正月を期待していないの？ お年玉とかはある？
- 102 宏：期待していない。どうせお金は全部ゲームに使ってしまうから、お年玉なんかはどうでもいい。

都市化により農村でも携帯やパソコンが普及し、農村にいる留守児童もこのような現代文明の機器に夢中になることで外出する機会が減り、自分の世界に閉じ込む場合が多い(92 宏)。宏は、学校以外の時間はほとんど一人でいることを明らかにした(94 宏)。つまり、都市化が進むことにより、農村は物質的・経済的には昔に比べて豊かになり便利になる一方で、人間同士の繋がりが薄くなったことが窺われる。

このように、外的言語生態場で周の問題提起により、宏は自分を取り巻く農村の変化(農村の都市化)を捉え直し、内的言語生態場では〈農村の都市化→希薄な人間関係〉という意味が生成された。一方、宏の発話から、「希薄な人間関係」を繋がりの中にある問題として捉えておらず、それが日常的なことであると捉えていることが窺われる。従って、宏の生態学的主客構造は現実世界(客体)から自己(主体1)へつながる矢印は図示されるが、自己(主体1)から現実世界(客体)へつながる矢印は図示されない。この時点における宏と周の外的言語生態場、及び宏の内的言語生態場を図3-2として示す。

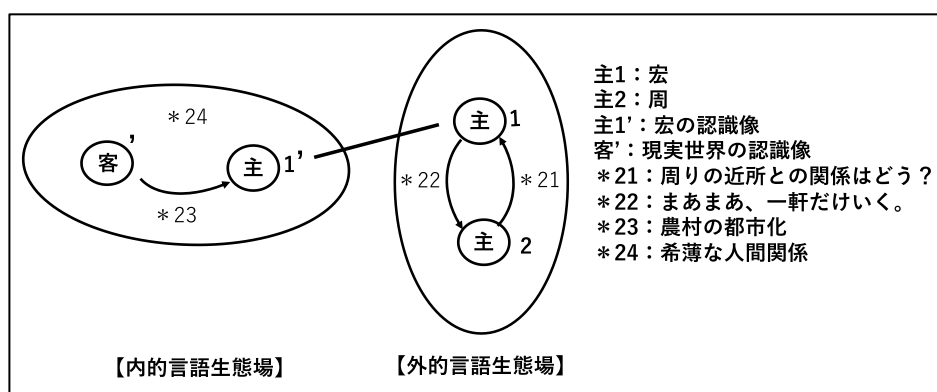


図3-2 宏と周の第3回の対話の言語生態場

第3回の対話をまとめると、外的言語生態場で周の問題提起により、宏は自分を取り巻く農村の変化(農村の都市化)を捉え返した。第3回の対話の全体図を以下の図3-3として示す。

す。

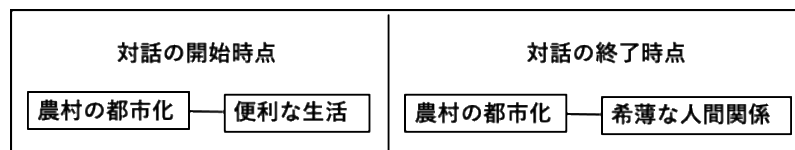


図 3-3 宏と周の第 3 回の対話の全体図

第 3 回の対話が終わった後も、周と宏はこの 1 年間互いに連絡を取り合ってきた。1 年前に周と対話をした時、宏は地元の高校 2 年生だった。その後、そのまま高校を続けて大学を受けるか、または大金を払って名門大学に受かるような大学入試の特別コースに入るかを宏が悩んでいて、周にも相談したことがあった。宏が通っている高校は重点高校ではなく、また宏自身も重点大学に受かる自信がなかったため、最初は大金を払って重点大学に入る可能性が高い特別コースに入ることを考えていた。しかし、その特別コースの学費は年間 200～300 万円もかかるため、そんな大金を持っていないから、このまま高校を卒業して自分の実力で大学を受けてと両親に言われた。宏は生まれた時から両親はずっと彼の要求を満たしてくれたため、今回両親の態度に納得できず、そこで親に反抗して高校をやめて専門学校に入った。第 4 回の対話の時は、宏は高校を中退して都市にある専門学校に入学して IT 関係の勉強をしていた。次の会話は、周がその専門学校を訪れて、宏の進学する経緯について聞いている場面から始まった。

第 4 回の対話【2018 年 8 月 28 日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

| 番号 | 発話内容 |
|----|---|
| 01 | 周：今回宏が短大に入ることについて、親と喧嘩したそうね。 |
| 02 | 宏：うん。 |
| 03 | 周：お母さん？ それともお父さんと喧嘩したの？ |
| 04 | 宏：父と喧嘩した。 |
| 05 | 周：お父さんは宏が短大に入ることを反対していたの？ |
| 06 | 宏：うん。 |
| 07 | 周：じゃもっと勉強しないと、お父さんに笑われるね。「ほら、やっぱりここに来るべきじゃなかったでしょう」と言われるかも。(笑う) |
| 08 | 宏：うん。私はここで一生懸命勉強して、将来父を笑うよ。 |
| 09 | 周：この間お父さんの工場に見学に行って、お父さんが仕事している姿をずっと見ていたよ。お父さんは帽子を作る工場で働いているけど、仕事が結構大変だ。夜もよく残業するから、働く時間が長くて結構きつい。でもお父さんはとても器用で、仕事が早い。宏は将来両親のように出稼ぎに行くことを考えていないよね？ |

- 10 宏：うん、考えたことがない。もし親に反対されてここに入れなかったら、私は出稼ぎに行ってお金を貯めてから、またここに来て勉強するつもりだった。
- 11 周：そうだったの？ じゃその後親がなぜ同意したの？
- 12 宏：父が祖母に説得されたから。
- 13 周：そっか。祖母はもっと先見の明があるのね。
- 14 宏：だって単純労働は暑いでしょう。
- 15 周：それは広州だけかな。
- 16 宏：今ここも暑くない？
- 17 周：ここも暑くてたまらないね。
- 18 宏：私は暑がり屋だから。
- 19 周：仕事をすると、暑いところもあれば寒いところもあるよ。
- 20 宏：パソコンの前に座っていればクーラーがあるし、涼しいから。
- 21 周：宏はオフィス仕事をしたいのね。工場だと、クーラーはないし、扇風機しかない。
- 22 宏：うん。

周は、宏が突然高校をやめて専門学校に入った決定を驚き、宏が両親と喧嘩したこともその後宏の母親から聞いた（01 周）。周は、宏と第 4 回の対話を行う前に、彼の両親の出稼ぎ都市に行って職場見学をした。宏の両親は出稼ぎに出てから十数年間も帽子縫製工場で働いている。毎日 12 時間以上の勤務時間にも拘らず、正社員ではないため、全ての社会保障が受けられない。そこで、宏の両親は、高い学歴か優れた技能か、そのどちらかを持たない限り、良い仕事には就けないと自分たちの経験を踏まえて捉え返した²⁹。このような両親の考えの影響を受けて、宏も将来大変で待遇が悪い単純労働ではなく、オフィスで IT 関係の仕事をしたいと考えており、自分の未来像を描いていた（20 宏）。

このように、宏は、外的言語生態場で周とこの 1 年間の変化及び現状を共有する中で、宏は自分の未来像を描き、そして内的言語生態場では、〈将来の生き方→オフィス仕事〉という意味が生成された。即ち、宏は、自分の両親を含める単純労働者のリスクを認識したため、そのような生き方から逃れるために新たな生き方（オフィス仕事）を見出したと言える。しかし、単純労働者は毎日働いているのに、なぜそれに見合うような待遇を得られないのか、またオフィスの仕事をすればリスクは全くないのかなど、自分が直面している現実に対する認識がまだ十分できていないことが窺われる。従って、宏の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における宏と周の外的言語生態場、及び宏の内

²⁹ 宏の母親：（訳）知識も技術もないと、大変な仕事しかできない。学歴が少しでも高ければ、オフィスで仕事できる。私たちのように学歴が低くて、能力もなければ、周りからも排除される。

的言語生態場を図 4-1 の通りである。

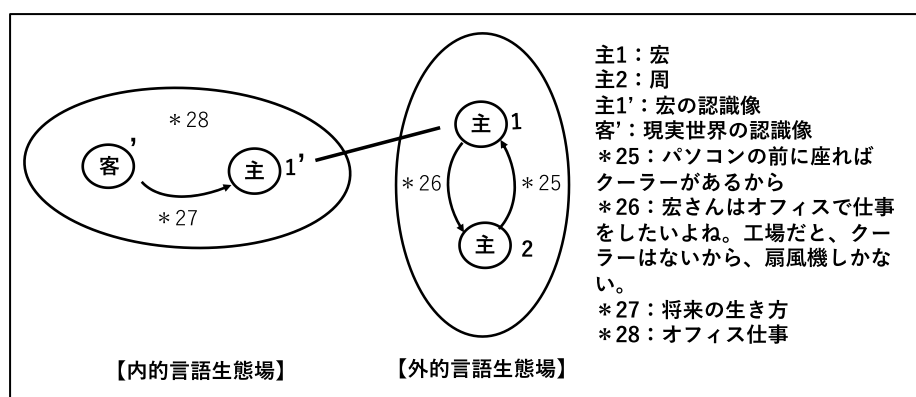


図 4-1 宏と周の第 4 回の対話の言語生態場

一方、1 年前の第 2 回の対話では、宏は、将来出稼ぎに出てお金を貯めたら実家の農村で自給自足の生活をするという未来像を語った。その考えを再度確かめるために、周が再び問題提起した（70 周）。

- 68 周：将来は今学んでいる専攻に関連する仕事をする？
- 69 宏：うん。
- 70 周：実家の農村に帰って、自分で家を建てて自給自足の生活をする、と宏が去年言っていたけど、その考えはもうやめたのね？
- 71 宏：お金をたくさん稼いだら帰る。

70 周の質問を受けて、宏は突然自分が言った言葉呼び起こし、1 年前の考え方を再び強調した（71 宏）。1 年前の第 2 回の対話では、宏が周のテキスト（父親の給料不払い）を読んで、出稼ぎに行っても生活が保障されるとは限らないことを知った。また、長期間出稼ぎに出ると、生活基盤が不安定であり、食料の安全も保証できないため、短期間出稼ぎに行つて十分な現金を貯めたら農村に帰って自給自足の生活をするというように、宏が出稼ぎについてのリスクを把握することで自分の未来像（自給自足）を見出した。一方、宏が捉えていた「自給自足」は専門機械を使って農業を行うという農業法は不安定で、持続可能な生き方ではないことを第 2 回の対話で述べた。ここでも、70 周の問いかけによって、宏が過去の考えを呼び起こして自己の未来像（オフィス仕事）を捉え返し、「自給自足」という生き方を持ち出したと言えるだろう。

このように、外的言語生態場で周の問題提起により、宏は自分の未来像を捉え直し、内的言語生態場では〈将来の生き方→自給自足〉という新たな意味が生成された。言い換えれば、宏は、「出稼ぎ」のリスクを認識し、その認識を踏まえて自己の未来像（自給自足）を見出

したと言える。一方、第2回の対話から分かるように、宏は「自給自足」に対する認識は不十分であり、「出稼ぎ」のリスクから逃れるための選択肢として位置付けており、自己を取り巻く世界の全体像をよく把握できていないことが窺われる。従って、宏の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における宏と周の外的言語生態場及び宏の内的言語生態場を図4-2の通りである。

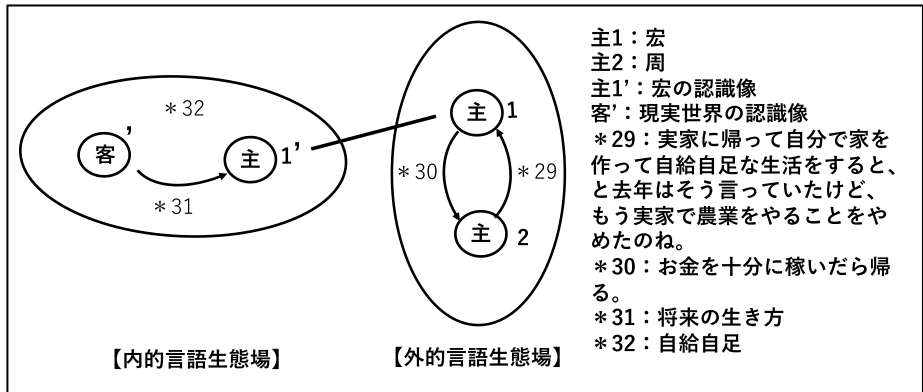


図 4-2 宏と周の第4回の対話の言語生態場

第4回の対話をまとめると、宏は、周と過去1年間の変化を共有することにより、1年前の考えを呼び起こし、それを踏まえて自分の未来像を捉え返した。第4回の対話の全体図を以下の図4-3として示す。

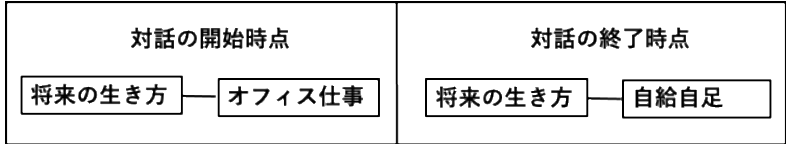


図 4-3 宏と周の第4回の対話の全体図

以上、対話的問題提起学習の事例から、周と対話を通じて、宏は自分の留守児童経験を捉え返し、生態学的意味の生成過程を見た。第1回の対話では、宏は〈両親の出稼ぎ→家を建てる&物質的・経済的に豊かになる〉と捉え、親の出稼ぎを捉え返した。言い換えれば、宏は、親の出稼ぎを狭い意味で捉えており、その現象を生み出される社会的な背景及びリスクについては把握していないことが窺われた。第2回の対話では、宏は〈農民の出稼ぎ→普遍的な現象〉として捉え、自分が直面している現実を所与の事実として認識しており、自己を取り巻く世界の現実をよく認識できていないことが分かった。一方、その後周のテキスト（親の給料不払い）をきっかけにして、宏は、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人（農業、出稼ぎ、農民）のあり方及びリスクに対する認識を進め、その認識を踏まえて「農民の出稼ぎ」を捉え返し、自分の未来像（自給自足）を見出した。しかし、宏の「自給自足」に対す

る捉え方から見ると、それを「出稼ぎ」のリスクから逃れる選択肢として位置付けており、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人（農村、農業、農民、自給自足）のあり方をよく把握できていないことが窺われた。第3回の対話では、宏は農村の変化（農村の都市化）を〈農村の都市化→便利な生活〉を捉えていたが、周の問題提起により〈農村の都市化→希薄な人間関係〉へと捉え直した。しかし、宏は自己を取り巻く世界（農村）のあり方を一面的に捉えており、自己と世界の繋がり、またはその世界のコト・モノ・人の繋がりを把握していないことが窺われた。第4回の対話では、宏は、過去1年間の変化および現状について周と共有し、そして対話をすることによって自分の未来像（オフィス仕事）を見出した。その後、周の問題提起により、宏は1年前に述べたことを呼び起こし、自己の未来像を捉え返した。このように、周と対話を通じて、宏は「出稼ぎ」のリスクを認識し、そのリスクから逃れる選択肢として「自給自足」という新たな未来像を見出したが、それは自己を起点にして自己が直面している現実を把握していないため、狭い範囲で自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を認識していたことが窺われる。一方、前のプロフィールで紹介したように、宏は、過去の経験（標準語の発音が悪くて笑われた）に引きずられ、自分が話す言葉に自信を失い、他人と話すことも消極的になった。本対話実践においても、宏は周と対話を4回繰り返されたが、ほとんど周が一方向的に問題提起して対話を進め、宏自ら能動的に話そうとしないことが窺われる。言い換えれば、宏は、今でも過去の経験に囚われて自分の話す言葉に自信を持っていないため、言葉本来の機能が十分果たせず、それによって狭い範囲で世界観、行動基準観、人間関係観、自己のアイデンティティー観を捉えていることを本対話事例で確認できたとと言えるだろう。

以上を、生態学的主体性を成す契機の生成の過程を形成する三段階を辿って、宏の生態学的主体性を成す契機をまとめる。

まず、生態学的主体性を成す契機の生成のその1は、「自己を起点としてレバンスをたどり、自己・世界の相即的意味を把握する」である。第1回と第2回の対話の開始時点では、宏は「両親の出稼ぎ」と「農民の出稼ぎ」を所与の事実として捉え返したが、周のテキスト（親の給料不払い）をきっかけにして、自分を取り巻く世界のコト・モノ・人（農業、出稼ぎ、農民）のあり方及びリスクに対する認識を進め、その認識を踏まえて「農民の出稼ぎ」という概念を捉え返し、「農民の出稼ぎ→不安定な生活基盤」という意味が生成された。即ち、宏は、外的言語生態場で周と対話を通じて、自己起点にして自分を取り巻く世界の現実（農民の出稼ぎ）を捉え返すことができ、自己を取り巻く世界に対する把握が進み、自己と世界との繋がりを認識することができたと言える。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその1と考える。

6.2 武〈行きつ戻りつする生態学的意味の生成過程〉

本実践は2017年8月6日から2018年8月22日の間に、武は周と対話的問題提起学習を

援用して、対話を4回行った。第1回の対話を行う前に、周のライフストーリー・テキスト（付録1）を武に読んでもらった。武は周のテキストを読み終わった後、周の経験（「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し、「男尊女卑」、父親の給料不払い）に共感を表した。以下の対話は、周と共通する自分の経験について武が説明している場面である。

第1回の対話【2017年8月6日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|---|
| 01 | 武：（前略） <u>最初の文章は私の家の状況と全く同じで、一番良いと思う。</u> |
| 02 | 周：どこ、例えば？ 私たちは十何歳も違うよ。 |
| 03 | 武：例えばね。標準語がいい？ |
| 04 | 周：標準語でも方言でもどっちでもいいよ。 |
| 05 | 武：「1980年代の中国は「一人っ子政策」が厳しかったため、……生活が一気に窮屈になってしまった。」。この文、 <u>私の家もそうだった。私が生まれたときに罰金も払わされて、しかも2回も払わされた。それから、家も壊された。家も壊れて、罰金も1000-2000元を払わされたから、当時はとても不思議に思った。</u> もう一文、「我が家の一番目は女の子だったので、祖父母はあまり喜ばなかった」。 <u>私の一番上の姉と二番目の姉が産まれたとき、男の子じゃないから、祖父の態度がよくなかった。しかし、その後私が生まれて、祖父は私のことをとても可愛がってくれて、親に対する態度もよくなった。お年寄りには男の子だけ好きなのだ。</u> |
| 06 | 周：祖父は武と二人の姉さんに対する態度が大きく違ったの？ |
| 07 | 武：私が生まれる前は、祖父が姉たちに対する態度がよくなかったと思う。私が生まれた後は、祖父は皆に対して同じように可愛がってくれた。でも、私がまだ小さかったから、私のことを一番可愛がってくれた。 |
| 08 | 周：武は幼かった頃からその違いに気づいたの？それとも大きくなってから気づいた？ |
| 09 | 武：私が大きくなってから気づいた。 |

武が周の留守児童経験のテキストを読んで、最初の文章に書かれた「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し、年寄りの「男尊女卑」について、「私の家の状況とまったく同じだ」（01 武）と共感を示した。一方、周は武より歳が10つ以上も違うため、武の反応を見て驚き、武に具体的な説明を求めた（02 周）。02 周の要求を受けて、武は、周との共通経験の「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊しを説明し、そして「当時はとても不思議に思った」と自分の気持ちを表した（03 武）。続いて、武は、年寄りの「男尊女卑」についても言及し、男の子として生まれたため、ずっと祖父や周りの人に可愛がられてきたと振り返った（05 武）。武は、周の留守児童経験に触発され、自分の経験を捉え返し、内的言語生態場で

は、「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し&年寄りの「男尊女卑」→不思議だ」という意味が生成された。

このように、周の留守児童経験を辿ることをきっかけにして、武は自己の留守児童経験を捉え返すことができ、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人に対する認識を進めたことが窺われる。従って、武の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印と、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図1-1として示す。

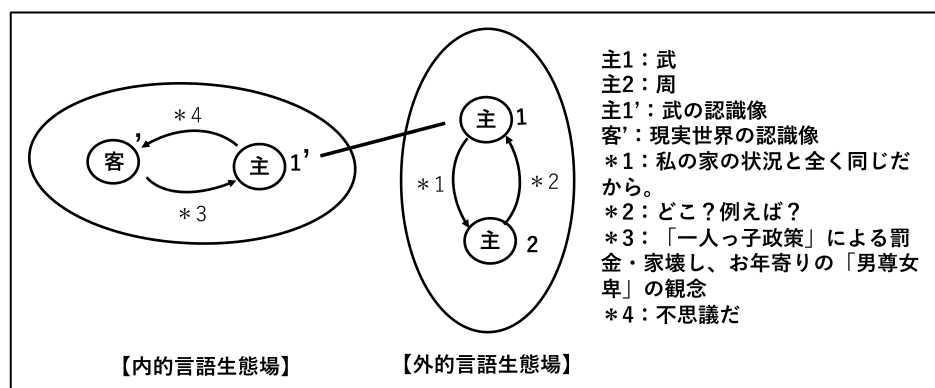


図1-1 武と周の第1回の対話の言語生態場

武は、周の〈「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し&年寄りの「男尊女卑」〉という経験に反応しただけでなく、周が書いた出稼ぎの父親の給料不払い経験に対しても共感を表した（34武）。

- 33 周：これを読んで、他に似ている経験がある？ または全然違う経験はある？
- 34 武：ちょっとまって、この文、「特に父のような農民工は、給料は毎月ではなく、……給料の支払いの請求に出かけていた。」私の父もよく給料をもらえなくて、この間帰ってきた時もそうだった。都市で長く働いたのに、なぜ給料は何百元しかもらえなかったのか、と母に文句を言われた。そして、残りの分は今度払ってくれると父が言ったけど、私はおかしいと思った。これまではこのようなことに全く関心がなくて、普段私は何も聞かないけど、どうして相手のために働いたのに、給料をくれないのか、すぐ給料を払ってくれるべきだと思う。
- 35 周：いつ頃？
- 36 武：この間、だいたい今年の5、6月かな。
- 37 周：お父さんの仕事については全然関心がなかったの？ 給料は毎月もらえると思っていた？
- 38 武：給料は月に1回、時には2ヶ月に1回もらう、定期的ではないと思っていた。毎回もらえる給料は少ない時もあるし、多い時もあるから、金額は毎回違

う。家にお金がなくなると、父が請負人のところに行って給料を請求しにいくけど、時々朝出かけて昼頃になっても帰ってこない。

39 周：もらえないからずっとそこで待っていたのかな？

40 武：どうしてそんなに時間がかかるのか、私もよく分からない。ある日、私は朝8時まで寝坊していたから、父親は多分6、7時に家を出た。実は私も目が覚めて、ずっとベッドの中で携帯をいじっていて、父がバイクで家を出た時の音も聞こえた。その後私が昼ごはんを食べて、ゲームを何局もやった。だいたいゲームは一局30分もかかるけど、2、3局をやった後父がやっと帰ってきた。

41 周：それで給料をもらえた？

42 武：父が母にお金を渡したのを見たから、多分少しはもらえたと思う。それはちょうどお正月の時で、2017年のお正月だった。

武の父親は周の父親と同じく建設労働者として長年出稼ぎに出ているが、給料不払いという共通の経験もあると武が語った（34 武）。普通の仕事は「働けば給料をもらえる」という固定な観念があるが、自分の父親は一生懸命に働いても給料がもらえないということについて、武は「私はおかしいと思った。どうして相手のために働いたのに、給料をくれないのか、すぐ給料を払ってくれるべきだと思う。」と自問自答をした。即ち、武は周が書いたテキストの内容（父親の給料不払い）に触発され、自分を取り巻く世界の現実（父親の給料不払い）を能動的に捉え返したと言える。

このように、外的言語生態場で周の留守児童経験を辿る中、武は共通の経験（父親の給料不払い）を捉え返し、内的言語生態場では〈父親の給料不払い→おかしい〉という意味が生成された。武は、周の留守児童経験を基づいて能動的に自分にとって身近な群像の生き方のあり方を捉え返し、そして自問自答を通じて自己（主体）と現実世界（客体）との繋がりを把握しようとするのが窺われる。従って、武の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印と、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図1-2として示す。

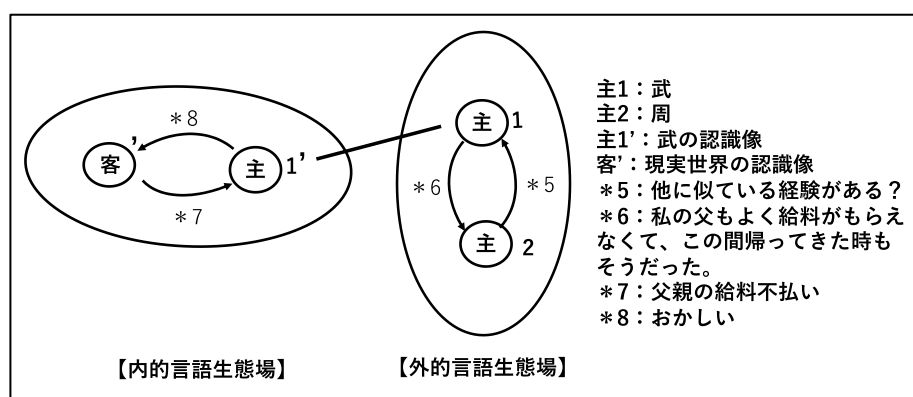


図 1-2 武と周の第 1 回の対話の言語生態場

第 1 回の対話をまとめると、外的言語生態場で周の留守児童経験を辿る中、武は自己の留守児童経験（〈「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し&年寄りの「男尊女卑」&父親の給料不払い〉）を捉え返した。即ち、周が書いた留守児童経験に触発され、さらに二人が議論をすることで、武はずっと持っていた問いを外的言語で捉え返すことができたと言える。第 1 回の対話の全体図を以下の図 1-3 で示される。

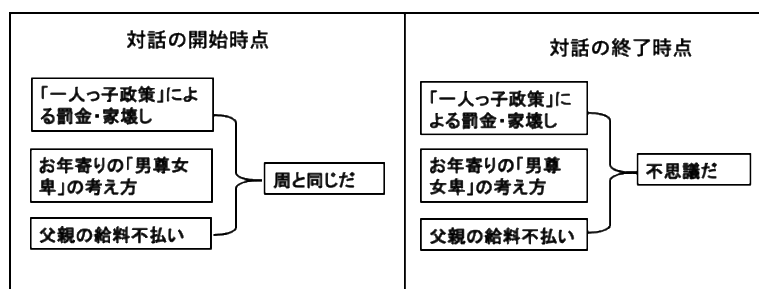


図 1-3 武と周の第 1 回の対話の全体図

武は生まれる前から 7 歳までは父親が出稼ぎに行って、母親及び二人の姉（彩は二番目の姉）と農村で暮らしていた。そして、8 歳から 11 歳までは両親に伴って出稼ぎ先の小学校に入って勉強したため、流動児童という経験もあった。その後また故郷に戻って現在に至るまでずっと母親と農村で暮らしている。第 1 回の対話の後、武にも周と同じように自分の留守児童経験を第 2 回の対話の「テキスト」として作成してもらうように依頼したが、武は広州での流動児童経験をメインに書いたことを、その後周が読んでから分かった。過去広州での生活経験は武にとって大きな影響を与え、それが現在に至っても影響し続けていることが分かる。以下の第 2 回の対話は、武が書いたテキスト（付録 1）の内容を踏まえて、流動児童の経験を踏まえて現在の留守児童生活を捉え返している場面である。

第 2 回の対話【2017 年 8 月 11 日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：実家の町に戻ってきた時、どう思った？ 何か変化を感じていた？ |
| 02 | 武： <u>この町に対して全く印象がなくて、自分の家の周りだけ覚えていた。</u> 当時幼かったし、母は遠いところには行かせてくれなかったから、いつも家の近くだけで遊んでいた。 |
| 03 | 周：じゃ家の近くには変化を感じていた？ |
| 04 | 武：うん。特にお姉さん【周】の家の周りには昔は全部林だったが、そのあと全部ブルドーザーで整地され家が建てられた。それから、昔私が住んでいた家もボロボロになって、窓のガラスが全部割れてしまった。 |

- 05 周：周りの人たちはまだ覚えていた？
- 06 武：昔よく一緒に遊んだ友達と近くの近所だけは覚えていた。広州に行った時はまだ幼かったし、何年間もそこにいたから、実家の人はほとんど覚えていなかった。
- 07 周：じゃ実家に戻って来たばかりの時は農村の生活に慣れていた？
- 08 武：ちょっと慣れなかった。農村の人は何かにつけ悪口を言うから、そのような習慣に慣れなかった。広州の人の方が教養が高い。広州の人はゴミをポイ捨てしなくて、しっかり分類するけど、農村の人はゴミを分類しない。
- 09 周：農村のいいところはないの？
- 10 武：特にない。やっぱり広州の方がいいと思う。都市は経済が進んでいるから、農村は比べられない。また、都市では夜でも電気がずっとついているから、私が一人で出かけても怖くない。農村の夜は真っ暗で、しかも周りには全部草や木ばかりで、とても不気味な感じがする。昔農村にいたときも、一人で外出するのが怖かった。

武は両親の出稼ぎにより広州で約3年間生活した。武は、対話の「テキスト」で広州へ行ったばかり時のカルチャーショック（言語や文化の壁）の経験と故郷に戻る時の葛藤を書いた。武のテキストを読んだ周は、大都市の広州から故郷の農村に帰ってきた当時の心境を尋ねた（01 周）。一方、武は、広州に行く頃はまだ幼かったため、故郷の農村に対しては印象が薄いと振り返った（02 武、06 武）。それに対して、8歳から11歳まで生活した広州は武にとって印象深く、今でもそこでの記憶が鮮明であることをテキストで書かれた。武が広州に行ったばかりの頃は、生活も言葉も慣れなかったが、1年後に現地の言葉と生活に馴染むことにより人間関係も広がり、現地の人々に対しても親近感を抱くようになってきた。そして、3年後に武が故郷の農村に戻ってきて、農村と都市の大きな格差に衝撃的だった（08 武）。武は、広州にいた頃は標準語で周りの人とコミュニケーションを取っていたが、故郷の農村に戻ってきたら現地の方言が唯一な交流手段になったことに対して、武が抵抗感を感じていた。武は8歳の時に広州に行ったため、故郷の方言もほとんど忘れてしまった。その言葉を理解できないため、武は、故郷の方言は悪口に聞こえて、その言葉を話す農民は教養が低いと捉え返した（08 武）。武の発話を受けて、周は、広州にない故郷の農村の良さは何かを尋ねたが、農村は都市と比べるものにならないと武が強く主張した（10 武）。広州は中国の最も南にある大都市で、1978年の改革開放政策により経済発展の最先端に立つようになり、出稼ぎ労働者が最も多く集まる大都市の一つである。広州で3年間暮らした武は、都市の便利な生活及び早い経済発展を実感したため、故郷に帰ってきて農村の不便さと遅れた経済を指摘した（10 武）。

このように、外的言語生態場で周の話題提起によって、武は過去の流動児童経験を踏まえ

て現在の農村生活を捉え返し、内的言語生態場では〈農民→教養が低い〉〈農村→経済が遅れている〉という意味が生成された。武は、過去の都市生活経験を踏まえて、現在生活している農村を意味付けていることが分かる。しかし、武は、都市と農村及び都市の人々と農村の人々の生き方の一部のみ取り上げて捉えているため、狭い意味で自分を取り巻く世界及びその世界で生きている人々のあり方を把握していることが窺われる。従って、武の生態学的主客構造は、現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図2-1として示す。

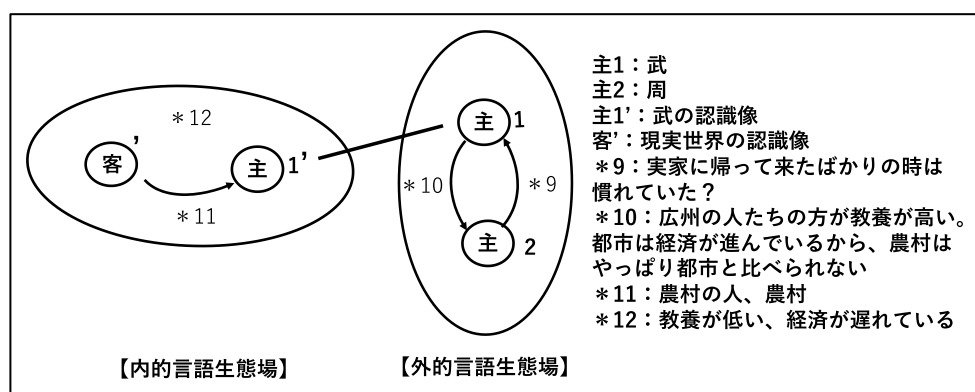


図2-1 武と周の第2回の対話の言語生態場

続いて、周は、武の農村の学校生活について尋ねた（21 周）。広州にいた時に武が通った学校には彼のように親に伴って都市に来た流動児童がほとんどだが、地元の子どもも少なからなかったことを振り返った（22 武）。

- 19 周：農村の学校に慣れた？
- 20 武：まあまあ。どこの教師も責任感があるから、やっぱり学生の努力次第だと思う。でも広州の学校設備や学校環境は農村の学校よりいい。
- 21 周：広州で友達をたくさん作った？
- 22 武：うん。私のような他の地域から都市に行った子どもがたくさんいた。私のクラスには地元の子どもは2、3人しかいなかったけど、そのうちの一人はよく知っている。彼のお父さんはベンツにいつも乗っていて、とても豪華だった。ある日、私がその同級生の家に遊びに行った時に、初めてベンツに乗った。それは私にとってはとても新鮮だったが、その同級生にとっては当たり前のことだ。彼の家は別荘のようで、とても広かった。プールも、高いスパイラルな階段も、魚を飼っている池もあった。その家は8階建てで、車庫には多くの高級車があった。彼のお父さんはきっと百万長者だろう。私は初めて彼の家に行ったけど、すぐ惹きつけられて、その家から出たくなかった。彼のお父さんはラップを作っている

ビジネスをやっているらしい。私はその同級生と一緒に彼のお父さんの工場に遊びに行ったことがあるけど、工場にはたくさんの従業員がいた。その時、彼のお父さんは本当にすごい人だと思った。

23 周：じゃ武の両親の仕事とは全然違うのね。

24 武：うん、私の両親は時代遅れだと思う。だって今はもうインターネットの時代だから、親はまだ頭を使って仕事ができないし、力仕事しかできない。私は将来勉強ができなくても力仕事は絶対やらない。これからインターネット時代で機械化の時代だから、力仕事はもうなくなるはずだ。父と似ているような仕事があるかどうかを、私も時々インターネットで調べたりもするけど、結構たくさんあった。しかも給料は今より高い。だから父もインターネットで仕事を探せるはずだと思う。なにしろ今やっている仕事よりずっと楽だと思う。

25 周：武は将来どんな仕事をしたいかを考えたことがある？

26 武：私は将来絶対力仕事はやらないよ。どんなことができるかを就職する前によく考えてから決める。だって、目標がなければ実行も難しいでしょう。

地元の広州で生まれた子どもの親は企業の経営者が多く、家が裕福で生活環境も恵まれていることが多い。一方、武の両親のような出稼ぎ農民は単純労働をしている人が多く、賃金も安くて簡素な生活しかできない。武は、広州にいた時に同級生の親の高級車と豪華な家を見て、大きな衝撃を受けたことを語った（22 武）。商売をして大金持ちになった同級生の親を見ると、武は農業や単純労働しかできない両親を「時代遅れだ」と捉え返した（24 武）。農村の都市化により大きく変動した農村社会に生まれた武は、将来親のように単純労働や農業をやる可能性を強く否定し、農業及び単純労働を行う人は淘汰されるはずだと捉えた（26 武）。

このように、武は、周と現在の農村生活を捉え返す中、過去の流動児童経験と呼び起こし、そして両親の生き方を捉え返し、内的言語生態場では〈単純労働&農業→時代遅れ〉という意味が生成された。言い換えれば、武は、過去の流動経験を踏まえて自己を取り巻く世界の人々（単純労働者、経営者、農民）の生き方を捉え返したが、なぜ農民や単純労働者が質素な生活しかできないのか、都市の企業経営者がなぜ大金持ちになり裕福な生活を暮らせるのかというような問いが発してないため、自己を取り巻く世界及びそこで生きている人々のあり方を把握していないことが窺われる。従って、武の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図 2-2 として示す。

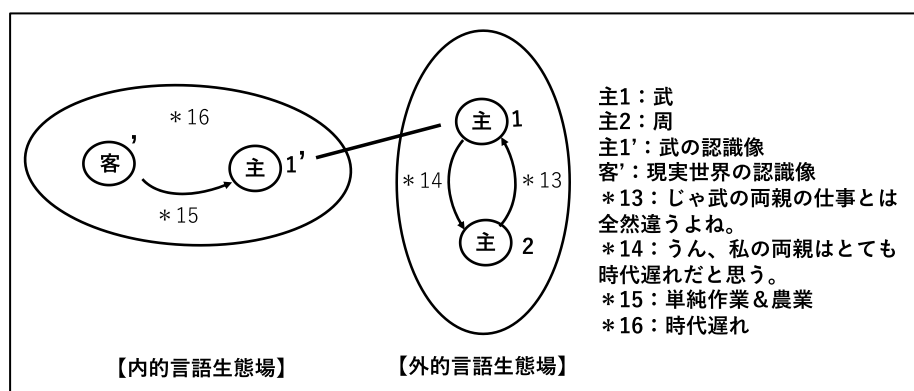


図 2-2 武と周の第 2 回の対話の言語生態場

第 2 回の対話をまとめると、外的言語生態場で周の問題提起により、武がかつて生活した広州と比較しながら現在自分を取り巻く世界（農村の人、農村、両親の仕事）を捉え返した。第 2 回の対話の全体図を図 2-3 として示す。

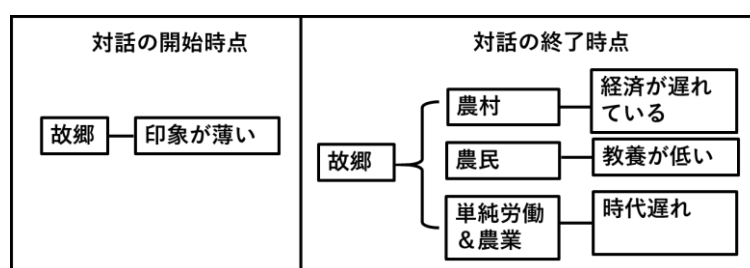


図 2-3 武と周の第 2 回の対話の全体図

第 2 回の対話が終わった後、過去 2 回の対話を踏まえて武と周は互いが気づいた点について出し合い、第 3 回の対話を行った。以下はその対話の一部である。

第 3 回の対話【2017 年 8 月 22 日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：武のお父さんも私の父もずっと都市へ出稼ぎに行っているけど、大したお金を稼ぎないし、給料も時間通りにもらえないし、生活も保障されないね。どうしてと思う？ |
| 02 | 武： <u>彼らは正式社員じゃないから。他の親は全部固定な仕事があるけど、私たちの親は仕事があればどこにでも行く。</u> |
| 03 | 周：お父さんのような仕事も社会でとても重要な役割を果たしているから、もし給料不払いがあった時はしっかりサポートしてくれるようなシステムが必要だと思う。日本の建設現場で働いている労働者は大体その日の仕事が終わるとすぐ給料をもらえる。でも中国の労働者は 1 ヶ月以上、またはもっと |

- 長い時間が経っても給料をもらえない場合が多い。
- 04 武：父はいつも一つの家を建て終わった時に、給料を一括でもらう場合が多い。でも、「お金がない」と請負人に言われたら、給料が全然もらえない場合もある。
- 05 周：これはおかしいと思わない？
- 06 武：給料をもらえればいいけど、もらえない場合は警察を呼ぶしかない。
- 07 周：このようなことは警察の業務範囲に入るかなあ。例えば、武はお父さんのように出稼ぎに行って、半年間働いても給料をもらえなかったとして、その時は警察を呼ぶ？ 他の方法はないかなあ？ 例えば、他の労働者と弁護士を雇って請負人を訴えるとか？
- 08 武：うん、それもいいね。弁護士に頼んで給料の支払い期限を請負人に伝えてもらう。ずっと払ってくれないのはやはりダメだから。
- 09 周：そうね。建設現場の仕事は大変で給料も安い。しかも、時間通りに給料がもらえなくて、とても不安定だ。これが問題だと思う。
- 10 武：今学校の近くにも建設労働者がたくさんいるけど、彼らは毎朝早く建設現場に行って、そこで朝ごはんを食べてからすぐ仕事を始める。その仕事が終わると、また次の仕事を探し、あっちこっちと移動している。
- 11 周：もし近くで仕事を見つけられなかったら？
- 12 武：見つけられなかったら、私の父と同じように都市へ出稼ぎに行けばいい。
- 13 周：じゃ都市へ出稼ぎに行ったら安定した仕事が見つかるの？
- 14 武：都市もあまり安定しないけど、せめて農村よりは安定している。

第1回の対話では、武は周の留守児童経験に基づいて、自分の父親の給料不払いを捉え返した。給料不払いという問題を生み出す社会を把握するために、第3回の対話で周はそれを問題提起して武とさらなる議論をした（01 周）。一方、01 周の問題提起に対して、武は「彼らは正式社員じゃないから、他の人の親は全部固定な仕事がある」と答え、つまり父親の給料不払いは雇用形態に原因があると捉え返した（02 武）。正規社員であればずっと固定した場所で働くことができるが、武と周の父親のような建設労働者は非正規社員であるため、固定した職場もなく、正規社員のような社会保障も適応されず、給料も時間通りにももらえないと武が解釈した。武の応答を受けて、周は、社会建設において建設労働者は重要な役割を果たしていることを主張し、さらに日本の建設労働者の待遇を取り上げて比較しながら中国の建設労働者の悪い雇用環境を指摘した（03 周）。武は周の質問を応答しながら給料不払いという現実を捉え返し、多くの問題の解決方法を出した（06 武、08 武）。武の反応を踏まえて、周は建設労働者の悪い雇用環境を強調し、問題の本質を捉え返そうとした（09 周）。一

方、武は身近にいる建設労働者の不安定な雇用環境を取り上げ、自分の父親だけでなく、他の建設労働者も共通の経験をしていることを強調した（10 武）。

このように、外的言語生態場で周の問題提起により、武は自分の父親をはじめとする建設労働者の給料不払いを捉え返し、内的言語生態場では〈建設労働者の給料不払い→非正規社員だから〉という意味が生成された。一方、第1回の対話では、武は、〈父親の給料不払い→おかしい〉という意味を生成したが、その認識が続かず、ここでは建設労働者の給料不払いを繋がりの中にある問題として認識していなかったことが窺われる。従って、武の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印はつながるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図3-1として示す。

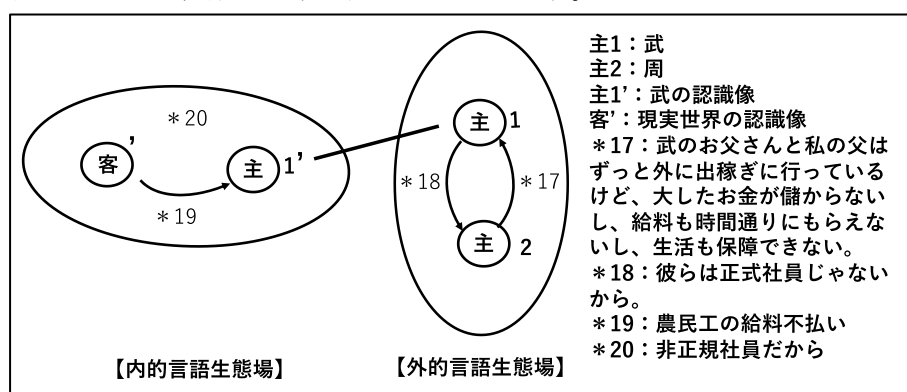


図3-1 武と周の第3回の対話の言語生態場

続いて、武の応答を踏まえて、周は改めて建設労働者という群像の生き方について思考が続いた。そして、問題の本質を理解してもらうため、周は、「このような仕事をしている人たちは社会保障もないし、仕事も不安定だし、どのように生きれば良いのか？武はどう思う」と、武に建設労働者の追体験をしてもらうように問いかけた（15 周）。

- 15 周：このような仕事をしている人たちは社会保障もないし、仕事も不安定だし、どのように生きればいいのか？ 武はどう思う？
- 16 武：昔政治の授業で読んだけど、ある建設現場の労働者が仕事中にレンガに当たって死んでしまった。建設現場の請負人はその責任を取りたくなかったが、被害者側の方が弁護士を雇ってその請負人を訴えた。そして、被害者の方が勝った。その建設現場で起きた事故だから、何かあった時は当然現場の請負人に責任を取ってもらうべきだ。
- 17 周：そうね。そうしないとその人がただで死んでしまうから、もったいない。
- 18 武：せめてお金を弁償してもらわなきゃいけない。それから個人の損失費も

ね。

- 19 周：建設労働者も法律に関する知識を少し知ると良い。そうすると、どうやって自分の権利を守るかが分かる。都市の建設労働者はほとんど農村出身で、彼らに何があつて時は良い解決方法を知らない。私が子どもの頃、父はよく同僚たちと未払いの給料を請求するのに出かけていた。その請負人の家へ行って要求するが、もしその請負人の態度が悪すぎると喧嘩になる場合もあった。しかし、もらえなかった場合でも警察署や裁判に行かなかった。
- 20 武：昔の農民はそういう手段を知らなかったかもしれない。でも、今の時代は違うから、多分警察署や裁判に行くことくらいは知っているだろう。
- 21 周：もし武だったら警察を呼ぶの？
- 22 武：うん、そうするしかないよ。相手を殴ることもできないから。相手を殴って警察が来たらもっと大変なことになるから、問題が解決できない。
- 23 周：じゃお父さんは最近給料をもらえない場合は、警察を呼んだことがある？
- 24 武：いや、いつもお正月の時に請負人の家へ行って給料を請求する。
- 25 周：どんな手段で給料を請求できるのか、武はお父さんと話したことがある？
- 26 武：いや、ない。昔は全然こういうことを知らなかったから。
- 27 周：じゃどうして警察を呼ぶことを思いついたの？
- 28 武：今は全部そうだから。どんなことがあっても、まず警察を呼ぶ。

武は、学校の教科書に書かれた建設労働者が法律を通じて自分の権利を主張して成功した話と呼ばれこし、給料不払いをされた建設労働者もそうすべきだと主張した（16 武）。武の発話を受けて、周も法律知識の重要性を強調した（19 周）。一方、周の父親も建設労働者であるが、いつも家の近くの知り合いを通じて都市の仕事を受けることが多い。そして、都市に出稼ぎに行った時、工事現場の請負人に会う機会が少ないし、たとえ何が不公平な扱いをされても直接に訴える機会も少ない。そこで、お正月しか家に帰ってこない父親が給料を請求するために毎日出かけていた姿を周が子どもの頃によく見た（19 周）。近年中国政府も農民工（出稼ぎ労働者）の給料不払い問題を重視するようになり、農民工の雇用環境の改善に取り組む部門や法律も作られた。このように、武は、周の質問と応答によって自分の既有知識を生かして建設労働者の給料不払いを捉え返し、そして当事者の視点に立って能動的に問題の解決方法を考えた（22 武）。

武は、外的言語生態場で周の質問や応答により、建設労働者の給料不払い問題を捉え返し、自己を起点にして解決方法を考えた。そして、武の内的言語生態場では〈建設労働者の給料不払い→自分の利益を主張すべきだ〉という新たな意味が生成され、上の〈建設労働者の給

料不払い→非正規社員だから」という意味を捉え直した。言い換えれば、周の質問や応答により、武は、自分の既有知識を生かしながら自分が直面している問題を捉え返し、自己を起点にしてその問題の解決策を見出したと言える。従って、武の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印と、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図 3-2 として示す。

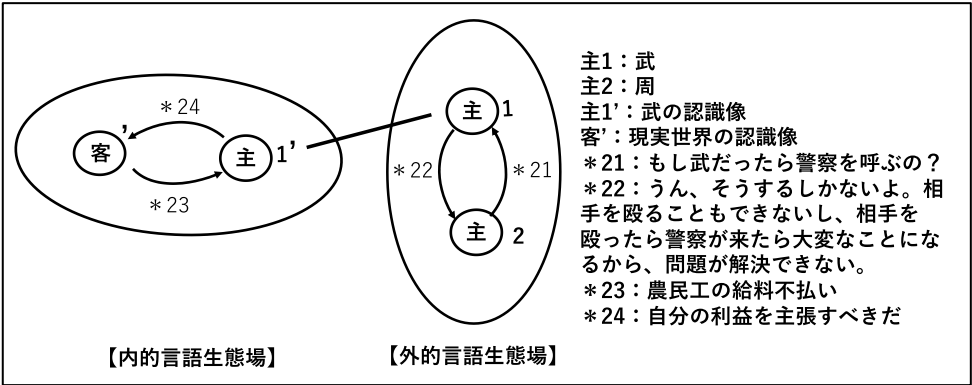


図 3-2 武と周の第 3 回の対話の言語生態場

以上をまとめると、第 3 回の対話では、外的言語生態場で周の問題提起や応答により、武は建設労働者の給料不払い問題を捉え返し、能動的に問題の解決方法を考え始めた。第 3 回の対話の全体図を以下の図 3-3 として示す。

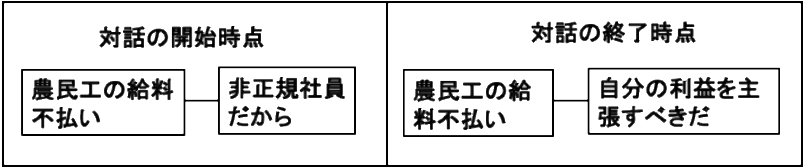


図 3-3 武と周の第 3 回の対話の全体図

過去 3 回の対話が終わった後も、周と武は互いに連絡を取り合ってきた。1 年前の第 3 回の対話をした時、武は中学校の三年生だった。1 年後の第 4 回の対話の時、武は中学校を卒業して都市のある専門学校に入学する直前であった。以下の対話は、武が現在の考えと将来に対する期待について周と共有している場面である。

第 4 回の対話【2018 年 8 月 22 日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

| 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：武は将来何をしたい？ |
| 02 | 武：デジタル制御関係の仕事をするよ。でも一旦この領域に入ると、一生もこの仕事をやらなきゃいけない。そう思うとまた少し悔しい。 |

03 周：どうして悔しいと思うの？
04 武：一生も同じ仕事をするから、好きじゃない。
05 周：他の仕事もやってみたい？
06 武：うん。
07 周：例えば？
08 武：コンピューターを学んだり、携帯を修理したりするとか。
09 周：携帯を修理するというのは、携帯を解体したいと考えているでしょう？
10 武：もし携帯の修理を学んだら、携帯が壊れた時は自分で修理できる。もしコンピューターを学んだら、携帯に関係するソフトを勉強したい。もし今自分でソフトを開発できたら、どんなにかっこいいだろう。私が中学校二年生で初めて携帯のソフトを開発した時、同級生の皆が私のことに感心していた。
11 周：今までは開発したソフトは全部携帯をロックするものだったよね？
12 武：うん。このようなソフトは、Tencent にもあるよ。
13 周：一部の人だけではなくて、大衆向けのソフトは開発したことがある？
14 武：まだない。私は自分に有利なことしかやらない。利益がないことは絶対やらない。
15 周：利益というのは、お金のこと？
16 武：大体同じだ。よく知っている人なら、お金をくれなくてもいいけど、くれたらもっといい。
17 周：そうか。利益がないとやらないのね。武は商売人に向いているね。
18 武：お金が儲からなければやらない。
19 周：でも多くの職業は収入が多くないよ。例えば中国では教師のような仕事はほとんどサービスや貢献の職業で、あまりお金が稼げない。
20 武：教師はお金を稼げない？ 私の同級生は今 A 師範大学にいるけど、彼は卒業したら、学校が仕事も紹介してくれるから、待遇がとていいらしいよ。将来給料も結構高いと思う。
21 周：〇〇さん【武と同じ村にいる人】も B 師範大学にいる。重点大学だ。
22 武：B 市にも師範大学があったのね。私の同級生は中学校を卒業してからあの師範大学に入った。
23 周：すごいね。この社会には収入が高くない職業もたくさんあるけど、そのような職業でもやはり誰かがやらないといけない。じゃ、誰がそのような仕事をするの。
24 武：底辺の人、つまり一番下の人たちがやるよ。
25 周：どうしてその人たちがやらなければならないの？
26 武：彼らはお金を稼ぐためにやらなければならない。だって彼らには能力がな

いから。

- 27 周：能力がない？　じゃ武はどう？
28 武：私には能力がある。
29 周：何の能力？
30 武：お金を稼ぐことに対して、私はできるだけ頑張る。お金が儲かるから、こんないいことがない。

1年前の第2回の対話では、武は、「私は将来絶対力仕事はやらない」と意思を表明した。1年後の第4回の対話で、周が再び将来の進路について武に尋ねた（01 周）。コンピューターが普及している現代社会では、コンピューターに関する職業の需要が高まると武が推測し、専門学校に入ってそれに関する専攻を勉強し始めた（02 武）。また、武は中学時代から携帯やパソコンに馴染みがあり、携帯のソフトウェアを開発してインターネットで販売した経験もあり、中学校の同級生の中で評価されていた（10 武）。しかし、武が作ったソフトウェアは一部の人に向けるサービスであり、他人の携帯をロックしたり、ウィルスを感染させたりするような悪質なソフトウェアである。周の携帯もかつて他人にロックされ、武に頼んで解除してもらった経験がある（13 周）。そのようなソフトウェアを作ってお金を儲かることに対して興味を持ち、お金が儲かる仕事しかやらないと武が強調した（14 武、18 武）。武の発話を受けて、周は、職種によって収入は異なるが、お金が儲からない仕事でもそれなり重要な役割を果たしていると反論した（19 周）。一方、武は、収入が低い仕事は能力がない人がやることであり、能力がある人間になる自分は高収入をもらうべきだと主張した（28 武、30 武）。

このように、外的言語生態場で周と将来の職業についての考えを共有し、そして収入によって相手の能力を位置付ける武は収入が低い単純労働者・農民を「能力がない人間」と捉え返し、内的言語生態場で〈単純労働者・農民→能力がない人間〉という意味が生成された。一方、武は、自分を取り巻く世界の現実に対して問い（単純労働者や農民はなぜ収入が低いのか、また農業や単純労働者はなぜ自分の既存能力を発揮できないのか、収入が高い人は必ず能力を持つ人間なのかなど）を発していないため、つまり自己を取り巻く世界のコト・モノ・人に対する把握はできていないことが窺われる。従って、武の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつながる矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつながる矢印は図示されない。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図4-1として示す。

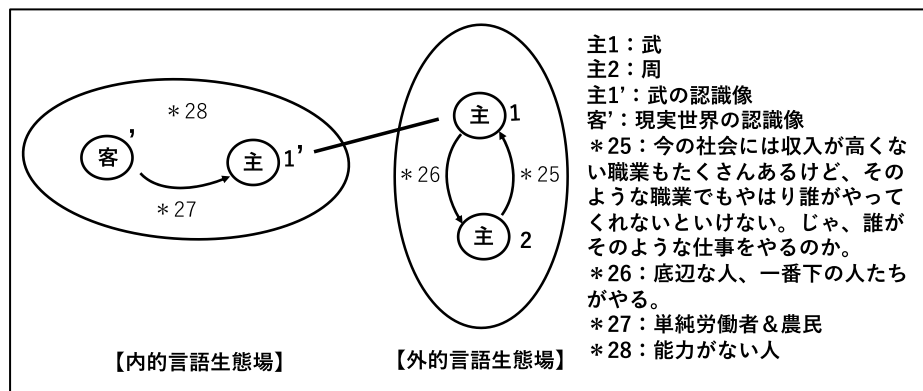


図 4-1 武と周の第 4 回の対話の言語生態場

続いて、周は、お金を稼ぐこと以外に自分のやりがいを感じることは何かを武に尋ねた (31 周)。そこで、武は学校で学んだ知識を生かして、現在の中国人の生き方を指摘した (32 武)。

- 31 周：じゃお金を儲かること以外に、他に生き甲斐を感じることはある？
- 32 武：生き甲斐？ 私は将来絶対多くの中国人のようにならない。中国人はとても賢いけど、多くの中国人は結婚、出産、子育て、老後のような人生を計画して、ただ計画通りに生きていく。皆はこのようにことばかりを考えていて、遠い未来が見えない気がする。このような人生では全然自分の生き甲斐を感じられない。私はそのような人生が好きじゃない。せめて海外でも出てもっと視野を広げたい。
- 33 周：視野を広げるとは？
- 34 武：視野を広げるはね、ほら、サラリーマンたちを見ると、彼らは朝から晩まで仕事していて、他のことは何もできない。休日でも家で休むしかできないから、他にやることがない。
- 35 周：自分の趣味とかはないね。
- 36 武：生活を楽しんでいない。「自分の生活を豊かにして、視野をもっと広げること」というように、政治の教科書の中には書かれてあったよ。

結婚、出産、子育て、仕事、老後というライフステージを辿って一生を送る典型的な中国人は生きがいを感じられないと武が指摘した。その認識を踏まえて、自分は将来そのような生き方をしないと武が意思を表明した (36 武)。

このように、外的言語生態場で周の問題提起 (自分の生きがい) により、武は既有知識をもとに中国人の生き方を捉え返し、内的言語生態場では〈多くの中国人→生存価値を感じら

れない」という意味が生成された。そして、武は、彼らの生き方のあり方を捉え返した上で、自分の生き方を描いた。一方、武は、自己を取り巻く世界の人々（単純労働者、農民、中国人）の生き方のあり方を自分の基準（収入、仕事、ライフスタイルなど）に判断しているが、彼らの生き方のあり方は現実世界の影響を受けていることもかわらず、それらの人々の生き方のあり方とそれを影響する社会的な背景をつなげて認識していないことが窺われる。従って、武の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における武と周の外的言語生態場及び武の内的言語生態場を図4-2として示す。

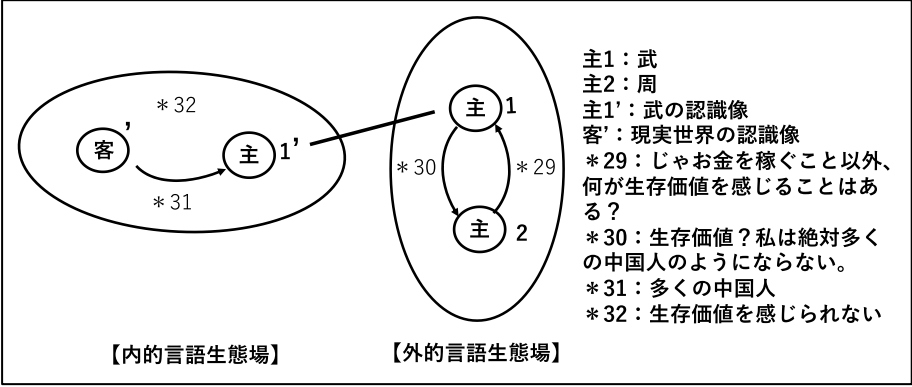


図4-2 武と周の第4回の対話の言語生態場

第4回の対話をまとめると、周の問題提起により、武は自己を取り巻く世界の人々（農民、単純労働者、中国人）の生き方を捉え返した。1年前の第2回の対話では、武は〈単純労働&農業→時代遅れ〉と捉えていたが、1年後の第4回の対話ではそれをさらに捉え直し、〈単純労働者&農民→能力がない人間〉という新たな意味が生成された。第4回の対話の全体図を図4-3として示す。

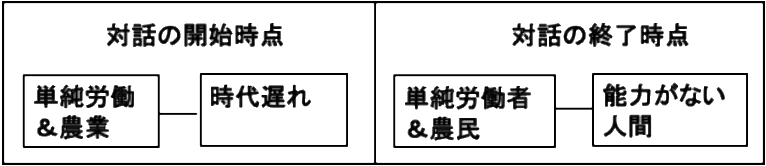


図4-3 武と周の第4回の対話の全体図

以上、対話的問題提起学習の事例から、武は周と対話を通じて、自分の留守児童経験・流動児童経験を捉え返し、生態学的意味の生成過程を見た。第1回の対話では、周の留守児童経験を辿ることにより、武は自分の留守児童経験を捉え返し、〈「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し、年寄りの「男尊女卑」、父親の給料不払い→不思議だ〉という意味が生成され、自己（主体）と現実世界（客体）の繋がりに対する認識を進めていたことが窺われた。第2回の対話では、武は、過去の流動児童経験を踏まえて自己を取り巻く世界のコト・

モノ・人（農業・農村・農民）のあり方を捉え返し、〈農民→教養が低い〉、〈農村→経済が遅れている〉、〈単純労働&農業→時代遅れ〉という一連の意味が生成された。一方、武は、自己（主体）と現実世界（客体）の全体像を把握しておらず、狭い意味でその世界のコト・モノ・人のあり方を捉えていることが窺われた。第3回の対話では、周の問題提起により、武は自分の父親をはじめとする建設労働者の給料不払いを捉え返した。対話の開始時点では、武は〈建設労働者の給料不払い→非正規社員だから〉という意味を生成し、「給料不払い」を繋がりの中にある問題として認識していなかった。その後、周の質問や応答により、武は既有知識を生かして「給料不払い」という問題を捉え返し、〈建設労働者の給料不払い→自分の利益を主張すべきだ〉という意味を生成し、自己を起点にしてその問題の解決方法を考え始めた。第4回の対話では、外的言語生態場で周と将来に対する考えについて共有する中、武は自己を取り巻く世界の人々（単純労働者、農民、中国人）の生き方を捉え返し、〈単純労働者・農民→能力がない人間〉と〈多くの中国人→生存価値を感じられない〉という意味を生成した。一方、武は、自己を取り巻く世界の人々（単純労働者、農民、中国人）の生き方と自己・世界との繋がり、及び彼らの生き方は現実世界の影響を受けていることを認識していなかったことが窺われた。このように、武は周と対話を4回繰り返されたが、第1回と第3回の対話では自己と世界の繋がりを把握でき、生態学的意味が生成されたが、第2回と第4回の対話ではまた自己と世界の繋がりを認識せず、生態学的意味が生成されなかった。つまり、武の認識をそのまま次回の対話へ移行せず、行きつ戻りつする生態学的意味の生成過程であることが分かる。

以上を、生態学的主体性を成す契機の生成の過程を形成する三段階を辿って、武の生態学的主体性を成す契機をまとめる。

まず、生態学的主体性を成す契機の生成のその1は、「自己を起点としてレバンスをたどり、自己・世界の相即の意味を把握する」である。第1回の対話では、外的言語生態場で周の留守児童経験を辿ることにより、武は自分の留守児童経験（「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し、「男尊女卑」、父親の給料不払い）を捉え返し、自己（主体）と現実世界（客体）の繋がりを把握していたことが窺われた。即ち、武は、周の留守児童経験を踏まえて、自己起点にして自分及び自分にとっての身近な群像の生き方のあり方との繋がりを辿ることを媒介にして、自己と現実世界の相即の意味を把握することができた。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその1と考える。

次に、生態学的主体性を成す契機の生成のその2は、「自己の生の底流を成す生存の危機を起点としてレバンスをたどる」である。第3回の対話では、外的言語生態場で周の問題提起により、武は自分の父親をはじめとする建設労働者の給料不払いを捉え返した。対話の開始時点では、武は「給料不払い」を雇用状態という単一の要因として捉え、繋がりの中にある問題として認識していなかった。その後、周の質問や応答により、自分の既有知識を呼び起こして建設労働者の給料不払い問題を捉え返し、自己を起点にして能動的にその問題

の解決方法を考え始めた。即ち、周と対話を通じて、武は、自己及び身近な群像の生存の危機を起点として、自己と世界との繋がりを把握することによって、自己を起点にして能動的に問題の解決方法を考え始めたと言える。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその2と考える。

6.3 玲〈対話参加者の働きかけによる「農業」への捉え直し〉

2018年8月10日から2018年8月12日にかけて、玲と周は対話的問題提起学習を援用して、対話を3回行った。玲と静（元留守児童）は同じ村の出身であり、近所である。2017年8月に周が静の村を訪れた時に玲と知り合い、その後も連絡を保っていた。そして、2018年8月に周は親の出稼ぎ先で夏休みを過ごしている玲と対話を3回行った。

第1回の対話を行う前に、玲に周の過去の留守児童経験をまとめたテキスト（付録1）を読んでもらった。以下の対話は、周のテキストを読み終わった後の玲の感想を求める場面から始まった。

第1回の対話【2018年8月10日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|---|
| 01 | 周：私の留守児童経験を読んで、似ている経験があった？ |
| 02 | 玲：全部覚えているよ。似ている経験は特にない。祖父母と喧嘩するような経験は、ここにはないよね。 |
| 03 | 周：全然違う？ 最初の文章を見てみて。 |
| 04 | 玲：これが本当の経験？ |
| 05 | 周：うん。これは自分の経験から書いたのよ。 |
| 06 | 玲：ここは少し似ている。 |
| 07 | 周：どこ？ |
| 08 | 玲：「弟が生まれた後、父は故郷を離れ、もっと遠くの町に出稼ぎに行った」。ここだけは似ている。線を引いたほうがいい？ |
| 09 | 周：どこ？ 線を引いて。何が似ているの？ |
| 10 | 玲： <u>つまり、うちの両親も弟が生まれた後に出稼ぎに出た。</u> |
| 11 | 周：玲の両親はその前から出稼ぎに出ていたよね？ |
| 12 | 玲：まあ、だいたい同じ。 |

留守児童経験を読み終わった後、自分と共通する経験があるかどうかを周が玲に尋ねた（01 周）。玲は、周との共通経験がないと答える一方、祖父母と暮らしている自分は祖父母とよく喧嘩するが、周のテキストにはそのような経験がないことに気づいた（02 玲）。また、周が書いた過去の留守児童経験は現在玲の留守児童生活と大きく違うため、玲は、この「テ

キスト」に書かれた経験が本当かどうかを周に確かめた（04 玲）。すると、周は、自分の実経験を基づいて書いたと強調した（05 周）。その後、玲がその「テキスト」をもう一度読み返し、自分と共通した経験を見つけた（08 玲）。玲は両親の出稼ぎ先で生まれたが、小学校に入るときに弟が生まれて、そして玲は実家の農村に送り返され、今まで農村の学校に通っている。一方、玲の弟は生まれてからずっと両親の出稼ぎ先で暮らし、現在も出稼ぎ先の小学校に通っている。そこで、玲は両親の長期間出稼ぎ、及び自分が両親と別れて留守児童になったことを弟の誕生と関連づけて捉え返した（10 玲）。一方、当時玲を農村へ送り返したことについて、彼女の父親は異なる説明をした³⁰。つまり、都市戸籍ではない子どもが都市の小学校に入るためには高額の入学金が必要になるため、当時玲の両親は払えなくて仕方なく彼女を農村に送り返したと親が解釈した。

このように、周の留守児童経験を辿ることによって、玲は自分の留守児童経験を捉え返し、内的言語生態場では〈両親の出稼ぎ→弟の誕生のため〉という意味が生成された。一方、玲は両親の出稼ぎを単一の要因（弟の誕生）として位置付け、親の出稼ぎという現象とその現象を生み出す世界との繋がりを認識していなかったことが窺われる。従って、玲の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における玲と周の外的言語生態場及び玲の内的言語生態場を図1-1として示す。

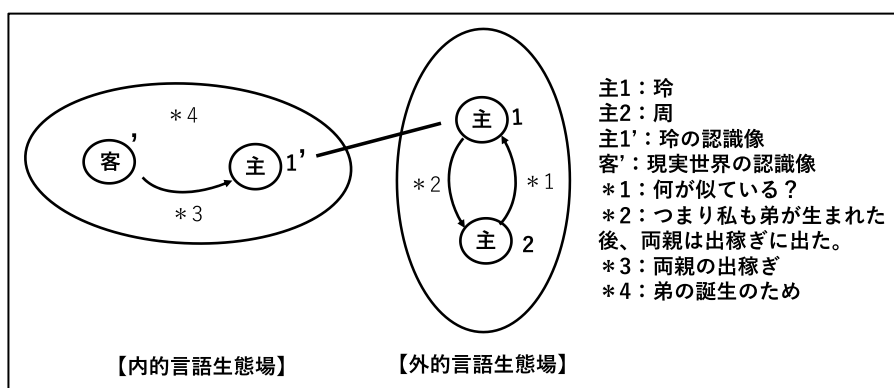


図1-1 玲と周の第1回の対話の言語生態場

中国は1978年に「改革開放」政策が実施されてから、多くの農民が沿岸部の都市に出稼ぎに行った。玲の出身地の村も1990年代から出稼ぎに行く農民が急増し、村には労働力にならないお年寄りと子どもだけが残された。

98 周：私が子どもの頃、住んでいた村には出稼ぎに行った人は少なかった。でもここは玲の実家には結構多いね。ほとんど出稼ぎに行った。

³⁰玲の父親：（訳）玲はここの幼稚園を終えてから実家の農村へ帰った。外部の戸籍の子どもが現地の学校に入るためには、最初何万円も払わなければならないから。

99 玲：うん。
100 周：だから、自分の親が出稼ぎに行ったことも普通だと考えている？
101 玲：え？
102 周：親が出稼ぎに行ったことが普通だと思う？
103 玲：まあね。
104 周：なんとも思わないのね。
105 玲：友達の親は家にいるよ。
106 周：そう？ 前回会った子【玲の同級生】の親？
107 玲：いや。前回会った子もお父さんが今出稼ぎに行ったよ。
108 周：そうなの？ どこに出稼ぎに行った？
109 玲：広東省。
110 周：彼女のお母さんは？
111 玲：お母さんは貴州に出稼ぎに行った。だから、彼女も留守児童である。

(中略)

150 周：玲の学校には親が出稼ぎに行った生徒が多い？
151 玲：多いよ。
152 周：どのくらいいるの？
153 玲：ほとんどそうだよ。両親とも家にいる生徒はほとんどいなくて、大体お母さんかお父さんか、どちらか片方だけが家にいる。
154 周：そうか。両親とも家にいるのはほとんどいないのね。
155 玲：うん。3人だけかな。とても少ない。
156 周：え、そうなの？
157 玲：うん。多分全部合わせても5人は超えない。
158 周：玲のクラスには全部何人いる？
159 玲：私のクラスには50人くらいいるよ。

周が初めて玲の出身地の村を訪れた時、村の農民がほとんど出稼ぎに行ったことに気づいた（98 周）。周は、両親をはじめとする農民の出稼ぎについて玲の捉え方を尋ねた（100 周）。玲は、自分の両親だけではなく、周りの農民も全部出稼ぎに行ったため、両親の出稼ぎを特別なことではなく、普遍的な現象として捉え返した（103 玲）。また、玲が通っている中学校でも、玲の同級生の両親もほとんど出稼ぎに行っており、親がそばにいる子どもより玲のような留守児童の方が多数派であることが分かる（155 玲）。

このように、周の問題提起によって、玲は両親をはじめとする農民の出稼ぎ現象を捉え返し、内的言語生態場では〈農民の出稼ぎ→普遍的な現象〉という意味が生成された。つまり、玲は自分が直面している現象（農民の出稼ぎ）を所与の事実として認識し、その現象を作ら

れている社会構造を把握していないことが窺われる。従って、玲の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における玲と周の外的言語生態場及び玲の内的言語生態場を図1-2として示す。

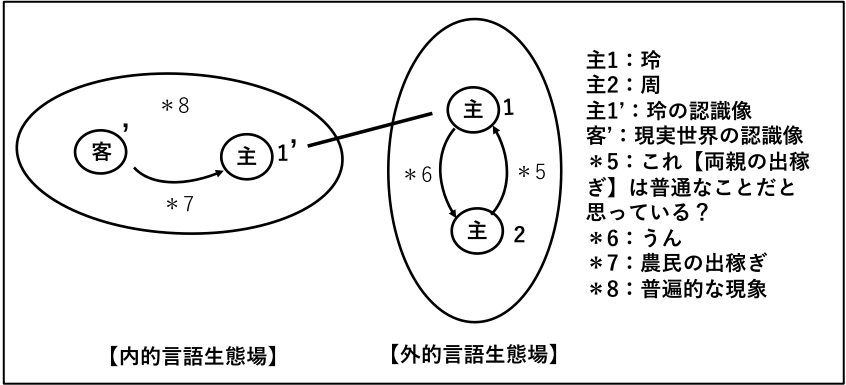


図1-2 玲と周の第1回の対話の言語生態場

第1回の対話をまとめると、周の留守児童経験を踏まえて、周と対話することにより、玲は両親をはじめとする農民の出稼ぎ現象を捉え返した。第1回の対話の全体図を図1-3として示す。

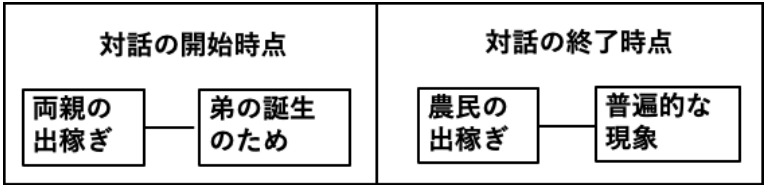


図1-3 玲と周の第1回の対話の全体図

第1回の対話の後、玲にも周と同じように自分の留守児童経験を第2回の対話の「テキスト」として作成してもらった。第2回の対話では、玲が書いたテキスト（付録1）を用いて対話を進めた。以下の対話は、玲の留守児童経験を踏まえて周と自分を取り巻く世界（農村）及びそこで生きている人々（祖母）を捉え返している場面である。

第2回の対話【2018年8月11日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

| 番号 | 発話内容 |
|----|--|
| 01 | 周：村にあんな立派な家を建てたのに、お父さんとお母さんはまだ出稼ぎに出ていて、全然帰って来ないのね。 |
| 02 | 玲：私の家が立派なの？ |
| 03 | 周：結構立派じゃん。どうして村に帰って来ないのかな。 |
| 04 | 玲：私も分からない。 |

- 05 周：帰って農業だけをやるのでは収入が少ないからかなあ。玲の祖母はとても苦勞してお金を稼いでいるようだね。
- 06 玲：農業をやめたと叔母さんに言われたけど、祖母はどうしてもやめない。
- 07 周：玲の祖母はどうしてあんなに一生懸命農業をやっているのかな？
- 08 玲：分からない。

玲は生まれた時から5歳までは両親の出稼ぎ先で暮らしていたが、6歳から祖父母と農村で暮らしている。周が玲の出身地の村を訪れたとき、玲の4階建ての家を見て驚いた(01周)。それは玲の両親が長年都市に出稼ぎに行き、稼いだお金で建てられた家である。農村に立派な家があるのに、玲の両親はなぜ出稼ぎに行くのかと周が不思議に思い、玲に質問した(03周)。「私も分からない」と玲が答え、両親の出稼ぎを捉え直そうとしなかった(04玲)。一方、祖母は農村で農業をやっているが、玲は農作業経験が全くない。玲の祖母は収穫した農作物を市場で売って生活費に充てている。一方、出稼ぎの両親及び親戚は祖母に一定の生活費を送っているため、祖母はまだ農業をやめないのか、玲も出稼ぎの両親も理解できない(06玲)。周は、祖母が農業をやり続ける意味は何かを尋ねたが、「分からない」と玲が答え、自分の両親と同じく農業をやる祖母の行動について納得できない態度を示した(08玲)。

このように、周の話題提起により、玲は農業をやり続ける祖母を捉え返し、内的言語生態場では〈農民→理解できない〉という意味を生成した。言い換えれば、玲は、農業は自己・世界にどの影響を与えるのか、自己と農業との繋がりを認識せず、自分を取り巻く世界に対する把握ができていないことが窺われる。従って、玲の生態学的主客構造は現実世界(客体)から自己(主体1)へつながる矢印は図示されるが、自己(主体1)から現実世界(客体)へつながる矢印は図示されない。この時点における玲と周の外的言語生態場及び玲の内的言語生態場を図2-1として示す。

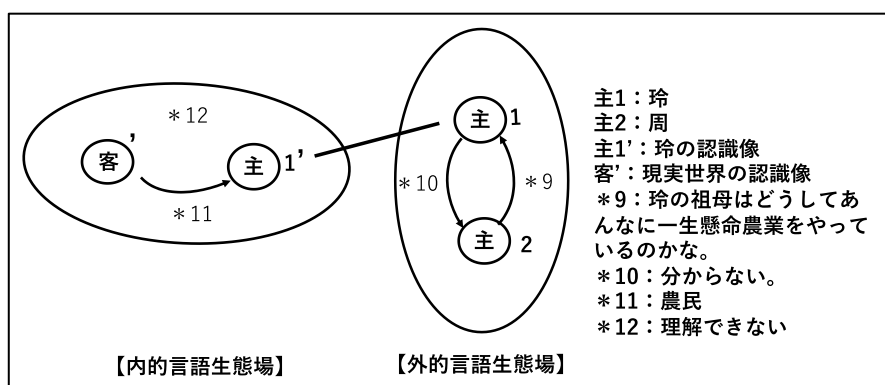


図2-1 玲と周の第2回の対話の言語生態場

玲の村は水も空気も綺麗で、村に来て畑を借りてビニール栽培や有機栽培などを行った

り、水工場を作ったりしている外部者もたくさんいることを周は静（元留守児童）から聞いた（20 周）。

- 20 周：玲の近所の人【元留守児童の静】の話によると、ここの農民は皆出稼ぎに行
って、農耕地が耕作放棄されているそうよね。そして、そこに外部から来た人
たちが畑を作っているらしいね。
- 21 玲：彼らは〇〇の近くにいる。
- 22 周：そこで何をしているの？
- 23 玲：知らない。そこを通りかかっても人を見たことはない。
- 24 周：〇〇は、景色がとても綺麗な場所だよね？ 水もとても綺麗だった。
- 25 玲：うん。
- 26 周：外部の人が来て玲の家の前でスイカ畑を作っていた話も聞いたよ。
- 27 玲：今はもうやっていない。
- 28 周：彼らは、夜になるとスイカに薬を注射して、昼になると、そのスイカを売っ
ていたそうよね。このことを知っている？
- 29 玲：彼らはもう他の場所へ移っていった。
- 30 周：どうして？
- 31 玲：私もよく分からない。多分ここでのビジネスがうまくいかなかったかもしれ
ない。
- 32 周：もし農民が農耕地を放棄して誰も作らなかつたら、ちょっともったいない
ね。
- 33 玲：今でも作っている人がいるよ。この間、そこで田植えをしていた人を見かけ
たもの。
- 34 周：お年寄り？ それとも若者？
- 35 玲：お年寄りだった。
- 36 周：今はほとんどお年寄りが農業をやっているよね。玲も農作業をやった経験は
ないよね？
- 37 玲：私はもちろんやったことがない。
- 38 周：やってみたいと思わない？
- 39 玲：いや、やりたくない。
- 40 周：どうして？
- 41 玲：大変そうだから。

周の発話を受けて、玲は、村には畑をやり続けている高齢者の農民もいると反論した（33 玲）。玲の祖母もそのうちの一人で、昔からずっと農業をやり続けている。毎日農作業をや

っている祖母と一緒に暮らしている玲には農業経験があるかどうかを、周が尋ねた（36 周）。すると、玲は「私はもちろんやったことがない」と強調し、農業に対する抵抗感を示した（37 玲）。さらに、玲は、農業を「大変そうだ」と捉え返し、将来も農業をやる可能性を否定した（41 玲）。

このように、外的言語生態場で周の質問や応答により、玲は祖母をはじめとする村の高齢者がやり続ける農業を捉え返し、内的言語生態場では〈農業→大変だ〉という意味が生成された。つまり、玲は、農業と自己の生活との繋がり、それから農業と世界との繋がり（飢餓人口の増加とか）を把握していないため、狭い意味で農業を捉えていることが窺われる。従って、玲の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつなぐ矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印は図示されない。この時点における玲と周の外的言語生態場及び玲の内的言語生態場を図 2-2 として示す。

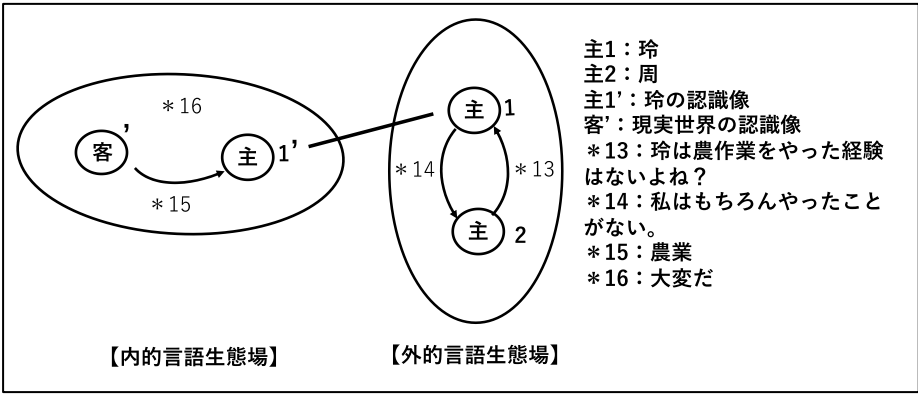


図 2-2 玲と周の第 2 回の対話の言語生態場

以上をまとめると、第 2 回の対話では、周の問題提起や質問により、玲は農業及び農民を捉え返した。第 2 回の対話の全体図を図 2-3 として示す。

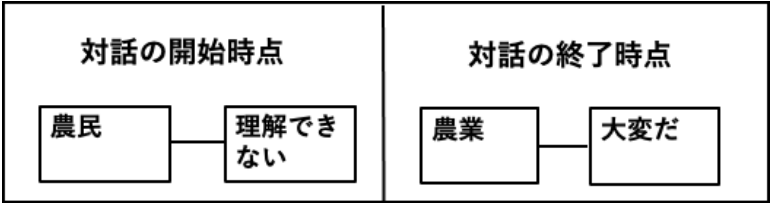


図 2-3 玲と周の第 2 回の対話の全体図

第 2 回の対話が終わった後、過去 2 回の対話を踏まえて玲と周は第 3 回の対話を行ない、互い気づいた点について出し合った。以下の対話は、周が玲の将来に対する考えを尋ねている場面である。

第3回の対話【2018年8月12日、一部抜粋】（以下の番号と下線は筆者）

- | 番号 | 発話内容 |
|----|---|
| 01 | 周：玲の親のここまでの生活はまあまあ安定しているよね。 |
| 02 | 玲：まあまあ。 |
| 03 | 周：玲もこのような生活を送りたいと考えている？ |
| 04 | 玲：いや、考えていない。 |
| 05 | 周：じゃ玲は将来何をしたい？ |
| 06 | 玲：何でもいい。 |
| 07 | 周：どうして親のような仕事はしたくないの？ |
| 08 | 玲：親がやっているような仕事がいいの？ 良くないよ。 |
| 09 | 周：お母さんは髪のリサイクルの仕事を、お父さんはバックを売る仕事をしているよね。玲は何をしたい？ |
| 10 | 玲： <u>私はネットで物を買う。</u> |
| 11 | 周：TAOBAOのように物を買うのね。自分で品物を仕入れて、写真を撮ってアップして、そしてネットで売る。 |
| 12 | 玲：うん。 |
| | (中略) |
| 16 | 周：ネット販売が普及すると、玲の村にあるような実体店は少なくなるよね。 |
| 17 | 玲：なに店？ |
| 18 | 周：実体店。つまり、実際に店舗を持つ店のことだよ。 <u>もし皆ネットで物を買うとなると、このような店は商売を継続できなくなって、だんだん少なくなるよね。</u> そうすると、どういう結果が生まれるだろう？ |
| 19 | 玲：どういう結果とは？ |
| 20 | 周：そういう店には店員もレジ打ちの従業員もいるから、もし店が潰れると彼らも仕事がなくなるからね。 |
| 21 | 玲：うん。 |
| 22 | 周：掃除する人も、警備員とかもいないでしょう。どう思う？ |
| 23 | 玲：まあね。 |
| 24 | 周： <u>このような実体店が潰れると、多くの人は仕事を無くして、他の仕事を探さないといけなくなる。もし仕事が見つからなかったら、ご飯も食べられなくなる可能性がある。</u> |
| 25 | 玲： <u>じゃ彼らもネットで物を買えば？</u> |

玲の両親は広西省に出稼ぎに来てからもう10年以上も経ち、一部の常連のお客さんを確保できたため、ある程度安定した収入を得ていることを、周は玲の両親へのインタビューを

通して知った（01 周）。一方、両親現在の仕事及び生き方に対して、玲は不満を感じている（08 玲）。玲は、毎日移動しながら苦労して物を売る両親の仕事より、ネット販売の方がどこも行かず楽にお金が稼げると捉え返した（10 玲）。しかし、ネット販売が普及されると、既存の実体店舗が潰されることになり、多くの従業員が解雇され、彼らの生活基盤が揺れると周が認識した（18 周、24 周）。特に、農村の実体店舗の存在は地元の余剰労働力を減らすことができ、地域の経済を活性化する効果もある。しかし、もしネット販売が普及されると、このような実体店舗がどんどん減っていくはずだと周が推測した。周の発話を受けて、玲は実体店舗で解雇された人も自分と同じようにネットショップを経営すればいいと提案したが、周が上で述べた一連の繋がりをまだ認識していないことが窺われる（25 玲）。

このように、外的言語生態場で周の問題提起により、玲は将来の職業（ネットショップの運営）を共有した。一方、ネット販売の普及による実体店の持続難と従業員の解雇などにつながると周が目にしたが、玲は、解雇された従業員もネットショップの運営をすれば大丈夫だと捉え返し、自分が直面している現実を取り巻く全体像を認識できておらず、自分と他者・世界の相即的關係を把握していなかったことが窺われる。従って、周の内的言語生態場では〈解雇された従業員→ネットショップの経営〉という意味が生成され、生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 2）へつながる矢印と、自己（主体 2）から現実世界（客体）へつながる矢印が図示される。それに対して、玲の内的言語生態場では〈解雇された従業員→ネットショップの経営〉という意味が生成され、生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつながる矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつながる矢印は図示されない。この時点における玲と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-1 として示す。

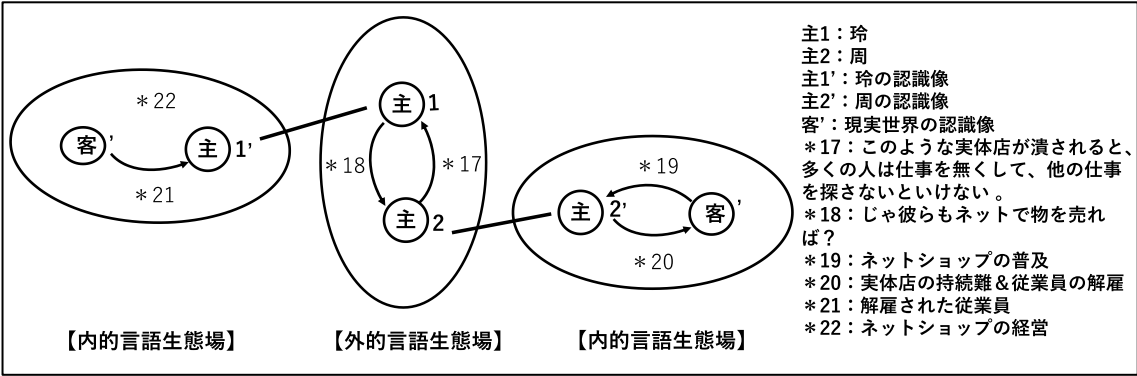


図 3-1 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場

一方、全ての人がネットショップを職業にすると、製造業及び専門職人が存在しなくなり、商品の入荷も保証できないと、周が捉え返した（26 周）。また、ネットショップの普及により、既存の実体店舗が閉鎖されることになることで、人と人との交流も少なくなり、人間関係も希薄化していくと予想される（31 周）。

26 周：もし皆がネットで物を売ようになったら、誰が物を作る？ 全ての人がネットで物を売となると、実体店が一つもなくなって、どういう社会になるのだろう。（後略）

（中略）

31 周：このような社会はいつか来る気がする。つまり、毎日家にいて、何か欲しければネットで買う。そうすると、人と人の交流の機会も少なくなるね。

32 玲：うん。

33 周：また、最近配達もロボットができるようになったそう。ロボットが荷物を分類して、配達してくれる。ロボットが発達する社会になると、人間の必要性がなくなるね。もしロボットが人間に代わって仕事するというような社会になったら、玲は何ができると思う？

34 玲：え？

35 周：今多くの工場では人間の代わりにロボットを導入しているでしょう。人間がやると、たくさんの従業員を雇わなきゃいけないし、ミスも起きるから、管理しにくい。ロボットは設定すれば、効率よく正確に完成してくれる。でも、仕事を全部ロボットに任せると、人間はやる事がなくなるから、従業員たちは全部解雇されてしまう。もし玲だったらどうする？

36 玲：分からない。

37 周：まだネットショップを開きたい？

38 玲：でも他の仕事が見つからないから、これをやるしかないでしょ。

（中略）

47 周：自給自足の生活はできないだろうか？

48 玲：できない。

49 周：祖母のように自分の食べ物を自分で作ることができたら凄いやね。

50 玲：うん。

周は、近年ネットショッピングの発達により、郵便物の配達員も不足になり、そして荷物の配達や分類ができるロボットを導入されたことも周が静（元留守児童）から聞いた。このようなロボットが導入されることによって、単純労働の仕事がどんどん少なくなり、そのような職業に就く人々も解雇され生活基盤が揺れると予想される。つまり、ネットショップの普及によるロボットの発達によって、従来人間が行われていた作業の多くはロボットに替えられ、人間ができる職業の枠が減ることで就職をめぐる競争も激化していくことになる。周が捉え返した（33 周）。一方、玲は、自分には特殊なスキルを持たず、仕事があれば生きていけないため、ネットショップの経営しかできないと反論した（38 玲）。特に、生ま

れた時から親の仕送りで生活してきた玲はお金がないと生きていけず、祖母のように自給自足で生きていくことは不可能であると強調した（48 玲）。

このように、周は、外的言語生態場でネットショップの普及による一連の問題〈ネットショップの普及→製造業の減少&人間関係の希薄化&ロボットの発達による単純労働者の解雇〉を捉え返し、玲に働きかけた。一方、周の質問や応答に対して、玲は、生きるスキルを持たない自分にはネットショップの経営しかできないと捉え返し、つまり〈ネットショップの経営→スキルがなくてもできる〉という意味を生成した。即ち、玲は、自己を起点にしてその繋がりを辿っていないため、自己を取り巻くコト・モノ・人の繋がりを把握していないことが窺われる。従って、玲の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつながる矢印は図示されるが、自己（主体1）から現実世界（客体）へつながる矢印は図示されない。一方、周は、ネットショップの普及という現実を多方面から捉え返し、それを取り巻くコト・モノ・人の繋がりを把握したことが窺われる。従って、周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体2）へつながる矢印と、自己（主体2）から現実世界（客体）へつながる矢印が図示される。この時点における玲と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図3-2として示す。

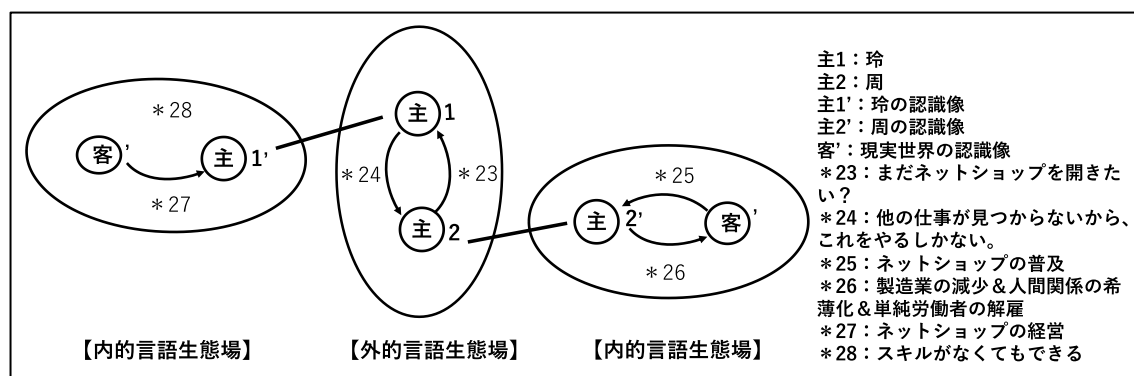


図3-2 玲と周の第3回の対話の言語生態場

上の対話では、ロボットが導入されることで人間ができる仕事が減ることを周が述べた。その発話を受けて、玲は日本のロボットの応用状況について、日本で生活している周に尋ねた（52 玲）。

- 51 周：これからロボットがもっと増えて人間の代わりに仕事をやってしまうと、人間がやる仕事が少なくなって、生きることも大変なことになるね。今日本では、店でお客さんにサービスをするロボットや家で年寄りの介護をするロボットがたくさん出ているから、ロボットが人間に代わって仕事をする日が遠くないと思う。
- 52 玲：日本にはロボットがたくさんあるの？

- 53 周：うん。特に工場にはロボットがたくさんあるから、人間がやる作業がとて
まなくなつた。このような日は中国にもいずれ来るだろう。
- 54 玲：恐ろしいね。
- 55 周：うん。そのような社会になると、私たちには何ができるかな。
- 56 玲：じゃ日本人は就職が難しいじゃない？
- 57 周：うん。とても難しい。ロボットが増えると人間がやる仕事が減る一方で、職
をめぐり競争も激しいから、ストレスがたまりやすい。もし競争で負けると淘汰
されるから、自殺する人も多い。日本では自殺する人は毎年2、3万人もいる。
- 58 玲：日本で？
- 59 周：うん。電車に乗っていると、毎日人身事故にあう。就職でストレスが溜まっ
て自分の生きがいを感じられなくなると自殺する。中国はまだそんなにひどく
ないよね。
- 60 玲：日本人はそんなに悲観的なのか？
- 61 周：悲観的じゃない。日本は先進国で技術が進んでいるから、最近は多くの単純
作業を全部ロボットに任せて、人間ができる仕事が少なくなってきた。また、外
国人労働者も日本にたくさん来ているため、日本人がやりたがらない仕事を全
部外国人労働者にやってもらっている。外国人労働者の給料は日本人より安い
が、彼らの母国の収入に比べるとずっといいから、とても喜んでやってくれる。
このように、ロボットの発達と外国人労働者の増加によって、日本人ができる仕
事がますます減って就職が難しくなった（後略）。

玲の質問を受けて、周は、日本でロボットが様々な領域で応用されていることを共有し、もし中国もそのような社会になったらどう生きていくのかを玲に問い返した（周 53）。周の質問に対して、玲は直接に答えなかった。一方、玲は、ロボットが発達している日本にいる日本人の就職の厳しさに目を向けた（56 玲）。言い換えれば、玲は、周が上で述べたロボットの発達による人間の職業の減少という繋がりを認識し、その認識を踏まえてロボットの発達による日本人の就職難と捉え返したと言える。玲の発話をを受けて、周も賛同し、さらに日本人の就職難による自殺率の上昇という繋がりを説明した（57 周、59 周）。

このように、外的言語生態場で周と玲の応答により、ネットショップの普及によるロボットの発達から、ロボットの発達による日本人の就職難という一連の繋がりを辿った。玲は、周の応答により、ネットショップの普及による一連の繋がりを把握でき、その認識に基づいてその繋がりをさらに拡張したことが窺われ、内的言語生態場では〈ロボットの発達→日本人の就職難〉という意味が生成された。従って、玲の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体1）へつなぐ矢印と、自己（主体1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。一方、周の内的言語生態場では〈ロボットの発達→自殺率の上昇〉という意味

が生成された。周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 2）へつなぐ矢印と、自己（主体 2）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における玲と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-3 として示す。

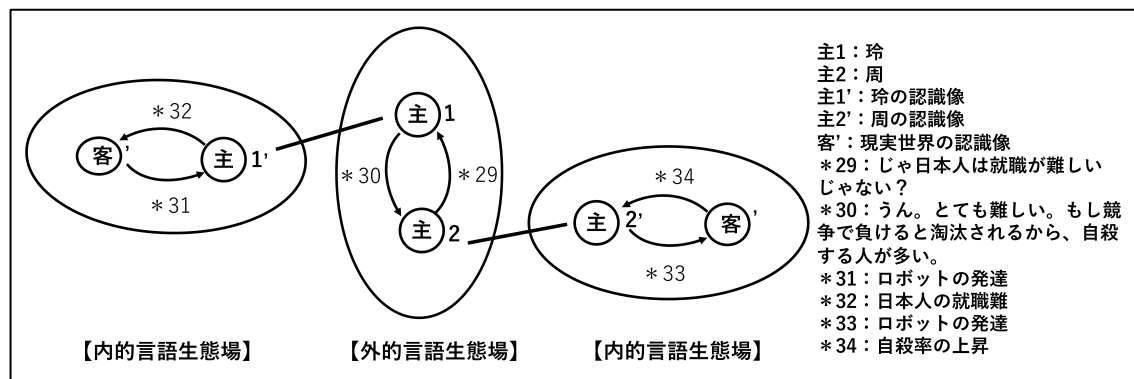


図 3-3 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場

玲は、周の説明（日本の就職の厳しさ）を聞いて、上の対話の続き（後略）では周の今後の進路を聞いた。また、周の家族の生活現状にも関心を示し、周の両親が今でも農村で自給自足の生活をしていることを聞いて、周及び周の兄弟の親不孝を批判した。つまり、玲は、周及び周の兄弟が金銭的なサポートをしていないから、両親が仕方なく農業をやっていると捉え返した。玲の反応を受けて、周は自給自足によって安定な生活基盤を保てるため、両親は金銭的なサポートがなくても自力で生きていけると反論した。つまり上で述べたネットショップの普及による一連の繋がり（職をめぐる競争の激化、人間関係の希薄化、就職難、自殺率の上昇など）を踏まえて捉え返したと言える（244 周）。

- 244 周：だから農民は仕事がなくとも、家で畑とかやればまだ生きていけるんだよね。
- 245 玲：そうね。でも農業は大変だ。
- 246 周：都市にいと、皆がお米を買って食べるでしょう。
- 247 玲：うん。
- 248 周：玲の村の農民のように皆農業をやめたら、自分の食べるお米も全部輸入することになる。輸入品はいつでも値上がりする可能性があるから、もし仕事不安定で給料も高くなかったら、ご飯も食べられないかもしれないね。そうしたら、どうやって生きていく？
- 249 玲：じゃ、カップラーメンを食べる。

玲の応答（周の両親はお金のサポートがないから農業をやっている）を受けて、周は、ネットショップの普及による一連のつながりを踏まえて農民の出稼ぎによる農業の衰退を述

べ、さらにそのつながりを拡張した（248 周）。具体的に言うと、出稼ぎ農民が増えることで農業が衰退し、国内の食糧自給率が低下するとともに、海外輸入の食糧を購入することで食糧を得るためのリスクが高くなり、自己の生活基盤が揺れやすいと周が捉え返した。そのため、玲の祖母及び周の両親のように農村で農業を主な生活基盤として生きる農民は、たとえ雇用されず現金収入をもらえなくても食料には困らず、持続的な生き方ができると周が認識した。一方、玲は、出稼ぎ農民の増加による農業の衰退は主食の米だけに支障が生じると捉え、米以外の食べ物（カップラーメン）を主食にすれば生存の危機はないと反論した（249 玲）。

このように、周と玲は自己を取り巻く世界の人々（両親、農民）の生き方を辿ることによって、出稼ぎ農民の増加による農業の衰退でもたらされた悪影響を捉え返した。そして、周は、自己と世界との繋がりをよく把握した上で、自己の生存危機と現実世界と関連づけて捉え返し、内的言語生態場では〈農業の衰退→国内の食糧自給率の低下〉という意味が生成された。一方、玲は、周の説明を受けて、農業の衰退は主食の米だけに影響を与えると捉え、そして内的言語生態場では〈農業の衰退→米以外の食べ物を主食にする〉という意味が生成された。従って、周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 2）へつながる矢印も、自己（主体 2）から現実世界（客体）へつながる矢印も図示される。玲の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1）へつながる矢印は図示されるが、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつながる矢印は図示されない。この時点における玲と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-4 として示す。

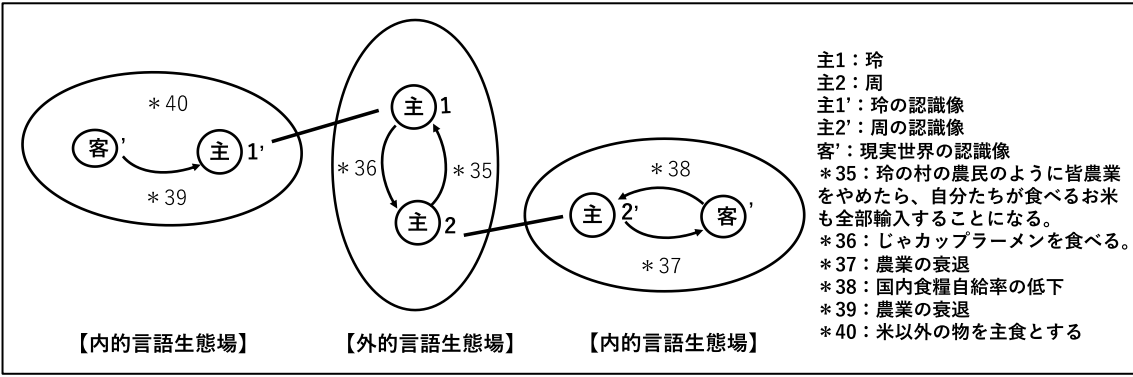


図 3-4 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場

出稼ぎ農民の増加により農業が衰退し、国内の食糧自給率の低下に繋がり、海外の食糧を輸入することになる。近年中国も国内の食糧自給率が下がってきて、海外輸入の食糧の量が年々増えている。

250 周：カップラーメンも外国から輸入することになるよ。

251 玲：そうか。

- 252 周：うん。だから、もし食糧を外国から買うと、コントロールできない要因が
たくさんあるから、自分の食べ物も保証できない。昨日読んだニュースでは、
中国は今世界で最も多くの穀物を輸入している国だと書かれてあった。これは
何を表している？
- 253 玲：何を？
- 254 周：つまり今の中国には農民がとても少なくなって、国内で作っている食糧が
足りないから、海外からたくさん輸入している。でも他の国の食糧をたくさん
輸入したら、その国の人は何を食べるか。だから、中国は食糧をたくさん輸入
すればするほど、他の国の食糧を奪ってしまうことになる。中国のようにお金
を持っている国だったらいっぱい輸入できるけど、アフリカのような貧しい国
だったらどうするか。もし私たちに食糧を取られたら、彼らは食糧を作っても
食べられないことになる。
- 255 玲：アフリカの人はとてもかわいそうだ。
- 256 周：そうね。どうしてかわいそうだと思う？
- 257 玲：アフリカも人口が多いから。
- 258 周：(前略) 中国は今お金があるから輸入の食糧を買えるけど、もしお金がな
かったら何も買えないよ。例えば戦争とかあった場合、お金もなくなって、農
業もやっていないし、その時は皆餓死してしまうでしょう。どう思う？
- 259 玲：だから農民は今でもまだ役に立つのね。
- 260 周：そうね。でも多く的人是それを認識していない。玲の両親も昔は農民だっ
たけど、今は農業をやりたいがらないでしょう。お金があれば何でも買えると思
っているから。でも、今自分が買っている食糧はどこから来ているのかは全く
考えていないよね。このお米はどの国から来ているのか、その国の人々はお腹
を空かしていないのか、というように周りのことに対してあまり関心を持って
いなくて、自分だけ食べられればいいと思っている。でも、もし自分で食糧を
作ったら、自分の分は保証できるでしょう。もし皆もそうしたら、他の国の食
糧は買わなくて済む。
- 261 玲：アフリカの人が一番かわいそうだと思う。
- 262 周：アフリカのドキュメンタリーやテレビ番組を見たことがあるの？
- 263 玲：うん。
- (中略)
- 277 周：この3回の対話を通じてどんな気づきがあった？どう思った？
- 278 玲：このような話は初めて聞いたんじゃない。他の人も言っていたよ。
- 279 周：誰から聞いたの？
- 280 玲：祖母がよく話す。それから学校の先生からも聞く。

- 281 周：じゃ玲はちゃんと聞く？
282 玲：いつも左耳から入って右耳から出ていく。
283 周：私の話も左耳から入って右耳から出た？
284 玲：違う。
285 周：祖母や先生から聞くのに比べて、同世代から聞くと違う感じがするんだろうか？
286 玲：うん。

一方、中国のような経済力を持たない国にとっては、他国の食糧を買うのにお金もないため、自分の国で作られた分の食糧しか食べられない。しかし、もし中国のような大国が海外から大量の食糧を輸入すると、その国の人々の食糧の分を取ってしまい、彼らの生活基盤を揺らがすことになる。周が捉え返した（254 周）。さらに、農業の衰退により国内食糧自給率が低くなることで海外輸入の食糧に頼るとリスクが大きいと、周が続けて玲に説明した（258 周）。例えば、海外の食糧が値上げされたり、あるいは中国国内で何か変動があったりすると、食糧の輸入が保証されなくなる可能性が高い。さらに、もし国内の農業が衰退していくと同時に、海外の食糧も輸入できなくなると、世界の飢餓人口が増加すると周が捉え返した（258 周）。

このように、外的言語生態場で周の一連の働きかけにより、玲も農業の衰退による悪影響とリスクを把握でき、最後に「だから農民は今でもまだ役にたつね」という認識を得て、初めて農業の重要性に気づいた（259 玲）。玲の反応を受けて、周は自己を起点にしてその繋がりを辿り、さらにその繋がりを改善するためには一人ひとりから行動することが大事であることを強調した（260 周）。最後に、玲が今回の対話について振り返り、そして祖母や教師の話と、周との対話の違いを説明した（285 玲）。祖母や教師の「農民は大事で、農業は役に立つことだ」という言葉の本質を理解していなかったため、全然頭に残らないと考えられる。一方、周と対話的問題提起による対話を繰り返すことにより、玲は自己を起点にして自分と自己を取り巻く世界の現実（農民の出稼ぎによる農業の衰退）との繋がり、農業の衰退による一連の問題（国内の食糧自給率の低下、食糧確保のリスク上昇、飢餓人口の増加など）を把握でき、そして最終的に農業の重要性に気づき、農民を「役に立つ人間」と捉え返したと言える。

このように、外的言語生態場で周は農業の衰退による悪影響を説明し、玲に能動的に働きかけた。そして、周の内的言語生態場では〈農業の衰退→飢餓人口の増加〉という意味が生成された。つまり、周は、農業の衰退によるリスクを自国だけでなく他国の人々の生存危機と自己と関連づけて捉え、自己の生存と他者・世界の生存の繋がりを認識したと言える。一方、外的言語生態場で周の働きかけにより、玲は農民を「役に立つ人間」とであると捉え直し、内的言語生態場では〈農業→役に立つこと〉という意味が生成された。玲は、周の一連の働き

かけにより、農業の衰退による影響とリスクを辿ることによって、自己を起点にして自己の生き方と他者・世界との繋がりを把握できたと言える。従って、玲と周の生態学的主客構造は現実世界（客体）から自己（主体 1、主体 2）へつなぐ矢印と、自己（主体 1）から現実世界（客体）へつなぐ矢印が図示される。この時点における玲と周の外的言語生態場及び内的言語生態場を図 3-5 として示す。

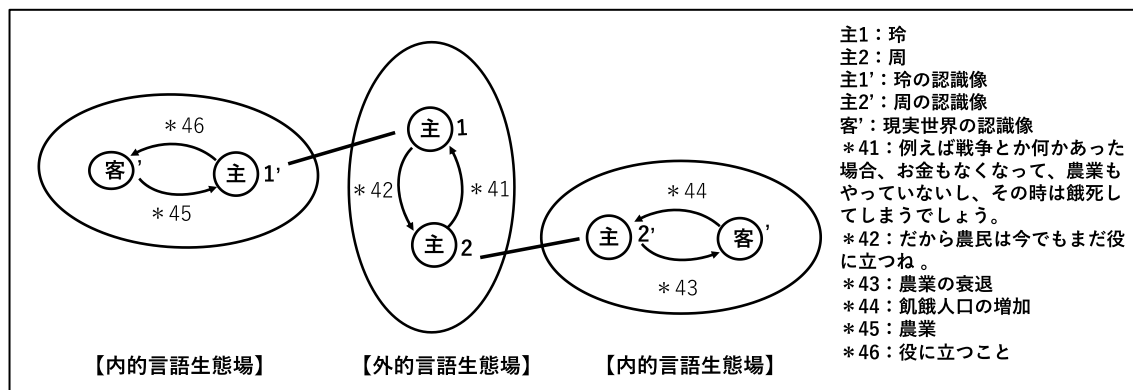


図 3-5 玲と周の第 3 回の対話の言語生態場

第 3 回の対話をまとめると、外的言語生態場で周が玲の将来の生き方（ネットショップの運営）という話題をきっかけにして、ネットショップの普及による一連の繋がりを説明し、さらにそれを踏まえて農業の衰退による影響を捉え返した。外的言語生態場で周の一連の働きかけことによって、玲は、自己を起点にして自分の生存の危機と他者・世界との繋がりを認識し、農業の重要性に気づき、第 2 回の対話で捉えた農業の意味を捉え直した。第 3 回の対話の全体図を図 3-6 として示す。

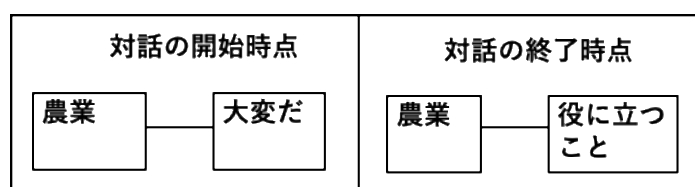


図 3-6 玲と周の第 3 回の対話の全体図

以上、対話的問題提起学習の事例から、周と対話を通じて、玲は自分の留守児童経験を捉え返し、生態学的意味の生成過程を見た。第 1 回の対話では、外的言語生態場で周の留守児童経験を辿ることによって、玲は自分の留守児童経験（両親の出稼ぎ、農民の出稼ぎ）を捉え返し、自分が直面している現象を単一要因または所与の現実として認識し、その現実を繋がりの中で把握しなかった。第 2 回の対話では、外的言語生態場で周の話題提起により、玲は農民と農業を捉え返したが、自己の生存と農業との繋がりを認識せず、自分と他者・世界の相即的關係を把握していなかったことが窺われる。第 3 回の対話では、周は玲の将来の生き方（ネットショップの運営）という話題をきっかけにして、ネットショップの普

及による一連の繋がりを説明し、さらにそれを踏まえて農業の衰退による影響を捉え返した。外的言語生態場で周の一連の働きかけことによって、玲は、自己を起点にして自分の生存の危機と他者・世界との繋がりを認識し、農業の重要性に気づき、「農業→役に立つこと」というように捉え直した。このように、第1回と第2回の対話では、玲は、自己と他者・世界とのつながりを認識せず、農業と世界の生存危機とのつながりを把握しなかったが、第3回の対話で周の一連の働きかけにより、自己と他者・世界とのつながりを認識し、農業の重要性に気づいたと言える。

以上を、生態学的主体性を成す契機の生成の過程を形成する三段階を辿って、玲の生態学的主体性を成す契機をまとめる。

まず、生態学的主体性を成す契機の生成のその1は、「自己を起点としてレバンスをたどり、自己・世界の相即的意味を把握する」である。第3回の対話では、周は、玲と関連付けやすい話題（将来の生き方について）を問題提起することによって、玲は自己を起点にして「ネットショップの普及」による影響を捉え返し、過去2回の対話に比べて能動的に対話に参加していたことが窺われる。言い換えれば、周の問題提起は玲が関連付けやすい話題であるため、自己を起点にして自己と世界との繋がりを辿ることができ、自己（主体）と現実世界（客体）との相即的な関係を把握できたと言える。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその1と考える。

次に、生態学的主体性を成す契機の生成のその2は、「自己の生の底流を成す生存の危機を起点としてレバンスをたどる」である。第3回の対話の後半では、周は、農業の衰退による一連の悪影響とリスクを説明し、自己と自己を取り巻く世界の人々の生存危機と関連づけて捉え返した。玲は、外的言語生態場で周の一連の働きかけにより、自己を起点にして自己の生存危機と他者・世界との繋がりを把握でき、農民を「役に立つ人間」とであると捉え返し、農業の重要性を認識した。つまり、自分の生存危機（食糧）に直接関わる話題を起点として自己と他者・世界とのつながりを辿ることによって、玲は自己と世界との相即的な関係を把握できたと言える。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその2と考える。

6.4 本章のまとめと総合的考察

6.4.1 本章のまとめ

以上、本章では、現留守儿童3人（宏・武・玲）は周と対話的問題提起学習を援用し、対話を通じて、それぞれの生態学的意味の生成過程を報告した。現留守儿童3人（宏・武・玲）が周と対話的問題提起学習による対話を繰り返すことで、それぞれにおいて、生態学的主体性を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界の繋がりを辿る社会的実践とはどのようなものか、という課題に対する答えは本章のまとめとして以下に述べる。

宏は、周と4回の対話を通じて、自分を取り巻く世界のコト・モノ・人（農民の出稼ぎ、農村の都市化、農業、農民、単純労働者、オフィス仕事）を捉え返した。宏は、「出

稼ぎ」のリスクを認識し、そのリスクから逃れる選択肢として「自給自足」という新たな未来像を見出したが、それは自己を起点にして自己を取り巻く世界を認識していなかった。本対話実践から見ると、宏と周は対話を4回繰り返されたが、ほとんど周が一方的に問題提起しながら対話を進めていたことが窺われる。言い換えれば、宏は今でも過去の経験（標準語の発音が悪くて笑われた）に囚われて言葉が十分に機能しておらず、世界認識を深めることを阻止し、生態学的主体性をうながす契機が形成されていなかったと考えられる。

武は、周と対話を4回繰り返すことで、自分の留守児童経験（「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し、「男尊女卑」、父親の給料不払い）と流動児童経験を辿り、自己を取り巻く世界（農村、都市）及びその世界で生きている人々（農民、単純労働者、多くの中国人）の生き方を捉え返した。また、周の問題提起により、武は自分の父親をはじめとする建設労働者の給料不払いについて捉え返し、自分の既有知識を生かしてその問題の解決策を見出し、生態学的主体性をうながす契機が形成された。

玲は、外的言語生態場で周の一連の働きかけにより、自己を起点にして将来の生き方（ネットショップの運営）による影響を捉え返し、「ネットショップの普及」による実体店の持続難、従業員の解雇、人間関係の希薄化など一連の意味を生成し、自己（主体）と現実世界（客体）との相即的な関係を把握したことが窺われた。また、最後玲は農民を「役に立つ人間」と捉え返し、農業の重要性を認識した。即ち、玲は、周と農業の衰退による影響とリスクを辿ることによって、自己の生存危機と他者・世界との繋がりを把握でき、生態学的主体性をうながす契機が形成されたと言える。

6.4.2 総合的考察

(1)生態学的意味生成における問題提起の重要性

フレイレ（1979）では、被抑圧者の非識字農民は、自分の生活の中の問題を、対話を通じて、その現実を捉え返すことで、自分たちのような非識字農民を多く生み出す社会の変革に向けた実践を起こすことに成功したことを述べた。本章の現留守児童宏と周の対話例から見ると、外的言語生態場で周と対話を通じて、宏は自分の留守児童経験を捉え返したが、周が一方的に問題提起して対話を進め、宏自ら能動的に話そうとしないことが窺われる。そこで、宏は、自己を起点にして自己が直面している現実を把握できず、狭い範囲で自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を認識していたことが窺われる。一方、宏は、過去の経験（標準語の発音が悪くて笑われた）に引きずられ、自分が話す言葉に自信を失い、他人と話すことも消極的になったことを、周が宏と対話した後に宏の両親から聞いた。言い換えれば、本対話実践において、周と対話的問題提起を援用して対話を4回繰り返されたが、宏は自分が抱えている課題（標準語の発音が悪くて笑われたことで言語に対する自信がないこと）を対話のテキストとして取り上げられなかったため、それを問題提起することもできず、問題の解

決に向けての対話も実現できなかった。言い換えれば、宏は、対話的問題提起の対話テキスト及び周との対話の中で、自分が抱えている課題を取り上げられなかったため、それを問題提起できず、自己を起点にして自己が直面している現実を把握できず、狭い範囲で自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を認識していたことにつながると考えられる。

(2)言語の機能不全による想像力の縮退

「言葉が十分機能していないという言語生態は、ことばの問題に留まらず、人の世界の見方、生き方、人と人の繋がり、人のアイデンティティーの問題と密接に繋がっている」という考えもある（岡崎 2009a）。第6章では、現留守児童の宏は、過去の経験（標準語の発音が悪くて笑われた）に引きずられ、自分の発する言語に自信を失い、他人と話すことに対して消極的になり、言語本来の機能が十分果たしていないことが分かる。本対話実践においても、宏は周と対話を4回繰り返されたが、ほとんど周が対話を主導し、一方的に問題提起しながら対話を進めていたことが窺われた。また、宏がいる農村も出稼ぎ農民の増加と都市化の進みにより、人間関係が希薄し、会話できる相手も少なくなった。このように、外的言語生態環境もそれを促す内的言語生態環境も保全されない中、言葉本来の機能が機能できなくなり、宏の世界認識、動基準観、人間関係観、自己のアイデンティティー観にも悪影響を及ぼしていることが窺われる。本対話実践において、宏は、周と対話を通じて、「出稼ぎ」のリスクを認識し、そのリスクから逃れる選択肢として「自給自足」という新たな未来像を見出したが、それは自己を起点にして自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を認識していないため、生態学的意味が生成されなかった。言い換えれば、宏は今でも過去の経験に囚われて自ら積極的に話すことができないため、言葉が十分に機能しておらず、狭い範囲で世界観、行動基準観、人間関係観、自己のアイデンティティー観を捉えていることが分かる。

(3)対話参加者の働きかけによる生態学意味の生成

本章の現留守児童玲と周の対話例から見ると、第1回の対話では、玲は自分の留守児童経験（両親の出稼ぎ、農民の出稼ぎ）を捉え返し、自分が直面している現象を単一の要因または所与の現実として位置付け、現実世界を自己との繋がりの下で把握していなかった。第2回の対話では、外的言語生態場で周の話題提起により、玲は農民と農業を捉え返したが、自己の生存と農業との繋がりを認識せず、自分と他者・世界の相即的關係を把握しなかった。第3回の対話では、外的言語生態場で周が農業の衰退でもたらされた悪影響とリスクを説明し、玲に能動的に働きかけた。玲は、対話のはじめは、「食糧」に対する認識及び自己の生存危機を実感していなかったため、農業の重要性及び自己と農業との繋がりを認識しなかった。しかし、その後外的言語生態場で周の一連の働きかけにより、玲は自己を起点にして自己の生き方と他者・世界との繋がりを把握でき、それによって農業の重要性に気づい

た。言い換えれば、外的言語生態場で周の一連の働きかけにより、玲は、自己と他者・世界との繋がりを把握でき、「農業」に対する位置付けを捉え返すことができたと言えよう。

(4)人間生態系と自然生態系の乖離による言語生態系の不全

第2章の理論的枠組みでは、自然生態系・人間生態系・言語生態系が相互交渉であり、また人間生態系と自然生態系が切り離されると言語生態系も不全な状態になると述べた(岡崎 2009a)。第5章では、元留守児童3人(静、彩、武)が留守児童として生活していた農村は、人間生態系と自然生態系がよく統合されていて、そして両者を仲立ちする言語生態系も保全された状態であったことが分かった。一方、第6章では、現留守児童3人(宏、武、玲)が生活している農村社会は、都市化と出稼ぎに行く農民の急増により、農業中心から非農業中心の農村に変わっている。農民の生活も便利になり経済的にも豊かになった一方、農業の衰退により農村コミュニティの連携が弱くなり、現留守児童問題の生活にも影響を与えていることが窺われる。現留守児童の宏と武は学校以外ほとんど一人で二階の部屋で引きこもり、自分の親や祖父母をはじめ、外部の人間と対面の交流がほとんどなされていないことが分かった。現留守児童の玲も農業をやり続ける祖父母を理解できず、普段も一緒に暮らしている祖父母と話すことが少ない。つまり、現留守児童3人とも両親・監護者とのディスコミュニケーションが見られ、自分の両親と監護者に対する信頼度も低いことが窺われた。言い換えれば、農村の都市化により農業が衰退し、農業活動による協働作業がなくなったため、人間と自然が切り離されるとともに、それを仲立ちする言語生態系にも影響を及ぼし、そのような言語生態系が不全な農村社会で育てられた現留守児童の人間生態系にも悪影響を与えると窺われる。

(5)農村社会環境の変動による三農に対する捉え方の変容

中国は2001年にWTOに加入して以来、グローバル化が進み、農村部も都市化が進んできた。そして、このような急激な社会変動の下で生まれた現留守児童は元留守児童と違って、日常生活では農業活動から疎遠され、農村・農民・農業の「三農」に対して否定的に捉える傾向があることが分かった。本章の現留守児童3人の対話事例から分かるように、3人とも出稼ぎ農民の増加と都市化の進化により大きく変動した農村環境の下で生まれ、そして自分を取り巻く農村・農業・農民に対して否定的に捉えていることが窺われた。具体的に見ると、武は、農業を「時代遅れ」と捉え、自分の両親をはじめとする農民を「能力がない人間」と位置付けていた。玲は、農業は「大変だ」と捉え、農業をやり続ける自分の祖母を含むすべての農民は「理解できない」と捉え返したことが分かった。宏、周と対話を通じて、「出稼ぎ」のリスクを認識し、そのリスクから逃れる選択肢として「自給自足」の生き方を見出したが、専門機械で農業を行うという考えから「自給自足」について十分認識していなかったことが分かる。このように、現留守児童が生まれ育った農村社

会は出稼ぎ農民の増加と都市化の進化により農業が衰退し、それによって人間生態系と自然生態系が切り離され、自己と自己を取り巻く世界のコト・モノ・人（農業、農村、農民）との関係やその全体を捉える基盤が乏しくなったことが窺われる。それによって、現留守儿童は自己（人間生態系）と農業（自然生態系）の一体化及び自己・他者・世界の生存危機の繋がりを捉えることが難しくなり、農村・農民・農業に対する位置付けも否定的であることが窺われる。

第7章 結論

本研究は対話的問題提起学習を援用して、対話を通じて、中国の元留守児童・現留守児童が生態学的主体性を獲得すると同時に、留守児童共同体生態場の構築の可能性について検討した。以下では、まず本研究の筆者でありながら対話の参加者でもある周の生態学的意味の生成過程を記述・分析していく。対話参加者とする周が本研究を通じて、生態学的意味の生成過程はどのようなものなのか、どのように生態学的主体性を獲得し、さらにどのような学びを得たかを見る。次に、【研究1】、【研究2】及び周の生態学的意味の生成過程の分析結果をまとめ、それを踏まえて考察を行う。また、対話的問題提起学習による留守児童共同体生態場の構築を目指す自他支援システムへの示唆を述べる。そして、最後に、今後の課題を提示する。

7.1 周の生態学的意味の生成過程及び学び

第5章と第6章では、元留守児童・現留守児童の生態学的意味の生成過程を見てきた。一方、周も、本研究の実践者でありながら対話の参加者として対話的問題提起学習に援用して、元留守児童・現留守児童と対話を繰り返すことで、周の生態学的意味の生成過程はどのようなものなのか、生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界の繋がりを辿る社会的実践とはどのようなものかについて、周の内外の言語生態場と実践生態場に着目して分析していく。以下では、周の生態学的意味の生成過程を言語資料及び図3に沿って見ていく。

本節で取り上げる資料は、周が本研究の実践を行う前に提出したゼミの振り返り、研究計画書の一部である。

まず、周が博士課程に入った一年目の振り返りで次のように書いていた。これが本研究を行う出発点であった。

「修士論文の研究をどうやって博士論文につなげていくのかを考えています。今はとりあえず文献をたくさん読んで、研究課題を見出す段階です。近年中国の農民工子女の教育が非常に深刻な問題になっていますが、実は彼らと上で挙げた支援教室の子どもたちの状況が非常に似ています。修士の研究をつなげて考えると、中国の農民工子弟を支援しているボランティアはどのように考えて彼らを支援しているのか、上で挙げた支援者たちの意識と

どのように違うのか、それに関する論文を探して読んでいこうと考えています。それから、当事者である流動児童や留守児童も調査して彼らがどのように現在の勉強状況を捉えているのか、または周りの人々とどのように関わっているのか、直接聞くことによってその実態を明らかにし、彼らに対して具体的な支援の仕方を探っていくことも今後の課題です。」(ゼミの振り返り 2017年4月8日)

図3に即して、現実生態場と意識生態場における認識・言語・実践の生成過程を見ていく。まず、図の中の一番右の列<現実生態場>の下(T1)の時点で発生した事態が起点である。上記の振り返りの中で、周は修士課程の研究(日本の言語少数派の子どもに対して支援をするボランティアの意識変容)と関連づけようとして、博士課程の研究は「中国の農民工子女に対する支援」に目を向けた。周は「近年中国の農民工子女の教育が非常に深刻な問題になっています」と認識し、そして、「彼らに対して具体的な支援の仕方を探っていく」ことを目的とすること、これが本研究の出発点である。ここで横長の楕円は、円で囲んだ主、つまり主体(周)が、客体、つまり農民工子女(留守児童と流動児童)を取り巻く世界に対して働きかけを示すものである。ここで*1のついた右向きの矢印は客体から主体に対して表した現実世界、つまり農民工子女が直面している厳しい現実世界の客体を示す。その客体からの反応は周が「農民工子女に対する支援策を探る」ために、それに関する研究を行う、つまり*2についた反応として返ってきた様相を左向きの矢印を示す。

この冒頭の実践が現実生態場で行われたのを踏まえて、その一番左の列である<現実生態場>で周という主体の中に(T2)の時点で、「農民工子女に対する支援策を探る」に関する具体的な調査方法についてゼミの先生・同級生と議論したことを示しているのが、<現実生態場>の中の<言語生態場>の中に描かれた横の楕円の様相である。そして、頭の中ではなく外での人と人との間の対話の場における言語生態場即ち外的言語生態場の生成である。その議論を通じて、周は「農民工子女」に関連する情報をさらに収集し、そして自分が研究しているテーマの重大さを認識した。一方、ここでは周は留守児童問題を研究テーマとして認識しており、自分との関連にまだ認識していないことが分かる。その認識についての振り返りは次のように書いていた。

「今月初旬に、「農民工子女」のことを研究すると決めた時、とても興奮しながらも不安もありました。なぜかというと、農村生まれの私にとってはこのテーマは比較的になじみやすいし、かつて自分もそのような問題にあったから生々しい現実でイメージしやすいです。

しかし、この2、3週間で「農民工」及び「農民工子女」に関する論文、ニュースやビデオなどを検索してみていて、それに関する情報がたくさん入ってくると、自分が研究していることが本当に重大なテーマだと分かりました。」（ゼミの振り返り 2017年4月22日）

（T2）で外的言語による議論を踏まえて、周は具体的な調査方法について考え始めた。そして、対話的問題提起学習の手法を援用してデータを収集することにした。対話的問題提起学習は、自分の生活や経験から「テキスト」を作ることが前提であるため、周が自分の過去の経験を文字化して調査協力者と対話することを計画した。それについての研究計画書には次のように書いていた。

「本研究は中国における農民工子女、彼らの保護者、学校の教師及び農民工子女を支援する支援者を対象に対話的問題提起学習の手法を使って調査を行う。まず、調査を実施する前に、対象者に調査目的とデータの扱い方などを説明し、対象者の同意を得る。同意を得た上で、筆者の子ども時代のエピソードを複数提示し、それらをめぐって対象者との間でやり取りを行い、多様な視点からエピソードの解釈を深める。最終的には対象者の生活から類似のエピソードを収集する。」（2017年7月16日 研究計画書）

このように、（T3）の時点では、周という主体1の意識生態場の中の認識生態場で、自問自答が行われた。即ち（T3）の横向きの楕円の内側の左の主体1が右側の主体1自身に向かって「調査はどう行うのか」という*4-1が投げられたのに対して、意識生態場の中で同様に*4-2「自分の過去の経験を書いてみてはどうか」と回答がなされる、つまり自答がなされる過程が存在していたと考えられる。意識生態場の中での事態であるので、円で囲んだ主の上にはアポストロフィーが付けられている。

そして、（T3）の認識を踏まえて、一番左の列の＜現実生態場＞の（T4）の時期では主体1である周が過去の経験を文字化して、自分のライフストーリー・テキストを作成した。そして、周が過去の経験を頭の中ではなく文字化することは、言語生態場即ち外的言語生態場の生成である。

このような（T2）（T3）（T4）の三段階の時期における対話、認識及び文字化を踏まえて、真ん中の列である＜意識生態場＞で周という主体の中に（T5）の時点で、*6「自分も留守児童であった」という認識が生まれたことを示しているのが、＜意識生態場＞の中の＜認識生態場＞の中に描かれた横の楕円の様相である。即ち周が（T2）で具体的な調査方法につい

て外的言語による議論を踏まえて、(T3) では対話的問題提起学習を援用するという認識を得て、そして (T4) で対話的問題提起学習のためにテキストを作成する中、(T5) の認識を得ることができた。即ち、対話的問題提起学習を援用して過去の経験を文字化することによって、周は初めて自分が留守児童であったことを認識した。

このような (T5) の認識を踏まえて、一番左の列の〈現実生態場〉の (T6) の時期 (2017 年 8 月) において、主体 1 である周と主体 3 の元留守児童の静の間で対話が 3 回行われた。第 1 回の対話では周が自分の過去の留守児童経験を辿り、そして静との対話を通じて (〈家の災難→私が原因〉) から〈家の災難→当時の政策・社会制度とも関係がある〉へと捉え直した。第 2 回の対話では静の過去の留守児童経験を捉え返し、そして静は両親の出稼ぎを所与の事実ではなく、具体的な事情 (弟の学費を稼ぐ、農業による現金収入の低下) があると捉え直した。第 3 回の対話では、二人は静の出身地が直面している現実 (出稼ぎ農民の増加、留守児童問題、農業の衰退、富裕層目当ての開発の進化など) について対話を積み重ねることで、全ての問題が繋がっていることを認識した。これも外での人と人との間の対話の場における言語生態場即ち外的言語生態場の生成である。

そして、この (T6) における外的言語生態場の生成とそこの中で行われた対話により、周という主体 1 の意識生態場の中の認識生態場で新たな認識を得た。静と 3 回の対話を積み重ねることで、周は自己を起点にして被与として与えられる現実世界 (出稼ぎ農民の増加、留守児童問題、流動児童問題、農村の物価上昇、農民工問題、農村地域の過疎化など) を辿る中、全てが悪循環になっていることを認識した。即ち、静との対話に触発され、周は初めて留守児童問題をつながりの中にある社会問題として捉え返し、そして (T7) の「留守児童問題は構造的に作られた社会問題である」という*8 の認識を得た。(T7) の場合も意識生態場の中で事態であるので、円で囲んだ主の上にはアポストロフィーが付けられている。

このように、(T7) の認識をもとに、一番左の列の〈現実生態場〉の (T8) の時期において、主体 1 の周と主体 2 のゼミの先生・同級生の間で言語生態学理論を勉強し始めた。週に一回の文献講読会は言語生態学理論を勉強しながら議論し、理論に対する理解を深めていた。これも頭の中ではなく、外での人と人との間の対話の場における言語生態場即ち外的言語生態場の生成である。

言語生態学理論の勉強をする中、教科書のように位置づけて読んでいた文献の中の「世界は 10 億の人が生存危機 (飢餓人口) にある」という一文に注目し、その現実に衝撃を受けた。(T6) の時期では、周が静の出身地を訪れて出稼ぎ農民の増加による農業の衰退という現実を見て、そしてそれについて静と議論した。そのため、周が主体的に「農業の衰退」と

「10 億人の飢餓人口」を関連づけて捉えようとした。さらに、言語生態学理論の勉強を通じて、周は自己と世界との繋がりを認識し、自分もその世界の一人であることを自覚した。即ち、(T8) の言語生態学理論の勉強を通じて、(T9) の*10-1「この世界には 10 億人の飢餓人口がいる」と*10-2「自分もその世界の中の一人である」という認識を得た。

そして、(T9) の認識を踏まえて、(T10) の時点では、当初の (T1) とは異なる実践が繰り返された。つまり、周は (T6) と (T7) で「出稼ぎ農民の増加による農業の衰退」という現実を見て、そして静と対話を通じてそれにつながる一連の問題を認識した。その認識を踏まえて (T8) で言語生態学の勉強をする中、(T9) の「この世界には 10 億人の飢餓人口がいる」という現実注目し、さらに「自分もその世界の一人である」という認識を得た。このように、自分をその繋がりの中にいるという認識を踏まえて、周は自己を起点にして「世界は 10 億の人が生存危機（飢餓人口）にある」を不可避とする繋がりの変えようとする試みとして、わずかでも自身が食糧生産に携わること、即ち (T10) という新たな実践（ベランダでの野菜栽培）を行った。

さらに、周は (T10) 自身が始めた実践（ベランダでの野菜栽培）の写真も SNS でアップした。静はそれを見て、自身の過去の留守児童として祖母の指導の下に従事した農作業経験から得た既有知識を呼び起こして、周に多くの野菜栽培の助言をした。即ち、(T6) で周と対話を通じて互いの留守児童経験を捉え返すことで、静は過去の農作業経験を呼び起こし、そして (T11) で周に助言ができたと言える。

このように、(T7) (T8) (T9) (T10) の 4 段階の時期における認識、対話及び実践を踏まえて、(T12) の時期（2018 年 8 月）では周は静と第 4 回の対話を行った。(T11) では静は周に野菜栽培の助言をしたが、その後静も遂にベランダで野菜を作り始めた。そして、第 4 回の対話のために周が静のアパートを訪れた時は、静のベランダ野菜の規模は最初より何倍も拡大されたことに気づいた。(T12) では周はその野菜を見学しながら、二人の野菜栽培経験を共有した。これも外での人と人との間の対話の場における言語生態場即ち外的言語生態場の生成である。

このように、(T10) の実践（ベランダでの野菜栽培）を通じて、そして (T11) と (T12) の時期において静と外的言語による対話を積み重ねることによって、周は新たな認識を得た。即ち、(T13) の*15-1「人間は自然の一部であり、両者は相互交渉的な関係である」と*15-2「生き物としての自分」という認識を得た。この認識は、人間生態系の下にある主体が客体である対象的自然の下にある野菜の生育・収穫という自給労働によって得られたと言える。周は、自給労働を通じてこの認識を獲得したことで、「人間生態系と自然生態系の

乖離」という現代社会で最も大きな課題を克服できたのである。

そして、周は（T1）から（T13）まで生態学的意味の生成過程を通じて、（T14）の時期においては自然生態系・人間生態系・言語生態系の相互交渉的な関係が形成され、3極構造が実現された。（T14）では、*16 つまりベランダ野菜の栽培で野菜を生産し、その結果*17 で野菜を生育し、収穫されたという成果が得られたことが示される。（T14）で進められた過程を示すのが横長の長方形の内部である。それは三つの楕円が組みあわさって示されている。一つは主1（周）と現実世界である客体1との間の往復の過程を示す左上から右下にかけて描かれた楕円の主1から客1に向けた矢印のもとにある*16である。これに対して現実世界である客体1から主体1に向けた矢印のもとにある*17野菜の生育と収穫という成果である。同時に主体3（静）と現実世界客体1との間の過程が左下主3から右の客体1にかけて描かれた右上がりの楕円の過程である。同じように*16と*17の往復の過程がそこには成立している。この二つの右下がりと左下がりの楕円は人間である主体1、主体3と現実世界との間になされた[自然との相互作用]を示している。

もう一つの楕円である縦長の楕円の中では、主体1（周）と主体3（静）との間での協働*18の過程が示されている。先ほどの主体と自然との間の過程が自然との相互作用であったのに対して、こちらは[社会的相互作用]を示すものである。こうして、（T14）では、主1－客1間・主3－客1間の[自然との相互作用]が、主1－主3間の[社会的相互作用]を仲立ちとしてなされている。

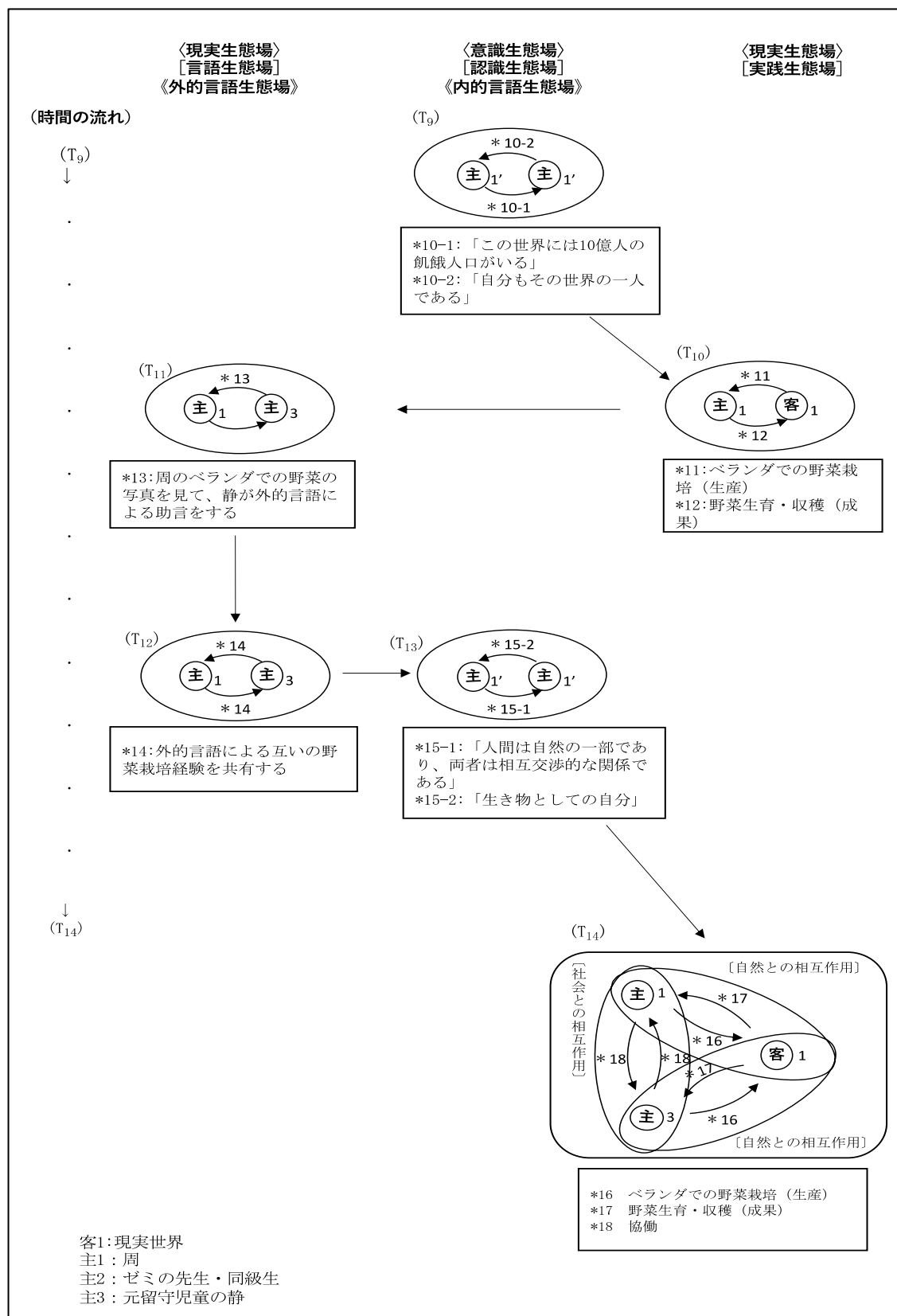


図3 周の生態学的意味の生成過程の図

以上、生態学的主体性を成す契機の生成の過程を形成する三段階を辿って、周の生態学的主体性を成す契機をまとめる。

まず、生態学的主体性を成す契機の生成のその 1 は、「自己を起点としてレバランスを辿り、自己・世界の相即的意味を把握する」である。以上を周の生態学的意味生成過程の図に基づくと、(T1) の実践は本研究の出発点として、(T2) では周が「農民工子女」に対する調査方法についてゼミの先生・同級生と議論し、その議論を踏まえて (T3) の自問自答を経て、対話的問題提起学習という手法を使うことにした。そして (T4) では対話的問題提起学習のテキストを作成することをきっかけにして、(T5) では「自分も留守児童の一人であった」ことを認識した。即ち、外的言語による議論を踏まえて、対話的問題提起学習という手法を援用することにより、周は自己を起点にして過去の経験を捉え返すことができ、そして自己も留守児童当事者であることを認識した。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその 1 と考える。

次に、生態学的主体性を成す契機の生成のその 2 は、「自己の生の底流を成す生存の危機を起点としてレバランスをたどる」である。周の生態学的意味の生成過程図に基づくと、(T6) で静との対話を通じて、周は「出稼ぎ農民の増加による農業の衰退」という現実を知り、(T7) ではそれによる影響と繋がりを認識した。そして、(T7) の認識を踏まえて、(T8) で言語生態学の勉強をする中、周は「10 億の人は生存危機（飢餓人口）にある」という言葉に注目し、主体的に「農業の衰退」と「10 億人の飢餓人口」と関連づけて捉えようとした。即ち、周は自己が直面した現実（農業の衰退）と世界の生存危機（飢餓人口の増加）の繋がりを辿っていることが分かる。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその 2 と考える。

さらに、生態学的主体性を成す契機の生成のその 3 は、「逆規定性の胚胎・逆規定としての形成」である。周の生態学的意味の生成過程図に基づくと、(T8) と (T9) を踏まえて、(T10) の時点で周はベランダでの野菜栽培の実践を始めた。即ち、自分で食糧を生産することによって他人の食糧を奪わないことが可能となり、世界の飢餓人口の減少にもつながることを周が認識し、その認識を踏まえて自己のあり方・関わり方を変える実践（野菜栽培）を行ったと言える。さらに、(T11) と (T12) で周は元留守児童の静と対話を通じてお互いの野菜栽培経験を共有した。そして、ベランダで野菜栽培をすることを通じて、(T13) で周は「生き物としての自分」を実感できた。このように、周は自然生態系と人間生態系の統合が可能になり、(T14) では自然生態系・人間生態系・言語生態系という 3 極構造が実現された。これが生態学的主体性を成す契機の生成のその 3 と考える。

以上、図 3 の生態学的意味の生成過程から分かるように、周は本研究を行うことを通じて多くの学びを得た。それらは次の 3 点でまとめられると考える。

(1)まず、周はゼミの先生・同級生と外的言語による議論を踏まえて、そして対話的問題提起学習を援用して自分の過去の経験を文字化することによって、「自分も留守児童の一人であった」ことを認識した。これは対話的問題提起学習のためのテキストを作成することを通じて得られた認識であり、自分の生活や経験を文字化して捉え返すことによって実現されたことである。そしてその認識を踏まえて、周が留守児童問題を本研究の課題だけでなく、自分自身の課題として位置付けるようになった。

(2)次に、周は元留守児童の静と対話を積み重ねることで、「留守児童問題は構造的に作られた社会問題である」という認識を得た。その認識を踏まえて、世界のコト・モノ・人は繋がりの中にあるものとして捉え返した。即ち、周は静との対話に触発されて、つながりの中で物事を捉える思考（生態学的な思考）を獲得した。

(3)それから、周は静の出身地で「出稼ぎ農民の増加による農業の衰退」という現実を目の当たりにすることで、農村と農業の崩壊という現実を痛感した。そしてその現実について静との対話を積み重ね、農業の衰退によって引き起こされる様々の影響についての認識を深めていった。その認識を踏まえて、言語生態学理論の勉強をする時、周は主体的に「世界は 10 億の人が生存危機（飢餓人口）にある」に着目し、それを静と議論を通して到達した認識「出稼ぎ農民の増加による農業の衰退」と関連づけて捉えようとした。このような認識を踏まえ、周は、自己を起点にして、「世界は 10 億の人が生存危機（飢餓人口）にある」を不可避とする繋がり of 不全を変えようとする試みとして、わずかでも自身が食糧生産に携わること、即ちベランダでの野菜栽培を始めた。このように、言語生態系・人間生態系・自然生態系が統合された三極構造が実現された。そして、言語生態系・人間生態系・自然生態系が保全された状態は本研究の課題だけではなく、今後の人生にも続く課題であり、持続可能な生き方を追求する上で考え続けていく必要があると考える。

7.2 本研究のまとめと考察

7.2.1 本研究のまとめ

本研究の目的は、対話的問題提起学習による対話を通じて、中国の元留守児童・現留守児童が自分たちの留守児童経験を捉え返すことで、留守児童共同体が構築され、中国の留守児童問題の根本的な解決方法の一つとして提案することである。そして、【研究 1】元留守児童の生態学的意味の生成過程、と【研究 2】現留守児童の生態学的意味の生成過程はどのようなものか、第 7 章では本研究の実践者と対話の参加者である周の生態学的意味の生成過程も見た。以下に、本研究のまとめをする。

【研究1】では、元留守児童3人（静・彩・健）が周と対話的問題提起学習による対話を繰り返すことで、元留守児童が生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界の繋がりを辿る社会的実践とはどのようなものかについて、元留守児童の言語生態場に着目して分析した。具体的には、静は、周が静の出身地に老人と子どもだけが取り残されたような農村の実態を問題提起することによって、静は自分を取り巻く世界（出身地の村）に生きている全ての農民へ拡がり、そして自分を取り巻く現実が捉え返すことで、留守児童問題は構造的に作られた社会問題であると認識し、自分もその繋がりの中の一人であることを捉え返した。その認識を踏まえて、静は留守児童当事者として主体的に留守児童問題の解決に向けて考え始めた。さらに、1年後に静は自己の生存を支える食糧の確保を他者の生存と関連づけて把握することによって、自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎し、具体的な実践（野菜栽培）が行われた。彩は、周が「キャンパスローン事件」を取り上げることによって初めて自己と世界との繋がりを認識できた。その認識を踏まえて、彩は「出稼ぎ農民の増加」という現実を起点にして、能動的に自己及び自己にとって身近な群像の生存の危機（離婚率の上昇、生きる意味の喪失など）を辿り、そしてすべてのことが繋がっていることを認識した。最後に、彩は自分の留守児童経験を文字化して周と議論することにより、自分も留守児童であったことを認識し、留守児童当事者として主体的に現実世界に向けて働きかけようとする意志が形成されたことが窺われた。健は、周の話題提起によって過去の農民の生活に目を向けるようになり、自分を取り巻く現実（出稼ぎ農民、農業の衰退、飢餓リスク、中国経済への悪影響）の繋がりを辿り、そして自己（主体）と他者・現実世界（客体）との相即的關係の把握を能動的に進めた。その認識を踏まえて、健は、自分を取り巻く世界（農村、都市）のコト・モノ・人を能動的に捉え返し、そしてその世界のあり方及びリスクをよく認識した上で自分の未来像を見出した。

【研究2】では、現留守児童3人（宏・武・玲）が周と対話的問題提起学習による対話を繰り返すことで、生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界の繋がりを辿る社会的実践とはどのようなものかについて、現留守児童の言語生態場に着目して分析した。具体的には、宏は、周と対話を4回繰り返しながら現在の留守児童経験を捉え返したが、自分が直面している問題（両親の出稼ぎ、農民の出稼ぎ）を所与の事実として認識し、自己と現実世界との繋がりを認識していなかった。また、周と対話を通じて、宏は「出稼ぎ」のリスクを認識し、そのリスクから逃れる選択肢として「自給自足」という新たな未来像を見出したが、それは自己を起点にして自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を把握していなかった。さらに、宏と周の対話はほとんど周が一方的に問題提起しながら対話を進めていたことから、宏は今でも過去の経験に囚われて自ら積極的に話すことができないため、言葉が十分に機能しておらず、狭い範囲で世界観、行動基準観、人間関係観、自己のアイデンティティー観を捉えていることが分かる。武は、周の留守児童経験を

辿ることをきっかけにして、自分の留守児童経験（「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊し、「男尊女卑」、父親の給料不払い）を捉え返し、自己（主体）と現実世界（客体）の繋がりを認識した。また、周の問題提起により、武は自分の父親をはじめとする建設労働者の給料不払いについて捉え返し、自分の既有知識を生かしてその問題の解決策を見出し、生態学的主体性をうながす契機が形成された。しかし、その認識は次の対話へ移行せず、武の生態学的意味の生成過程は行きつ戻りつしていることが分かった。玲は、周の将来の生き方（ネットショップの運営）という話題をきっかけにして、ネットショップの普及による一連の問題及び農業の衰退による影響を捉え返した。外的言語生態場で周の一連の働きかけことによって、玲は、自己を起点にして自分の生存の危機と他者・世界との繋がりを認識し、農業の重要性に気づき、「農業→役に立つこと」というように捉え直した。つまり、周の一連の働きかけにより、玲は自己と他者・世界とのつながりを認識し、農業の重要性に気づいたと言える。

最後に、周の生態学的意味の生成過程を見る。まず、周が外的言語による議論を踏まえて対話的問題提起学習による対話のテキストを作成する中、自分が留守児童であったことを認識した。また、周が元留守児童静と対話を積み重ねることにより、留守児童問題を繋がりの中にある問題として捉え返した。さらに、その認識を踏まえて、言語生態学理論の勉強をする時、周は主体的に「世界は10億の人が生存危機（飢餓人口）にある」に着目し、それを静と議論を通して到達した認識「出稼ぎ農民の増加による農業の衰退」と関連づけて捉えようとした。このような認識を踏まえ、周は、自己を起点にして、「世界は10億の人が生存危機（飢餓人口）にある」を不可避とする繋がり of 不全を変えようとする試みとして、わずかでも自身が食糧生産に携わること、即ちベランダでの野菜栽培を始めた。さらに、周は元留守児童の静と野菜栽培経験を共有することにより、自然生態系・人間生態系・言語生態系という相互交渉的關係が形成され、三極構造が実現された。

7.2.2 言語生態系・人間生態系・自然生態系の相互的交渉の観点による考察

留守児童共同体生態場の構築に向けて、研究1と研究2の分析結果をどのように位置付けるのだろうか。以下、研究1、研究2及び周の生態学的意味の生成過程の分析結果を言語生態系・人間生態系・自然生態系の相互交渉の観点から考察する。具体的には、「言語生態のあり方の良さは人間生態のあり方の良さ」、「外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉による言語生態の保全」、「生態学的思考による繋がり of 改善」の3つから述べたい。

(1)言語生態のあり方の良さは人間生態のあり方の良さ

「言語生態のあり方の良さは人間生態のあり方の良さ」について、研究1の元留守児童の

静と周の生態学的意味生成過程の分析結果から考察する。元留守児童の静は、周と4回の対話を繰り返す中で、自己を起点にして、自己（留守児童）を取り巻く他者・世界の生存の不安性・危機性との繋がりを把握することができ、自己もその繋がりの中の一人であることを自覚し、その繋がりを変えようとして、具体的な実践（ベランダでの野菜栽培）を行ったことが分かった。また、周は、外的言語による対話と内的言語による自問自答を踏まえて、自己が留守児童当事者であり、そして留守児童問題を構造的に作られた社会問題として認識した。さらに、その認識を踏まえて、自己が置かれている現実（農業の衰退）と他者の生存危機（飢餓人口）を関連づけて把握することによって、自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎し、具体的な実践（野菜栽培）を行ったことが分かった。

この結果について、第2章で述べた「言語生態系・人間生態系・自然生態系のトータルエコロジー」に基づいて考えてみる。2.2.1では、グローバル化・都市化の進化により、人間生態系と自然生態系が切り離され、それによって人間生態系と自然生態系を仲立ちする言語生態系も不全な状態になることを説明した。本研究では元留守児童の静と周が外的言語生態場による対話及び内的言語生態での自問自答・認識を繰り返す中で、自分の人間生態の不全を認識し、その不全を変える実践（野菜栽培）を始めた。そして、周と元留守児童の静は「社会的相互作用」とともに、「自然との相互作用」も成立し、自然生態系・人間生態系・言語生態系という相互交渉的な関係が形成された。つまり、静と周は外的言語生態環境と内的言語生態環境を保全することで言語生態を良い状態にし、それによって人間生態も良い状態になったと言える。

(2)外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉による言語生態の保全

「外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉による言語生態の保全」について、研究1、研究2と周の生態学的意味の生成過程の分析結果から考察する。まず、研究1では、元留守児童3人（静・彩・健）は周との対話を繰り返すことで、自分の留守児童経験を辿ることを通じて、自分を取り巻く世界（農村）のコト・モノ・人を能動的に把握し、そしてその世界のあり方及びリスクをよく把握したことが分かった。研究2では、現留守児童3人（宏、武、玲）は周との対話を繰り返す中で、自分の留守児童経験を捉え返すことができ、自分を取り巻く世界（農村）のコト・モノ・人を捉え直し、自己と世界の相即的關係の把握を進めていたことが分かった。周も、外的言語による対話と内的言語による認識を繰り返す中で、自分も留守児童であったことを認識でき、留守児童当事者として主体的に元留守児童・現留守児童と対話していたことが分かった。

この結果について、第2章で述べた「外的言語生態場と内的言語生態場の保全の必要性」に基づいて考えてみる。2.2.2では、留守児童が自分を取り巻く世界について「なぜなのか」という問いが発せられないのは、世界観、それを形作る認識、概念など「言語の内的生態環境」と呼ばれるものに不全があることと、そうした問いを問いかける相手がいない、つまり「言語の外的生態環境」と呼ばれるものに不全があることを説明した。本研究では、周が元留守児童・現留守児童との対話を繰り返し、彼らと共に留守児童経験を捉え返したことで、つまり人と人の間の外的やりとりは、「外的言語生態環境」を保全できたと考える。また、元留守児童・現留守児童が周との対話を繰り返す中で、自問自答のような自己内対話の形で、つまり彼らの頭の中のやり取りを生み出したことが、「内的言語生態環境」を保全できたと考える。このように、外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉的な言語使用によって言語生態が保全されることで、彼らの人間生態にも良い影響が与えられると考えられる。

(3)生態学的思考による繋がり改善

「生態学的思考による繋がり改善」について、研究1と周の生態学的意味の生成過程の分析結果から考察する。まず、研究1では、元留守児童の静は、周と4回の対話を繰り返す中で、自己を起点にして自己と自己（留守児童）を取り巻く世界の繋がりを辿り、そして自己もその繋がりの中の一人であることを自覚し、その繋がりを変えようとして具体的な実践（ベランダでの野菜栽培）を行ったことが分かった。また、元留守児童の彩は外的言語生態場で周の問題提起をきっかけにして、初めて自己と他者・世界との繋がりを認識し、そして自分も留守児童であることを自覚し、留守児童当事者として主体的に現実世界に向けて働きかけようとする意志が形成されたことが分かった。さらに、周は、外的言語による対話と過去の経験を文字化することによって、自分が留守児童当事者であることに気づき、そして静と対話を通じて留守児童問題は構造的に作られた問題であることを認識し、さらに言語生態学の勉強をすることで自己と他者の生存危機を関連づけて把握することによって、自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎し、具体的な実践（野菜栽培）を行ったことが分かった。

この結果について、第2章で述べた「外的言語生態場と内的言語生態場の保全の必要性」に基づいて考えてみる。2.2.3では、「生態学的思考」とは、一つの出来事や現象が起きた時、それは多くの事柄の繋がりでできていると捉える思考であることを説明した。つまり、その現象を取り巻く世界の「コト・モノ・人の繋がり方」を変え、新たな繋がり方を形作ることで問題の解決につながるという捉え方である。本研究では、元留守児童の静、彩と周は

外的言語生態場で過去の留守児童経験を捉え返すことで、自分を取り巻く世界のコト・モノ・人の繋がりを辿ることができ、そして自分たちもその繋がりの中の一人であることを認識した。その認識を踏まえて、元留守児童の彩は今後留守児童問題の解決に主体的に働きかけようとする意志が窺われた。そして、元留守児童の静と周は自己を起点にして、その繋がりを変えようとする実践（野菜栽培）を行なった。すなわち、元留守児童の静、彩と周は対話を繰り返すことによって、自分を取り巻く問題及び現象は単一要因ではなく、多くの事柄の繋がりでできていることと捉え、いわゆる「生態学的思考」が形成された。そして、このような「生態学的思考」を持って自分を取り巻く世界のコト・モノ・人の繋がりを捉え、そしてその繋がり不全を変える実践が行われたと言える。

以上、言語生態系・人間生態系・自然生態系のトータルエコロジーの視点から、研究 1、研究 2 と周の生態学的意味の生成過程の分析結果を考察した。その中で、「言語生態のあり方の良さは人間生態のあり方の良さ」は、「言語生態系・人間生態系・自然生態系のトータルエコロジー」の一部であると言える。また、「外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉による言語生態の保全」は、外的生態環境と内的言語生態環境の相互交渉における分析であると捉えられる。さらに、「生態学的思考による繋がり改善」は、生態学における分析であると捉えられる。

こうした分析や考察から、留守児童問題を解決するためには、外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉による言語生態の保全が重要であることが示唆された。その中で、外的言語生態場を通じて、「生態学的思考」を育てることも重要である。さらに、言語生態を保全することで人間生態も良い状態になり、そして言語生態系・人間生態系・自然生態系の相互交渉的関係も形成されていく。そのため、留守児童に対する支援は、言語的支援が重要であることが示された。次節では、研究 1、研究 2 と周の生態学的意味の生成過程の分析と考察から、対話的問題提起学習を援用して留守児童共同体生態場の構築のために考えられる自他支援システムの支援のあり方についての示唆を述べる。

7.3 留守児童共同体生態場の構築を目指す自他支援システムへの示唆

本節では、対話的問題提起学習による留守児童共同体生態場の構築に向けて、研究 1 と研究 2 の分析と考察から得られた自他支援システムの支援のあり方についての示唆を述べる。留守児童の人間生態を良い状態にするためには、外的言語生態環境と内的言語生態環境の相互交渉による言語生態環境の保全が必要である。内的言語生態環境は外的言語生態環境によって促されるため、まず外的言語生態環境の保全が重要である。そして、外的言語生態

環境を保全するための対話的問題提起学習による対話実践のあり方について、具体的に「対話のテキスト」、「対話の回数」、「対話の参加者」の3つから述べたい。

(1)対話のテキスト

フレイレ（1979）は、非識字者の農民たちは自分の生活の中の問題を、対話を通じて、その現実を捉え直し、読み書き能力を獲得するとともに、自分たちのような非識字農民を多く生み出す社会の変革に向けた実践につながったことを第2章で述べた。また、フレイレの問題提起型教育に由来した対話的問題提起学習による日本語教育の対話実践では、日本人母語話者と外国人学習者が互いの違いを理解しながら、ともに暮らす上で生じる生活上の諸問題に対話で共有し、問題の解決に向けて主体的に関わっていたことも第3章で述べた。本研究も、研究1の元留守児童の静、彩及び周が自分たちの留守児童経験を対話のテキストとして文字化することによって、自分を起点として自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を捉え返すことができ、そして留守児童当事者として認識するようになり、主体的に留守児童問題の解決に働きかけようとする意志が形成されたことが分かった。

このように、対話的問題提起学習を援用して自分の生活や経験を文字化して対話のテキストにすることは、自分が抱えている課題を見つけ出すことができ、さらに対話を通じて実質的な問題解決につながると考える。そのため、対話的問題提起学習による対話を行う時、自分の日常生活から対話のテキストを作成することが大事である。そのテキストを作成することによって自分が置かれている現実を捉え返すことができ、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人の繋がりを辿り、そしてその繋がりの中にある自己を自覚することで、主体的に社会に向けて働きかけていくと期待できるだろう。従って、対話的問題提起学習を援用して留守児童と対話をする場合、留守児童の日常生活や経験を対話のテキストとすることが重要である。

(2)対話の回数

本研究では、中国の元留守児童・現留守児童は周とそれぞれ3回以上対話を通じて、互いの留守児童経験を捉え返すことで、自己と世界との相即的な関係を把握し、生態学的意味の生成過程を見た。本研究の分析結果から見ると、最初の対話では自己と世界との繋がりを見出せなかったが、対話を積み重ねることにより、元留守児童・現留守児童の認識に変容が起き、対話の内容も深まった。そして、その認識の変容及び深化によって、元留守児童・現留守児童は主体的に自己を取り巻く世界のコト・モノ・人を捉え直し、世界と自己との繋がりを把握した上で、その繋がりを変えようとする具体的な実践へつながったことが窺われた。また、理論的枠組みで述べたように、激動するグローバル化社会において、人々の生存が脅かされている人間生態系に関わる「なぜなのか」という問いを、繰り返して問いかけていく

ことが必要である。特に、元留守児童・現留守児童のような構造的に仕組まれている存在こそ、対話を繰り返すことで、自分が仕組まれている社会構造を批判的に捉え返し、主体的にその現状を変えていく（逆規定）ことが求められる。従って、留守児童を対象とする対話的問題提起学習による対話を行う場合、1回か2回だけではなく、複数回の対話を行うことがより効果的であると考ええる。

(3)対話の参加者

①元留守児童

研究1では、元留守児童3人（静・彩・健）と周は対話的問題提起学習を援用して対話を繰り返す中で、自己を起点にして留守児童を取り巻く世界との繋がりを見出し、留守児童問題の解決に向けて能動的に働きかけようとする意志が形成され、その繋がりを変えていこうとする主体性を獲得したことが窺われる。また、元留守児童（静・健）は、過去の留守児童経験が自分を成長させてくれる経験だと肯定的に評価し、それを踏まえて今後自己の未来像を見出したことが分かった。つまり、今後対話的問題提起学習を援用して現留守児童と対話を行うとき、このような元留守児童が主体性を発揮し、現留守児童とともに留守児童を生み出す構造を批判的に捉えることにより、留守児童問題の解決につながることを期待できる。そのため、今後留守児童共同体を構築する際に、元留守児童は対話実践活動中のキーパーソンとして位置付けることができると考えられる。

②現留守児童

研究2では、現留守児童3人（宏・武・玲）は周と対話的問題提起学習を援用して、対話を繰り返すことで、自分の留守児童経験を捉え返し、生態学的意味の生成過程を見た。そのうち、宏は周と4回の対話を繰り返して自分の留守児童経験を捉え返したが、自己と世界との繋がりを認識できず、直線的な思考が進んでいたことが分かった。また、武は周と4回の対話を繰り返して自分の留守児童経験を捉え返すことにより、自己を取り巻く世界の事象（「一人っ子政策による罰金・家の取り壊し」、「お年寄りの男尊女卑」、「父親の給料不払い」）を捉え直したが、行きつ戻りつする生態学的意味の生成過程であった。さらに、玲（13歳）の場合は、第1回の対話と第2回の対話では、自分の留守児童経験（両親の出稼ぎ、農民の出稼ぎ）及び自己を取り巻く人々の生き方（農業をやり続ける祖母、農民）を捉え返したが、自分が直面している現象（両親の出稼ぎ、農民の出稼ぎ）を単一の要因として捉え、自己の生存と他者・世界との繋がりを認識しなかった。第3回の対話では、外的言語生態場で周の一連の働きかけにより、玲が農業の衰退でもたらされた悪影響とリスクを認識し、そして自己を起点にして自己の生き方と他者・世界との繋がりを把握できた。このように、対話的問

題提起学習を援用して、年少者の対話参加者と対話を行う際に、他の対話参加者が積極的に働きかけることが求められる。年少者の留守児童にとっても理解できるような情報をできるだけ多く提示することによって、彼らも自己を起点にして自己と世界の繋がりを辿り、自己と世界との関係を認識することで、今後彼らも対話の主体として参加することが期待できると考えられる。

7.4 今後の課題

(1) 留守児童を取り巻く関係者との対話の必要性

本研究は、対話的問題提起学習を援用して、元留守児童・現留守児童は周との対話を通じて、自分たちの留守児童経験を捉え返す過程の中、留守児童共同体が構築され、留守児童問題の根本的な解決を検討した。一方、生態学的な考えに基づくと、問題の発生は単一的な要因ではなく、多くの事柄の繋がりができており、その繋がりを変えていくことで問題の解決につながるということである。つまり、留守児童本人だけではなく、留守児童を取り巻く関係者(両親、監護者、教師など)も自己を起点にして自己と留守児童問題との繋がりを辿り、そしてその繋がりの不全を変えていくことで、留守児童問題の根本的な解決につながると考えられる。本研究では、元留守児童・現留守児童のみ周と対話的問題提起学習による対話実践を行った。しかし、留守児童問題の根本的な解決を目指すには、留守児童本人だけではなく、留守児童を取り巻く関係者とも対話的問題提起学習を援用して、対話を繰り返して行っていくことが重要であると考えられる。

(2) 元留守児童・現留守児童と継続的に対話を行う必要性

本研究では、元留守児童(静と彩)と現留守児童(宏と武)の4人は周との対話を4回行なったが、元留守児童の健と現留守児童の玲は周と対話を3回行った。そのため、第3回の対話の1年後に、健と玲に対しても第4回の対話を行い、この1年間で二人の生活にどんな変化があるのか、自己を取り巻く世界のコト・モノ・人に対する認識に変容があるのか、などを確認することも重要であると考えられる。また、理論的枠組みで述べたように、激動するグローバル化社会において、人々の生存が脅かされている人間生態系に関わる「なぜなのか」という問いを、繰り返して問いかけていくことが必要である。従って、本研究が終わっても、対話的問題提起学習を援用して、本研究の元留守児童・現留守児童の6人と継続的に対話を行い、自己と自己を取り巻く世界との繋がりを繰り返して捉え返していくことが重要である。自分が置かれている現状を常に捉え返すことにより、自己と世界の繋がりを把握でき、その繋がりの不全を変えていく主体として働きかけていくことが可能だと考えられ

る。

(3) 非留守児童と元留守児童・現留守児童と対話する可能性

本研究は、中国の元留守児童・現留守児童を対象にした研究である。一方、対話参加者が留守児童経験を持たない非留守児童の場合、元留守児童・現留守児童と対話的問題提起学習による対話を行うことも可能である。グローバル化の変動の下にある世界、元留守児童・現留守児童という一つの群像だけではなく、他の群像（例えば、サラリーマン、大学生、教師など）にも大きな影響を与え、それぞれが異なる課題を抱えている。一方、異なる課題や現象として見えても、グローバル化という共通の社会背景の下で現れたものである。そのため、そのような世界を構成している多様な「人の群像」と対話することによって、世界と自分との関係で捉えていくこと、その人たち同士の相互の関係を見ていくこと、さらに世界のコト・モノ・人の間の繋がりを広い範囲で捉えていくことが可能であると考えられる。世界の中のコト・モノ・人の広い繋がりの下、どのような生き方を選ぶか、その下でどのような人との繋がりを持っていくか、ということの裏打ちを持ったアイデンティティーの形成がしやすくなると言えるだろう。従って、留守児童経験を持つ元留守児童・現留守児童という群像の対話に限定せず、多様な群像と元留守児童・現留守児童と対話することも可能であると考えられる。

参考文献

日本語文献

- 益満雄一郎、「深セン、絶望の出稼ぎ労働者 ネット賭博で借金漬け、路上生活」、『朝日新聞』2018年9月25日。
- 大谷尚、「質的研究とは何か」、『The Pharmaceutical Society of Japan』137(6)、2017年、653-658頁。
- 岡崎敏雄・西川寿美、「学習者とのやりとりを通じた教師の成長」、『日本語学』12(3)、1993年、31-41頁。
- 岡崎敏雄、『言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語—』、凡人社、2009年a。
- 岡崎敏雄、「持続可能性教育としての日本語教育—課題の克服とその具体的形態—」、『筑波大学地域研究』30、2009年b、1-16頁。
- 岡崎敏雄、「生態場における生態学的意味の生成—第三段階：意志の形成段階における生成—」、『日本語と日本文学』50、2010年、1-17頁。
- 岡崎敏雄、「生態学的意味論—主体的意味論としての生態学的意味論—」、『日本語と日本文学』55、2013年、1-21頁。
- 岡崎敏雄、「日本語教育の教室談話テキスト分析—内容重視日本語教育における教室談話テキスト分析方法論Ⅰ方法論の前提と枠組み—」、『言語学論叢』オンライン版7(通巻33)、2014年、1-21頁。
- 岡崎敏雄、「年少者日本語教育の生態学的基盤—学習者共同体生態場を基盤とする年少者生態場の育成—」、『言語学論叢』オンライン版8(通巻34)、2015年、1-13頁。
- 岡村純、「質的研究の看護学領域への展開—社会調査方法論の視点から—」、『沖縄県立看護大学紀要』5、2004年、3-15頁。
- 鎌田文彦、「中国における戸籍制度改革の動向—農民労働者の待遇改善に向けて—」、『レフアレンス』60(3)、2010年、49-65頁。
- 黄敏、「中国における民工子弟の就学問題—「民工子弟学校」の歴史分析から—」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』1(2)、2008年、81-94頁。
- 里見実・野元弘幸(共訳)、『パウロ・フレイレを読む—抑圧からの解放と人間の再生を求める民衆教育の思想と実践—』、亜紀書房、1993年。(原著 Moacir Gadotti. *Convite à leitura de Paulo Freire*. Editora Scipione.1989.)
- 周亜芸、「留守児童当事者の視点から見た中国の留守児童問題—元留守児童と現留守児童へのインタビュー調査から—」、『文明の科学』15、2018年、1-16頁。
- 田村紀之・夏欣、「中国における国内労働力移動と農民工」、『二松学舎大学国際政治経済学部 Discussion Paper (Econ)』1、2011年、1-66頁。
- 陳小君、「中国農村における「留守児童」問題について」、『家庭教育研究』16、2011年、35-

42 頁。

西尾敦史、「パウロ・フレイレとコミュニティ・オーガニゼーション—1970 年代以降の北米のコミュニティ実践とその理論モデルへの影響—」、『沖縄大学人文学部紀要』12、2010 年、17-33 頁。

野々口ちとせ、『人の主体性を支える日本語教育—地域日本語教室のアクション・リサーチ—』、ココ出版、2016 年。

野々口ちとせ・トンプソン美恵子・鈴木寿子・房賢嬉・半原芳子・佐藤真紀・三輪充子・後藤美和子・小田珠生・岡崎眸、「学習者と教師の応答的な関わりが生むグローバル化社会で生きるための主体性形成—リベラル・アーツ科目における教室談話テキストの言語生態学的分析から—」、『城西国際大学紀要』26(2)、2018 年、23-54 頁。

野元弘幸、「社会教育における日本語・識字教育の現状と課題（暮らしに生きる日本語学習の創造〈特集〉）」、『月刊社会教育』39(1)、1995 年、6-14 頁。

半原芳子、「『対話的問題提起学習』が母語話者参加者の積極的共生態度に及ぼす影響—PAC 分析を用いた事例検証—」、『世界の日本語教育』18、2008 年、147-162 頁。

李海波、「中国における基礎行政組織の再編：郷鎮政府を中心に」、『京都大学学術情報リポジトリ』2、2005 年、1-22 頁。

中国語文献

曹志芳、「莫把遺憾留明天」、『農村天地』2、1998 年、12-13 頁。

陳世海、詹海玉、『西部留守兒童—社會工作綜合服務體系研究—』、中央編譯出版社、2017 年。

陳娜娜、「貧窮山區留守兒童現狀、問題及對策—以永泰縣調研結果為例—」、『福建教育學院學報』9、2014 年、17-22 頁。

池瑾・胡心怡・申繼亮、「家庭背景與留守兒童生活滿意度的關係」、『心理研究』2、2008 年、57-61 頁。

范麗恆・趙文德、「農村留守兒童生活滿意度的現狀調查」、『教育導刊』2、2010 年、42-44 頁。

范先佐、「農村「留守兒童」教育面臨的問題與對策」、『國家教育行政學院學報』14、2005 年、7-15 頁。

匡儀・呂颯颯・劉楓・王若逸・賀豪振、「農村留守兒童與城市兒童主觀幸福感之比較」、『中國健康心理學雜誌』6、2016 年、919-922 頁。

李慶豐、「農村勞動力外出務工對「留守子女」發展的影響—來自湖南、河南、江西三地的調查報告—」、『上海教育科研』9、2002 年、25-28 頁。

劉旦・陳翔・王鶴・李棟・徐靜、『留守中國—中國農村留守兒童婦女老人調查—』、廣東人民出版社、2013 年。

劉成斌・王舒序、「留守經歷與農二代大學生的心理健康」、『青年研究』5、2014 年、23-32 頁。

呂紹清、「孩子在老家—農村留守兒童—生活與心理的雙重衝突—」、『中國發展觀察』9、2005

- 年、7-13 頁。
- 南方周末、《在一起—中國留守兒童報告—》、中信出版社、2016 年。
- 紀韶、「留守經歷影響新生代農民工就業質量」、《人民論壇》18、2016 年、76-77 頁。
- 秦樹文·賈巨才·劉守義、「農村留守兒童生活現狀與對策研究—以河北省尚義縣、懷安縣為例—」、《河北北方學院學報》1、2009 年、56-59 頁。
- 全國婦聯課題組、「全國農村留守兒童、城鄉流動兒童狀況研究報告」、《中國婦運》6、2013 年、30-34 頁。
- 阮梅、《世紀之痛—中國農村留守兒童調查—》、人民文學出版社、2008 年。
- 孫順其、「「留守兒童」實堪憂」、《教師博覽》2、1995 年、10 頁。
- 譚凱鳴、《世紀關懷—中國農村留守兒童調查—》、中國發展出版社、2012 年。
- 譚久遠、「淺談「4+1」培養模式對留守兒童心理的影響—以重慶石柱縣冷水鎮小學為例—」、《學周刊》3、2018 年、42-43 頁。
- 汪建華·黃斌歡、「留守經歷與新工人的工作流動 農民工生產體制如何使自身面臨困境」《社會》5、2014 年、88-104 頁。
- 王玉花、「有童年期留守經歷的大學生成人依戀、社會支持與主觀幸福感的關係研究」、《心理學探新》2、2010 年、71-75 頁。
- 吳霓、「農村留守兒童問題調研報告」、《教育研究》10、2004 年、15-19 頁。
- 吳霓、高慧斌、劉永福、《農村留守兒童教育現狀及問題實證研究》、安徽教育出版社、2015 年。
- 夏瑞金、「留守兒童支教及教育問題研究報告—以河南省新鄉市鳳泉區太陽村為例—」、《學理論》25、2015 年、102-103 頁。
- 徐孟輝·唐秋月·嵇紅濤·張君冬·鄧春萍、「對留守兒童生活現狀的分析與研究—以江蘇省宿遷市泗陽縣為例—」、《改革與開放》22、2017 年、80-81 頁。
- 謝東虹、「留守經歷對新生代農民工工作流動的影響—基於 2015 年北京市數據的實證檢驗—」、《南方人口》3、2016 年、1-9 頁。
- 姚彬、「雷沃情系北大荒 黑土地上播真情—「雷沃公益·關愛留守兒童計劃」走進黑龍江省龍江縣—」、《當代兵團》18、2013 年、56 頁。
- 楊曙明·李建秀·原冬霞、「留守經歷大學生生活技能現狀及影響因素分析」、《中國衛生統計》5、2015 年、808-809 頁。
- 一張、「留守兒童」、《瞭望新聞周刊》、1994 年、45 頁。
- 袁俊傑·楊帆·潘祥磊、「關於建立對留守兒童可持續發展的支教模式的思考—以宿遷市高校志願隊為例—」、《河南廣播電視大學學報》03、2017 年、83-87 頁。
- 葉敬忠·詹姆斯 莫瑞（編）、《關注留守兒童》、社會科學文獻出版社、2005 年。
- 朱科蓉·李春景·周淑琴、「农村“留守子女”学习状况分析与建议」、《教育科学》4、2002 年、21-24 頁。
- 趙富才、《農村留守兒童問題研究》、中國海洋大學博士論文、2009 年。

趙俊超、《中国留守儿童调查》、人民出版社、2012 年。

張春勝・王朝暉・張嘉波・張曉麗、「留守兒童心理問題預防機制研究—基於「曾經的留守兒童」調查—」、《學周刊》5、2018 年、35-38 頁。

張志英、「“留守幼儿”的孤僻心理」、《健康心理学杂志》1、1998 年、106-107 頁。

英語文献

Freire, P., *Pedagogia do Oprimido*. 1970. (三砂ちづる『被抑圧者の教育学—新訳』、亜紀書房、2011 年 1 月)

Haugen, E., *The Ecology of Language*. Stanford, California: Stanford University Press. 1972.

Shor, I., *Freire for the Classroom: A Sourcebook for Liberatory Teaching*. Heinemann. 1987.

Pike, Kenneth L., *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. The Hague, Mouton. 1967.

付録1： 周と調査協力者のライフストーリー・テキストの中国語原文と日本語訳文

周のライフストーリー・テキスト（中国語原文）

1 出生前后的故事

我出生于湖南省的一个偏僻的山村，父母都是当地的农民家出身。同村的父母通过相亲介绍认识，结婚没多久就结婚生下了姐姐。结婚后母亲在家务农，父亲在离家不远的地方做工建房子。虽然说家里情况虽然不宽裕，但是一家三口日子还算过的去的。当时农村每家每户都种了很多田地，除了自己吃的那一部分以外，大部分都上缴政府当税金了。在农村家里要是多一个男孩就多一个劳动力，所以当姐姐出生时爷爷奶奶并没很欢喜，而是催母亲再赶紧生一个男孩。可是当时全国各地都在实行计划生育，每个村干部以及村民都会相互监督不允许超生。但还是有一部分人铤而走险，这其中也包括我的父母。当父母偷偷生下我的时候，怕被政府发现还逃去了湖北，把我寄放在亲戚家。但是半个月后还是被发现了，被政府罚了款后本来不宽裕的家里更加一贫如洗，生活变得更加困难了。可是迫于爷爷奶奶以及周围村人的压力，母亲还是必须生一个男孩，所以在我出生后的第三年母亲又生了我弟弟。尽管这次超生是有心理准备，但是再次超生不仅罚款而且房子都被没收了。虽然母亲完成了生男孩的艰巨任务，可是今后该怎么养活我们三姐弟是父母更加担心的。当时村里也有像我家生三个小孩的家庭，家庭情况稍微好点的人家就罚点钱解决了，家庭情况不好的就把女孩子送给远房亲戚或者送去县里让别人来领。我父母曾经也有过这打算，听说我弟弟刚出生没多久，也就是我才两岁多一点的时候。我记得是在一个严冬的晚上，父母把我放在一个麻袋里，父亲抓着麻袋口两头，然后一直看着站在麻袋里的我。我能感觉到父亲那忧伤的眼神，觉得他要把我送去哪里，好像今后再也见不到我了一样。可是我却一直盯着父亲拼命的微笑着，好像在恳求他不要把我送走似的。后来听邻居说当晚父母把我送到县里的政府办事处门口，然后他们在附近偷偷地观察等着别人把我领走。可惜，他们等了一晚上都没见到其他人经过，所以不得不把我又带回了家。后来父母才知道那天晚上是元宵节，全家人团聚的节日，所以大街上晚上一个人都没有。父母当时也是被生活所迫，一时冲昏头脑了吧，所以连过节都不知道。不过，自从那次以后父母就决定把我留了下来，说即使日子过的再苦，也要一家人生活在一起。

2. 父亲外出打工期间的生活状况

弟弟出生后家里的负担越来越重，为了养活一家人父亲不得不离开农村，去了更远的城市打工。当时村里出去打工的农民还非常少，大部分人都是在家务农，靠种的农作物来补贴家用。爸爸在外打工的收入一天也就 20-30 块钱，每次来回的车费就相当于大半个月的工资，所以一年只有过年和农忙时期才回来。母亲在家除了照顾我们三姐弟以外，还种田种菜，养了很多鸡和鸭。母亲每次都把收获的玉米和红薯，养的鸡鸭下的蛋都拿去卖钱补贴家用。虽然当时我们都还没上学，可父亲的收入全部都交了每年高额的农业税以及当年建房时的欠款。所以母亲和我们三姐弟当时的生活比较拮据，没有什么现金收入。由于粮食和蔬菜是自己家种的，衣服大

部分是邻居们把自己小孩穿不要了的衣服送给我们，所以还能勉强生活。还有同一个村里的村民都会相互帮助，像农忙时期或者哪家有红白喜事的时候，都是全村人一起帮忙的。大家都会记下谁帮了几天，下次人家需要帮忙的时候再去还几天就是了。尤其像我家的主要劳动力一年四季都在外面，所以我们家有什么事时村里人也会关照一下。记得我还没上学的时候，村里还没通电只有煤油灯，大家都过着日出而作日落而息的生活。自来水当然也没有，整个村的人都要去村里仅有的一口井里挑水。煮饭也是用柴火，每到周末母亲都会带着我们三姐弟去山里砍柴。平日母亲从早到晚都在外干农活，家里活大部分都是姐姐干的。姐姐虽然只比我大三岁，可是特别懂事，每天除了上学，还要做家务以及照顾我和弟弟。

3 上小学期间的生活状况

我们姐弟三个年龄都相差不大，所以姐姐入学后不久我和弟弟也相继入学了。虽说是小学是属于义务教育阶段，但是当时在农村还是要收学费的。三人每学期的学费和学杂费加起来几乎是父亲半年的收入，因此每学期开学的时候父母都到处筹学费。尤其像父亲这样的农民工，工资不是每个月结算的，一般都是等整个建筑工程结束后才结算。运气好的时候会一次性拿到所有工资，运气不好的时候包工头会拖欠工资，所以父亲辛辛苦苦工作了一年有时一分钱都拿不到。只有等到年末父亲和他的工友们天天早出晚归去讨工资，有时讨不到工资还会和包工头吵架。对于父亲这样的农民工来说，只有过年期间能够休息几天，但是却被拖欠工资的包工头逼的无法过一个安稳年。

我上的小学离我家不远，学校是由附近几个村的村民出钱一起建的。小学一年级到四年级都在这里上学，全校一共才4、5个教师，而学生一共有差不多200个，因此每个教师同时教几门课，还有一两个教师是住在学校里的。因为姐姐入学后，母亲既要带弟弟和我又要干农活，实在忙不过来，所以我5岁的时候母亲多次求校长提前让我入学了。小学时我成绩很不好，在学校和老师同学的关系也一般，但是我小学期间的的生活还是很愉快的。去学校的途中会经过很多树林和田地，每天上学时和村里的伙伴一起摘林子的野果子，捉昆虫，在河里捉蝌蚪。我们对树林里的各种花花草草都很熟悉，知道哪个树根可以做药材，知道哪种花可以采蜂蜜，还知道哪种叶子可以吃。虽然那时候母亲从来不会给零花钱，但是每天自己都能找到各种好吃的。上五六年级是在离家比较远的学校，每天来回走路需要30-40分钟。出了我们村就是当时唯一一条修好的油柏路通往这学校，夏天习惯打赤脚的我们经常双脚被烫的一路跑去学校。这里的教师比较多，所以比起村里的小学这里的教师对每个学生的关注多一点，我的成绩也就在这两年提高了不少。可是当时还是尽量和老师同学保持着距离，因为不希望大家知道我家的情况。尤其交各种学杂费的时候，每次交的晚都会被班主任单独叫出去谈话，那时候就特别希望所有同学都不认识我就好了。因为一提学校交钱母亲的脸色就会变得很难看，所以每次学校要交学杂费时我都瞒着母亲，只是那几天我在家会变得比平常更勤快，尽量讨好母亲让她意识到我的目的。虽然每次母亲一听交钱的事都会愁眉苦脸，但是要么借钱要么卖掉农作物换钱都会给我交上。村里也有像我家一样生活特别困难的家庭，尤其父母双方都在家务农的家庭根本交

不起每期昂贵的学费和学杂费，所以有好几个比我大两岁的姐姐都是小学一毕业就出去打工了。后来，当我上五年级的时候，也就是姐姐上初一的时候，姐姐也辍学了。原因是几年前家里发生火灾把整个房子都烧了，后来到处借钱临时建了几间房，本来紧巴巴的生活变得更困难了。另外一个原因是，她一直没交学杂费被班主任单独留在学校到晚上八点才回家，后来母亲便跑去学校和班主任以及校长说明了家里的情况，校长了解我家情况后说可以考虑今后不交任何学杂费。但是第二天开始姐姐就再也不愿意去学校了，不久后便和同村的姐姐一起去广州打工了。

4 中生活

姐姐出去打工后，家里就剩母亲，弟弟和我三个人一起生活。以前姐姐做的家务活一下子全部转移到了我身上。每天下课后回家要干家务活，周末也要和母亲去田地里干农活。后来父亲选择了离家只要一两个小时的城市打工，回家的次数也比以前多了。但是，我和弟弟并不因此感到开心，因为父亲脾气很暴躁，母亲爱唠叨，所以每次两人都会为各种小事吵架甚至动手打架。每次父母吵架时我和弟弟都会躲在房间里吓得不敢出声，那时候我和弟弟都希望父亲不要回家，希望他去离家更远一点的地方打工。比起父亲，我们更期待姐姐回家，因为姐姐每次回家都会带很多好吃的零食和好看的衣服给我们，还会给我们零花钱。在那之前我都是穿姐姐或者邻居家给的旧衣服，后来穿着姐姐买的新衣服去学校经常会被同学们投来羡慕的眼光。姐姐出去打工时才 13 岁属于童工，又没有任何技能，只能做简单又累人的流水线工作，每个月发的工资除了自己的生活费以外也所剩无几。上初二开始我也渐渐地失去了学习的动力，对学校感到了厌倦。于是初二期末的时候，我也向母亲提出和姐姐去广州打工的想法，结果被母亲狠狠地训斥了一顿。对于没让姐姐没上完初中就让她出去打工这件事，母亲一直觉得很对不起她，所以无论如何一定要让我和弟弟顺利完成初中教育。我听了母亲的劝告后便决定初三毕业后再去打工，但是那一年时间对我来说几乎就是煎熬。后来终于盼到了初三毕业之际，我也顺利拿到初中毕业证了，便再次跟母亲提去广州打工这一事。但是这时姐姐却说懂点电脑找工作待遇会好点，建议我先去学点电脑技术再去打工。母亲也同意姐姐的建议，于是在县城里找了一家职业学校，学习一年电脑还包分配工作。这里的学费虽然不便宜但是有工作分配，姐姐也安心的帮我付了学费。初中是 6 月份毕业，9 月份又入学了这家职业学校，在这里学习了 3 个月的简单电脑知识，12 月份学校就提出要给我们分配到深圳去工作。虽然当时我和家人都很好奇为什么会这么快，但是想想能够马上打工赚到钱便也没和学校太计较。12 月的一天晚上，母亲和姐姐一边拉着我行李一边哭着把我送上去深圳的巴士。

元留守児童の静のライフストーリー・テキスト（中国語原文）

我出生在湖南，一个偏远的小山村。四周都是大山，三条马路通向其他乡镇，外面的世界。

我的父亲，母亲都是农民的孩子。他们是通过邻居介绍认识的，认识没多久就结婚了，过了一年就生下了我。在农村，都是靠种地来维持生计。一家五口人，住在一个小平房里面，日子

过的还算可以。但是在农村，在乡下爷爷奶奶甚至有些父母重男轻女都说很正常，我们家也不例外。只是我还比较幸运，只有我爷爷奶奶有一点，记得小时候爷爷也就是我大伯的儿子做了好多的玩具，我就只能在旁边看着哥哥玩，因为我是个女孩子，说我不适合玩那些。然后哥哥玩腻了，不想玩了就给我玩。后来在我三，四岁的时候，因为爷爷一直催爸妈生二胎，想再添个孙子。所以我妈在我四岁的时候怀了孕，刚开始家里人通过医院的关系得知怀的是个女孩，爷爷奶奶很是不开心。然后家里粗重的活又让妈妈全包了，有一次妈妈在喂猪的时候不小心流产了。爷爷在不久之后生病过世了，那时我6岁，我没哭，可能是爷爷不喜欢我是女孩子吧，我也并不为他走了而感到难过。

到了我读书的年龄，记得当时学费并不便宜，爸妈想给家里增加点收入，把家里仅有的积蓄和找亲戚借的钱开了家竹子加工场，还承包一座山头，每到周末我都会到加工场去帮忙。山上竹子砍完了就换山头，不知不觉几年时间就过去了，也不记得搬了几次“家”，住过多少村子。可真正的家爸妈很少回，而我就跟着奶奶生活，这种日子持续了两年。

8岁的时候，我弟弟降生了，妈妈在家带孩子，爸爸独自一人在外工作，妈妈在家照顾我和弟弟。我们家的条件在村子里还算不错的，但是好景不长，在我10岁的时候爸爸查出肾结石，动手术拿掉了一个肾。屋漏偏逢连夜雨，加工场的合伙人趁着爸爸生病期间把钱都卷走了。爸妈很无奈，家里也正在建房子，我跟弟弟也要读书，爸妈跟亲戚借了几万，后来实在没有办法了，迫于无奈爸妈只能背井离乡出去打工，我心里很是舍不得，想哭但我还是忍住了。我和弟弟留在老家了，由奶奶带着我们，可我不想跟奶奶住，后来爸妈同意我一个人住在新房子里，第一次一个人住在家很害怕，每晚都是把家里的灯全打开才敢睡觉，又害怕又想爸妈只能躲在被窝哭，经常在哭泣中睡着。爸妈打电话回来问家里都好不好，我不想他们担心就说一切都好，其实心里是很想他们的。

以前从来不进厨房的我，也要开始学做饭了。泡面吃了几个月看到都想吐，饭菜虽然不是很好吃，但至少能填饱肚子。后来慢慢的弟弟每个星期天都会过来吃饭跟我一起住。这样过了一年多，弟弟上小学了，我也升高中了，高中寄宿在学校，每个月有4天假可以回家。奶奶年纪大了身体也没以前好了，带不了我弟弟，爸妈就把弟接到北京去读书了。每到过年爸妈才回来一次，渐渐的2年回一次，时间久了我也就习惯一个人呆着了，这样反而让我更坚强更独立不再依靠别人了。其实也没人可依靠，家里大大小小的事都自己面对，换保险丝，家里遭贼，很多事，让我明白一个道理求人不如求己。

在学习上我也受到了生活的影响，有时候想认真学习却跟不上老师的进度了，所以成绩并不是很理想，上课总是发呆，能玩的到一起朋友也很少。不知不觉到了高三，对于高考我自己知道考不上好大学，但为了不让爸妈失望也不让自己后悔，考试前2个月都是在失眠中度过。爸妈也开导我就算考的不好也没关系，可能爸妈对我没有抱多大希望吧。终于高考完了，是个大专，意料之中。在学校的最后一晚班上开了派对，疯了一晚，回家倒头就睡，睡了三天三夜。三天三夜也没人来我家敲门问问，可能我消失了也没人知道吧！

在进大学前的暑假找了份兼职，钱虽然不多，但想着能学点东西。大学选了个不太好的学校

也选了门不太感兴趣的专业，但学校里认识一个最好的朋友，也认识了我现在的恋人，渐渐的我也敞开了心里的世界，不再那么内向，开始尝试跟陌生人交流，出去旅行学习自己喜欢的东西，在大学里收获的应该是心灵上的，让我成长很多。

现在的我，有份自己喜欢的工作，生活中有自己爱的人，不管未来会发生什么，我一定勇敢面对，我会按照自己喜欢的生活方式去生活。感谢给我生命的父母，感谢帮助过我的人。

最后，我想说我有一个很不错的家庭。

元留守児童の彩のライフストーリー・テキスト（中国語原文）

对于以前父母外出工作留我在家这件事，现在的我能理解，但那时候我是真的不能理解。我不懂钱有多重要，也不懂生活的柴米油盐，我只知道父母在家在身边就好，哪怕住的不是高楼房，吃的不是最好的，我也无所谓。特别像我这种性格的人，不太爱和别人打交道，只想固守在自己的圈子里，由于父母外出打工，让我从这个地方搬到那个地方，又从那个地方换搬到另一个地方。你刚刚熟悉的一个环境一群人又要离开，重新去适应，我讨厌那种感觉，是很讨厌。那时候青春期的叛逆碰上生活上的各种隔应，感觉一切都是那么的不如意。我不想回家，我也不想读书，我甚至开始怀疑我存在的意义，我不知道我想干什么，我只想找个安静的地方谁都不要理，每天都这样就好。父母外出挣钱，她们不了解你，不懂你到底需要什么，其实她们一无所知，感觉在她们眼里，挣了钱给你读书吃饭，便是对你最好的爱。这样的爱说不上错，但也说不上对，因为那不是我需要的。

不过留守期间我最感恩的不是谁谁谁将我带在身边帮忙照顾我。我感恩的是那些日子，有那么一群人给了我安慰，让我在每天不停的怀疑自己的时候，她们还能让我那么开心，忘却所有的烦恼。也感恩有那么一群老师，不管你怎么沉默，也一直将你放在心里，不放弃你，时时刻刻抓紧着你，盯着你，不让你懈怠。以至于后来我想努力的时候还有一丝的资本，不至于那么为难。是他们让我一直记着一句话：感谢我身边遇见的都是好人！

总之，现在的我能坦然面对那段日子，但不想去想那段日子。

元留守児童の健のライフストーリー・テキスト（中国語原文）

我出生在一个偏僻的农村，我们一家有四口人。我母亲在家务农活，父亲在外面打工养育着我们一家。记得从我读小学的那时候，我最大的乐趣就是跟几个小伙伴早上一边玩耍一边去读书。那个时候我们没有什么零钱，每次到了一些野果成熟的时候我们就去摘野果吃。当我有一点懂事的时候，每个周末我都会帮着母亲干一点农活，比如说种一点花生，扳一下玉米，撒一点肥料。到了我上初中的时候，夏天我会帮父母亲晒一下稻谷。还记得以前上学的时候，经常跟我几个很好的朋友走绕很远的路，每天玩的很晚回家。然后我还记得那时候父亲常常在外面打工都是每几个月回来一次，那个时候是我最幸福的时刻，因为父亲每次回来的时候都会给我带一些好吃的。

現留守児童の宏のライフストーリー・テキスト（中国語原文）

我出生在湖南的一个偏远的山村，父母都是当地的农民家出身。父母不是同一个镇的，他们是在外出打工的时候认识的。爸爸 20 岁的时候，也就是 2001 年生下了我，生下的是个男孩，我爸妈和我奶奶都非常高兴。但是当时我们家在建房子，所以我爸妈就在我八个月的时候又去广东打工了，每次回家都是过年的时候。他们回家的时候都买好多的东西，有糖，有玩具。我最喜欢的就是玩具了，小时候的我玩具很多，比起同龄人的小孩我觉得自己很幸福，所以我每次都会叫上我的朋友来玩我的玩具。小时候我两个表哥也和我一起都住在奶奶家，他们天天带着我出去玩，到了晚上他们还吓我：说要带我出去捉鬼，而我却害怕得直哭。爷爷奶奶出去干活的时候就是我哥他们带着我。有一次我要喝水，我哥他们不给我倒水，我就自己撒了一泡尿，拿着勺子说“叉属(普通话“喝水”)", 然后我哥他们看见了就笑我，我就哭(>__<)。直到我哥他们初中毕业了他们就回自己家了。

我从 3 岁就开始读幼稚园。幼稚园的校车经过我家时，我奶奶问我要不要上学，于是我一脚踏上了校车，之后我的上学生活就开始了。上幼稚园的时候，听话的小朋友每天下午都有一朵小红花，那时候小红花对于一个天真无邪的孩子来说是一种荣耀。

6 岁，到了上小学的时候了。小学一年级还不怎么懂事，直到二年级，数学要背乘法口诀，不背完不准回家。语文也要背课文，不背完不准回家，还要默写古文和字词，所以那时候我经常被留在学校。三年级就要开始学英语，可那时候觉得不重要所以就没有听老师讲课，直到现在都没有学会。四年级就换了所有的老师，那时我妈又我生下了弟弟。那时候我比较调皮，还摔伤了手，所以老师都比较照顾我。五年级就开始寄宿了，开始第一学期觉得还好，第二学期我就不愿意了，当时下午就逃学，不愿意寄宿，所以我家人就叫我晚上再和别人回家。后来我又逃了一次，我说要下午回家而不是晚上回家，我家人也同意了我下午回家，当时因为逃学还被我伯父打了一顿。之后，六年级开始就懂事了，小学毕业后进入中学时代。

初中开始的时候成绩还可以，但是初二的时候我妈给我买了手机后成绩就滑啊滑，滑下来了。那时又有女生追我，那个女生还是我们学校的校花，于是就和她开始了我的恋爱时段。最开始和她认识不是我和她接触，而是我同学把我骗到那里，之后才开始交往的。我们先是从 QQ 聊天，之后就成了男女朋友。最开始我们晚自习下课后就一起牵手聊天彼此慢慢了解。在学校下午的时候她会把我叫进她们寝室，一起聊天一直到快要上课才分开。后来如果不是她闺蜜我们也不会分手。温馨提示：信什么都不要信闺蜜。后来直到初中毕业都没有再找女朋友。初中时候的情感是懵懂的，初恋也是甜蜜的，是一个人最难忘的一段感情。就在中考的时候我在考场遇到一个女孩，应该就是传说中的一见钟情吧，虽然我们两个明明知道对方，在乎对方，可是就是不向对方表白。高中是学习的一个重要的阶段。军训的时候有一个女孩又追我了，之后没半个月就分手了。少年时代的感情不是真的，懵懵懂懂，高二之前的事都过去了，不必回忆。我在想全世界都在改变，我自己也需要改变。就算世界不认识我，但我认识世界。好好努力吧，骚年。

現留守児童の武のライフストーリー・テキスト（中国語原文）

我出生在一个说好不好，说坏不坏的农村。家里不是特别穷。我们家有三姐弟，我有两个姐。因此我家人疼爱最多的自然是我。我爸爸在我很小的时候就外出赚钱。我读学前班时，二姐和我读一所学校，上学下学都是跟着她走。我读二年级时，正值八岁，因为父母要去广州打工赚钱回来做房子，迫不得已，我们也只好转学，去广州读。在广州读书期间，环境难以适应，大街小巷的。而且那边的人普遍都说本地话。当时的我可谓迷茫。他们甚至连数字都用本地话说，上学校的话就更加不用说了，还好大部分老师都用普通话。因为这边学校环境跟我以前的那个学校形成一个反差，短时间内真心受不了这生活，连厕所都是马桶。过来两，三年吧，读四年级的时候，当时不敢相信，自己可以说本地话了，多么爽呀，而且对当地也有了了解，认识了更多朋友。不过可惜了，当我正读四年级时，爸妈已回老家盖房子了。我就被大姐照顾着，这段没爸妈的日子里心里难受的很，有哪个小朋友受得了没爸妈的生活勒！二姐当时一个星期回来一次，所以见她的面也是少。四年级上学期读完时，我妈突然回广东了。当时正放寒假，她来接我们回家!!! 突然说回老家又有一点不舍了，毕竟在这儿呆了这么久。回到湖南后，又开始了以前的生活。因为我当时留了一级，所以我二姐早就不在和我同一所学校。每天一个人走路回家，反反复复。到了中学还好一点，交友范围广。就一路不知不觉的，交了特别多朋友。在班上的话，向来独来独往，讨厌群居。一般只和两，三个人在一起玩。我们班被老师称为最难教育的班，可耻的行为很多，打架，恋爱，吸烟，喝酒，啥事都干。我跟女生混得很好，不过只是和个别女生咯。一般学霸我理都不理，一副正经脸，满脸严肃，跟她们说话很尴尬。最讨厌不爱笑的人了，反正我都是微微一笑。我跟班上的男生关系特别好，也包括隔壁班，他们都叫我外名[牛哥]，我也没有计较，久而久之我就习惯了。

现在的生活个人感觉还行，随着时间的推移吧，长大了越来越觉得父母唠叨了，啥事都管着，反正就是一百万个嫌弃。他们不管着还好，走自己想走的路，做自己想做的事，这才是自由。

現留守児童の玲のライフストーリー・テキスト（中国語原文）

我来自一个小村庄的女孩。我六岁的时候和奶奶一起住。爸爸妈妈在外面打工、过年的时候才回来。暑假的时候，我可以去他们那儿。我的奶奶是一个重男轻女的人，我爷爷也是。奶奶忽冷忽热，经常和爷爷吵架。爷爷骂她，她就把脾气发在我身上。爷爷奶奶总是很偏心，他们喜欢我哥，我弟、就是不喜欢我，让我很苦恼。我爷爷不怎么说我，但是我奶奶处处针对我。我多想快点长大离开这里，有时被她冤枉后，我就非常想我爸妈，就一个人在哭。她就过来问我，你为什么哭？我不说她就用根棍子来打我。我真的很恨她，多么希望没有这个奶奶，但有时候又觉得有这个奶奶很好，这是我的想法。

周のライフストーリー・テキスト（日本語訳文）

1 生まれる前後の生活

私は中国のある小さな町で生まれて、両親とも農民出身であった。両親は同じ村でお見合

いを通じて結婚した。そして父が 21 歳のときに姉が生まれた。母は家で育児と農業をし、父は近くの町の建設現場で働いていた。当時の農村ではどの家でもたくさん田んぼと畑を持っていて、自分の食べる分以外は、残りは税金として政府に納めた。農業をやるには労働力も必要で、そこで男の子は農村では非常に大事にされる。我が家の一番目は女の子だったので、おじいさんもおばあさんもあまり喜ばなかった。いつも母に次は男の子を生んでという圧力をかけた。しかし、1980 年代の中国は「一人っ子政策」が厳しく取り締まられていたため、公に 2 番目の子どもを生むことはできなかった。それでも、農村では男の子が女の子より役に立つという観念が根強く、同じ村に 2 番目、3 番目の子どもをこっそり生んだ人もたくさんいた。母も私を産んだあと、政府に知られないように、私を親戚に預けて、父と二人で一時遠くの町へ逃げていた。最後はやはり発覚されて、持っていたお金を全部罰金として払わされ、生活が一気に窮屈になってしまった。しかし、男の子を産むという夢を諦めなかった。2 年後にやっと念願の男の子が生まれた。今回もばれてしまい、罰金のほかに住んでいた家も取り壊されてしまった。同じ村で我が家と同じように 3 人子どもがいた家もあったが、罰金を払える人は罰金を払って、払えない人はこっそり女の子をだれかに送って、生まなかったことにした。両親にも当時このような考えがあったそうだ。つまり私を里子に出そうとしていた。記憶の中では、私がまだ 2 歳で、弟が生まれたばかりのときだった。ある寒い冬の夜、父が私を麻の袋の中に立たせて、そして袋の両端を持ったまま私のことをずっと見つめていた。父の悲しい目つきから良くない予感がしたが、一体私をどこへ連れていくかは分からなかった。ただ私が父の顔を見て一生懸命に笑っていたことは今でも覚えている。その後の話は近所の人と両親から聞いたが、その夜両親は私を町の役所のゲートのところに置いた。そして、両親は、物陰に隠れて、誰がもらってくれるだろうか、じっと見ていた。しかし、いくら待っても誰も現れなかった。それで、仕方なく、私を家に連れ帰ったそうだ。実は、その日は中国のお正月の最後の日で、伝統的な家族団欒の祝日であった。だから、夜の町にはだれもいなかった。両親がおそらく毎日大変な生活に追われて、いつが祝日なのかも分からなかったのだろう。その件を経て、両親も少し落ち着いて私を家で育つと決まった。生活がいくら苦しくても、家族全員で一緒に暮らすことが一番大事だと考えていた。

2 父が出稼ぎに出た後の留守時期の生活

弟が生まれた後、父は故郷を離れ、もっと遠くの町に出稼ぎに行った。当時は農村から都市に出稼ぎに行く人はまだ少なく、同じ村にいる村民はほとんど農業だけで生計を立てていた。父は出稼ぎに行っても、やはり建設現場という 3K の仕事しか就けなかった。給料は 1 日 20-30 円で、往復の列車料金は半月の給料にもなるから、お正月と農忙期以外はほとんど家に帰って来なかった。母は三人の子どもの世話をしながら、畑も田んぼも飼っていた豚と鶏のお世話もしていた。そして、飼っていた豚と鶏の玉子も、作っていたうもろこしやさ

つま芋も売って生活費に充てていた。父の収入のほとんどは毎年の重い農業税金と家を建てた時の借金に使った。現金収入がほとんどなかったが、お米も野菜も自分で作っていたし、洋服は近所から古いものをもらうから、なんとか生活ができた。当時の農村には、現在のような進んだ農業機械がなかったため、農忙期は同じ村の人々が助け合って仕事をしていた。家を建てるときも、結婚とお葬式の時も、大体村中の人々が力を合わせて行動するのが普通だった。例えば今回この家の人に何日間手伝ってもらって、次回この家に何かあるときにその時間分を返せばいいのだ。我が家は父が年中家にいなかったため、母が全ての農作業を背負っていて、村の人たちも色々手伝ってくれた。私が学校に入る前には、村はまだ電気が普及していなかった。燈油ランプを使うのももったいないと思われて、村の人々は日が暮れると寝て、日が昇ると農作業に出かけるという毎日を送っていた。水道もちろん通っていなかったから、村中の人々は全部村にある唯一の井戸で水をくみ上げて飲んでいて、母は朝から晩まで農作業の仕事で忙しくて、家事はほとんど姉に任せた。姉は私より三つ上だが、長女としてとてもしっかりしていて、勉強以外に家事の手伝い、弟と私の面倒も見てくれた。

3 小学校期間の生活

兄弟三人はあまり年が離れていないので、姉が入学した後に弟と私も次々と入学した。小学校と中学校は義務教育段階だと言われても、農村ではまだ每学期高い学費を払わされていた。三人の学費を合わせると父の半年の収入に当たるので、毎年学期開始時期になると、両親は学費のことであっちこっちお金を借りていた。特に父のような農民工は、給料は毎月ではなく、一つの建設工事が全部終わった後に精算するのが普通だった。運がいいときは一回で全部の給料をもらえるが、運が悪いときには給料の不払いになるか、もらう日が延ばされるか、父が一年中働いても一円ももらえないこともあった。そこで、毎年の年末になると、給料の支払いを要求するのに父は他の同僚と毎日請負人のところへ駆けつけていた。もらえない場合は請負人と喧嘩することもよくあった。

私が通った小学校は家の近くにあり、この学校は近くの村の人々が出金して建てられた。一年から四年の学年で 200 人くらいの生徒がいるが、教師は全部で 4-5 人しかいない。姉が入学した後、母は農作業と弟の世話で毎日とても忙しかったため、私が 5 歳になると母が校長にお願いして早めに入学させてもらった。小学校の時の成績はとても悪くて、勉強には全く興味がなかったが、その時期はとても楽しかった。毎日の通学路で仲間と遊ぶことが一番の楽しみであった。通学路には林と畑がたくさんあって、毎日同じ村の子どもたちと遊びながら学校に通っていた。途中の草花にとっても詳しくて、どれは食べられるか、どれは毒があるのかもよく知っていた。その頃お小遣いは全然もらえなかったの、毎日自分で山や林の中の果物や草花を見つけて食べた。五、六年生のときにはまた違う小学校になり、家から少し離れていた。毎日往復だけで 30～40 分はかかった。私の村を出ると、当時町で唯一の

アスファルト道があって、その道はその学校とつながっていた。夏になると裸足で歩くのが好きな私は、そのアスファルトの道を通る時は足の裏が熱くていつも走って学校に行った。でもこの学校は昔の小学校に比べて教師の人数が多く、各クラスに一人の担任先生がついていた。私の成績もこの二年間で上がってきて、勉強に対しても少し興味を持ちはじめた。学校で一番嫌いなことは高い学費と雑費を払うことだった。毎学期の学費もあっちこっちと借りているから、なるべく払わなくてもいい費用は絶対払わないで、払う必要がある費用はいつもギリギリまで延ばさせていた。村には私の家のように子どもが何人もいる家もあるが、大体小学校卒業した後に学校をやめて出稼ぎに行かせた。農村で夫婦二人とも農業だけをやっていて、あまり現金が稼げないから、重い農業税と高い学費を払うのがとても大変だった。私が五年生の時、つまり姉が中学校一年生の時に、姉も学校をやめた。その理由として、何年前に火事にあって新しい家を建てるためにたくさんの借金をしたため、姉は家の負担を軽減しようと考えていたのだろう。もう一つの理由はその後母親から聞いたが、姉が学校の雑費をずっと払わなかったため担任の先生に夜8時まで学校に留められたそう。その日、母が学校に行き担任の先生と校長に家の事情を説明し、そして今後姉は学校の雑費を払わないように検討すると校長が言った。しかし、次の日から姉はどうしても学校に行かなくなり、しばらくしてから同じ村のお姉さんと一緒に広州に出稼ぎに行った。

4 中学校期間の生活

姉が広州へ出稼ぎに行った後、家には母、弟と私の三人だけ残った。中学校は家に近かったため、授業が終わるとすぐ家に帰って母のお手伝いをしていた。その後、父も家から約1時間離れた町で働き始めて、家に帰る頻度も増えた。父はとても気性が激しくて、母もくどいため、二人はよく些細なことで喧嘩していた。毎回両親が喧嘩すると、弟と私は部屋の中に閉じこもって、怖くて声も出せなかった。私も弟も父のことを怖がっていて、もっと家に離れた町へ出稼ぎに行きたくてしょうがなかった。父の帰りより、姉が帰ってくることをいつも楽しみにしていた。姉が帰ってくるたびに弟と私に美味しいお菓子と洋服を買ってくれたからだ。それまでには、私はずっと近所からもらった古い洋服を着ていたから、新しい洋服を買ったことがなかった。しかし、当時姉は13歳で未成年だったため、賃金も安く仕事の環境も悪い工場でしか働けなくて、毎月の給料はほとんど自分の生活費に使った。中学校に上がった後、だんだん勉強に対する興味もなくなってきて、そして中学校二年生のときに姉と一緒に広州に出稼ぎに行きたいと母に言い出したが、すごく怒られてしまった。姉が中学校も卒業しないで広州に出稼ぎに行ったことに対して、母はその後ずっと姉に申し訳ないと思っているようだ。いくら何でも、私と弟を中学校卒業までに行かせると母が決心した。仕方なく、中学校卒業まで我慢しようと思い、その一年間は重心がほとんど学校になく、母のお手伝いを一生懸命にやっていた。平日は家事の手伝い、週末は弟と母の三人で畑や田んぼに行き農業のお手伝いをしていた。その後やっと中学校の卒業式を迎え、無事に卒業証明書をもら

った。その時、また広州に出稼ぎに行くことを母に言い出したが、パソコンのスキルがあると仕事が見つかりやすいと姉に勧められて、町にあるコンピューター専門学校に入学した。この専門学校で一年間勉強して、卒業後は仕事も紹介してくれるということだから、姉は安心して高い学費を払ってくれた。しかし、6月に中学校を卒業して、9月に専門学校に入学したが、その年の12月になるとシンセンでの仕事を紹介してくれると学校が言い出した。まだ3ヶ月も経っていないから、ちょっとおかしいと皆も思っていたが、すぐ仕事ができるお金が稼げるから、私はとても興奮していた。そして、12月のある日の夜、母と姉は泣きながら私を深セン行きのバス停で見送ってくれた。

元留守児童の静のライフストーリー・テキスト（日本語訳文）

私は湖南省の離れた小さな村に生まれた。周りには全部山に囲まれ、三つの道路があって、それらが外の世界へとつながった。

父も母も農民の子どもで、近所の紹介で知り合ったそうだ。知り合ってまもなく結婚し、1年後に私が生まれた。農村では、ほとんど畑で生計を立てている。祖父、祖母、そして私の家族三人と一緒に小さな一階部屋に住んでいたが、普通な生活はできた。しかし、農村ではお年寄りは「男尊女卑」という考えがあるのが普通で、私の祖父母もそうだった。隣の叔父さんの家には男の子(私の兄)がいたから、祖父はいつも兄におもちゃを作ってあげてくれたが、私には何も作ってくれなかった。それは女の子が遊ぶおもちゃじゃないと祖父が言っていて、そして私はずっと兄が遊んでいるのをただ見ていた。もし兄が飽きてもう遊ばないと言ったら私にくれる。私がまだ三歳か四歳のときに、「二番目の子どもを生んで」と祖父が母を急かした。そして、私が4歳のときに母がまた妊娠した。祖父は孫がほしかったが、病院の関係者を通じて検査したところ、また女の子だと分かって祖父母がとても機嫌が悪くなった。そして母は家事や重い農作業を全部させられて、ある日豚の餌をやるときに流産してしまった。私が6歳のときに祖父は病気で亡くなったが、私は全く泣かなかった。私が女の子でずっと気に入ってくれなかったし、私も祖父が亡くなったことについても全然悲しいと思わなかった。

その後、学校に入る年齢になった。当時の学費はそんなに安くなかったし、両親も収入を増やそうとして、家の全ての貯金と親戚から借りてきたお金で竹の加工工場を作って、一つの山を請け負ってそこで竹の木を切って加工する仕事をしていた。私も週末になると工場へ行って手伝った。山の上の竹を全部切ったら、また他の山へ移し、そのような繰り返して何回も引越しをした。親は自分の家にはあまり帰らなくて、私は祖母とそこで約2年間一緒に暮らした。

8歳の時に弟が生まれたため、母が家で育児をし、父が外で働いていた。その時は、村では私の家の状況はまだいいほうだった。しかし、あまり長く続けず、10歳の時に、病院の

検査で父が腎臓結石だと分かり、手術をして腎臓を一つ切ってしまった。その後も悪いことの続きで、父が病気の間に工場の共同パートナーが工場のお金を全部持っていかれてしまった。その時、新しい家を建てている最中だったし、弟と私がちょうど学校に行っているし、親が親戚から何万元を借りても足りなくて、仕方なく農村を離れて北京へ出稼ぎに行った。当時私はとてもつらくて泣きたかったが、ずっと我慢していた。弟と二人で農村に残され、祖母が面倒を見てくれた。でも祖母と一緒に住みたくないから、その後一人で新しい家で住むと親の許可を得た。初めて一人で生活するからとても怖くて、毎晩全ての部屋の電気をつけっぱなしで寝ていた。親に会いたくてしかたないから、よく布団の中で泣きながら寝ていたことが多かった。毎回親の電話をもらうたびに、家のことは心配しなくていい、全てうまくいっていると言いながらも、本当は親に会いたくて仕方なかった。でも親に余計な心配をかけたくなかったから、いつもそのように伝えていた。

親が出稼ぎに行くまでは、まったく台所に入ったことがなかった私もお飯を作るようになった。最初の何ヶ月間は毎日カップラーメンを食べておいしくはなかったけど、お腹をいっぱいさせることはできた。その後、弟は週末になると祖母のところから私のところにやって来て、一緒にご飯を食べたり一緒に寝たりした。このように一年くらい経って、弟も小学校に入る年になって、私も高校に入った。高校では学校の寮に泊まるから、毎月四日間だけ家に帰られる。祖母も年が取ってきて体も弱くなり、弟の面倒を見られなくなった。そこで、両親が弟を北京へ連れて行って、向こうの小学校に入らせた。それまでは両親は一年に一回帰ってくるが、その後は二年に一回になり、だんだん私も一人での生活に慣れてきた。一人暮らしの生活で私をもっと強く自立させてくれた。他人に頼っても頼れないし、頼りたくても誰もいないから、家のことは全部一人でやった。電気コードの交換も、家に泥棒を入れたことも、いろいろなことがあった。その時、「他人に頼るよりは自分に頼ることだ」ということに気づいた。

生活上の変化で学校の勉強にも影響を及ぼした。授業の進度についていけなくて、成績もあまりよくなかった。授業のときはいつもぼとしてしまって、一緒に遊ぶ友達も少なかった。高校三年生になって大学入試に近づくと、親にがっかりさせようといういい大学に受かるかどうかを心配していて、受験前の二ヶ月間はずっと勉強して寝られない日々を送っていた。別に受からなくてもいいよと親が言ってくれたけど、おそらく私のことをあまり期待していなかっただろう。大学入試が終わって、そして専門学校に受かった。それは予想通りだった。高校を卒業する前日の夜は、クラスの卒業パーティーがあって、その日は思い切って遊んだ。家に帰った後、丸三日間も寝てしまって、その間は誰一人も家に来なかった。たぶん私がそのまま消えてしまっても、だれも知らないだろうと思っていた。

専門学校に入る前の夏休みは、社会経験を学ぼうと考えて初めてアルバイトをした。その後通った専門学校は有名じゃなかったし、私はあまり好きじゃない専攻を選んだ。学校では一人の友達だけと仲が良かったが、そこで今の恋人に出会った。そして、私の心の扉も少し

ずつ開いてきて、昔ほど内向ではなく、知らない人とでもコミュニケーションを取るようになった。時々旅行に行ったり、自分が好きなことを勉強したりするようになった。専門学校
の3年間で一番大きな収穫は心の成長だった。

今の私は、好きな仕事をしているし、好きな人と一緒に暮らしている。将来はどんなことがあっても、必ず正面から向き合い、好きな生活スタイルで暮らすと考えている。それから、私を産んでくれた両親と今まで私を助けてくれた人々に感謝している。

最後に、私にはとても素晴らしい家族を持っていると言いたい。

元留守児童の彩のライフストーリー・テキスト（日本語訳文）

昔両親が出稼ぎに行って私を農村に残ったことに対して、今の私は理解できるが、当時は本当に理解できなかった。お金がどれほど重要だったのか、生活がどれほど大変だったのか、全然分からなかった。両親が私のそばにいてくれることがどれほど大事なのかだけは分かっていた。たとえ大きな家に住まなくても、美味しい物を食べなくても両親がそばにいてほしかった。特に、私のような他人と話すのが苦手な性格の人にとっては、当時はずっと自分の世界の中に引きこもっていた。両親の出稼ぎによって、私はこっちからあっちへ、またあっちからこっちへと引っ越しを繰り返していた。やっと新しい環境に慣れたと思ったところにまた離れてしまい、次の新しい環境に慣れなければならないという感じは本当にいやで、大嫌いだった。その時はちょうど思春期で反抗期でもあり、生活上にこのような変動があると、全てうまくいかないような気がした。家にも帰りたくなかったし、学校にも行きたくなかったし、自分が生きていることさえ疑っていた。自分も何をしたいのかが分からなくて、ただ毎日一人でこのように過ごせばいいと思っていた。両親はお金を稼ぐために出稼ぎに行っていたが、私が本当に欲しいものは何かを理解してくれなかったし、私のことを何も分かっていたなかつたと思う。親にとっては、お金を稼いで子どもに学校を通わせることやご飯を食べさせることは一番良い愛の表現だと思われる。そのような愛は良くも悪くも言えないが、私が欲しいものではなかつた。

一方、留守児童でいた間私が一番感謝したいのは、私の面倒を見てくれた人ではなく、私のことをいつも支えてくれた人たちである。私が自分のことを疑っていた時期でも、彼女たち（同級生）はずっとそばで私を楽しくさせてくれた。それから、今まで出会った多くの先生にも感謝している。クラスで私がずっと黙っていても、先生たちはいつも励ましてくれたり、応援してくれたり、私のことを見捨てずにずっと見守ってくれた。このような先生たちがいたからこそ、その後自分がもう一度真面目に勉強しようと思った時にまだ努力の資本があつて、チャレンジすることはそんなに難しくなかつた。そして、このような人々が私のそばにいてくれたからこそ、「自分が出会った人々は全部素敵な人だ」というように思えるようになった。

今は、留守児童時期の日々を淡々と振り返ることができるが、あの時の生活はやっぱり思

い出したくない。

元留守児童の健のライフストーリー・テキスト（日本語訳文）

私はある離れた農村に生まれて、家族が四人いる。母は家で農業を、父は外へ出稼ぎに行って一家を養っていた。小学校の頃は、仲間と遊びながら学校に行くことが最大の楽しみだった。あの頃お小遣いはあまりなかったが、いつも果物が成熟した時に山や林へ行行って自分で摘んで食べていた。物心がついてから、週末は畑に行行って落花生を蒔いたり、トウモロコシを収穫したり、肥料をかけたりして、よく母の農作業の手伝いをした。中学校に上がると、農忙期は親と共に稲の収穫の手伝いをした。あの時、放課後の道は家から学校まで遠くて、いつも仲間たちと遅くまで遊んでいた。父は出稼ぎに行っていて、いつも何ヶ月に一回しか帰って来なかった。そして、毎回帰ってくる時に美味しいお菓子を買ってくることをとても楽しみにしていた。

現留守児童の宏のライフストーリー・テキスト（日本語訳文）

私は湖南省の離れた村に生まれて、両親は地元の農民出身である。父と母は同じ村ではないが、出稼ぎ先で知り合った。そして父が 20 歳のとき、つまり 2001 年のときに私が生まれた。男の子で両親も祖父母もとても喜んでいて。当時は新しい家建てている最中だったから、私が生まれて 8 ヶ月の時に両親はまた広州へ出稼ぎに出かけた。両親がお正月のときだけ帰ってきて、いつもおもちゃ、お菓子や洋服をたくさん買ってくれた。私はおもちゃが一番好きで、子どものころから多くのおもちゃを持っているため、よく周りの子どもたちに羨ましがられていた。そして、私はよく皆を家に呼んできて一緒におもちゃを遊んでいた。私のほかに、もう二人の従兄弟の兄も祖父母と一緒に住んでいた。兄たちはいつも私を連れて遊んでいた。夜になると、私を連れて鬼を捕まえに行くと脅かされて、私が怖くていつも泣いていた。祖父母が農作業をやる時は、いつも兄たちが面倒を見てくれた。そして、兄たちは中学校を卒業した後自分の家に帰った。

私は 3 歳から幼稚園に通い始めた。幼稚園のバスが家を通ったときに、学校に行きたいかと祖母に聞かれて、私はそのままバスに入り込んで、その時から学校生活がスタートした。幼稚園のときは、先生の話をよく聞く子どもは赤い花をもらえるが、その花をもらうことはとても名誉なことだと思っていた。

6 歳になると小学校に入った。その時は勉強がよく分からなかったが、二年生になってから数学の公式、古文の暗誦と単語のデクテーションもしなければならなくなった。3 年生から英語の勉強も始まったが、その時は英語の重要性がよく分からなかったため、まじめに勉強しなかった。そこで、今でも英語がよくできないのだ。四年生になると、全ての先生が変わって、そして私の弟も生まれた。その時私はいたずらっ子で、腕を怪我してしまったが、先生たちはとても優しくしてくれた。五年生になると、学校の寮に入った。最初の一学期目

はまだ大丈夫だったが、二学期目から寮に住むのがいやで、午後になると学校をサボって家に帰った。仕方なく、祖父母も家で泊まることを許してくれた。でも学校をサボると、叔父さんに怒られて私を叱った。その後、六年生になると少し落ち着いてきて、学校の寮に入ることにした。そして小学校を卒業して、中学校に入った。

中学校のはじめは、成績はまだ悪くなかったが、二年生のときに母が携帯を買ってくれてから、成績がぐっと下がってしまった。その時、同じ学校の女子学生に告白されて、しかも学校で一番きれいな子だったので、初めての恋愛をした。私たちはまずＱＱで交流し、そのあと恋人関係になった。最初はよく一緒に夜の自習授業に出た。その後、彼女の寮に誘われて、寮にいるほかの女子学生とも話すようになり、いつも授業が始まるまでそこにいた。もし彼女の友達が邪魔しなければ彼女と分かれなかったと思う。自分の友達でも信じられないことを、このことを通して分かった。その後、中学校を卒業するまで恋愛をしなかった。恋愛とは何かはまだよく分からなかったが、初恋はとても幸せで懐かしかった。そのあと、高校入試の受験所である女の子に一目惚れしたが、互いは気になっても何も話さなかった。高校はとても大事な勉強期間である。最初の軍事訓練でまた他の女の子に告白されたが、半月も経たないで分かれてしまった。思春期の愛はとても朦朧としていて、過ぎてしまうともう思い出せない。

今は世界全体が変わりつつあるから、私も変わらなきゃいけない。世界が私のことを知らなくても、私は世界のことを知らなきゃいけない。頑張ろう、青年！

現留守児童の武のライフストーリー・テキスト（日本語訳文）

私は悪くも良くもない農村で生まれた。家はそんなに貧しくなかった。兄弟は三人いて、上に姉が二人いる。そのため、両親と親戚は私のことを一番可愛がってくれた。私がまだ幼いときに父は出稼ぎに出かけた。幼稚園のときは、二番目の姉と同じ学校にいたから、毎日一緒に通学していた。二年生のとき、ちょうど私が八歳で、両親は新しい家を建てるために広州へ出稼ぎに行った。仕方なく、私も広州の学校に転入した。最初は広州の学校にも町にも慣れなかった。現地の人たちは全部広東語で話すから、私はとても戸惑っていた。学校にいるときも、同級生たちは数字さえも広東語で話すし、授業用語も時々広東語でやっていた。幸いなことに、一部の先生は北京語で授業をやってくれた。広州の学校設備は実家の学校と全然違って、トイレさえも便所ではなく、座り式の便座だったから、最初はどうしても慣れなかった。その後約二、三年が経って、私が四年生になったとき、やっと広東語を話せるようになった。その時自分さえも信じられないほど、とても興奮していた。そして、広州の生活も少しずつ慣れてきて、友達もたくさんできた。しかし、その後両親が実家の農村へ帰って家を建て始めた。私は広州に残って、二人の姉に面倒を見てもらった。親がそばにいない日々がとてもつらくて、寂しかった。二番目の姉は学校の寮に泊まっていたから、一週間に一回しか帰って来なくて、会う機会も少なかった。四年生の前期が終わったときに、そ

の時はちょうど冬休みで、母が突然広州に戻ってきて私たちを迎えに来た。広州で何年間も住んでいたから、急に帰ると言われるとまた悲しくなった。湖南の実家に帰った後、また以前の生活に戻った。実家の学校に帰ってきて一年間留年したから、二番目の姉はもう私と同じ学校じゃなくなった。そこで毎日一人で上下校をしていた。中学校に入ると、友達もできて、少し良くなった。学校ではたくさんの人と一緒に行動するのが嫌いだから、いつも一人で行動している。友達もいるが、大体二、三人で一緒に遊ぶ。今のクラスは学校で一番評判が悪くて、喧嘩、恋愛、喫煙、飲酒、何でもするクラスである。私は女子学生の何人とも話すが、優秀な女子学生とは絶対話さない。彼女たちはいつも厳しそうな顔をしているから、話しかけることも気まずい。私は笑わない人が嫌いだから、自分は誰に対してもいつもにっこりと笑うタイプである。クラスの男子同級生と隣のクラスの男子学生とはとても仲がいい。彼らはいつも私のあだ名を呼んでいるが、私は気にしない。

私は今の生活に対してまあまあ満足している。時間が経つにつれて、自分も大きくなってきたが、親のこともうるさく感じてきた。何でも言われるから、本当にたまらないのだ。いずにせよ、自分の歩きたい道を歩み、自分の好きなことをする。これが自由だということだ。

現留守児童の玲のライフストーリー・テキスト（日本語訳文）

私は小さな村に生まれた女の子で、6歳の時から祖父母と一緒にすることになった。両親は出稼ぎに行って、毎年のお正月しか帰ってこない。しかし、夏休みの時は、私は両親の出稼ぎ先に行くことができる。祖父母はとても男尊女卑の観念が強い人である。祖父母はたまに喧嘩するが、祖母が祖父に文句を言われると、祖母はいつも私に八つ当たりする。それから、祖父母はいとこの兄と弟をととても可愛がっていて、私のことが好きじゃないからとても辛い。祖父はまだいいが、祖母は所々私のことに文句をつけるから、早く大きくなってここを離れたい。時々祖母に勘違いされて文句を言われると、本当に自分の両親に会いたくたまらない。もし一人で泣いたりすると、「なぜ泣くの？」と祖母に聞かれる。私が答えないと祖母に棒で叩かれる。本当に祖母が嫌いで、このような祖母がいなければいいのに、とよく思ったりする。でも、祖母がいて良かったと思う時もある。これが私の感想である。

付録 2：対話の中国語原文

静と周の対話（中国語原文）

第 1 次対話内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 周：（前略）以前小时候经常被邻居笑，说你差点就被送走了，只是没人来领。我记得当时我家打算把我送走的时候，我就一直看着我爸爸笑，我就感觉他要把我要送去哪里。 |
| 02 | 静：你还记得吗？ |
| 03 | 周：我记得。 |
| 04 | 静：那时候多大？ |
| 05 | 周：应该 2，3 岁吧，我弟弟刚出生没多久。但是我记得，一直印象里有。我就记得我拼命的笑，拼命的笑。后来没把我送走我也一直笑，为什么呢，因为我就怕有一天他们又把我送走了（笑）。 |
| 06 | 静：你觉得你笑就不把你送走了是吧？ |
| 07 | 周：对对。因为我爸后来也挺喜欢我的，因为我弟跟我姐都很怕他，不爱笑不说话，就我平时逗他开心。（中略）小时候还有一个事情，我没写进去，就是我 6、7 岁，我弟弟 3，4 岁的时候，我家房子都烧了。我妈在家里，当时我爸爸也一直在外面打工。当时我家不是收了那个粮食嘛，就是那种稻子，然后很多草嘛那种稻子，就是把谷子打完之后的那个草。然后就把它捆成烧柴火的那个引火的，就是用那个东西（绑起来？）对对，绑起来，（晒干）对对，晒干，绑起来，然后我妈在做那个。到处都是草嘛，然后我和我弟在那里玩火，然后不小心把我家房子都烧了。当时把我和我弟都吓的不行。我跟我弟，他说是我烧的，我说是你烧的，两个人吓得，都很小。我妈也是吓得，就看着整个房子，我们三个人就看着整个房子被烧了，熊熊大火，都扑不了。 |
| 08 | 静：那两年你们肯定很辛苦，过得很辛苦吧？ |
| 09 | 周：很辛苦。本来就是被罚，因为生了三个，房子又烧了。而且我爸妈结婚的时候我爷爷奶奶啥都没给。我妈妈老是说，他们结婚的时候我爷爷奶奶就给他们一口装水的缸和一口锅而已。（呵呵呵呵）什么都是自己，最开始的那个土砖房子都是用钱买的，跟我爷爷他们用钱买的，最开始啥都没有。后来，最开始是土砖房，到处都是漏洞嘛，每次下雨或者下雪就直接就进来了，到处都是桶，盆和杯子。 因为学费又贵，我们当时一期一个人 600 多，而且我爸的工资一天才 20，30 块。还要交农业税，所以家里负担特别重。其实小时候表面装的很开心，其是心里很压抑的，因为很有压力，上学呀干嘛。还有自己又是老 |

二，经常是不受大家关注的，所以为了博取大家的关注，想方设法。所以小时候就想，读完初中之后就不读了，就出去赚钱，减轻他们的负担。因为火烧了房子也有我的原因，然后小时候罚钱也是因为我，然后他们又没把我送走，就是各种事情。

10 静：我听他说你有经历过家里到处都是盆子的感受吗？（笑）就是滴滴答答，滴滴答答的。

11 周：真的，真的就像音乐一样，就是哪里都是漏的。然后后来就经常修修补补，修修补补，到后来那个房子还被烧了，被我们烧了。

12 静：那段时间你们住哪里？

13 周：我当时记得当天晚上我和我弟吓的，两个人都说不出话来。从那以后我就再也不敢用火柴了，我看到火柴我就怕，因为当时就是玩火柴玩的。当时住我外公家里，因为离我外公家很近嘛。在我外公家床上睡了几天，然后就临时找亲戚借钱，就临时做了几个房间，做的，然后就住进去，在那里住了很久。但是那个小房间特别小，就我们家五个人住一起。然后反正那几年，一直到我姐，我自己出去之前过的都是比较，挺困难的。因为学费又贵，我们当时一期一个人 600 多，而且我爸的工资一天才 20，30 块。我在想，我一听到上学我就痛苦。其实小时候表面装的很开心，其是心里很压抑的，因为很有压力，上学呀干嘛。还有自己又是老二，经常是不受大家关注的，所以为了博取大家的关注，想方设法。所以小时候，读完初中之后就退学了，就出去赚钱，减轻他们的负担。因为火烧了房子也有我的原因，然后小时候罚钱也是因为我，然后他们又没把我送走，就是各种事情。

14 静：也是，他们也有他们的苦衷。

15 周：对，我知道他们也有他们的苦衷，而且他们，以前的农民还要交税的，很重的税，要交几百。

16 静：对，我们那里也。

17 周：也要交？

18 静：一样的。

19 周：现在不是有钱收嘛，会给你钱。以前都要交税，然后学费也要交。

20 静：现在哦，现在我能，我觉得还是理解你（后略）。

第 2 次对话内容

序号

对话内容

01 周：那个时候很少吧，就是你们村里出去打工的？

02 静：反正没现在多。也不对，我隔壁家的小孩的爸妈也一直在外面，在我

印象中她们在我很小的时候就出去了。应该也多，只是我没观察。

03 周：你看你家对面也是，隔壁也是哦。

04 静：对。上次去的她爷爷家就是她老家，对，很小就外面了。

05 周：就是你们父母那一辈都出去打工了，老人都留在家里把小孩留给老人带的。

06 静：对，老人都没出去，就从我妈妈那一辈都出去了。

07 周：感觉每家都是，所以父母不在家是不是也感觉挺正常的，因为周围人都是这样。

08 静：对呀，都出去了。但是对小孩子肯定是有影响的，只不过她（他）们不说而已。

09 周：你小时候有什么影响吗？你爸爸妈妈不在家。

10 静：我小时候没想过，没深入的想过，就是过不了也要过。

11 周：有没有过，比如说，就是觉得要是爸妈在就好了。

12 静：就他们出去的时候有想过，其实也想让父母留在家里，但是没有说（后略）。

13 周：你爸爸现在不在那边【北京】了哦，去别的地方打工了哦。

14 静：嗯。

15 周：你爸为什么还在外面打工哦，没想过要回来吗？

16 静：因为我弟弟还在上学呀。如果回来就没有收入，在农村应该没什么工作，没有什么事情做。

（中略）

47 周：那你跟你奶奶生活，就是和老人一起生活感觉怎么样？

48 静：我奶奶呀？我跟我奶奶生活就是，经常跟她出去做事，老人们不管学习的，跟奶奶一起就随便玩。她就问你写好作业了没有，你就说写好了，然后就随便你出去玩。但是我跟我奶奶在一起，好像出去玩的时间还比较少，还更少。她经常叫我，就一放学写完作业什么的，她就会叫你跟她去地里干活。然后晚上我都能吃 2, 3 大碗饭呢，我奶奶笑我说你比男孩子还吃的多，然后她说我是在长身体。（笑）就拿那个菜碗吃两三大碗，我奶奶就跟我妈说我正在长身体，吃那么多。

49 周：那你后来觉得，以前你奶奶叫你做的那些事情，后来你不是一个人出来生活嘛，那些事情对你现在有用吗？

50 静：没用，我也不种菜。我自己一个人又不种菜。

（中略）

58 周：那你以前在农村和你奶奶一起生活的日子，就只是一种回忆了哦，没有想过要回去哦。

- 59 静：嗯，没想过。
- 60 周：就是在家里种田种菜呀什么的。
- 61 静：没想过要回去。
- 62 周：你说不想回去，是哪里不满足吗？
- 63 静：收入又低呀，然后又辛苦呀。我们也不会做那些，有很多事我爸妈都不会做（后略）。

第3次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|--|
| 01 | 周：你们那里真的好多哦，都是老人带小孩。 |
| 02 | 静：遍地都是哦，哈哈。上次我们坐公交车的时候就只能看的老人和小孩。中年人很少，年轻人就更加不用说了。 |
| 03 | 周：都出去了，待在农村没事情做是吧？ |
| 04 | 静：对呀，种田又没收入。其实我们县城的消费要比这边大城市的消费还要高，除了蔬菜那些可能便宜一点以外，其他东西都比这边要贵。我上次在这边看中一件衣服 200 块，我还嫌贵，后来我在老家看到一件一模一样的衣服要 600 块，还明码标价，也不打折。 |
| | （中略） |
| 13 | 静：像我奶奶一个人生活，除了没种稻子以外，一个人还种了那么多玉米和花生，菜呀，一般人都没种的那么多。 |
| 14 | 周：那你奶奶怎么过的呀？她一个人能够生活吗？ |
| 15 | 静：我奶奶就是儿子女儿给呀，我们给呀。 |
| 16 | 周：哦哦，也是不能完全靠种田。 |
| 17 | 静：对，肯定是不行的，她还卖玉米那些。 |
| 18 | 周：哦哦，那一般老人就靠儿女靠亲戚。没有几个是真正单纯的种田种地的吧？ |
| 19 | 静：就是家里没有一个人出去，只种田种地，养不活自己，只能管吃，就是衣服什么其他东西都消费不起。而且他们都不懂网购，只能去实体店买东西，又比较贵。 |
| 20 | 周：那这样的话，就更加促进那些大人出去打工，大人就必须出去赚钱，老人和小孩就必须留在家里。 |
| 21 | 静：因为活动的范围小，物价又高。 |
| 22 | 周：没有其他办法嘛，就是去解决那个问题。大人出去打工也是没办法，但是老人和小孩在一起生活会有代沟，上次我听宏说，他觉得父母不在身边就很大一个不好的地方就是没人教育他们，没人教他们，就是别人说什么我就说什么，就像他弟弟，别人骂什么他就跟着骂什么，反正父母也不在身边，就越学越坏。 |
| 23 | 静：对，就过年回来管几天也没用。 |

- 24 周：就回来几天也没有感情。
- 25 静：你说带在身边也不行，像我弟弟。本来是打算一直在那边上学的，即使读了初中，也不能参加当地的高考。
- 26 周：是当地的规定不能参加高考吗？所有人都不能吗，外地的。
- 27 静：是的。他连初中都上不了呀。读初中那时候是要 5 个证吧，其中一个就是房产证。很多人就买了一个洗手间大小的房间。
- （中略）
- 31 周：那不也得要几十万？
- 32 静：其实我觉得北京消费还没这边高，就是房价高。
- 33 周：那他们大人去那边，小孩最终还是得回来。
- 34 静：所以说带在身边也不行，就是很多地方能读初中也有，就是能参加高考的比较少，就是外地的人。
- 35 周：那这样一想的话，当然最好的就是，家人在家里，小孩也在家读书当然是最好的，但是就是没收入（后略）。
- 36 静：感觉都是循环的。就是可能是在县城范围比较小，而且看大家都从外地打工回来应该都有钱，然后物价就提的更高了，上去了就成了一种循环了，物价就更高了，就不得不出去打工挣钱了。
- 37 周：还真是，本来是因为没钱才出去打工的，回来后反倒被看作有钱人，把物价提的更高了，逼的大家又不得不出去赚钱了。
- （中略）
- 44 周：感觉这些事情都是连在一起的，不只是他们出去打工会给小孩带来影响，大人自己出去打工会遇到问题，然后大人出去打工后这个地区也会变得荒凉，都会受影响。
- 45 静：可能我自己一直在那里还没什么感觉，不过作为一个初来乍到的外人看的话可能感受更加深刻一点。
- 46 周：以前没想过这些是吧？
- 47 静：以前读初中高中的时候没想过这些。
- 48 周：你觉得这些问题和你有关系吗？
- 49 静：有关呀，因为我也算是其中的一个。肯定小孩子都希望他们父母在家里。
- 50 周：其实农村的父母出去打工时也会遇到很多问题，比如到大城市里语言和习惯不同导致不适应，陌生的地方和陌生的语言就会使人压抑，人际关系也不顺畅，还有自己既有的技能也发挥不了，所以应该过得很辛苦吧。
- 51 静：所以这样又导致了一个恶性循环，就成了父母最开始的他们不愿意出去，但是出去久了又不想回来，即使回来了也不知道怎么种地了，又不得不去城市了，这也导致了房价变高，因为打工的也在那边要买房。其实都是相关联的，每一件事情都

是有关系的。然后有钱人又都跑来乡下去，他们就追求高品质环境好的生活，因为他们有钱了不需要赚钱了，就不必要留在城市了。真的好奇怪哦。

（中略）

- 87 静：觉得我们那里的小孩，就是你要调查的留守儿童太多了，遍地都是，这是一个很严重的问题，只是都没人意识到。
- 88 周：是呀，这些都是息息相关的。不止留守儿童的问题，还有他们父母，还有当地地区的发展。如果越来越多的外地人去你们那里开发或者租地的话，可能还会影响你们本地人的衣食住行和环境的问题。所以要解决的话，还得每个因素都考虑进去，才能完全解决好。
- 89 静：我觉得最好的解决办法还是要靠教育，因为人一出生最开始的十几年时间都是在学校，就是最好改变一个人的时候。如果这段时间没有教好的话，就很难实行。
- 90 周：除了学校教育，还有可能跟国家政策也有关系。就是即使大人不出去也能生存下去的环境也很重要。

第4次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|--|
| 01 | 周：那后来怎么决定种菜了呢？ |
| 02 | 静：也有看到你【周】种的那个嘛。菜爬藤比较快。夏天还可以遮阳。但是我去广州的那几天啊，这些长得特别快。之前那些藤啊，我都整理一根一根的。后来回来他们全部都长乱了。之前都是一根一根，我都会定期把它排好。 |
| 03 | 周：是啊，这些菜长得好快呀。 |
| 04 | 静：对啊，我就去几天，长得好快。 |
| 05 | 周：那你种这些菜，为了吃吗？ |
| 06 | 静：也是为了看吧。 |
| 07 | 周：不是为了吃呀。 |
| 08 | 静：吃也吃啊，吃了好几顿了。现在外面卖的菜都有撒药啊。你看之前种的小白菜，天天都要捉虫，好多虫。你从外面卖的小白菜长得那么好，不知道打了多少药。 |
| 09 | 周：是啊，外面的都长得很好。 |
| | （中略） |
| 29 | 静：这个土太难提了，这个土都提了一个多月。 |
| 30 | 周：这些全部是你自己提上来的吗？都是你背回来的？ |
| 31 | 静：好重，我背的比较多吧。我那个朋友有时候会跟我出去。 |
| 32 | 周：去哪里挖呀。 |
| 33 | 静：之前我们去人家菜地偷土，后来被我们挖出一个洞来。哈哈哈哈！那时候是晚上啊，然后被我们挖出一个很大的洞啊就没去了，后来就在我们下面那个花坛里面 |

挖。刚好我们店里有咖啡渣可以做肥料，可以把土变的肥一点的那种，然后就攒了很多。之前就想着怎么样把土弄肥一点。

34 周：你这些都是别人告诉你的，还是你本来就知道？

35 静：咖啡渣我知道，因为之前我也用咖啡渣养花什么的。咖啡渣有很多作用，比如杯子上有污垢，用咖啡渣就会洗的很干净，稍微抹一点就可以了。

36 周：是吗？我在那边【日本】，土都是买的，肥料也是买的。

37 静：不过咖啡渣也有不好，就是容易长虫子，所以一定要把它放到发霉了以后才能放到土里。而且一次不能放太多，容易烧根，所以还是很肥的。要抓点蚯蚓放土里面。

38 周：啊！（惊讶）

39 静：松土。

40 周：是吗？

41 静：对。这样土又肥，又能松土，就能长那种肥一点的地。

42 周：你在哪里看到的？

43 静：这个时候听大人说的。就是土里一般有蚯蚓的话，土就很肥。

（中略）

310 周：那其他呢？对你自己的家乡啊，周围的留守儿童呀。之前你不是一直跟着我走嘛，对你的感触是最深的，比其他留守儿童，因为你一直跟着我走。

311 静：之前没有仔细想过这个留守儿童的问题，因为我觉得很正常啊。

312 周：你自己也没有意识，还是说意识到了，也觉得没什么？

313 静：小时候我就觉得这是没有办法的事情，是很难改变的事情。其实我也知道父母是逼不得已呀，没有办法才这样的。

（中略）

352 周：最后我想问你哦，就是从去年8月份开始一直到今年8月份，你不是一直非常配合我调查嘛。还帮我做翻译呀，带我去你家做调查呀，帮我找人。我想问的是，就是你为什么会这么配合我调查，愿意跟我聊天呢？因为其他的留守儿童都还是很有点抵抗的，都要我去讨好他们才愿意说，但是我感觉你是很乐意的，所以我就想问一下你的，你是怎么想的？为什么这么配合我？

353 静：开始的时候因为你是朋友的姐姐呀，我们那里刚好又有，所以想着能帮就帮。后来跟你聊了以后我也觉得存在很大的问题，留守儿童长大以后可能有一定的影响，既然我身边有人在关注这个问题，并且想改善，我也想通过我自己能做点什么，能帮到最好。

彩と周の対話（中国語原文）

第1次对话

| 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 彩：可能跟你们那时候比的话，就没有太多的想法。你要问我的记忆的话，我只记得我弟弟出生的时候，有政府的人过来拆房子。 |
| 02 | 周：真的吗？ |
| 03 | 彩：嗯。 |
| 04 | 周：你弟弟出生的时候？ |
| 05 | 彩：是呀，因为弟弟不是超生的嘛，然后政府的人带一堆人过来拆房子来了。后来我家下面那房子不是有个洞嘛。 |
| 06 | 周：嗯。 |
| 07 | 彩：是呀。那就是生弟弟的时候拆掉的。 |
| 08 | 周：你看见了吗？ |
| 09 | 彩：我看他们拆的，看见他们来的。 |
| 10 | 周：那时候有什么感受吗？怎么想的？ |
| 11 | 彩：那时候哦，那时候人小太单纯。 |
| 12 | 周：你当时几岁？ |
| 13 | 彩：才4岁，还没5岁。那时候弟弟才刚出生，妈妈还在坐月子。 |
| 14 | 周：你爸爸呢？那时候去哪里了？ |
| 15 | 彩：爸爸，我不知道。我不知道爸爸那时去干什么了。反正我就记得当时正好我在外面玩，我就看到一堆人过来了，因为之前也有来过。然后邻居家的小孩就来告诉我妈妈，说你家外面来了好多人。妈妈就说你们别出声，就说我没在家，后来那些人就把房子给拆了。 |
| 16 | 周：嗯嗯，然后呢。拆了就走了吗？ |
| 17 | 彩：拆掉之后好像后来还是罚了钱吧，反正后来我也不太记得了。 |
| 18 | 周：那你出生的时候没有事吗？ |
| 19 | 彩：我出生的时候好像没有，我也不记得。 |
| 20 | 周：对呀，你那时候太小了。你爸爸那时候在家还是在外地工作？ |
| 21 | 彩：在外面工作，肯定要出去工作呀，三个小孩。（哦）就算只有我和姐姐两个人，家里条件也不算很好。 |
| 22 | 周：你以前那下面的房子还挺好的哦。 |
| 23 | 彩：好吗？周围都是树，没有人家，感觉晚上挺害怕的，不过后来我家搬去QQ那里了。我感觉我的经历挺平淡的，没有什么很多记忆。我小学就在00小学读，后来读到三年级，00小学就跨掉了。 |
| 24 | 周：怎么垮掉了？ |
| 25 | 彩：后来不做了，做不下去了。 |
| 26 | 周：学生太少吗？ |

- 27 彩：学生太少，学生所有的都加起来都没有 90 个人。后来读到三年级就没了，就去 BB 学校上学，在那里读到五年级又没了。六年级到中学就合并到 CC 中学去了。读到六年级，上学期还是在 CC 中学上的，后来下学期我妈妈就出去打工了。妈妈出去后，我就转去亲戚家那边的学校去了。我是一直到初一，在 A 亲戚家住了一年，在 B 亲戚家住了一年，然后初一去妈妈那里读了一年，后来又回来了，回来后又有复读了一年。
- 28 周：你住亲戚家生活怎么呀，适应吗？
- 29 彩：那时候住在亲戚家，我没有什么适不适应的，我除了我父母，其实哪里都不想去。

第 2 次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|-----|--|
| 01 | 彩：你姐 13 岁就出去打工了呀？ |
| 02 | 周：对呀，好像还是初一的时候吧。 |
| 03 | 彩：我感觉你们的经历都好丰富呀。 |
| 04 | 周：什么好丰富？ |
| 05 | 彩：经历。我觉得我从头到尾都是在读书。 |
| | (中略) |
| 13 | 周：要是你是我姐姐，13 岁就出去打工，上初一就辍学出去打工了，你会怎么办呢？ |
| 14 | 道：我都不知道我 13 岁能干什么。才初一，我感觉我什么都不知道。 |
| 15 | 周：当时我妈妈也是天天帮她换工作，因为刚开始她也做不惯，所以她做几天就不做了。你知道她做的第一份工作是什么吗。是给别人当保姆。 |
| 16 | 彩：哈哈。怎么说呢，我觉得我和 00 姐的出生环境可能不同，我出生的时候条件要稍微好点，要是让我去想象她的处境，我感觉各方面都无法想象得到。 |
| | (中略) |
| 134 | 周：那你平时看新闻吗？就是社会上发生的各种事情会关心吗？ |
| 135 | 彩：不怎么看。关心还是关心，但是感觉看不懂。 |
| 136 | 周：找不到和自己的关联吗？ |
| 137 | 彩：嗯嗯。你说比如新闻报道今天封了那座城，但是还没封到我们这里来，所以也感受不到着急的感觉。 |
| 138 | 周：没想过明天就会封到我们这里来了，今天可以提前考虑一下对策什么的。 |
| 139 | 彩：不会。 |
| | (中略) |
| 166 | 周：(前略)对了，你们学校有校园贷款吗？ |

- 167 彩：有呀。怎么说呢，就是超贷吧。去年我们学校有个学生校园贷款，后来跳楼自杀了。
- 168 周：为什么？
- 169 彩：怎么说呢，校园贷款就是利滚利，超利贷，还不起。听说她只借了一两千块，后来滚到了几十万，她怎么还的起呢。现在中国的大学年年都有因为校园贷款自杀的人，而且还不少。因为校园贷款的一般有两种，一种就是借了之后，利滚利的，如果家里条件好的话，让家人出钱解决了。还有一种就是，你家里条件又不好，你又还不起，所以你自己就成为那些贷款的人员，去帮助他们欺骗其他同学，然后从中得到的利益再去填补自己的贷款。就这样一拉一，一拉一的，越来越多。所以我们学校现在主要拒绝的就是校园贷款，校园里横幅上都有写拒绝网路贷款。
- 170 周：这么严重呀。
- 171 彩：我们学校当时还把这消息封锁了，对外全部封锁，对内部的学生还是说明了情况，因为我们也是这个学校的一员，我们也应该知道这事，也为了避免今后发生这种事吧。所以现在这个已经渗透到了每个学生每个寝室，老师也会派一些学生去督促其他学生有没有可疑的行为。
- （中略）
- 178 周：那你们同学之间也不会谈这些事情吗？
- 179 彩：学校现在挺重视这件事的，就是因为发生在自己学校，发生在自己身边，才会有感觉吧。要是不是发生在自己身边的话就很难去想象。感觉现在的校园有点社会化了，也不单纯。
- 180 周：所以作为学生也得经常保持清醒的头脑，时常关注社会上生活中的事情，说不定哪一天就轮到自已了。平时没事也多和周围的同学讨论，这样万一自己真的哪天遇到了也不会慌。
- 181 彩：嗯嗯。

第3次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|--|
| 01 | 彩：感觉出去父母打工不止对小孩有影响，而且对大人也有影响。 |
| 02 | 周：对呀，现在的离婚率真的很高，尤其最近年轻人离婚率真的越来越高了。农村人出去打工去了城市后就很容易离婚。 |
| 03 | 彩：现在的结婚很少是真心相爱的，大部分都是看这家人条件不错，然后就嫁过去了。然后结婚后要是有什么矛盾又不好好商量，于是只能选择离婚。有没有发现，周围有很多人都只认识两三个月就结婚了。如果家庭条件特别差的农村家庭，父母出去打工后，尤其是母亲那方就特别容易改嫁，这时候小孩也会变成累赘。我做兼职的那里很多姐姐都是结了婚的，听她们说那些事，就感觉结婚后矛盾特别多，婆 |

媳之间的矛盾呀，和老公之间的矛盾呀，听着都感觉可怕。

04 周：我觉得这些家庭矛盾是可以通过各种交流来解决的，只是现在的人都不善于这样对面交流了。而且现在的交流工具也变了，大部分都用手机和电脑来交流，面对面的交流也少了。

05 彩：以前感觉离婚这个词特别遥远，很少在自己生活中出现，即使有也是极其个别的例子，但是现在好像已经完全渗透到自己的生活中了。

06 周：那你觉得是因为什么原因造成的呢？

07 彩：钱吧。尤其出去打工后就会产生各种各样的想法。

08 周：也有可能农村的女性不像以前只能待在家里，现在都可以出去打工挣钱了，在外面见多了也就容易受诱惑吧。

（中略）

35 彩：我们现在这里以后可能划分为城镇了，00 镇，县城不是也叫 00 镇吗。还有我们这里以后要修铁路，上次还有人过来测量路线呢。你没发现，大家一听说要被征收就马上开始做房子，想着以后能分到搬迁费。能分到就分到嘛，干嘛要去刻意做房子呢，我实在搞不懂他们在想什么。

36 周：我搞不懂政府为什么要把农村也全部实现城镇化。

37 彩：这个我倒能理解，因为 2020 年我们国家要全面实现小康社会，2050 年要进入共产主义社会，是一种最高境界的社会。你知道什么叫小康社会吗？

38 周：不太清楚。

39 彩：就是每个家庭的生活质量都很高，比如每个家庭都有工作，有房有车的，生活条件比较好的社会。

40 周：但是中国这么多人，全面实现小康社会不是很难吗？

41 彩：所以现在已经开始实行了。现在农村都是高科技了，不是谁都能做农民的，农民也需要知识分子才能当的。

42 周：但是高科技并不代表都是好的呀，就比如以前推崇的【转基因】，现在不是说对身体有害嘛。

43 彩：是呀。还有像那些大山里要实现小康社会，感觉很难，毕竟要改变他们的生活环境有点不可能。

44 周：还有生活方式也是很难一时改变的。尤其像那些少数民族，他们祖祖辈辈都习惯了那种我们看来比较原始的生活方式，如果政府硬是让他们也过小康生活的话，感觉反而降低了他们的生活质量。

45 彩：嗯。现在城市里的人看农村空气好，所以越来越多的人来农村建房子。这样的话农村里的房子越来越多，农村里也会变得乌烟瘴气了。我觉得没有一方净土了，感觉我们这里的空气都没以前好了。像我家周围的地都被卖出去了，没钱的人都想方设法的想出去，有钱人又想方设法的想进来。

46 周：形成了一种反趋势哦。

（中略）

66 周：是呀。你上次说有钱人越来越有钱，没钱人越来越没钱。

67 彩：是呀，因为有钱人的话有钱去发展的更好呀。

68 周：那你觉得这和现在的社会有什么关系吗？

69 彩：我觉得政府的政策不够好，虽然现在也在扶贫，但是没扶到点子上。现在国家发展越来越好了，整体生活条件也提高了，但是贫富差距也拉的越来越大了。

70 周：当时改革开放也是只先致富一部分沿海地区，所以内陆地区还是发展很慢的。

71 彩：嗯，所以现在很多人都出去打工，但是出去打工后很容易迷失自我，可能觉得自己不努力的话就会被别人压制着。所以拼命往上爬，一直往上爬，什么时候是个头呢。

第4次对话内容

序号

对话内容

01 周：嗯，你这里写你以前的老师都对你特别好。

02 彩：对，我还是觉得我从小到大特别幸运。为什么呢？因为我周围的人都特别好，无论是同学还是老师，都是一些好人。就是无论你走到哪里，老师都会对你特别关照的那种。

（中略）

18 彩：我遇到我最好的老师就是他无论你的成绩好坏，他都不会以你的成绩看人，而是以你的品性看人。就算你哪方面不是特别好，但是他会关注你好的方面，只要你不犯法，不违背学校的规则，他就觉得你很好，很不错了。

19 周：怎么判断是不是好学生？我觉得不可能每个人的成绩都很好。我觉得只要作为一个人，最基本的品格有的话就行了。因为我觉得教师的工作就是育人，怎么样把一个人培养出来？所以比起怎样教出好学生，我觉得怎么样教他们做一个好人更重要。因为他们出了社会就没人教他们了。尤其像这种留守儿童家庭教育这块本来就缺失了，所以学校教育更加重要了。

20 彩：现在就有很多家长把教育这块交给学校，学校又把这块交给家长。就是两方推来推去，但是这到底是谁的责任呢？你也不好说是谁的责任。

21 周：就像这种事情，你也不好说是怪学校，或是怪家长，因为这些事情都是串在一起的。那你爸爸为什么要出去打工啊？还不是因为要交你们的学费，如果呆在农村的话，又没事情做，所以必须得出去打工。所以他作为一个父亲。对你们的教育就缺失了。现在还好你妈妈在家，像以前你爸爸妈妈都去广州打工的话，父母对你的教育就完全缺失了。然后对你心理上就会产生负面影响，然后这些又会对你的学习产生影响。还好当时你有老师在身边拉你一把，如果当时老师没有拉你一把的话，

- 这一串事情都是负的影响。导致小孩，
- 22 彩：就像串串一样，你串着我，我串着你。
- 23 周：所以说呢，有些小孩为什么会表现出负面的情绪，或者是成绩不好，就像你之前那样，可能是因为父母不在身边的原因。或者是因为住在亲戚家不习惯，反正各种原因导致他表现出了这种行为，或者是成绩突然下滑。如果老师只是关注这一点的话，指责他为什么成绩下降这么快，那小孩的心里就会更加委屈了，就会对学校和老师产生反感。所以看问题不能只看单方面，要从多方面来看。（后略）
- 24 彩：有很多留守儿童，周围人对他都排斥，然后她心里就会很压抑，人一旦压抑的话，就容易引发心理问题。平时就像我们自己因为一点小事也会产生问题，更何况所有事都堆积到一起就更容易产生问题了，那就更容易爆发了。
- 25 周：对呀，尤其他们父母不在身边的话，就更容易堆积问题。尤其他们就会觉得为什么别的父母都在身边，自己父母不在身边，然后对父母就会有一种，就像你刚刚写的有一种不理解。无法理解，为什么他们要出去赚钱不在我身边？如果老师又对他爱理不理的话，
- 26 彩：如果能够走向一条正确的道路的话还好。如果真的想不通的话就容易，
- 27 周：就容易走极端。所以这些事情不能怪某一个人，是周围这个社会导致的。也不能怪父母，因为农村里面的教育就是要交学费啊，你要上学的话就必须出去打工赚钱。所以，如果不去打工的话，自己一家人都养不活。所以这又跟国家政策挂上钩了，如果国家能够给农村的教育多出一一点资金的话，
- 28 彩：现在农村里面的义务教育不是 12 年吗，基本上都是免费的。但是你看，学费是免了，学杂费却更贵了。我们以前交学费的时候，学杂费顶多几十块钱。
- 29 周：嗯，几十块钱。
- 30 彩：像现在学费是免了，学杂费一学期也还是要一千多。就像我弟弟现在他们上初中，除了午餐费，那是没办法要吃饭嘛，但是除去那个也还是要几百块。然后最近这个学杂费就越来越贵了。
- 31 周：对呀，我就觉得为什么学杂费会那么贵呢。
- 32 彩：对呀，就一些本子和笔。学费是免的。是国家出的。
- 33 周：所以呢，我觉得这些政策刚开始初衷是好的，但是一实施下来就全部变味了。
- 34 彩：嗯。
- 35 周：所以我觉得这管理也有问题。
- 36 彩：没有实施到位。有实施不到位，这么多人呀，总有一两个。
- 37 周：贪污，贿赂。
- 38 彩：上面的压下面的，下面的再压下面的，下面的也没办法。最主要的还是上面的，如果你上面没管理好的话，你不压着下面，那下面的只能压着下面。他们也不好生存呢。

- 39 周：反正是他们一层压一层。压到下面的那层就是最可怜了，比如说农民。他们下面没有压的了，就只能靠自己，出去打工赚钱。我发现农民很少有人去意识到自己的一些权利。不去问为什么这么贵，为什么要交这些钱？
- 40 彩：他们就不问为什么。就知道赚钱。
- 41 周：嗯嗯。很少去意识到自己的权利，像投诉什么的应该很少。
- 42 彩：你看我们这里无论发生什么事情，都没有人投诉的。还有什么上法庭的，估计都没有。
- 43 周：死了就是死了，撞死就撞死了。出了什么事就出来了，好像一下子就能接受这个事实。
- 44 彩：你看上次那个江歌案，妈妈还会去法庭投诉。如果是发生在我们这里，我们这里绝对没有一个人去。所以说呢，还是走出这个地方，呵呵呵。需要一个个去改变，不是一下子就能改变的。

健と周の対話（中国語原文）

第1次対話内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 周：那你对我写的经历有什么感想呢，这上面写的就是我的经历。 |
| 02 | 健：怎么说呢，这上面写的我经历的很少。但是第三页上写的东西跟你差不多，那个时候应该我们都经历过。 |
| 03 | 周：哪里？ |
| 04 | 健：上学的时候去林子里面，摘果子啊，捉虫。还有早上起很早，村里面几个小孩都念一个学校一起去上学。这里差不多都很像，90%很像。 |
| 05 | 周：对，那时候家里没有多少零花钱，都是自己出去找吃的。 |
| 06 | 健：那时候零花钱都很少，除非我爸爸回来的时候。有时候回来就给我们几块钱。那时候我们用钱用得快，马上就去买东西吃了，不知道钱怎么用。所以说那时候零花钱虽然少，但是偶尔还是会有有的。然后那时候读书最有趣的就是上学和放学的时候。记得我上中学的时候，学校每天4点半放学，然后我到家都是六点。然后，我父母就在家里要等我很久，经常跟那些同学一起走山路，绕很大一圈才回去。如果知道哪里有吃的，就有李子摘呀，就会绕一大圈去摘那个吃。那时候就图个开心，还有东西吃吧。其实吃的挺多，但是就是吃不腻。 |
| 07 | 周：不过家里也没什么吃的。 |
| 08 | 健：有什么吃的呢？没什么吃的。以前读书的话，所有人没有什么零花钱。哪有什么好吃的呢？就有李子，桃子，橘子。板栗。家里没有就去别的地方摘着吃。 |
| 09 | 周：嗯嗯，你就觉得这一部分跟你的经历特别像是吧。 |
| 10 | 健：是的。特别像。以前从自己家走到那个双桥，要走半个小时吧。每天早上走过去，中午又走回来吃饭，那时候学校虽然有食堂，但是谁会留在食堂吃饭呢？ |

11 周：给钱的吧。

12 健：要给钱的。那时候我们同村的有几个都是中午一起回家吃饭，午休就一个小时，吃完饭过去就正好差不多。这就差不多了，就没有一点时间了。中午都是奔波在回家吃饭的路上，一来一去就没时间了。那时候自行车都没有，就靠两条腿走路。以前家里那条路好差，都是黄泥巴路。那条路有个坡，一高一低这一个坑那里有个坑。

13 周：是的是的。那后面的部分呢？比如做家务啊。

14 健：做家务还是做，当家里种花生啊，收玉米呀，收稻子的时候也去帮忙。还有插秧的时候，虽然大人不期待你插，但是到了5，6年级的时候，就都会跟去田边玩。

15 周：就跟着大人走呗。

16 健：那时候在家也无聊，所以大人们去田里做事的时候，我们也都会跟着去啊。

17 周：那时候还是抬着那种收稻子的道具去，要多人抬着去。

18 健：对。那时候上了初中之后，像收稻子什么事情，都要靠自己了，然后这些都是经历吧。像你们也都经历过吧。

19 周：对呀，我以前也经常去帮忙。

20 健：要是谁家来我家帮忙，我也去帮人家。都是这样。

（中略）

68 周：你对以前的生活感觉好像还挺满足的。

69 健：对于乐趣方面，我觉得还是挺开心的。那时候生活上也不是说特别穷，但是也不好。总的来说，童年都不是完美的嘛。

70 周：哪些地方不完美呢。

71 健：所有人的童年都不完美吧，虽然那时候玩的是特别开心。

72 周：哪方面不完美呢。

73 健：太可怜了，虽然不是特别可怜，但是那个时候我们生活情况都不好。

74 周：那时候大家生活条件都不好。

75 健：肯定呀，大家都是自己种的菜。

76 周：那你感觉我们现在买个菜跟以前自己种的菜吃着有什么不同呢。

77 健：怎么说呢，现在的生活就变得奢侈了，因为什么都要买。其实不用那么奢侈就好了。

78 周：大吃大用就浪费哦。

79 健：对，大吃大用就是浪费。

（中略）

137 周：以前的农民负担都很重。

138 健：负担重啊，怎么不重呢。

139 周：上缴税收很重，我听我妈妈说，一年一个人要交一两百。是按人口交的，一个

人一两百。

140 健：对呀。这些都要交，不过这些事情，像我们的话都不太懂。

141 周：但是像现在的话，都会给农民钱。

142 健：给是会给的吧，现在都 21 世纪了。现在是鼓励农民多种田地，生怕大家都不种了，就没饭吃了。

143 周：你觉得呢。

144 健：我觉得呀，所有农民都不种田都出去打工的话，所有人都得饿死。

145 周：是呀。

146 健：如果大家都不种田了土地都荒了的话，中国经济也会被拉下来。

第 2 次对话内容

| 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 周：那你以前读书的时候有幻想过做什么工作吗？ |
| 02 | 健：那时候还真没幻想过做什么工作。那时候我就幻想不要太累，然后又能赚很多钱的工作。但是没有那么好的事呀。 |
| 03 | 周：出来之后呢？ |
| 04 | 健：出来之后呀，那就是做白日梦啊。最开始又没有一技之长，所以能学点技术就学点技术。能赚点钱就赚点钱。学了一门技术之后就自己干就好，现在就是这样想的。踏踏实实过一辈子就可以了。如果真的是中彩票中了就中了，不中也没事，反正不带任何期待。能中就中，不中就算了。 |
| | (中略) |
| 21 | 周：那你现在上班做事累吗？ |
| 22 | 健：你怎么说呢？说累也不累，说不累呢也累。事情多的时候就累呀，没事的时候就轻松。 |
| 23 | 周：以后也一直做这个吗？ |
| 24 | 健：不知道！我现在有个想法，就是开一个早餐店。 |
| 25 | 周：自己开早餐店吗？ |
| 26 | 健：对，开一家连锁的早餐店。我要去加盟一个店，要开在老家。 |
| 27 | 周：比如说哪种店呢。 |
| 28 | 健：这边的粉店，鱼粉。你可以下次去尝尝。 |
| 29 | 周：明天去吃吧，我还没吃过呢。 |
| 30 | 健：味道比较好，而且家里人还没有人开过这种店。像那些中年人，老年人不喜欢吃太重的口味的的话，像这种粉的味道就特别好。非常适合他们，没有一点辣椒的。我有想法，就是想去开这种店。 |
| | (中略) |

- 56 周：对呀，在县城住的话，一个是人际关系，二个就是开支，什么都要买。
- 57 健：对呀，我们说的话就在家后面的院子种菜，自己种的菜总比买的菜要吃的好吧。
- 58 周：安全一点。
- 59 健：既安全又卫生。不会喷什么药啊。县城里面。这些小商贩还好一点，要是那种大车大车装来的菜的话肯定喷了药，你都不知道他从哪里运过来的。
- 60 周：自己种菜的话，想吃什么就种什么。
- 61 健：对啊，种点萝卜种点辣椒，种点茄子，豆角，苦瓜。自己家里有块菜地就够自己吃了。
- 62 周：那你以后自己回去也会种菜吗？
- 63 健：我呀，还不知道！
- 64 周：你知道怎么种菜吗？
- 65 健：就是不知道种呀。但是种菜还是比较容易啊。就是施肥，挖坑，播种。只要有块菜地的话还是不会饿死。不要种太多，就够自己吃就行了。再说邻居之间你种多了的话，大家都会相互送来送去。你想吃什么大家也都会拿点给你呀。像有些人种多了的话，放在家里也是坏，还不如送给你嘛。乡下的。邻居之间如果关系好的话比亲戚还亲密，你比亲戚还走的近。你看我妈现在一个人在家里。我妈妈有时候叫她来我家作伴，她就过来作伴。我妈妈一个人睡在家里有点怕。
- 66 周：对呀，像在城市里面都是一个人，冷冷清清。
- 67 健：虽然说外面很多人不用怕，但是家里一个人。你想找个人作伴聊聊天都没找不到人。农村的话你想跟谁聊就跟谁聊，聊到什么时候都行，最后回家睡觉就行。只要不打扰别人睡觉就行。

第3次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|--|
| 01 | 周：你每天都关心新闻吗？ |
| 02 | 健：不是那种新闻，兴趣部落上面的新闻，是比较搞笑的。 |
| 03 | 周：那平时发生的国家大事，新闻你看吗？是不是不关心？ |
| 04 | 健：不是不关心，就算关心的话也轮不到我们来决定，也没有什么权利。像我们的话，只能跟别人聊天的时候可以聊一下，但是不起任何作用。 |
| 05 | 周：但是一个国家也是由，普通人组成的呀，所以我们每个人的举动行为，都会影响着整个社会，会影响很多人。 |
| 06 | 健：那你想太多了。现在，在外面有谁会做得到呢，其实你自己做到了，别人也不会做到。现在的人都是唯利是图，没有一点好处绝对不会干的。 |
| 07 | 周：但是像一般关系到自己的利益，比如说前阵子播出的打预防针还有幼儿园虐待 |

- 事件，你都知道吗？
- 08 健：知道啊。像那种幼儿园的老师欺负小孩，或者是保姆欺负小孩，这种行为肯定是不行的。你本来作为一个去照顾他的人，怎么能欺负他呢。再说，如果你的小孩被送去其他幼儿园被人家欺负，你怎么看呢？
- 09 周：虽说这也不只是一个人的事，这是整个社会的事情。
- 10 健：对呀，所以 90%的人都会对这种人有指责。还有 10%的人就觉得事不关己。就算我们一般人即使有这种指责也没有用啊。最多只是能在网上说几句，但是谁会理会你呢？
- 11 周：但是如果我们如果不在网上说几句的话，估计政府更加不会重视这个问题。
- 12 健：现在中国这些政策都很严，所以国家对这些问题应该也会管理吧。
- 13 周：还有一个就是网络特别普及，所以有什么问题就往上面上传。
- 14 健：网络发达的话，像这种事情几个小时之内就全部知道了。
- 15 周：所以这种事情，如果不去传播开的话，自己也很难意识到。
- 16 健：像这种事情的话一般都不是亲身经历者上传这个，一般都是旁观者或者陌生人看到这种事的就上传上去了。因为像这种事情 90%的人也都会转发吧。
- 17 周：有关于个人的道德。
- 18 健：但是像他们一般上传的时候，不会把对方的脸拍下来也不会直接说名字，只会说在某个地方的某个幼儿园的那个班有这个事情。因为现在的人也担心会被报复，现在的社会都人心叵测。
- 19 周：感觉现在的人都没有那种信赖关系。
- 20 健：人越人之间真的没有百分之百的信任，尤其在外面。
- 21 周：为什么呢。
- 22 健：不可能有百分之百的信任，尤其像我们做生意的。
- 23 周：是因为怕损害自己的利益吗？
- 24 健：也有吧。也有这种想法。我们做生意，虽然与老客户之间也有信任，但是没有百分之百的信任。毕竟如果给别人做了几万块钱的东西，万一人家跑了怎么办？这样你就损失了好几万，所以没有百分之百的信任。
- 25 周：那你现在有百分之百能信任的朋友吗？
- 26 健：百分百能信任的朋友肯定有，但肯定不是在外面做生意认识的。
- 27 周：还是以前在家里认识的朋友吗？
- 28 健：对，就是从小一起玩到大的朋友。现在虽然在这边认识做生意的朋友比较多，但是绝对没有百分之百的信任。超过 50%的信任就已经很好了，人都有防备心嘛。

宏と周の対話（中国語原文）

第 1 次対話内容

| 序号 | 对话内容 |
|----|-------------------------------------|
| 01 | 周：你读了之后，有什么感想？ |
| 02 | 宏：好像很不一样的感觉。 |
| 03 | 周：你父母也是农民吗？ |
| 04 | 宏：不知道。小时候种过吧。 |
| 05 | 周：你们这里不是农村吗？ |
| 06 | 宏：是农村呀。 |
| 07 | 周：那都不种地，都出去打工了。 |
| 08 | 宏：种地呀，我奶奶他们有种地。 |
| 09 | 周：那像你爸爸妈妈那些年轻人都不种了是吧，都出去打工。 |
| 10 | 宏：对，我爸爸 16 岁就出去打工了。 |
| | （中略） |
| 21 | 周：你父母出去打工的时候你多大呀？ |
| 22 | 宏：还没 1 岁。 |
| 23 | 周：为什么那么早就出去了？ |
| 24 | 宏：跟你写的一样，因为我家当时做房子。 |
| 25 | 周：没想过带你一起出去吗？ |
| 26 | 宏：没有。 |
| 27 | 周：你们这里好像都是这样哦，都是留给老人带的。 |
| 28 | 宏：是的。 |
| 29 | 周：那你小时候童年感觉怎么样？ |
| 30 | 宏：童年感觉挺好呀。和小伙伴们一起玩一起打架，因为我小时候玩具很多的。 |
| 31 | 周：都是你爸妈买的吗？ |
| 32 | 宏：对，还有亲戚。 |
| | （中略） |
| 71 | 周：你小时候会不会去你爸妈那里？ |
| 72 | 宏：去过一次。 |
| 73 | 周：一共就去过一次吗？ |
| 74 | 宏：至今为止去过两次，都是暑假，寒假的时候他们会回来过年。 |
| 75 | 周：那小时候见到他们是什么感觉？ |
| 76 | 宏：就是他们每次回来就有玩具玩，会买很多东西给我。 |
| 77 | 周：你会跟他们说很多话吗？ |
| 78 | 宏：不会。 |
| 79 | 周：还是跟你奶奶最亲哦？ |
| 80 | 宏：对。 |

第2次对话内容

| 序号 | 对话内容 |
|------|---|
| 01 | 周：那你父母把你生下后8个月就出去打工了？ |
| 02 | 宏：对。 |
| 03 | 周：你周围的同学的父母都是这样吗？都是小孩很小就出去了吗？ |
| 04 | 宏：对呀。 |
| 05 | 周：那你小时候会想你父母吗？ |
| 06 | 宏：不想。 |
| 07 | 周：是没有存在感吗？ |
| 08 | 宏：对呀。 |
| 09 | 周：那他们对你是一个什么样的存在呀？ |
| 10 | 宏：就是父母呀。 |
| 11 | 周：那你以后当父母也打算这样吗？ |
| 12 | 宏：现在还早，我还没成熟。还有过17,18年吧。 |
| 13 | 周：你要30几岁才考虑当父母是吗？ |
| 14 | 宏：对。 |
| 15 | 周：你父母20岁就结婚生下你了，你不想早婚是吗？ |
| 16 | 宏：对，不想。 |
| 17 | 周：为什么？ |
| 18 | 宏：没钱结是什么婚。 |
| (中略) | |
| 161 | 周：你们这边去广州打工的挺多，你也想过去吗？ |
| 162 | 宏：不想，我就在家里种田，因为种田至少有饭吃嘛。因为你说你父亲一年都在外面挣钱，有时候都讨不到钱。在家里种田还有饭吃，再说现在还有塑料米。 |
| 163 | 周：塑料米？你说在外面买的米吗？ |
| 164 | 宏：对呀，所以还不如自己种。 |
| 165 | 周：那你会种吗？ |
| 166 | 宏：百度呀，或者问那些老人。反正我是打算赚够钱后就回家种田，不想那么辛苦。而且现在种田都有机器了，不像以前那么累了。 |
| 167 | 周：是呀，不过确实像你说的那样，在外面那么累的工作，还无法保障自己吃的东西安全。 |
| 168 | 宏：对。还有我想学做雕刻，陶瓷。 |
| 169 | 周：在农村吗？ |
| 170 | 宏：对，因为种田只有春季和秋季才忙点，夏季和冬季就还可以学门技术，自己也 |

- 可以玩。
- 171 周：那你还种菜吗？
- 172 宏：种呀，用大粪，哈哈哈。
- 173 周：我们吃完了排出来又回归大自然，然后做蔬菜的肥料再长大后，我们又吃。这样你会感受到自己和大自然的关系很紧密。
- 174 宏：是呀。

第3次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|--------------------------------------|
| 01 | 周：那你平时有什么事会跟谁说呢？ |
| 02 | 宏：不说。 |
| 03 | 周：会不会打电话跟你父母说？ |
| 04 | 宏：不会，很怕他们。 |
| 05 | 周：为什么？ |
| 06 | 宏：因为毕竟是父母，还是很怕的。你不觉得吗？ |
| 07 | 周：小时候也许吧。那他们每次打电话跟你说什么？ |
| 08 | 宏：好好读书，要考个好成绩，要带弟弟。但是我弟弟太调皮了，所以我管不住。 |
| | （中略） |
| 39 | 周：对了，你们这边除了赶集的时候可以买东西以外，平时有买东西的地方吗？ |
| 40 | 宏：有，有超市，就卖一些日常用品，不是很全。像鸡，鱼，什么的都买不到。 |
| 41 | 周：那你们买衣服去哪里买？ |
| 42 | 宏：好像这里也有卖吧，不太清楚。我一般都去县城买。 |
| 43 | 周：特地坐车去县城买吗？ |
| 44 | 宏：对呀。或者就在网上买，京东，淘宝。 |
| 45 | 周：所以生活也没什么特别不方便吗？ |
| 46 | 宏：对。 |
| | （中略） |
| 91 | 周：你和你周围的邻居平时关系怎么样？ |
| 92 | 宏：还行，就去一家，但是他现在也去城市读书了，也很少去了。 |
| 93 | 周：那你平时都在家吗？ |
| 94 | 宏：对。看手机小说，看漫画。 |
| 95 | 周：你寄宿每次多久回来一次？ |
| 96 | 宏：两周回来一次。 |
| 97 | 周：你弟弟也是两个星期才见一次咯？ |
| 98 | 宏：是呀。 |

- 99 周：今年你爸妈会回来过年吗？
100 宏：不知道。
101 周：不期待过年吗？有压岁钱吗？
102 宏：不期待。要那些干什么，反正都是用来打游戏了。

第4次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|--|
| 01 | 周：我听他们说，你因为这个上学的事，还跟他们吵架了？ |
| 02 | 宏：对呀。 |
| 03 | 周：跟你妈妈还是跟你爸爸？ |
| 04 | 宏：我爸。 |
| 05 | 周：他不让你来吗？ |
| 06 | 宏：嗯。 |
| 07 | 周：那你要好好学，不然他以后会笑你说：看吧，早就不让你学。 |
| 08 | 宏：对，我也好好学，以后要笑他。 |
| 09 | 周：他现在在那工厂做那个帽子，也挺辛苦的。他那天在那里上班，我就坐在旁边看，他手脚还挺快的，动作特别快。也挺辛苦的，还要加班。你不希望自己以后出去打工哦？就像你父母那样，有想过吗？ |
| 10 | 宏：对，不想。我本来是想我爸不让我来学这个嘛，然后我就想出去打几年工再回来学这个。 |
| 11 | 周：当时是这样想的呀，那后来为什么又改变了呢？ |
| 12 | 宏：因为我奶奶给我爸说了。 |
| 13 | 周：哦，是吗？那你奶奶很有先见之明。 |
| 14 | 宏：因为打死工，好热。 |
| 15 | 周：那除非是广东吧。 |
| 16 | 宏：你现在不热吗？ |
| 17 | 周：这里热的受不了。 |
| 18 | 宏：我就是最怕热。 |
| 19 | 周：去做什么工作，他也有热的地方，也有凉的地方。 |
| 20 | 宏：坐在电脑面前有空调吹。 |
| 21 | 周：就想坐办公室吧。在工厂的话，肯定没有空调给你吹，只有风扇。 |
| 22 | 宏：嗯。 |
| | (中略) |
| 68 | 周：那你以后想做什么？就做这个相关的工作吗？ |
| 69 | 宏：对。 |

- 70 周：不回家务农了，我记得你去年是这样说的。做栋房子啊，在家过自给自足的生活。
- 71 宏：赚够了钱就回去啊。

武と周の対話（中国語原文）

第1次対話内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 武：我主要读了从出生到中学之间的事情，之后工作的事情我觉得也没什么必要读的。我觉得第一篇是最好的，和我家的情况完全是一样的。 |
| 02 | 周：哪里？比如呢？我和你差了十几岁哦。 |
| 03 | 武：比如，你听哦。我说普通话吗？ |
| 04 | 周：随便你。你说普通话也行，说家乡话也行。 |
| 05 | 武：【可是当时全国各地都在实行计划生育政策，每个村干部以及村民都会相互监督不允许超生。但还是又一部分人铤而走险，这其中也包括我的父母，当偷偷的生下我的时候，父母还一时逃到了湖北，把我寄放在亲戚家。结果半个月后还是被人告知后，被政府罚了款，本来不宽裕的家里更加一贫如洗，生活变得更加困难了。】就是这句话，我觉得和我家也是一样，就是生我的时候，也是被罚了款，好像还罚了两次，还把家里的墙给拆了。当时我就想不通，不仅把家里的房子拆了，还罚了一两千块钱。还有一句，【可是迫于爷爷奶奶以及周围村人的压力，母亲还是必须生一个男孩。所以在我出生后的第三年母亲终于如愿以偿的生了我弟弟。虽然这次的超生是有心理准备的，但是再次超生不仅罚款而且房子都被没收了。虽然母亲完成了生男孩的艰巨任务，可是今后该怎么养活我们三姐弟是父母更加担心的。】那时候我爷爷对我妈妈生了大姐和二姐之后，他的态度不是很好，就是因为没生男孩。后来生了我之后，我爷爷非常的喜欢我。我爷爷在生下我之后对我父母的态度就好多了，对我就更加好了。他们就喜欢男孩，就只有这个。 |
| 06 | 周：你觉得你爷爷对你的态度和你两个姐姐的态度有什么很大不同吗？ |
| 07 | 武：我觉得应该生我之前我爷爷对她们不是很好，但是生了我之后我爷爷对我们三个都是一样的，平等对待。不过我比较小，他可能更加的宠爱我。 |
| 08 | 周：你当时就能感受到吗？还是长大后意识到的？ |
| 09 | 武：应该是长大后发现的。 |

（中略）

- 33 周：还有哪里你读了感觉和你差不多的，或者完全不同的经历。
- 34 武：对，有，稍等一下哦，就是这句。【尤其像父亲这样的农民工，工资不是每个月结算的，一般都是等整个建筑工程都结束才结算。运气好的时候回一次性拿到所有工资，运气不好的时候负责人（包工头）还赖工资拖欠工资，辛辛苦苦工作了一

年有时都拿不到一分钱。所以每到年末父亲就和他一起工作的同僚们天天早出晚归的去讨工资，有时实在要不到还会和对方争吵打架。】我爸爸也是经常拿不到钱，就是上次回来的时候，我妈妈很纳闷，为什么你去外面打工了那么久，怎么才拿了几百块钱回来了。然后我爸爸就说其他都被欠在那里了。然后我就觉得很奇怪，怎么你去帮别人做事，怎么拿不到钱呢，应该是马上就能拿到工资的呀。我以前也不太关心这些事，所以平时我也很少去问。

35 周：大概是什么时候？

36 武：就是上次，大概是 5,6 月份吧，就是今年。

37 周：在那之前你不是很关心你爸爸工作的事情是吧？以为他的工资是每个月发的？

38 武：我以为他的工资是不定时发的，有时候一个月一拿，有时候两个月一拿。而且每次发的额度也不同，有时少的可怜，有时都发很多。但是有时家里缺钱的时候，他就会去 00 那里去讨工资，有时一早出去中午都不回来吃饭。

39 周：讨不到的话就一直坐在那里等吧。

40 武：我不知道他为什么去那么久。我当时早上睡懒觉睡到 8 点多才起来，但是爸爸应该是 6,7 点就出门了。我其实也醒了，只是没起来，在床上玩手机，所以他骑摩托车出门我还是听得到的。直到吃完午饭，然后我又玩了几盘游戏，我玩一盘游戏一般要半个小时。起码玩了 2,3 个小时，然后他才回。

41 周：讨回来了吗？

42 武：应该讨到了一点，我只看到他拿了一叠钱给妈妈了。那时候是快过年的时候，就是 2017 年过年的时候。

第 2 次对话内容

| 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 周：那你回这个县城的时候没什么感觉，有没有感觉什么变化？ |
| 02 | 武：其实对这座县城是完全没有印象的，对我家附近还是有印象的。因为小时候我妈从来不让我一个人去很远的地方玩的，就在我家附近玩。对我来说，当时的县城太远了，她从来不让我去的。 |
| 03 | 周：那你回到家有没有感觉周围的变化？ |
| 04 | 武：有，就是你家周围，以前都是树林的，你家对面和旁边都是树林的，后来全部被挖土机挖了做了房子。还有我家以前住的那套房子，破烂不堪，玻璃全部烂了。 |
| 05 | 周：那周围的人都还认识吗？ |
| 06 | 武：就记得几个以前经常一起玩的伙伴和家附近的邻居。因为感觉去了那边很久，很多人都不认识了，而且去的时候还小。 |
| 07 | 周：那你回来的时候适应吗？ |

- 08 武：有点不适应。有点适应不了这里的人的态度，他们动不动就骂人。感觉广州人的素质高点，而且不乱扔垃圾，都是分类的，这里的人就不分类。
- 09 周： 那有发现这边有什么好处吗？
- 10 武：好像没有什么，感觉还是那边好。农村怎么能那边相比呢，那边还是经济发达点，大街上都不关灯的，晚上我一个人出去都不怕。以前我在老家的时候一出门就怕，因为外面漆黑一片，周围又都是草和树，感觉很阴暗。
- （中略）
- 19 周： 那你回来家里后你在这边的学校又适应吗？
- 20 武：还好吧，感觉哪边的老师都是很尽责，主要还是靠自己。但是广州那边的学校的设备，环境要比家里的好点。
- 21 周： 那你在广州那边也交了很多朋友吧？
- 22 武：嗯，都是像我一样的去外地上学的小孩，在自己班上的同学只要两，三个，都是本地人。那时候认识一个本地学生，他爸爸开的是奔驰，很豪华。我有次和他一起去他家玩，我第一次坐奔驰感觉很稀奇，但是我同学感觉很平常的事。后来到了他新家，真的很大，应该是别墅，有游泳池，有很高的旋转楼梯，还有赏鱼的池子，那栋房子有八层，还有车库，里面很多车，他爸应该是百万富翁。我第一次去就深深吸引住了，不想出来。他爸好像是做保鲜膜的，我有时和他儿子一起去他工厂，里面好多员工。感觉他爸很厉害。
- 23 周： 那和你爸妈的工作完全不同哦。
- 24 武：嗯，我就感觉我爸妈特别落后，21 世纪就是互联网的时代，他们只会靠力气干活，不会动脑。以后我就算不读书也不会去做力气活，因为以后都是互联网时代，而且是机械化时代了，应该没力气活的工作了。其实我爸爸完全可以去网上做一份工作，我有时会在网上搜一下和我爸相似的工作，里面很多，而且工资要比他高。那个不管怎么说要比他现在的工作要好些
- 25 周： 那你有考虑过今后做什么工作吗？
- 26 武：我以后绝对不做这种力气活的工作，我以后工作之前要好好想想，到底能做什么。你没确定目标的话也不好实行是吧。

第 3 次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 周：你爸爸和我爸爸一样几乎常年在外出工作，但是还是挣不到钱，也很少按时收到工资，生活都很难保障。你觉得这又是为什么呢。 |
| 02 | 武：他们都不是正式职员，别人家的爸爸都是固定的工作，而我爸爸是哪里有工作就去哪里。 |
| 03 | 周：但是像你爸爸这样的工作也属于社会上的一种呀，应该也需要有系统的管理， |

- 比如他们被拖欠工资的时候，都没人帮他们声讨。在日本的建筑工人就是当天支付工资的，而中国的建筑工人却一个月，有时更久都拿不到一分钱的工资。
- 04 武：我爸爸他们一般要等把那栋房子全部做完，才会一次性拿到工资吧。不过有时候也拿不到钱，因为包工头说没钱的话就拿不到工资。
- 05 周：那像这种事情你不觉得奇怪吗？
- 06 武：我觉得只要讨得到工资就行，讨不到的话就只能报警了。
- 07 周：警察会管这些事情吗？比如说你像你爸爸一样也出去打工，然后做了大半年，但是工资又不给你，你会去报警吗？还有没有其他什么方法呢？比如，和其他工友一起请个律师投诉包工头？
- 08 武：嗯，也可以，请律师吃饭，然后让他通知包工头什么时候必须发工资给我们，总不能一直这样拖下去。
- 09 周：是呀，建筑工人的工作又累工资又不高，而且还不按时发工资，真的特别不稳定，是个问题。
- 10 武：我现在的学校周围也有很多建筑工人，他们每天都很早就去那里，吃完早饭然后就开始工作。也是四处流浪的，做完这个工作，又开始找下一个工作。
- 11 周：那要是周围找不到工作做呢？
- 12 武：那就出去外面打工，就像我爸爸一样。
- 13 周：那出去外面就稳定了吗？
- 14 武：也不是特别稳定，但是至少比在家里这边要稳定一点。
- 15 周：你觉得像他们这种工作的人怎样才能生存下去？像他们的工作什么保障都没有，工作又不稳定。
- 16 武：我记得以前上政治课，有个工人在工地做事，被一块砖头砸死了，但是工地的负责人不肯承担责任。然后就请来律师打官司，后来死者那方打赢了。因为在那个工地做事，如果出了什么事情肯定是那个工地的负责人承担责任。
- 17 周：是呀，要不然就这样白白的送了性命，真的太可惜了。
- 18 武：起码也要赔钱，还有损失费。
- 19 周：要是有点知识的建筑工人还好，知道怎么去维护自己的权益。像一般的农村出身的建筑工人，他们即使遇到什么事情也不知道该怎么合理去解决。我小时候的时候，我爸爸和他的工友们出去讨工资，如果讨不到也不会报警和打官司，只会跑去主家讨工资，如果主家实在太过分了的话还会吵起架了。
- 20 武：以前可能很少，现在的人不同了，应该都知道要报警或者打官司吧。
- 21 周：那要是你的话，就直接报警了是吧？
- 22 武：是呀，只能这样，又不能打人家，因为打了别人警察就会来找你的麻烦，也解决不了问题。
- 23 周：那你爸爸有报过警吗，最近讨不到钱的时候。

- 24 武：没有，都是过年的时候就去主家那里讨钱。
25 周：那你没跟他聊过该想什么办法去讨工资吗？
26 武：从来没有，以前没了解过。
27 周：那你怎么会想到报警的呢？
28 武：因为现在都是这样，有什么事就先报警呀。

第4次对话内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|--|
| 01 | 周：那你以后打算做什么呢。 |
| 02 | 武：就做数控方面的呀。但是一旦进入了这个数控行业的话，就要一辈子做这个数控，你自己想想又觉得有点不甘心。 |
| 03 | 周：为什么会不甘心呢。 |
| 04 | 武：一辈子都做数控，我不喜欢。 |
| 05 | 周：你还想尝试做其他的工作吗？ |
| 06 | 武：对啊。 |
| 07 | 周：比如呢。 |
| 08 | 武：学电脑，还有修手机。 |
| 09 | 周：修手机，你是自己想拆手机吧。 |
| 10 | 武：如果学修手机的话，手机坏了，自己还可以知道修理呀。学电脑的话，我只想学习关于手机软件，我觉得现在要是自己能开发一个软件的话，是多么的牛逼，多么的风光。多么的光彩。我初二的时候就开发出来了，他们都为我点赞。 |
| 11 | 周：哎，你之前不是开发了锁手机的软件吗？ |
| 12 | 武：对啊，之前开发的锁机软件，在腾讯上都有。 |
| 13 | 周：你开发过为大部分人服务的软件吗？而不是为少数人。 |
| 14 | 武：还没有。我只会做对自己有利的事，没利益的事我就不会做。 |
| 15 | 周：有利益就是有钱呗。 |
| 16 | 武：差不多吧。但是如果是熟人的话，可以不用给我钱，但是给我钱的话就更好了。 |
| 17 | 周：那也是，没钱赚就不做喽，你这种人还蛮适合做生意的。 |
| 18 | 武：没钱赚就不做了。 |
| 19 | 周：其实像很多职业也没有，钱赚的像，比如做老师啊这种工作都没有多少钱赚，一般都是服务和贡献的。 |
| 20 | 武：做老师没钱赚吗？我有个同学就在 A 师范大学。他也说毕业后包就业啊，听说还不错。他们以后工资也蛮高的。 |
| 21 | 周：〇〇在 B 师范大学，是二本。 |
| 22 | 武：B 也有师范大学呀，我那个同学是读完初中就去了。 |

- 23 周：这么厉害？现在社会上有很多工作，赚不了多少钱，但是也还是需要人做，那些工作谁来做呢？
- 24 武：底层，最底层的人员来做。
- 25 周：那为什么要让他们来做呢。
- 26 武：赚钱呢，因为他们没有能力。
- 27 周：没能力呀，那像你以后呢。
- 28 武：我反正有能力。
- 29 周：有什么能力？
- 30 武：反正对于赚钱的事，我尽量尽力。可以赚钱为我何乐而不为呢。
- 31 周：那除了赚钱，其他有什么生存价值呢？
- 32 武：生存价值，我绝对不会像其他大部分中国人一样。中国人其实很聪明，但是大部分人都是为了娶老婆，生儿子，养儿子，养老，基本上整个人生就这样规划了。感觉前途一片迷茫，那些大人始终把这些事放在心上。好像就是为了这些事活着，完全没有自己的人生价值。反正我不喜欢这样，起码要带自己去开阔一下视野。
- 33 周：你指的开阔视野是？
- 34 武：开阔视界呀，你看那些上班的人，他们一天到晚就只为了上班。一天到晚上班什么都不会做，除了上班还是上班。要么就休息，没什么其他事做。
- 35 周：没有自己的兴趣爱好哦。
- 36 武：不会享受。我们政治书上有这样一句话，要丰富自己的生活，开阔自己视野。

玲と周の対話（中国語原文）

第1次対話内容

- | 序号 | 对话内容 |
|----|---|
| 01 | 周：你看看我这个跟你的经历有什么相似的吗？ |
| 02 | 玲：我都记得，没什么相似的。就是跟爷爷奶奶吵架了，这个你好像没有。 |
| 03 | 周：完全没有相似的吗？你再看看第一篇。 |
| 04 | 玲：这是你真实的情况吗？ |
| 05 | 周：是啊。这就是我自己写的。 |
| 06 | 玲：这里有点像。 |
| 07 | 周：哪里呀？ |
| 08 | 玲：[自从弟弟出生后，家里负担越来越重，父亲也离开了乡村外出打工。]就这里很相似。要划起来吗？ |
| 09 | 周：你划一下，看是哪里。怎么相似了？ |
| 10 | 玲：就我弟弟出生之后，我爸爸妈妈就出来打工了。 |
| 11 | 周：他们之前不是也有在外面吗？ |

12 玲：哎呀，都差不多，差不多。

（中略）

98 周：那像你们那边现在大部分都出去了哦。因为我小时候我们那里就我爸爸，还有另外一个人出去打工，出去打工的人还是挺少的。你们那边出去的还挺多的。

99 玲：嗯嗯。

100 周：你们，你是不是觉得挺正常？

101 玲：嗯？

102 周：大家都出去打工。

103 玲：还好吧。

104 周：没有感觉。

105 玲：我闺蜜她爸，妈都在家呀。

106 周：哦，是吗？不是上次那个？

107 玲：不是，上次那个？上次那个，她爸爸现在也出去打工了。

108 周：是吗？去哪里打工？

109 玲：广东。

110 周：她妈妈呢？

111 玲：她妈妈在贵州。所以她也是个留守儿童。

（中略）

150 周：那你们学校像你这种爸爸妈妈出去打工的学生多吗？

151 玲：多呀。

152 周：多少？大概。

153 玲：大部分吧。有一些妈妈在家，有一些爸爸在家，都是这样子的。反正不是爸妈都在家。

154 周：哦哦。就爸妈在家的就几乎没有，很少？

155 玲：嗯，很少。不超过三个吧。

156 周：呃，是吗？

157 玲：对，应该全部不超过五个。

158 周：你们班上有多少呢，一共有多少人？

159 玲：我们学校？我们班上呀，我们班上一共五十几个吧。

第2次对话内容

| 序号 | 对话内容 |
|----|-------------------------------|
| 01 | 周：你爸爸妈妈他们一直在外面，家里房子建那么好，都不回去。 |
| 02 | 玲：我们家房子建的好吗？ |
| 03 | 周：挺好的呀。你觉得他们为什么不回去呢。 |

04 玲：我也不知道！
05 周：回家种田没有什么收入吧。看你奶奶也挺辛苦，你看她赚点钱很不容易。
06 玲：她本来，我姑姑不让她去做那些，但是她偏要去。
07 周：为什么要那么拼命呢。
08 玲：我也不知道！

（中略）

20 周：我听邻居说你们那边农民都出去打工了，然后田地就荒了，然后很多外地人去你们那边种地是吧。
21 玲：在○○那边有。
22 周：做什么呀。
23 玲：不知道，我都没见过。我去○○都没看到过他们。
24 周：○○就是那个景色很好的地方吗？水很清的。
25 玲：对。
26 周：我听说了，那些外地人去那里的话，就你家前面有个西瓜地嘛。
27 玲：现在没有了。
28 周：我听说晚上打药，然后白天来卖。你知道吗？
29 玲：他们现在已经搬去另外一个地方了。
30 周：为什么呀。
31 玲：我也不知道，可能是在这边生意不好吧。
32 周：现在田荒了也没人种，好浪费呀。
33 玲：现在也有人种田，上次我看见了，看到有人在那里插秧。
34 周：是年纪大的人吗？还是？
35 玲：年纪大的。
36 周：都是年纪大的在家里种。你不会哦，你没有种过。
37 玲：我肯定没种过。
38 周：你想不想尝试一下？
39 玲：不想。
40 周：为什么？
41 玲：因为应该很累。

第3次对话内容

| 序号 | 对话内容 |
|----|----------------------|
| 01 | 周：感觉你爸爸妈妈在这边生活还挺稳定的。 |
| 02 | 玲：还好吧。 |
| 03 | 周：你要想过这种生活吗？ |

04 玲：不想。

05 周：那你要做什么？

06 玲：随便呀。

07 周：为什么不想做他们这种工作？

08 玲：这种工作很好吗？不好。

09 周：你妈妈收头发。你爸爸卖皮包。那你想做什么？

10 玲：可以在网上卖东西啊。

11 周：卖东西吧，就是像淘宝那样。就是自己进货，拍照片，然后卖。

12 玲：嗯。

（中略）

16 周：就是那个网购特别流行的话，你们村里那种实体店就越来越少了。

17 玲：什么店？

18 周：实体店。就是真正有一个店面，然后在那里买东西的店就会越来越少。因为不需要大家都去网上买，然后他们就生存不下去了。你知道这样会导致什么结果吗？

19 玲：什么结果？

20 周：因为很多人需要工作，就去那种店里当店员啊，当收银啊，然后店面倒闭了那些人就生存不下去了，他们就下岗了。因为不需要那种员工啊，因为大家都像你一样在网上卖东西的话。因为一个人能干很多事情，不需要店员吧，是不是？

21 玲：嗯。

22 周：不需要打扫卫生的啊，看门的呀。觉得这种好吗？

23 玲：还好吧。

24 周：但是实体店的话就会下岗，吃不上饭，就找不到工作了，然后就要去做其他事情。

25 玲：那他们也可以在网上卖东西呀。

26 周：那如果大家都在网上卖东西，那谁去制造东西呢？然后，大家如果都在网上卖东西，没有一个实体店，会是一个什么样子呢？（后略）

（中略）

31 周：我感觉这个社会迟早有一天可能会到来。就是天天呆在家，想要什么就在网上买，就这样子人与人之间的交流就越少了。

32 玲：嗯。

33 周：还有就是现在送快递的也有机器人。他们也很聪明，就是把那些货物包括分类，然后把它们寄到哪里。如果是这样的话，我感觉今后也不需要人了。如果到了那个年代，你觉得你能干什么？如果全部都被机器代替人的话。有没有

想过？

34 玲：哼哼。

35 周：你没看现在很多工厂都引进机器人代替人工吧。你只要设定好，它完成的很好，而且非常准确。人工的话，要请很多人，而且他们还会出错，也很难管理。就像那些机器人的话，一台机器可以做很多事情。然后 24 小时都不用休息，然后那些老板就很开心。然后人就没有作用了，那些工人就下岗了。你说你会干嘛呀。

36 玲：我也不知道！

37 周：你还要开网店吗？

38 玲：但是找不到其他工作，只能做这个。

（中略）

47 周：会那种自给自足的生活吗？

48 玲：不会。

49 周：像你奶奶那样，很厉害哦，她自己吃的菜，这都是自己种的吧。

50 玲：嗯。

51 周：尤其今后有了更高端的机器人，他们把我们的工作都做了的话，我们就没事情可做了。我觉得以后就很难生存下去，就必须要靠自己了。觉得那天真的会来，因为现在日本好多各种各样的机器人。比如说在店里面招待顾客的机器人，还要在家照顾老人的机器人。

52 玲：日本是不是很多机器人？

53 周：是啊。像那些工厂里面都有机器人，都不需要人工作。我觉得在中国也会这样，这天迟早会来的。

54 玲：太吓人了。

55 周：对呀。所以觉得我们人到底能够干什么？

56 玲：那日本人的工作是不是很难找？

57 周：对，很难找。所以他们压力也挺大的，因为人能做的工作特别少，然后人又多，机器人又多，所以人与人之间的竞争也很大。所以如果在竞争中输了的，就会被淘汰。所以很多人自杀，每年有两三万人自杀。

58 玲：日本呀？

59 周：对呀，每天都有。我坐电车，每天都有人卧轨。就是压力太大，很难生存下去，找不到自己的生存价值。中国好像还没有到那种程度。

60 玲：他们就这么想不开吗？

61 周：也不是想不开，日本其实挺发达的，就是很多简单的工作就会被机器人代替，然后人能做的就是机器人不能做的工作。然后。只有那些工作才会被留下来。一般的工作都会被机器人，或者是像我们这些外国人这种廉价劳动力去做。

因为日本人不愿意做那种脏活累活，所以就会从国外去很多外国人去做，工资要比一般的日本人低很多。但是外国的工人也很开心，因为工资也比国内高很多，所以他们也愿意做。然后，日本人就越来越没有工作了，因为机器人也代替人工做了很多工作。

（中略）

- 244 周：所以说，农民如果没有工作，在家种田种菜的话，也不会饿死。
- 245 玲：对呀。但是很累。
- 246 周：但是在外面的话，像你们家都是买米哦。
- 247 玲：嗯。
- 248 周：像你们那边老家也是都没人种田，都没人种的话没有米吃，然后那些米都是买的进口的。进口的米的话，随时都有可能会涨价呀。如果你工作不稳定，工资不高，那个米涨价的话，你有可能连饭都吃不上。那你怎么生活？
- 249 玲：吃方便面。
- 250 周：方便面也是外国进的呀。
- 249 玲：这样啊。
- 250 周：对呀，所以吃的用的如果都是外面买的话就很难保障啊，因为自己控制不了。然后我昨天看新闻，说中国现在是进口粮食谷物最多的国家。你知道这代表什么吗？
- 251 玲：什么？
- 252 周：就证明现在中国农民特别少，自己种的东西不够自己国家人吃，就必须进口别的国家的人吃。但是你如果进口别的国家的粮食吃的话，那别的国家的人吃什么呢。如果把别人家的粮食都买过来的话，我们把别人家的粮食都抢了。就代表很多其他国家的人吃不饱。那些非洲还有其他比较偏僻的国家，他们其实也有种粮食的。那为什么他们自己种了，自己也吃不到呢？因为全部被我们这些有钱的国家的人买过来了。他们自己种的那些农民都吃不饱。
- 253 玲：我觉得非洲特别可怜。
- 254 周：对呀。为什么会可怜呢。
- 257 玲：因为他们人口也多。
- 258 周：（前略）但这些都是要有钱才行，中国是现在有钱了才能买得到。你要是没钱了就什么都买不到。如果哪天中国打仗或者是有什么事情的话，万一没钱了，我们又都没种田的话，那我们都会饿死了。是不是？
- 259 玲：所以现在农民也还是挺有用的嘛。
- 260 周：对呀。但是大家都意识不到，像你爸爸妈妈以前都是农民，但是现在他们都不想种田。他觉得我有钱就可以买得到。但是他没想过，我买的这些粮食是怎么来的。是从哪个国家来的，那个国家的人是不是能够吃饱？然后他们就

有想到那里去，只要自己能吃饱，周围这些事情可能就没有关心。你自己种一点，够自己吃就够了。如果每个人都这样的话，就不用去买别的国家的。别的国家的农民也是很穷的。他们就是因为没钱，自己种了还要卖出去才能生活。

261 玲：我觉得最可怜的国家就是非洲。

262 周：你有看过非洲的纪录片或者电视吗？

263 玲：嗯。

（中略）

277 周：这三次和我聊了这些之后，会不会有什么新的想法和感受？或者发现？

278 玲：不是第一次听到。也会听很多人说这些。

279 周：谁会说这些呢。

280 玲：我奶奶他们会说。还有我们老师。

281 周：那你会听吗？

282 玲：左耳进右耳出。

283 周：那我跟你说也是左耳进右耳出吗？

284 玲：不是。

285 周：是因为同年人跟你说这些会不同的感觉，老师和长辈们说就会有说教的感觉是吧。

286 玲：对呀。

付録3： 留守児童関係者（両親・監護者）への半構造化インタビュー質問項目

年齢：

学歴：

職業：

婚姻状態：

留守児童との関係：

出稼ぎ年数（出稼ぎ親のみ）：

留守児童との同居年数（監護者のみ）：

1. 留守児童の両親への質問：

- ①あなたは、いつから出稼ぎに出ていますか？
- ②出稼ぎ当時の状況ときっかけを教えてください。
- ③現在の出稼ぎの職場及び生活現状について教えてください。
- ④子どもの生活や教育に対して期待がありますか？あるなら、どんなことですか？
- ⑤子どもとよく交流しますか？どんな内容についてですか？年に何回子どもと会いますか？
- ⑥将来の生活について（ずっと出稼ぎに行くか、農村に戻るか）どう思っていますか？
- ⑦現在と過去の農村・農民・農業は変化がありますか？具体的に教えてください。

2. 留守児童の監護者への質問：

- ①あなたは、どんな職業に従事していますか？
- ②現在の生活現状をどのように捉えているのか。
- ③子どもの教育や生活に対して、どのようなことをしています？
- ④若者の出稼ぎに対して、どのように捉えていますか？なぜですか？
- ⑤子どもが好きですか？現在（元留守児童は過去）の子どものことをどのように捉えていますか？
- ⑥将来の生活についてどのような期待をしていますか？
- ⑦現在と過去の農村・農民・農業は変化がありますか？具体的に教えてください。

本文に関する既発表論文

- 周亜芸 (2018) 「留守児童当事者の視点から見た中国の留守児童問題—元留守児童と現留守児童へのインタビュー調査から—」『文明の科学』 15, 1-16.
- 周亜芸 (2019) 「中国元留守児童における主体性獲得のプロセス—対話的問題提起学習を通して—」『文明の科学』 17, 21-46.

謝辞

本研究の執筆にあたり、ご指導をいただきました岡崎眸先生、野々口ちとせ先生、房賢嬉先生、Jordan Smith 先生、田中由美子先生、吉田朋彦先生に心からお礼を申し上げます。

思い返しますと、日本語と日本文化をもっと知るため、日本留学を決心し、城西国際大学の学部の三年生に編入したのは2012年の秋でした。その時から日本文学を学びながら、副専攻の日本語教育に魅力を感じ、日本語教師を目指して2014年の秋、修士課程の日本語教育専攻に進学しました。修士課程から現在に至るまで岡崎先生には、研究について何も分からなかった私を導いていただき、研究者としての姿勢及び生き方に於いて身をもって範を示していただきました。また、生活上でも絶えず支えてくださったおかげで、3年間で博士論文を完成することができました。改めて感謝の意を申し上げます。

野々口先生と房先生には、言語生態学及び対話的問題提起学習について多くのご指導とご助言をいただきました。野々口先生には、本研究の構想の段階から対話的問題提起学習を教えていただき、言語生態学についても多くのご助言をいただきました。房先生には、言語生態学について教えていただき、2018年度の岡崎ゼミに参加されていた時には一緒にデータを分析してくださいました。審査の間も二人の先生は、精神的に励まし続け、支えてくださいました。心から感謝申し上げます。

Jordan Smith 先生と田中先生には、比較文化の観点と女性学の観点から多くのご助言をいただき、応援し続けてくださいました。また、学部生から支えてくださった吉田朋彦先生、林千賀先生、岡田美也子先生にも感謝を述べたいと思います。吉田先生には言語学を教えていただき、博士論文を執筆する時も言語学の観点から多くのご助言をいただきました。林先生には日本語教育の専門知識を教えていただき、海外の日本語教育実習を何度も導いてくださいました。岡田先生には論文の書き方を教えていただき、励まし続けてくださいました。感謝の意を申し上げます。

研究を外側から支えてくださった岡崎敏雄先生と齋藤等さんにも感謝を述べたいと思います。岡崎先生には本研究の構想の段階からご指導とご助言を多くいただきました。また、言語生態学についても教えていただきました。岡崎先生のご指導は博士論文を執筆する上で大きな基盤となりました。齋藤さんには、博士論文の最終段階で何度もネイティブチェックをしていただき、応援し続けてくださいました。

岡崎ゼミの中でも研究を様々な形で支えていただき、「協働」の大切さを学びました。ゼミの仲間は、データの分析に協力してくださり、論文に対して有意義なご助言や励ましをいただき、有形無形に私を支えてくださいました。ゼミの仲間の支えがあったからこそ最後まで論文を執筆することができました。心から感謝申し上げます。

本研究の対象者の方々にも感謝を述べたいと思います。本研究が実践できたのは、ひとえに対象者のご協力があったからです。特に、元留守児童の静には他の対象者を紹介していただき、方言を通訳してもらいました。心から感謝申し上げます。

最後に、私を支え続けてくれた家族にも心から感謝しています。